
Boy from Shattered World

あるれん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Boy from Shattered World

【Nコード】

N5968F

【作者名】

あるれん

【あらすじ】

SF、リアルロボットアクション。

#3より抜粋

「最外層は炭素繊維複合材です。熱硬化性樹脂の内部に格子状の炭素繊維構造を織り込んで積層し、軽量性と強度を両立しています。第二層が、超軽量発泡金属層です。その名の通りで、金属粒子の間にミクロン単位の間隙を、規則的に、最密構造に配置することで、衝撃吸収の役割を担います。言うならば、鋼鉄製のスポンジですね。ちなみに、泡の配置を拡大して見ると、黒鉛みtain、キレイな八

二カム構造の連続体になつてゐるそうです。ここまでが表層、喩えるなら皮膚ですね。

そして第三層が形状記憶合金層です。これは、表層にダメージが発生したときに効果を発揮します。衝撃と、表層の侵襲を感知して収縮することで、損傷の拡大を防ぐ働きをします。合金が筋肉のように縮んで、傷を埋めるんです。続いてその下にあるのが第四層、極細ファイバーセンサー層です。これも三層目と同じく損傷に対応するための機構で、損傷を受け、センサー部位の屈折率が変化すると対応する電気信号が機体中枢に送られ、ダメージとして認識されます。言わば、神経ですね。そして第五層には再び炭素繊維複合材。サンドイッチ構造です。更に、肩や掌の部分にはもう一層の追加構造が……」

1 始まりをもたらすもの・1

遠くから、母の声が聞こえる。

「何をしているの」

「何でここにいるの」

「あんななんか引き裂いてやりたい」

「あんなのせい、全部あんなのせい」

「あんななんか要らない」

「いなければよかったのに」

ヒステリックな叫びを無視し、少年はテーブルに着いた。薄暗い間接照明に、煙のコロイドが光を反射する。卓は緑に張られ、その上ではプラスチックの円盤が、小気味良い音を立てて衝突を繰り返していた。

波が来ている、と思った。幸運かもしれないし、不運かもしれない。だが、確実な波だ。少年には、ありありと感じ取れる。

波を感じるには、全てを閉じることだ、と彼は思う。全ての感覚を断ち、意識を半ば乖離させた状態のまま、流れ込んでくる情報を汲み上げるのだ。すると、そこに何かが見えてくる。光が闇か、過去か未来か。全ての過去を知れば、全ての未来が見えると言った人間が、どこかの世界にいた。その感覚に似ているのだろうと、彼は思う。

「8のナチュラルで、プレイヤーの勝ち」

少年は呟く。プレイヤー・サイドがスピードの3と、ダイヤの5。バンカー・サイドが1と3の四点。結果は、その通りに動く。二・〇倍の配当が、少年の下に還る。途端に、場がざわめく。

「あいつだ」

「奴が」

「あれが」

「まるで予知」

「new man」

「誰だ」

「何者だ」

「new man」

誰もが彼を知っている。だが誰も、彼を知らない。

「巨万の富」

「王者」

「new man」

「化け物」

「暇人」

「いつもいる。いつも賭けている」

「負けない」

「new manは負けない」

ざわめきの中、少年は呟く。

「バンカーが三枚目で8。勝つ」

1と2を引いたプレイヤーに、流されたカードはハートの4。計七点。そして五点のバンカーが引いたのは、スペードの3。結果は、少年の言った通りに動く。

時折、自分が世界を動かしているかのような錯覚に陥る。当たっているのは結果だけで、仮定には無限の分岐があるのだということ。を、時には忘れる。しかし、錯覚でも心地よい。知り尽くすことは即ち、支配欲を満たす。

波が来た、と彼は思う。そして、タイへ手持ちの全額を振る。ざわめきが、ディーラーの拳動が、目に映る全てが、一つの結果を雄弁に語っている。

「タイ」

「九倍」

「俺も乗るか」

「new manは負けない」

「乗らない」

「鬱陶しい」

「早く消える」

「new manを潰す」

途端、掛け金が跳ね上がる。少年の行動は、多くの人間を動かす。従えばいいのに、と少年は思う。何も知らないなら、従えば、幸福になれるのに。

カードは九対九、引き分け。巨額の配当が、デジタル表示のカウンターを回す。ブラック・アウト。扉越しに、叫びが聞こえる。

少年は、ネットワーク・カジノのウィンドウを閉じた。

真っ暗な部屋の中、パソコンのディスプレイだけが煌々と光を垂れ流している。彼は、その画面をじっと、じっと見詰めている。部屋の中には彼一人しかいない。窓にはカーテンが引かれ、外の様子さえ分からない。

画面に映るのは二足歩行のロボット兵器。見ているのは、報道番組だ。ハメートルはあるうかという巨体から放たれる弾丸が街を、人を蹂躪する。少年の二つの眼は、液晶画面の、決して越えられぬ障壁の反対側から、その場所へと向けられている。

並木を潰し、瓦礫を乗り越えて戦車が突き進み、破壊を続ける巨人に砲の照準を定め、撃つ。当たらない。

巨軀に見合わぬ鮮やかなサイド・ステップで建物の影に逃れてはあちらこちらから手持ちのマシンガンで反撃、確実に戦車の数を減らしていく。

最後の一台は、ロボットの持つ斧に貫かれて沈黙。

やがて形の違うロボットが現れ、ロボット同士が戦い、争い、殺し合う。

最後に残ったのは後から現れた細身のロボットと、燃え盛り、廃墟と化した街だった。

そこで映像は途絶える。凄惨な戦場の映像からスタジオのニュース・キャスターへと変わった画面から眼を離さぬまま、少年は考える。

自分は今ロボットに踏みつぶされた書店を知っている。すでに黒こげになった喫茶店を知っている。帝国の軍隊が居座っていた学校を知っている。隣町にある、彼自身が通っていた学校だ。

通っているのではない。通っていた。そこに思い出と呼ばれるものを、彼は残してきていない。だが、彼は考える。

どうして、こんなことに？

政治家はよく解らないことをまくし立てている。飛び交う弾丸は今日も人類の数を減らしていく。今こうしている間にも、戦火は一步步着実に近づいてくる。

彼は呟く。

「世の中狂ってるんだ。人も社会も国も、みんなマリオネットみたいだ。解らない、解れない。そんな世の中知ったことじゃない。だから僕はこの扉を閉ざしたんだ。僕は間違っていない。僕のせいじゃない」

部屋は暗闇に閉ざされている。彼が学校へ通うのを、外の世界に触れることを止めた日からずっとこの部屋は暗闇で、扉は閉じたままだった。

「だって僕の両親だって何も言っただけじゃなかったじゃないか。僕は間違っていないんだ。仕方ないんだ。僕はここに……」

始まりをもたらす、呼び鈴が鳴った。

届いたのは『赤紙』だった。自分が徴兵された証、さながら戦場へのプラチナチケットといったところだろうか。

徴兵制度の施行は既に一般に周知されていた。国家を守るため、侵略を許さぬため、共和国の自由と独立のため。政治家の主張は、繰り返し少年の耳を通り過ぎていた。

少年は一人、耳を傾ける者もない空間へ向け呟く。

「やっぱり狂ってる。戦う？僕が？ そんなの真つ平御免だ。死に行けっというのか？ こんな、僕をこの部屋に閉じ込め、両親から心を奪い、殺し合うしか能がない世間のために殉じろっての？

でもさ、分かつてはいるんだ。何を言っても逃れられるものではないことはね。国家権力つてやつ？ イカれてるとしか思えない。父さんと母さん、なんて言うだろう。一人息子が戦地に赴くんだけさすがに生きて帰ってこい、くらいは言ってくれるだろうか？ でも、あの両親だ。死んでくれれば？ とかいうに違いない。そうさ、そうに決まってる」

少年の親は、徹底して無関心だった。故に、愛の反対は無関心であることを、彼は既に学んでいた。

だが、少年は両親を憎んでいた。無関心にはなれなかった。

「僕、徴兵された」少年は言った。

「ふうん、そうか」父親は応えた。

「西部戦線だつて」

「早めに届いて良かった。お前みたいな馬鹿は死ななきゃ治らないからな」父親が言った。

「もう会えないかも」

「徴兵制度様々だ」父親の言葉に、母親が笑い声を上げる。

「さようなら、坊や！ もう会わなくていいのね！」

「そうだよ、母さん」

「まるで夢のようだわ！ ああ、坊や、可愛い私の坊や、早くいなくなつて！ いなくなれ、いなくなれ、いなくなれ！」

それが、少年が両親と数ヶ月振りに交わした、相槌以上の会話の全てだった。名前さえ、呼ばれない。

訓練所へ向かう日の朝は、あつという間に訪れた。両親の態度は相変わらず、少年にとって余りにも他人だった。テレビの向こうで起こっている戦争を安全な所で見ると人間のるように、両親は平然としていた。

少年は考える。

彼らは自分の血を分けた息子が死んでも悲しまないのだろうか。

たとえ何処かの戦場で野垂れ死のうが構わないのだろうか。

構わないのだ。

ここにある親子とは、書類・儀礼的意味でしかない。情もない。愛など、存在し得ない。少年はただここにいて、ただであって、家族ではない。

家の玄関口に立ち、父親を前にし、少年は一人呟く。

「だったら、ここをあえて出るのも悪くないかもしれない。どうでもいいんだ、こんなところ。執着する理由なんて無いんだ。あなた達を憎む理由も無いんだ」

父親が何か言いかげようとする。それを制し、少年は言った。

「もうあなたの言うことなんか、耳に入れる必要は無い。僕はあなた達を憎むことを止めた。僕は自由だ」

静かに、自分自身に語りかけるように言い、少年は玄関の扉を閉めた。

振り返り、少年は呟く。

「ごめんなさい」

拳を握り締め、父親は呻く。

「お前に、謝りたかった」

彼らの言葉も、眼に浮かぶ涙も、互いを隔てる閉ざされた扉の向こうには届かなかった。

事務手続き、身体検査、思想検査……諸々のデスクワーク的作業の後、乗り心地など考えもしない軍隊の車両に分乗して、少年や他の新兵たちは山合いの訓練キャンプへと移送される。共和国北東部比較的、安定な地域だ。南西部出身の彼には、少し温暖な気候が肌に合わない。鬱蒼と生い茂る木々の圧迫感が、神経を蝕んでいく。戦況は我らが共和国に劣勢。そんなことは誰もが多種メディアを通じて程度の違いはあれ知っている。だから目の前の教官ががなり立てる愛国演説が鬱陶しくて仕方なかった。掲げられる理想、描かれる夢。そのどれほどが、現実世界へ降りてこられるのだろう。

頭の中で、必要な内容だけを素早く要約する。新兵は徴兵、志願の別を問わず歩兵として一ヶ月半、簡易な訓練を受け、絶対的に戦

力の不足する前線へ早急に送り込まれる。つまり西部、帝国との国境付近。体の良い使い捨て戦力だ。

圧されていることなど認めない。いい加減な訓練しか行えないのではなく、行わない。戦力の補充ではなく、拡充……。

憂鬱を通り越して、滑稽な演説だと、その場にいる誰もが感じていた。

斯くして訓練が始まる。滑稽でも、憂鬱でも。

簡易なものとはいえ、それは少年にとっては苛烈を極めていた。

月曜から土曜まで、起床は五時半。就寝は二十一時半。生活リズムは決して乱れない。全ては連帯行動、連帯責任。一人の乱れは、全体に影響を及ぼす。

この環境は自分に向いている、と少年は思う。個というものが存在しないから、誰も互いを憎まない。ひたすらに一人であり、全体である。何か一つのミスをすれば、誰でも教官から容赦の無い罵声を受ける。過去など関係ない。

走る。軍規を学ぶ。走る。共和国の歴史を学ぶ。走る。小銃の扱いを学ぶ。限界まで走る。走り続ける。泥に塗れ、汗を滴らせ、少年は一人になる。

基礎教練を終えると、射撃訓練になる。冷静に、平静に、冷徹に、狙い射撃し当てる。それをひたすら反復する。少年の射撃は優秀だった。制服が乱れていた。初めて懲罰を受ける。

訓練は続く。水泳、格闘訓練。二回り程も体躯の大きな相手にいとも簡単に倒される。腕立て伏せ、ランニング。六週間の訓練期間も、終わりが近い。

朦朧とした意識を叩き起こしてその日も点呼を受ける。ペアを作るように言われる。明日から新兵同士でコンビを組んで行う訓練らしい。

二人組を作れといわれて、嫌な記憶が頭をよぎる。学校ではいつも必ず、少年は一人、相手を見つけられず余っていた。例えばクラスの人数が偶数でも。家族というコミュニティ内ですら孤立する彼が

学校の中でも孤立するのは自明のことだった。少年は誰にも好かない。誰にも憎まれない。いつも一人でいた。

少年の好きな昔の歌にこんな一節がある。

『友情なんて必要ない。友情は苦痛を呼ぶ』

彼はそれを座右の銘にしていた。ふと気付いた時に口ずさむフレーズ。遙か昔に奏でられたものでも、色褪せない。

「ねえ」

この歌を歌うのは親友同士の子二人組、というのは実に皮肉だ。拳句、麗しき友情を歌った曲を発表した直後に解散してしまう。その理由は二人の仲違いなのだ。

「ねえねえ」

ふと気付く。無駄な思考に気を取られ、指示を全く聴いていなかった。

「ねえ！ 聞いてんの!？」

「あ……ごめんなさい」

耳元で大声を上げられ、反射で謝る。

彼を盛大に怒鳴りつけたのは同い年か、少し年上位の少女だった。身にまとった階級章抜きの陸軍用迷彩服から察するに、同じ訓練中の新兵のようだった。

ヘルメットを外すと後ろで束ねた、下ろせば肩に少しかかるくらいの黒髪が露になる。土埃と汗で薄汚れてしまっているのが勿体無いと、少年は素直に思った。

「二 六番、三宅新人……二ート？」

「間違っちゃいないけど、違う。ミヤケシントって読むんだ」

少年にも名前がある。誰にも呼ばれず、使われず、本人さえも時に忘れかけていたが、三宅新人という名前がある。

一人なら、名前は要らない。

「ふうん……あたしは巴澄美琴、二 五番よ。よろしく」

そう言うと、彼女は右手を差し出した。握手のつもりだろうか。

「どつして?」

「……話聞いてなかったの？」

「ごめんなさい」

少年 新人は、また反射で謝っていた。

二人一組での山間部の踏破訓練らしい。しかも歩兵のフル装備、足掛け三日間、ほぼ不眠不休で。訓練課程最後の関門だった。これを終えた者には等しく二等兵の階級章が授けられ、前線へと送られていく。

「勘弁してよ……」

思わず新人の口から溜め息が漏れる。そしてそれを聞きつけた教官に、小一時間怒鳴られることとなる。二度目のミスだった。

「国、人を守る兵士としての自覚うんぬんかんぬん長々とさ」

「同情するけど自業自得ね」

腕組みして言う彼女、巳澄美琴の口調は憐れみでも嘲りでもない、不思議な調子だった。

「僕は徴兵なのにな、なんか納得いかない。」

そう新人が言うと、美琴は意外そうな顔をした。訊くと、彼女は志願兵なのだという。理由は答えてくれなかった。訊かなければ良かったかもしれない。

それから罵倒するときの語彙はなぜか異常に増えることについて話して、その日は別れた。

夜半、彼は思う。

同年代の人間とまともに話したのはいつ以来か、思い出せなかった。ましてや女の子と。ひよっとしたら初等学校以来かも知れない。そこで思考を打ち切る。いいや、もう寝よう。踏破訓練は数時間後に迫っている。

新人は固いベッドに全身を委ねる。上段の訓練兵の寝言は三秒で聞こえなくなった。

翌朝だかその日の深夜だか分からないような時間に彼らは点呼を受け、物資、装備の支給を受ける。そして三々五々、それぞれが定

められたルートへと散っていく。

地図とコンパスを頼りに歩き出す。なぜ衛星位置情報システムを使わないのかとぼやくと、また怒鳴られたのかと已澄に窘められた。

砂利道が獣道に、そして道無き道へと変わっていく。初めは周囲にちらほらと見えた他の組の人も、三六〇度見回しても気配すらない。広葉樹の森と腰ほどもある下草、名前も分からぬ羽虫が踊る。

そうして何時間歩いただろう、体内時計が電池切れを起こす位経った時、急に目の前が開けた。数少ない小休止点だ。

「ほら、間違つてなかつたでしょ？」

得意げに言う彼女に反論するより休息したかった。もつとも、コンパスも地図も彼女が占有していたから反論の余地はないのだが。

規定量の水を飲み終えた僕は、最後の一口を飲むのを躊躇っている彼女に訊ねる。

「そういえば、美琴はどこ出身なの？」

ファーストネームで呼ぶことに躊躇いはない。彼女のことを知ったからでも、距離が近づいたからでもない。それが、二〇五号、二〇六号と呼ばれることへのささやかな抵抗だったのだ。

だからこそ新人は、彼女のことが知りたかった。

「新仙台の、青葉区。あなたは？」

「ああ！ 僕は若林区なんだ。川向こうだったんだね」

「もうあの並木道は、無くなっちゃったけどね」

目抜き通りに沿って何処までも続く櫛の並木道は、それを目当てに観光客が訪れる程有名で、美しい景観だった。一人になった少年とは、もう何の関係の無い場所。

「僕もあそこはよく通ったよ。破壊されるどころ、テレビで見てた。君の実家は……」

「もう無い。両親も死んじゃった」

吐き捨てるように言うと、美琴は最後の一口を飲み干し、立ち上がって歩き出す。新人はその後を慌てて追いかけた。

再びループする風景が視界を支配した。その中を黙々と足を動かす。射撃や武器の取り扱いならともかく、こんなことに何の意味があるのかという余計な疑問も、もう捨てた。

唐突に彼女が言った。

「奴らにどんな理由、大義があるのか知らないけど、私の帰る場所を壊した奴らは許せない。だから軍に志願して、自分も帝国と戦うことを決めたの。何かしないと、おかしくなってしまうそうだったから」

「何故？」新人は応えて言う。

彼女はぼかんとした顔だった。彼は構わずに続ける。

「僕は徴兵で半強制的に連れてこられたけど、故郷へ帰りたいのか帰りたいのか分からない。帰る場所を命を懸けて守りたいか分からない。ましてや残っているならばともかく、戻っては来ないのに、そこは君にとって、まだ帰る場所なの？」

美琴は立ち止まる。合わせて新人も立ち止まる。

「君は一人になったんだ。故郷なんてもう、君とは何の関係も無い。違う？ だったら、命を懸ける価値が何処にある？」

その言葉が終わるより早く、美琴の拳が、新人の頬を打っていた。彼女には何か、自分と違うところがある。それが何なのか、彼には分からなかった。

痛みは引いても、殴られた拳の感触が消えることはない。

左頬に触れながら、またあの憂鬱で滑稽な演説を聞いている。あれ以来彼女とは口々に口を聞かないまま、訓練期間は終わりの時を迎えた。踏破訓練を終えた組は、泥と汗に塗れながらも、皆一様に晴れやかな顔をしていた。新人と美琴の組を除いては。

形ばかりの卒業式を終えると、直ぐに各々の配属先が決まる。彼女とも、ここで別れる。

「第二三輸送中隊……ですか？」

「そうだ。君らの任務は常に命を懸けて戦う最前線に物資、人員を

確実に送り届けることだ。中でも、二三中隊はH・A・Lの輸送任務が中心となる」

新人の目の前では、割と細面の軍人が淡々と説明を続けていた。「重要な任務であるがもちろん、敵に狙われる可能性も高い。H・A・Lはこれからの戦争の行く末を占う上で、欠かせない存在になるだろう」

何故そのような重要な任務に、短縮版の訓練しか受けていない新兵が配属されるのか、という疑問が浮かぶ。

「共和国軍人としての誇りをもって、任務に邁進したまえ」
一瞬で理解する。死んでも直ぐに代えが利くからだ、と。

送り込まれた西部戦線は、激戦区という前評判に拍子抜けするほど静かだった。赤茶けた礫砂漠に点々と生える生気の無い灌木、強い日差し、乾いた風。卓状大地の作る影は、やけに濃く、黒い。

「ようこそ、我が第二三輸送中隊へ」
部隊長だという男は新人と、同期の九人の新兵を前にやたら大仰なジェスチャーで歓迎の意を示した。まあ寛げ、堅くなるなと彼は言うが、容赦なく砂の吹き込む使い古しの野戦用テントの中で寛げという方がおかしいと、新人は思う。

彼の容貌は、いかにも叩き上げの軍人という風な厳つい顔に、手入れを怠っていそうな顎髭がしまりのない口の周りを囲っている、三〇を少し過ぎた位の年齢に見える。笑顔 楽しさという感情から生まれた物とは異質の笑顔を常に浮かべているが、そのくせ眼光だけは妙に鋭い。東部系の人種に見えた。たくしあげた袖から覗く筋肉質な左腕には、灼けた金属で抉られたような、一筋の傷跡があった。

彼はカーバネル・A・ジェズイトと名乗った。階級は大尉。

部隊員からはカーバ隊長だのジェズさんだの傷跡のジェズだの、エトセトラ、エトセトラ。数多くの仇名で呼ばれていた。それだけ親しまれている証拠だろうと、新人は思う。仇名で呼ばれたことな

ど、彼には無い。

第二三輸送中隊での日々は至って平穩だった。

あの新仙台青葉区での戦闘で、マスコミが見守る中、新たに投入された共和国の人型強襲陸上戦闘機（ヒューマノイド・アサルト・ランドファイター。略称H・A・L・）が敵方のロボット部隊に完腐なきまでの勝利を収めて以来、戦況は賭博師同士の腹の探り合いのような膠着状態に陥っていたのだ。新人が見ていた映像の、後から現れた細身のロボットこそが共和国の切り札だった。

同期の九人とも自分の昔話を語り合う程に打ち解けた。彼が、彼で無くなったかのようにだった。戦場の空気が、足音がそうさせるのかもしれない。変わったのは、訓練を潜り抜けた肉体だけではない。戦場では、一人ではいられない。

「僕にとつて、何か一つのことを最後まで成し遂げた経験は初めてに等しいんだ。いつもいい加減で…中途半端だったから」

彼は呟く。

「僕は、僕たちは、曲がりなりに軍隊の訓練を最後までやり通したんだよ？僕は変わった。そんな気がするんだ。良いことなのかどうかは、分からないけれど」

「その考えは間違っていないと思う」

「何か一つのことをやり通すって、簡単なようでとても大変なことだもの」

「世の中、それができねー奴らばかりだな」

生まれも育ちも様々な、徴兵されたという共通点だけを持つ皆の口々から出る同意の言葉が、新人には途方もなく嬉しかった。

だが、一人だ。あくまでも一人だ。心のどこかで、そう言っただけで諦めていた。

隊長とも話す機会がしばしばあった。隊長の方が作ろうとしてくれているのかもしれないと、ありがたさと鬱陶しさが混在する感情を、新人は抱いた。

その内容は銃の扱い方のコツからロボットの操縦法……拳げ句の

果てには兵法の基礎まで、実に多岐に渡る。コミュニケーション術なんてのもあった。だが、それは彼のようにするには必要なことなのだろうが、只の歩兵に必要なのかと思うと全てが余計で、お節介でしかなかった。

僕は生き残れる。それだけで十分だ。いつしか、にやけ顔のジエズィットに捕まり長高説を聞かせられるたびに、彼はそう呟くようになっていた。生まれて初めての、反抗だった。

日々は移ろい、ある一点へと達する。ある者はそれを宿命と言い、ある者は運命と呼ぶ。平穏な戦いなど存在し得ない。只一人の人間の眼には映しきれないだけであり、どこかで何かは動いている。

「救援要請？」

素っ頓狂な声を出した新人に、ジエズィットが何時になく厳しい声色で答えた。それでも、彼は笑っている。

「ああ。前線へお宝を輸送中の部隊からだ」

「お宝……ですか？」

「HALだよ」

あの、新仙台　新人が見詰めていた戦闘で証明された通り、二足歩行ロボット兵器の性能においては、共和国は帝国の一步先を行っている。配備がまだまだ遅々として進まない分、その優位を奪われる訳にはいかない。ましてや、ロールアウトしたての機体を見すみす渡してやる義理はない。司令部からも、周辺の各部隊に緊急通達が出つたらしい。

「現時点で最も近くにいるのが残念ながら我々だからねえ。行かない訳にはいかないんだよ、二等兵君」

そう言つて、カーバネル・ジエズィットはまた笑う。形容するなら、哄笑、或いは嘲笑。彼が貶めているのは、周囲であり、世界であり　そして、自分自身なのだろうか、新人は漠然と思った。彼は顎鬚を弄り、腕の傷跡を指でなぞった。

三〇分も経たないうちに、新人は小銃を肩に担いで兵員輸送トレ

ーラーに揺られていた。カーボン樹脂製のヘルメットが、眉の上まで覆っている。酷く現実感が無い、と彼は思う。自分が死地に赴くのだという実感が、全く湧かない。

ならば、これまでの生活に現実感があつたのか、と自分に問い、無かつた、と即座に答える。そもそも、現実とは何だ。客観なのか、主観なのか。主観だとしたら、現実だと感じなければ現実ではなくなる。逆に、現実だと感じれば現実になる。これまでの生活 部屋の中に閉じこもり、ネットワークの中へと自分を埋めていく感覚は、まさにそうだ。絶対主観で、世界が回る。

僕は緊張しているのだろうか、と彼は声に出さずに呟く。分からない、とまた即座に答える。緊張とはどういう状態だったか、思い出そうとしても思い出せない。

これが、現実感が無いということだ。現実感が無い、即ち、これまでと同じ。コンピュータの前だろうと、銃を握って赴く戦場だろうと、何も変わりはない。出来の悪い小説のように、淡々と、高速で流れていく時間。何があるわけでもない、平均化された日常。主観が一定であれば、そこが暗い部屋の中であろうと、熱砂の戦場であろうと、変わらない。

ならば、いつも通りにやればいいんだ。淡々とこなせば、日々は後ろへと流れていく。いつも通りに、何も考えずに、状況に自分を埋めていけば良い。やれる、と呟き、深呼吸。

蹲る新人を、緊張で身動きが取れないと解釈したのか、隣に腰掛けていた先輩の兵士がそつと囁く。

「気張るなよ、新兵くん。どうせお前らに出来るのは逃げることだけだ。多分、敵の中には例のロボットもいる。専門の訓練を受けた兵士ならともかく、お前たちではどうにもならない」

「そんな、じゃあ……」

「適当にやって、逃げる。安心しろ、背中を守ってやる。それが俺たちの仕事だからな。年下の人間を一人でも多く生き延びさせるのが年長者の役目だって、ジエスイット大尉が言ってたのさ」彼は笑

う。

名前を聞こうとして、止めた。彼のことを知ろうとしないことが、彼への礼儀だと、新人は本能で感じ取っていた。守るものと守られるものの距離は、限りなく遠いものだ。そこに信頼というものが存在しない限り。信頼は、距離を縮める。彼は新人を、遠ざけようとしている。

やがて移動手段を自らの足に変え、彼らは戦場へとにじり寄ってゆく。眼前に広がるのは、見渡す限りの荒野。赤茶けた大地に色の薄い灌木、岩盤。そして、それと余りにもミスマッチな朽ち果てた都市群が、視界のあちらこちらに転がっている。

国境に近いこの地域は、二〇〇〇年前に起こったと言われる、惑星規模の気候・地殻変動。俗に言う『大変動』の影響をもろに受けたのだ。露わになった岩肌が灼熱の太陽を浴び続ける脇で、文明の残滓を感じる建物が虚しく風化を受けている。このちぐはぐで、継ぎ接ぎだらけのパッチワークみたいな世界が、彼らの戦場だった。

1 始まりをもたらずもの・2

横倒しになった、鉄筋コンクリートのビルの影から向こう側を窺うと、これまた横倒しになった友軍の大型輸送トレーラーが、無様に腹を晒している。そして、聞きたくない音が淀む空気を切り裂いている。何か弾ける、軽い音。

隊長の檄が飛び、兵士たちは岩、瓦礫の影、窪地などに身を伏せ、小銃を敵兵のいるであろう場所目掛けて撃つ。新人もまた、倒壊した建物の影に身を伏せ、辺りを見回す。ターゲットがどこか分からない。教科書通りの射撃なんて、出来るわけがない。照準、トリガーを引く。けたたましい声と共に新人の銃からフルオートで飛び出した弾丸は空しく砂を散らし、大地を抉った。

すでに友軍部隊は統率を失っていた。残った僅かの兵士が、倒壊した家屋に突っ込んで倒れたトレーラーを盾に必死の応戦を繰り返すのみ。

「うくっ」

隣でくぐもった声。同時に一人の兵士が胸から血肉を散らして倒れる。新人と同期の、新兵の一人だった。

死体が変わった彼を見下ろし、新人は考える。目の前で人が死んだ。それを悲しむ自分、淡々と見つめる自分、悲しもうとする自分。一つの視線を、バラバラな意識が共有しているかのような錯覚を感じる。本心がどこにあるのか、自分がどこにいるのか、分からない。料理人に憧れていた彼の名を呼ぼうとしたが、砂にまみれた口からは乾いた音が僅かに漏れるだけだった。心のどこかが、呼ぶことを拒絶しているかのように。出来るのは、呆然として、生きることが止めさせられた彼の身体を眺めることだけだった。

どこからか、今までとは明らかに違う銃声が響いている。深く、重く 砲声と呼ぶ方が正しいほどの轟音だ。その発音源は、次第次第に大きくなり、近づいてくる。だが、危機が音の形で幾度警告

を飛ばしても、新人は、足に見えない楔を打ち込まれたかのようにその場を離れることができない。彼と過ごしたほんの数週間ほどの時間、彼と交わした言葉の全て、新人の中に残る彼が、楔だった。

新人には、友達がいなかった。信頼できる人間も、一人もいなかった。一人になり、一人の自分を広げ、自分の存在を薄めていくことが、新人の存在の仕方だった。だから、同期の彼が残したものは、新人にとっては途方もなく大きく、重い。薄かった新人の中に溶け込んだ存在の喪失は、弾丸の飛び交う場所で、生きるために行動することを忘れさせるほどに、巨大なものだった。

重厚な鉄の塊が岩盤を破碎する音が、一定のリズムを刻んで周囲を巡る。腹の底から突き上げてくる衝撃は即ち、巨大なモノの足音。何もかもを踏み潰し破壊する、争いの権化たる機械の巨人。新人が身を隠す瓦礫の前に達したそれは、八メートルの上方から緑に光る四ツ目をこちらに向けた。

帝国のロボット兵器、『機動装甲歩兵（モビリティ・アーマード・インフアントリ。略称M・A・I・）』だ。マツシヴなプロポーションにブレード・ローラー装備の脚部、左腕に外付けされた小口径の機関砲、腰のラッチに固定されたままのアサルト・ライフル、硝烟を上げる胸部バルカン砲。荒地での対人制圧戦装備であることは一目でわかる。つまり、一介の歩兵の 新人の敵う相手ではなかった。

先刻の、あの兵士の言葉が頭の中で何度も反芻される。

『逃げる』『敵わない』『どうにもならない』『生き延びさせる』

だが、新人の足は、沈黙する戦友の隣を離れなかった。走ることを行動することを、身体が忘却していた。動こうとすら、思えなかった。

ロボット兵器の頭部、カメラ・アイのレンズが小刻みに動く。自分にフォーカスを合わせているのだと、極めて冷静な頭が認識する。死への恐怖、生への執着 そんなものは感じなかった。ただ目の

前にある事実を認識し、処理することしか出来ない。思考の演算容量は、既に目盛を振り切れていた。

その時、機体の装甲に火花が散った。自動小銃の、火薬が爆ぜる射撃音に、金属を打つ着弾音が重なる。

「こつち向けやデカブツがアアアッ！」

あの若い先輩兵士だった。新人が彼を見ると、彼もまた新人を見る。早く離れる、死にたいのか、と彼の眼が叫んでいる。だが、新人は動けない。あの先輩は、きつと死ぬ、と彼は思う。そして、何故だ、と考える。隊長が、カーバネル・ジエズィットが言ったからか。その言葉のために、一つしかない自分の命を、自分の存在を薄めることで生きてきた人間、しかも他人の命のために捨てるのか。

命の価値には、人によって絶対的な違いがある。幾ら誰かが平等を叫ぼうと、人間は違う。新人の価値は、限りなく低い。

小銃の五・五六ミリ弾が、鋼鉄の装甲を叩く。弾倉一つ分を撃ち尽くしても、まるで効いていない。こつち向けという叫びに応えた訳ではないのだろう。鬱陶しいハエを追う人間のように、MAIは四ツ目を彼、兵士の方に向けた。胸部の機関砲が、虚しい抵抗を続ける彼を照準する。即座に、彼は弾切れになった小銃を捨て、鋼鉄の長筒を　対戦車バズーカを構えた。

「喰らえ！」

引き金を引いたのは同時だった。すれ違う火線が、互いの身体に達する。

だが、水分を繋ぎとめたタンパク質の塊であるところの人間は、鋼鉄の装甲に覆われた機械兵に比べて、余りにも脆弱過ぎる。毎分一五〇〇発、一秒に換算して二五発の一五ミリ機関砲が、彼を只の肉塊に変えるのは一瞬だった。対して、MAIの方は装甲板を一枚飛ばしてよろめくに留まる。一人の命の対価としては、余りにも軽すぎる。だが、意義はあった。

旋風の如く飛び出す男が一人。体勢の整わない巨人はその接近を容易に許してしまう。

「無駄にはしない……！」

男は手にした手榴弾のピンを引き抜き、機動装甲歩兵の股下に潜り込む。そして、股関節目掛けて放り投げる。

人の形をし、駆動する以上関節部というのは絶対的な弱点となり得る。構造上、駆動に必須な部位が装甲で防御出来ないためだ。関節が関節として機能するには、必ず面構成に遊び 隙間が出来る。それが一番大きいのが、股関節なのだ。

爆炎とともに、テルミット反応で焼かれた関節が弾け飛び、左脚部の外れたロボットが荒野に倒れ伏す。乾燥した砂塵が、巨体の衝撃で舞い上がり、飛び込んだ男の姿を隠した。

歩兵が大型二足歩行兵器と戦う術は、全く無い訳ではない。兵士が、機動装甲歩兵を知り尽くしていれば 弱点や死角など、操縦兵としてロボット兵器を知り尽くした人間であれば、戦い方は自ずと見えてくる。逆に言えば、知り尽くした人間でなければ、戦うことは出来ない。己の命を、無駄に散らすだけだ。

どう動けば照準されないか、どう接近すれば懐に潜れるか、どう攻撃すれば人の脆弱な力で、MAIを無力化出来るか。針の穴を通すような思考と行動があつて初めて、戦える。

新人は息を呑む。彼にそれを教えたのは、誰だったか。自分を埋め、生き残る 一つの駒として機能するためには、要らないと決めた付けたことを、教えてくれたのは誰だったか。

「た……い……ちょう」

「生きてるな、二等兵君」

少しずつ晴れる砂埃の中から姿を現した男 カーバネル・A・ジェズイットは、いつものようににやり、と笑う。

膝の力が抜けた。どうしてかは、分からない。安堵ではない。恐怖でもない。怪我もしていない。只、もう立っている必要は無いと新人の脚が主張していた。目の前では、片足を失った巨大ロボットが、ジタバタともがいている。男が、呻き声を上げる。

「隊長、その脚……」

ジェズイットの左脚は、夥しい量の血に塗れていた。太い血管を切ったのか、醜い赤い染みが、見る見るうちに広がっていく。鋭く千切れた鋼板が深々と突き立ち、傷口からはどす黒いが湧水のごとく溢れ出していた。コーヒーフィルタに似ているのだなと、新人は思う。

「奴さんの破片みたいだな。刺さったのが首じゃなくて良かった」
一つ肩を竦め、彼は新人の肩を借りて立ち上がる。無理に笑顔を作っているが、左脚を踏みしめる度に唸り声が漏れた。唇を歪めるのが、彼にとつては歯を食い縛る代わりになるのだ、と新人は理解する。彼は笑い、重すぎる苦痛に耐えている。今も、いつでも。

「行くぞ、ミヤケ」ジェズイットは言った。

「え……どこへ？」

「敵は一機だけじゃない。補給物資の中に人型強襲陸上戦闘機がある。そいつを動かして、他を蹴散らす」

彼の顔からいつの間にか笑いが消えていた。只一点に視線を固定、あらゆる痛みに耐える、憤怒の形相。

返そうとした無茶だ、の一言を新人は思わず飲み込んだ。

一体、何が無茶なのか。無茶だから、何がいけないのか。どうせ新人には帰りたい場所なんて存在しない。生きることとは作業であり、作業を継続することが唯一の存在意義だ。薄まった自分に核は無い。空っぽだ。

だったら一度くらい、死ぬ気になってみるのも良いじゃないか、と思う。もっと 膝だけじゃなく、全身が動くことを拒絶するよ
うな状況に自分を追い込めば、空ろな中にも何かが生まれるかもしれない。生きる理由として、縋れるものが。目の前の男は血まみれになりながらも、笑って耐えることを捨ててまで、死ぬ気で生きる
気である。

付いて行こう、例えばそれが奈落への道であろうとも。理由の無い
戦いの果てに、見えるものがあるかも知れない。

いつか打たれた左頬にそっと触れると、新人はジェズイットの杖

となつて歩き出す。理由があることは、きつと幸せなのだ。或いは、幸せだったのだ。彼女は。理由を持たない新人には理解できずとも、理由の否定が存在の否定であることだけは、理解できた。

足が何かに躓く。奇妙な重量を感じたそれは、あの先輩兵士の頭部だった。

「後ろを見るな。過去には、背中を見せる。死んだ奴らに、笑われたくないのなら、な」

「……はい」

ジェズイツトは笑い、新人は曖昧に頷く。新人が支える彼の肉体は、自分の心を支えることを彼に委ねても尚、重い。支えあうことは苦痛なのかそうでないのか、分からない。今は歩くしかない。

トレーラーに辿り着くのにさして時間も手間も掛からなかった。残された僅かの兵士が決死の覚悟で反撃を始めたため、却って手薄になっていたのだ。ロボットたちは、至上目標であるう補給物資の破壊を忘れ、携帯火器による必死の抵抗を試みる足元の兵士達に意識を持っていかれていた。「敵の指揮官は戦力差に奢り、反撃される可能性を露ほども考えない凡将だ。付け込む隙は幾らでもある」と言つて、ジェズイツトはまた無理な笑いを浮かべた。

トレーラー脇に付いている小さな扉を開き、這うようにして中へ入る。外から見た見た荷台は、内部で悠々生活が遅れそうな大きさがあるようだったが、内部は、乾燥地帯の日差しに慣れた眼では何も見えない程暗く、様子は分からない。

ジェズイツトが慣れた手つきで壁をまさぐり、照明を付ける。

「まだ電源は生きていたか」

「……これが」

「そう、我らが共和国の切り札さ」

そこには三機のHAL ヒューマノイド・アサルト・ランドフアイターが片膝を着き、頭を垂れた待機姿勢のままトレーラーの慣性に従つて横転していた。赤い塗装には剥げ落ちの一つも無い。パーツの欠損も、装甲の歪みも無い。工廠から出たての紛うことなき

新品だ。生まれたての、穢れを知らない赤。

新人は呆然としていた。変化する戦場の申し子　メディアに露出し、プロパカンダの役割も担うそれが、目の前に存在しているという事実が、彼を圧倒していた。同時に、知っている、と思った。機械の塊に、言い知れない親近感さえ覚えた。映像で見ている、ジエズイットの話に聞いている。知らないはずなのに、知っている。有名過ぎる観光地を自分の眼で見たときの感覚に似ているのだろう。と彼は思う。或いは、小さな子供の頃に見て、それきり忘れた光景を目の前にした感覚。記憶の奥底に刷り込まれた、経験を超越した一つの事実だ。

不意に、ジエズイットがさも当然のような口振りで言った。

「動かすのは、お前だ」

「え？」思わず、立場も忘れて問い返す。

「俺には無理だ。さっきの爆発の破片のおかげで左腕が上がらない。他にもあちこち、な」身体のあちらこちらを大振りなジェスチャーで指し示しながら、啞然とする新人を無視して彼は続ける。「安心してしろ、俺も乗ってやる。少し狭いがな」

「で……出来ませんよ！　車だつて運転したこと無いのに、いきなりロボットなんて……」

「お前、俺の話聴いてなかったな……まあいい。二足歩行兵器は従来の兵器とはあまりにもその操縦ノウハウ、要するに戦闘に要する慣熟度が違いすぎた。何らかのインターフェースが無ければ、まともに動かせるのは開発者のみ、という状況だ。そのため、搭乗者の脳波を非接触的にモニタリングすることで直感的かつ簡易な操縦を可能にする『B2システム』が例外なく搭載されている。思い出したか？」

何故か忌々しげに、ジエズイットは言う。新人の思考を、鉄板の向こうの轟音が妨げる。

確かに……そんな話も確かに、あった。乗り手の人間に合わせてセルフ・フォーミングを行い、最小の動作で最大の機動を行

う、言わば人機間の最適化装置、言語 コミュニケーション・ツール。それがB2、ブレイン・バイパス・システムだ。

新人の記憶は、全て忘れるか全て覚えているかのオール・オア・ナッシングだ。忘れようと務めれば、どんなことでも完全に封印できる。だが、一度その封印が解かれれば、詰まりの取れた排水パイプのように、記憶はスムーズに流れ、溢れ出す。それは、彼の生きるための防衛衝動が生み出した功罪に他ならない。

新人は語る。

「思い出しました。そのB2システムを扱えるか否かは純粹に個人の才能に依るところが大きい。そしてデータ上は明らかに若年層、それも一〇代の適合度が高い、でしたね」

同時に、それを語ったときのジェズイットの顔が、まるで苦すぎるコーヒーを口にしたときのように複雑で、曖昧に歪んでいたことまで、新人は思い出した。

「そうだ。お前がいたのは幸運だった。俺の勘だが、お前ならきつとシステムに適合する。うまくやれる。どの道、選択肢は無い。死にたくないのならな」

選択肢は無い、という一言が突き刺さる。人生には無限の選択肢があるという幻想を、新人は既に捨てて久しい。抗し難い、どうしようもない力 社会であり、親であり、大人であり に流されて生きることにしか、矮小な一人にはできない。しようとも思われない。

だが、無限の選択肢がどんなに狭められようとも、二つの道は残る。向かうか、立ち止まるかの二つだ。

立ち向かえる人間は、抗し難い力の中にあっても一人であり続ける。たとえ社会の歯車と蔑まれようとも、歯車が無ければ機械は動かないことを知り、その苦痛に耐えることができる。しかし、そうでない人間もいる。惰性で立ち向かうこと 悪し様な意味での歯車にすらなれず、ジャンク・パーツの一つとして目立たずに転がっていることしかできない、新人のような人間が。そして彼のよう

な存在は、誰にも顧みられることなく、流れの中で忘れ去られていく。

「知った風なこと言わないで下さい」

「何だと？」

忘れる側の人間に、忘れられる人間の考えが理解できるはずが無い。虚ろな 何も無い人間の心を、知ることはできない。できないものはできないのだと、骨の髄まで思い知らされた上で、新人はここにいる。

「僕にはできませんよ。死ぬだけです」

「このままここにおいても間違はなく殺される。だったら戦って……」
自らを死へ追い込めば、虚ろでなくなるかもしれない、とも思う。燃え尽きる間に際輝く蠟燭のように。だが、追い込むのと追いつ落とすとは違う。自暴自棄に動くくらいなら、いつそ立ち止まっていた方がいい。

「戦って、死ぬんですか？」

「さあな。そいつはお前さんのやり方一つだ」

「できないって、言ってるでしょう」

「生存の可能性があるなら、賭けてみる価値はあると思わないか、二等兵君？」

そう言って、ジェズイットはまた笑う。歪む唇が、新人を苛立たせる。リターン率が極めて低いことを理解しきっている、諦念の笑みだ。

「できないものはできないんだって、どうして分かってくれないんだ！」目の前への苛立ちは叫びとなって、新人の口を衝いた。「人間はね、不公平なんだ！世の中はそうできている。努力？頑張り？認めてもらえる？そんなの嘘だ。嘘っぱちだ。確かに、認めてもらえる世界だってあるのかもしれない。だけど、僕は……少なくとも僕はそうじゃなかった！やったって、頑張ったって、どうにもならないことが多すぎるんだよ。まして僕には、助けてくれる人もいなかった。いつも一人だった。だから僕には何も無い。凡庸

で低能で根暗で、傲慢で間抜けで……ようやく出来た友達が、守つてやると言ってくれた人が、死んでいくのを横で見ていることしか、逃げ出すことすらできない僕は……。僕はっ！」

不意に気が抜け、新人は膝を折り、言葉を切つてその場に崩れる。両手を地に着いた姿を、ジェズイットは淡々と見下ろしている。

「何も、できないんだ。だから、何も、しなくていいんだ！　なのはどうして、あなたはできるだなんて言うんですか！」

トレーラーの空間内に、新人の声が反響する。遠くで爆発音が時々起こり、鉄の壁面が震える音が混じる。着いた掌を握り拳に変え、新人は床の継ぎ目を睨む。ジェズイットが答えを返すまで、決して上を向いてやるものか、と彼は奥歯を噛み締めて思う。

立ち向かえる人間の、驕りなど微塵も混じっていない言葉ほど、新人のような人間に苦痛を与える物はない。責めることも、憎むこともできない。彼らはただ、別種の、決して理解しあえぬ存在がいるということを知らない、分からないだけなのだ。故に彼らは憐れむ。それがどれほどの苦痛を生むのかも分からずに。

ジェズイットはしばらく無言のまま、何も言わなかった。新人は下を見、砲弾の炸裂する音だけが遠くで響く。

果てしなく長く感じられた間を経て、男はそつとその口を開く。

「格好悪いな、お前」

憐れみの言葉ではなかった。罵倒か批評家気取りか　どちらにせよ果てしなく遠い場所からの言葉。憐れむくらいなら突き放した方がいいと、知った風な口を利く人間はどこの世界にもいる。偽善の優しさだ。

「そうですね」

「情けないな」

「そうですね！」

「だがな、一つ教えてやる」

ジェズイットの声色が変わった。思わず新人は口を真一文字に結んだまま、上を見る。

ニヤリと笑った彼の表情からは、さつきまでのような方便的感情は読み取れなかった。こんな笑いは、初めて見る。

「俺はもつと格好悪い。俺ほど多くの部下を失った人間を、俺は他に知らない。傷を負っても自分だけは生き延び、今も部下に全部任せて自分はこのザマだ。俺は信じるに足る人間ではない。裏切られ、後ろ指差され、泥と血に塗れるのが相応しい、人間の屑だ。そんな俺が、お前に言う」

口元をだらしなく歪めてマゾヒスティックな笑みを漂わせ、彼は腰掛けていた鉄箱から立ち上る。そして次の瞬間、新人は胸倉を掴まれ、無理矢理に立ち上がらされた。

「何……するんですか！」

「戦友を失った？ 先輩が死んだ？ それがどうした……。甘ったれるな、糞餓鬼！」

「甘えて何が悪いんです！？ 僕にとつて、彼らは……！」

「貴様の今までなど知ったことではない！ 大切な人を失う苦しさを知らぬ者は、守られたまま死んだ腰抜けだけだ。何も背負っていない人間などいない。そんな程度で知った風な口を利くんじゃない」

「それでも、僕は！」

「それでも戦うことを拒絶し、いつまでも逃げ続けるのか？ できないできないと言いつけるのか？ 自分を守めることは心地良い。閉じ籠るのは容易い。立ち止まるのは誰にだってできる。自分の価値を貶めることは、本当に簡単だ。お前はこれまで、そうやって生きてきたんだらう？」

「そうですね。だけど、その何が悪いっていうんだ！ 誰もが目の前の何かに立ち向かえるわけじゃない。立ち向かえば痛いだけだつて、僕は知っているんだ！ あなたとは、違うんだ！」

「違うないさ。俺もお前も、人間の屑だ。屑に甘んじているか、そうでないかの違いはあるがな。お前は、屑でいいと思っている。俺は、そうではない」

「そうですね！ 僕は屑でいいんだ！ 何がどうなるうと知ったこ

とじゃない。裏切られるのも、失くすのも、悲しむのも、悲しませるのも、嫌なんだ！」

「だから糞餓鬼と言った！」

何か言い返す間も無く、胸倉を掴んでいたジエズイットの手が、新人の身体を突き飛ばした。そのまま尻餅をつく。骨が鋼板に当たり、鈍い痛みが胃の辺りまで突き上げた。

「ミヤケよ。人の魂が育つのは、どんな時だと思っ？」

「……知ったときです。環境や、人を」

少しだけ迷い、新人は答えた。周囲に何があるのかを知ったとき、手を伸ばすことを。そして、伸ばしても届かぬ場所があることを理解する。人の心を知ったとき、決して分かり合えないと理解する。自分はそうだった、と彼は思う。

だが、ジエズイットの答えはそうではなかった。

「違うな。やはりお前は只の糞餓鬼だ、ミヤケ。いいか、人の魂が育つのは、傷ついたときだ。傷つき擦り切れ、それが癒える過程にこそ、成長というものがある。人間は、前に進む」

「痛みに耐えられない人は、どうすればいいんですか。僕は耐えられないから、閉じ籠ったんだ」

「痛みを知らぬ者に人の痛みは分からない。お前は既に、理解しているだろう？」ジエズイットはまた笑う。「お前は赤紙によって招集され、無理矢理にでも人と関わった。逃げ道を断たれた。ならば既に、知っているはずだ。お前には、人の痛みが……何を大切にしているのかが、分からない。違うか？」

左頬が脈打った。癒えたはずの、彼女に　美澄美琴に殴られた疼痛が、まるでたった今もう一度殴られたかのように蘇る。

「お前はそれでいいのか？　お前自身は、それを許せるのか？」

「僕は自分を傷つけなきゃならない、ってことですか？」

「傷つく覚悟をしる、ということだ。生きるとはそういうことだと、俺は思っている」

「どうすればいいんですか？」

「決まっている」

即座に言つてジェズイットは立ち上がり、何かの操作パネルに触れる。同時に、横転したロボット　人型強襲陸上戦闘機の頭部が倒れ、操縦席が露わになった。

「乗れ。そして戦え。今日を生きねば、明日は来ない」

超然とするジェズイットを見上げ、新人は拳を握り締める。

傷が癒えるとき人は成長するというのなら、今までの新人は、只生きていただけだ。目的も持たず、成長することも無く、全てが静止した中で、時の流れを漫然と彷徨っているだけだ。そしてそれが良い選択でないことは、彼自身も理解していた。動くことを恐れ、立ち止まり、届かぬ場所へ手を伸ばすことを止めることは、何も生み出さない。

だが、それは必ずしも悪ではない。変わらない、進歩の無い自身であり続けることを肯定するか否か。問題は、そこだ。目の前の男は、否定した。

(僕は……?)

彼のように、痛みに耐えられるのか。血を流しても、涙は流さずにいられるのか。

「安心しろ」こちらの心を見透かしたかのように、ジェズイットが言う。「耐えられなくなったら、俺がお前を助けてやる。今のお前は、一人じゃない」

そして差し出された無骨な掌を、新人は少しだけ迷い、しっかりと掴んだ。

1 始まりをもたらすもの・3

人型強襲陸戦戦闘機、その第一世代量産モデル、HAL MO1 ストライクリザード。名に相応しく、各部は折れそうなほど細い。二手二足。人の形をしてはいるが、地を這いずり回る蜥蜴が、そのまま二本足で立ち上がったかのようなようだ。二つのカメラ・アイは、爬虫類の鋭い眼を思わせる。無機質だが、射止められるような視線だ。

「ほう、仕様が随分と変わっている。初期生産型とはエライ違いだ。産まれたばかりの兵器は、進化も早い」

竜の鱗を思わせる赤い装甲を軽く叩きながら、ジェズイットは、外の喧騒などまるで別の世界のことのように言う。

前に倒れた頭部と背中の間でできた隙間から、新人は操縦席へと潜り込む。人二人、どうにか入りそうなほどの空間だ。正面と両サイドの壁には大型のディスプレイがはめ込まれ、手元にも小型の画面が複数ある。

シートは樹脂でコーティングされている。アームレストなどは無い。代わりに、足元にペダル。靴のように履く物が一つつつ、両手元にコの字型のグリップが、そして両肘両膝の当たる部分にパネルの付いたリングがある。

「そこに身体を通せ。基本の操作はそいつで行う」後から乗り込んできたジェズイットが、席内を物珍しげに見回して言う。「ここも広くなった……動力炉の小型化だな。以前のままなら、到底二人乗りなど不可能だったものを」

言われるままに、新人は輪に四肢を通し、シートへ身体を収めた。まるで、雁字搦めの拘束を受けているかのようだ。自分から入り、いつでも抜けられるというのに。

「そして肝心要のコイツだ」

シートの後ろからジェズイットの手が伸び、新人の頭部にヘッド

ギアを取り付けた。ウレタンか、類する素材が入っているらしく、衝撃を和らげる効果もありそうだ。沈黙する大型パネルに映る自分の姿を見ると、ヘッドギア 頭から、ケーブルが数本延びていることに気付く。先を辿ると、シートの後方だ。

「ブレイン・バイパス・システム。くっ付けるだけで、お前さんの頭の中を覗き見る機械だよ」

「……余り、いい気分ではないですね」

「直に気分は最悪になる」

彼の声に呼応するように、足元からの震え、唸りがボリュームを増す。既に火の入っていた主動力、疑似核融合炉の拍動だ。そして電力供給が一定値に達すると、モニタに一齐に光が点った。ブルー一色の、初期起動画面。ジェズイットの指が、キーボードの上を疾駆する。

「緊急時だ。手順は俺の方でスキップさせてもらう。B2システム起動、対象を三宅新人二等兵と登録……。開発に関わっていたのである。こういう非正規なやり方にも通じている」

幾瞬の間を経、了承を示す表示が画面に踊る。同時に、頭に鈍いとらえどころの無い痛みが湧き上がる。誰もいないのに、誰かが見ているような、視線を感じる状況に似ている。痛み、とは少し違うのかも知れない。言うならば、不快感だ。または、落ち着かない。身体が、動くことへと駆り立てられる。

「回路接続、センシング開始」

ジェズイットが操作パネルを叩く。

不快感が、溶けた。消えていないのに、頭の奥へと流れ込み、まるで初めからそこにあったかのように、もやもやとした感覚が頭の全体へと拡散していく。知っている感じだと、新人は思う。

「係数は……〇・六でいいな。よし、後は任せる。教えたな？」

「はい。多分、大丈夫です」

緊急時用の簡易セットアップを終えたジェズイットにそう答え、新人はパネルを操作しようと腕を動かす。同時に、『CLEAR』

の表示が流れ 両腕両膝に鈍痛が走った。

「ああ、操縦服がないから、少し痛いかな」人事のように、ジェズイツトが言う。

リングが、身体に食い込んでいた。同時に、頭上のハッチが閉鎖。そして、ブルーだった画面も切り替わり、外部の鮮明な映像が表示される。薄暗い、トレーラーの内部。遠くで爆発音がする。

「だが、これでもう ストライクリザード はお前のものだ」

「僕のもの……」

呟き、輪に通した両腕を動かす。壁の画面を通して見える ストライクリザード の両腕も、呼応してぎこちなく動く。腕部と膝の屈伸は、ここでの操作に対応している。だが、これだけでまともな

戦闘に耐える機動が行えるはずはない。

新人は、両手のグリップの、中指から下を軽く握る。軽い反発とともに、B2システムがアクティブになる。

ブレイン・バイパス・システムは、操縦者の意思を汲み取る機構としばしば形容される。非接触式に操縦者の脳をモニタリングし、どのような行動を望んでいるのかを類推することで、簡単な操作を發展させて複雑な動きを生み出す。新人が同じように右腕を動かすと、先ほどまでのようなぎこちなさは消えた、自然な動きで肘が曲がり、手首が回り、掌は拳を握っては開く動作を繰り返す。B2システムによって、動作が望む形に最適化された結果だ。

ジェズイツトはその過程を、『頭の中を覗き見る』と言った。人によっては、慮るとも言う。優しさを持った機械と絶賛する者まで、世の中にはいる。気分が悪いと、新人は思う。

「索敵範囲、周囲五〇〇メートルでロック……大丈夫ですか、隊長？」

「人の心配はいい。今のお前は、自分のことだけ考えていればいい」新人は頷き、足元に広がる血溜りを無視した。

「パワーレベル、戦闘時へ。いつでも行けます」

動力炉は、常にフル稼働するわけではない。戦闘などは行わない、

メンテナンスや出撃準備のときの平時、^{ユージュアル}交戦地域への移動時など、直接戦闘は行わないが警戒態勢を取る巡航時、^{クルーズ}そして敵と相対したときの戦闘の三種に、動力モードは大別される。

「よし。いいか、コイツの装備は荒地での高速機動戦闘用だ。フルドライブなら三秒で最高速度、時速二二〇キロに達する。性能の差に任せてひたすら逃げ回れ。奴らのベルキャットでは、絶対にコイツに追いつけない。この地形でなら、負ける要素は無い……操縦兵の技量を除けば、だがな」

新人は曖昧に頷く。

頭頂高七・六メートルの巨体は、その特徴的脚部形状によって高速戦闘を実現している。今装備しているのは、全長およそ三・五メートルに及ぶ長大な『足』だ。それがジェット・スキーの役割を果たし、脚は中腰の状態で半固定してバネとしての役割に特化。人型兵器ならではの柔軟で素早い重心移動による機動性と、高速時安定性とを両立させているのである。外見は、スキーを履いているというよりもむしろ、足の甲から先が異常に肥大化したかのように見える。

この脚装備は『荒地戦仕様』と一般に呼称されている。主要な物には他に完全な二脚の『市街戦仕様』があり、ごく一部、非常に限られた地域でのみ、それ以外の多脚仕様なども運用されている。

後ろで計器を操作していたジェズィットが身を乗り出す。

「一〇分後に味方のHAL部隊が着く。それまで保たせれば充分だ」
「……一〇分」

「ああ。運の良いことに、信頼の置ける連中だ」

「知り合いなんですか？」

「いいから、行くぞ。乗り込んだままトレーラーごと吹っ飛ばされるのは御免だろう」

笑って頷き、床 元々は壁面だった場所に固定されているライフルへ手を伸ばす。だが、届かない。二度目も三度目も、遠すぎるのではなく、操作のミスで腕が空振る。

「落ち着け。コツがあるんだ」焦る新人に、ジェズイットは落ち着いて言う。「自分を、いないものと考えろ」

「いないもの？」

「そうだ。意識を拡散させる。自分を広げるんだ」

「ああ、それなら……」

得意だ。ネットワークに呑まれるとき。現実感を消し去るとき。自分を薄め、自分を守るとき。いつだって、新人はそうしてきた。だが、それは手段として良いことなのだろうか。まるで、自分の存在を自分で否定するかのような行為は。

もう一度手を伸ばすと、易々と届く。口径四三ミリ、装弾数六〇のアサルト・ライフルだ。国を問わず、大型の二足歩行兵器では、仕様の違いは多々あれど、突撃銃は至極一般に用いられている。続けて予備弾倉を四つ、滑らかな動作でを腰の両サイドに二つづつ固定する。本来なら腰背部にもラッチがあるのだが、荒地戦仕様の場合はそこに推進機が取り付けられるため、使用できない。

「簡単だろう？」

「そう……ですね。意外に」

「それでいい。お前の心は大きい。肉体は、器に小さすぎる」

「ロボットこそが、僕の身体だとでも？」

答えの代わりに、轟音が聞こえた。そして衝撃。先刻より、明らかに近い。

「行け、ミヤケ！ この車両が砲撃を受けてる！」

自己の喪失、現実との乖離。痛みを知ること、同じ自分でい続けないこと。何が良くて、何が悪いのか。何を信じればいいのか。何のために、生きればいいのか。今はまだ分からない。ならば、どうするのか。

「……行きます」

立ち止まらずに、立ち向かう。今はそれでいい。空っぽの自分の中に、縫れる何かが生まれるまでは。

新人は、両足のペダルを一気に踏み込んだ。

推進剤に点火、スラスタが火を吹く。シートに押し付けられる方向の加速度が生じ、一瞬、息が詰まる。元は天井だった壁面に突っ込み、爪先　荒地戦仕様のジェット・スキーで突き破る。正面に、敵一機。

ロツク・オンするよりも早く、右手の親指が動く。コの字型グリップの上面に埋め込まれているボールを微細に操作し、照準。ヘッドギアが目線の動きと、照準したい対象を認識する。人差し指を引き、発砲。すれ違い様に弾丸を叩き込む。

撃墜、とはいかない。だが、戦闘能力は削れた。そのまま加速し、ものの数秒でトップスピードへ達する。土煙を飛ばし、ターン。頬の肉が歪むのが、ありありと分かる。

「どうだミヤケエ！　これがヒューマノイド・アサルト・ランドフアイターだ！　最強の陸戦兵器だ！」

「乗り心地は、最つ悪ですな……！」　直に最悪になる、というのはこのことだったのか、と新人は納得する。

「その意気だ……左六〇度ターン！　回り込んで撃ちまくれ！」　敵群の混乱が伝わってくる。気を取られて足元の瓦礫に突っ込む者、左腕部に取り付けられた対人用機関砲を慌てて投棄し、アサルト・ライフルへ持ち変える者。

残りは六機。戦力差は歴然としている。だが、それは正面から戦おうとしたときの話だ。プライドも、フェアプレイも、新人には関係ない。立ち向かい、今を生きること　今の新人を動かすのは、ただそれだけ。

爪の先端が、緑の薄い灌木を押し潰す。時速二〇〇キロメートルで疾駆する八トンを越える巨体が、乾燥して赤茶けた土を宙へと舞わせる。

一〇分、一〇分と呟きながら適当に照準を付け、トリガーを引く。標的を捉え切れなかった弾丸は都市の残骸に命中。均衡を崩壊側に振られた建物が瓦礫に変わり、また砂埃が視界を奪う。

凪いでいる。空になった弾倉を捨て、右腰から新しいものを取り

出しセット。ケースレス仕様なので、フルオートで乱射しても薬莖は排出されない。画面の片隅で、『0』だった表示が『60』に変わる。

高速走行を止めぬまま射撃。数字が、あつという間に減少する。左膝を微妙に屈してリングと、パネルの角度を変化させる。ブレイク・バイパス・システムの自動最適化を経て、左ヘターン。各部冷却・廃熱正常の表示が、ふと目に留まる。ライフルにも冷却機構があるのか、と新人は場違いに感心する。

視界が悪い。本来なら、岩盤にしても放棄都市にしても、三丁四メートル程度の高さが精々で、八メートル弱の体高を持つロボットたちの目線ならば、見晴らしは良い。だが今は違う。新人は、トレーラーを中心にした数十メートルの円内を縦横無尽に高速走行している。そのため、巻き上げられた　巻き上げた粉塵は天然のスムークと化している。襲撃者にとっては都合が悪く、新人にとっては都合が良いことに。加えて今は、風が無い。

撃墜する必要は無い。時間を稼ぐだけ。自分に言い聞かせ、できる限りの速さでマガジンを交換。間髪いれずに射撃。おぼろげに見える影が、大きく揺らめいた。

「当たった!？」

煙を割り、現れたのは、胸部に四三ミリ弾の直撃を受けて沈黙した機動装甲歩兵だった。ペット・ネームは　ベルキャット。型式番号はMAI 03G。共和国側では　ゴリアテ　と呼称されている。本名が知っているのに、なぜわざわざ違う呼称を用いるのか、新人には理解できない。

「お見事、コクピット直撃だ」口笛交じりに、ジェズイットが言う。死んだのかな、という曖昧模糊とした思いが浮かぶが、すぐに押し込める。死んだから何だ。殺したから何だ。殺すことが善とも思わない。必要悪とも思わない。考えるのは、後でもできる。今は人のことなど、考えていられない。

弾倉を入れ換え、再び四三ミリライフルが火を噴く。伸びる火線

は楢田弧を描き、見えない標的へと向かう。

「次が最後の一弾倉です！」

スキーを立て、スピードを殺しながらも加速は止めない。結果、スライディングした状態のまま走行する姿勢になり、振り返ると砂のカーテンを引いているようにも見える。そのまま空になった弾倉を投棄し、新しい物をセット。これで、最後の一つ、最後の六〇発だ。

敵陣の混乱は解けていない。向ける相手を失った四つの銃口から発せられるマズル・フラッシュは、花火のように瞬いている。綺麗だ、と新人は思う。そして、自分の感覚が、戦場にあつて尚日常と全く変わらないことに、そら恐ろしい気持ちになった。ただの延長線。自分を埋没させれば、生きていける。

「ようし、勝負どころだ、ミヤケ。いいか、最初に照準した一機に全弾叩き込め。それから超音波振動ブレードをセット」

「了解」

短く応え、火器・武装管制画面をアクティブに。ヘッドギアが感知する視線・頭部の向きと、B2システムを介して伝わる意識の収束点を総合し、前方ディスプレイの一部に機体の概略図と、武装の概要が立ち上がる。右手に四三ミリアサルト・ライフル、残弾六〇。胸部に機関砲、脇下に投擲式のダガー。そして左大腿部の武装ラックには、ブランクのゲージと短刀の図が表示されている。

「超音波振動ナイフ……ですか？」

「そう、それだ。充填しろ」

了解、とまた応え、左手の親指でボールを操作し、ナイフを選択してトリガーを引く。すると、空だったゲージが上昇を始め、同時にそのすぐ横に充填終了までの残り時間を示すコンマ刻みの表示が現れる。

緊急時や作業時はこの限りではないが、一般に戦闘時は、右手の操作は機体本体の、左手は内部システムの操作に対応している。ここでも、B2システムは操縦者の目的に合わせ自動で巧みなアシス

トをする。

先程ジェズイットが言った、増援到着までの時間は後二分強ある。保たせられるか、と不安が過ぎり、保たせる、と自分自身でそれを振り払う。数字が回転し、残り充填時間が減少する。

「三、二、一、チャージ完了です！」

コクピットが震えている。次の加速はまだか、早く走らせる。

ストライクリザードの叫びが聴こえた気がした。新人は赤外線センサーも併用し、標的を捜す。

煙の中に、薄ぼんやりと蠢く影が一つ。頂点の光が、こちらを向く。ターゲット、ロック。

「射程内だ、行ける！」

思わずそう口に出したときには既に、両脚は機体を横滑りさせ、右手はトリガーを引いていた。ストライク・リザードの右手も、巨大な突撃銃のトリガーを引き、閃光と轟音と共に、主力戦車の複合装甲をも易々と貫通する弾丸が迸る。一瞬遅れて、着弾。確かな手応えがある。装甲と、駆動系を撃ち抜く生々しい音。

やった、と新人は思う。だが、またしてもジェズイットの答えは違った。

「やられた……退け、ミヤケ！ 道理で動きが鈍いわけだ」

現れた機動装甲歩兵 MAI、ベルキャット。その異様さに気付いた時には、手遅れだった。

体躯が一回り大きい。それは、撃墜された 新人が撃墜した僚機の残骸を、楯代わりに抱えているためだ。弾丸は、命中はすれども届かない。なぜ気付かなかった、と臍を噛み、視界が悪いためだと納得する。こちらが向こうから見えないということは、向こうがこちらから見えないことと同義だ。見たければ、見せなければならぬ。

緊急回避 間に合わない。致命傷を防いぎつつ肉迫した ベルキャット が、もはやスクラップでしかないMAIの成れの果てを、狼狽する新人と ストライクリザード へ向け思い切り叩き付ける。

衝撃に一瞬、身体がシートから浮く。

「うわああっ！」

視界が暗転、仰向けに転倒。セーフティ機構が働き、推進器がストップする。痛む身体を叱り付け、モニタで周囲を確認　するまでもない。目の前には、手斧を構えた別の機体が立ちはだかっていた。軌跡は恐らく胸部のコクピット一直線だろう。無表情な頭部の四つの瞳が、獲物を捉えて危険に輝く。

動かなくてはやられる、と思う。だが、立ち上がれない。

脚部の形状上の問題だ。高速時ならば抜群の安定性をもつ三・五メートルの巨大な足だが、倒れてしまうと復帰するまで時間が掛かりすぎる。一撃離脱を旨とする　ストライクリザード　荒地戦仕様が、離脱できなかつたらどうなるか。答えは一つ、死、だ。

立ち上がらないわけではない。動きたくないわけではない。動くという思考が働かないわけではない。この戦場に、新人を縛る物は何もない。先刻とは違う。だったらこの脚は何だ？　邪魔だ。要らない。顕在化した、枷だ。

左手がグリップから離れ、壁の一箇所を叩く。意識下と無意識下の間で、何を、どうすれば良いか、脳が全身に指令を送っている。その、プラスチックパネルで覆われた拳半分大のスイッチを叩くかどうか、新人は知らなかった。だが、叩けば良いと　動ける、戦えると理解していた。

知識は無い。乗ったのも初めて。なのに、なぜ分かるのか。そもそも、なぜ戦えるのか。システムをたまたま上手く扱えると、ただそれだけか。具体化された行動まで、『上手く扱える』の範疇に入るのか。

ストライクリザード　のことを、新人は知らない。テレビの映像で見たか、ジェズイットの話聞いたか、それだけだ。ならば、この既視感は何だ。

違う、既視感ではない。見たのではなく、見られている。この得体の知れない居心地の悪さを、新人は知っている。どこで知ったの

かは、分からない。解けたはずの違和感が、頭の底に再び蘇る。考えるな、と新人は自分に言い聞かせた。考えるのは、後でもできる。

左手が動く。安全機構のブロックを強制解除。スラスタ、アクティブ。火器管制、兵装切り換え。両足のペダルを、一気に踏み込む。背中から、突き上げるG。

衝撃吸収用の緩衝材が一気に気化し、関節ボルトが接続を解く。足首から下 ジェット・スキー部を切り離し。後腰部スラスタ、全開。機体が弓なりにしなり、無理矢理に体勢復帰。関節が悲鳴を上げ、アラートが絶叫する。左大腿部武装ラック解放。飛び出したナイフの柄を、右手で掴む。振動機構を始動。微かな唸りだけが耳に届く。

うろたえる敵機へ、半ば殴りつけるようにナイフを突き刺す。同時に、想定していない荷重に耐えかねた足首 足が切り離され、内部機構が露出している が、断末魔の音を立てて圧壊した。

鋼鉄を裂く刃は、胸部、コクピットに食い込んでいる。中の操縦兵は恐らく即死だろう。高周波振動する特殊加工されたブレードに身体を潰され、血肉の塊と化したに違いない。ベルキャットの右手から、手斧が落ちる。そして全身が力を失い、砂の上へ崩れた。同時に ストライクリザード も、膝を屈して両手を地面に着く。

やった、と呟く。だが、新人に許された反撃は、そこまでだった。身動きが取れない。ライフルは衝突の再に手放し、拳銃弾切れ。ナイフは深く刺さりすぎ、敵の身体から抜き取れない。そして残った投擲用の短刀を取り出すよりも、無傷の敵性体三機の攻撃の方が遙かに早かった。

膝立ちになった ストライクリザード に、容赦の無い攻撃が襲い掛かる。ショット・キャノンが右腕を、アサルト・ライフルが脚部を、そして手斧が頭部を潰した。衝撃に全身の感覚が一瞬麻痺し、肺の空気が残らず抜ける。コクピットの天井が陥没し、金属板が新人の頭を殴りつける。だが幸いにして、意識が混濁するほどでは無

かった。

主映像と感覚器を失い、視界がブラックアウト。暗闇の中で、胸のサブカメラからの、解像度が低い映像だけが煌々と光る。一つ咳き込み、反吐を吐く。正面に、霞んだ青空が見えた。

「まだ……戦えないか!？」

残っている左手を伸ばし、脇の下のラックを探る。だが、その腕も鋼鉄の足に踏みにじられる。ダークグレーの装甲が視界を塞ぎ、マニピュレータがブレード・ローラーで砕かれた。警報音が、耳を劈く。胸部機関砲 使用不能。先刻の衝突で、撃発機構に異常が発生している。

何も見えない。立ちはだかる巨大な壁が、全てを覆い隠す。全ての武器を奪われ、全ての力を壊され、できることは、もう何も残っていない。

『やったって、頑張ったって、どうにもならないことが多すぎるんだよ』

自分の言葉が、頭の中を渦巻く。

(だから、どうする……?)

全てを放棄し、部屋の中で蹲るか? それとも、何か違う道を行くか? 後ろで荒い呼吸を繰り返す男のように。

頭の中で大鐘が鳴っている。鈍い痛みを感じて額に手をやると、ぬるり、と生暖かい感触が指先に走る。ディスプレイの明かりに照らし出されたそれは、鈍い赤色だった。

「痛い……。痛い」

「クソッ……動くか、ミヤケ?」

「ダメです。うんともすんともいわないですよ」

「制御系をやられたか。不味いな……脱出機構は?」

「やってますよ、さつきから!」

頭部が完全に圧壊しているため、頭を吹き飛ばす脱出機構は死んでいる。両腕をどんなに動かしても、B2システムをアクティブにしても、しなくても、機体は何も反応しない。

血と汗に塗れた手をスポンで拭くと、砂がべったりとこびり付く。敵機は眼前に迫り、銃口がゆっくりとこちらに向き、止まった。

(終わりか……?)

何かしなければならぬ。どうにもならない大きな力に流されても、もがくことを止めてはならない。だが、ならば今どうしたらいいかと思うと、何もできない。壁を押し返すには、力が足りない。限界は確かに存在する。

「痛い」

目の前の現実には、どうにもならないと嘆き悲しむか。どうでもいいと目を背け、自分をいない物とするか。

「違う、僕は！」

何もできなくとも、力が無くとも、できることはある。

額から流れる血が、右目に入る。鋭い痛みには、思わず顔を顰め、右手で押さえる。

そして新人は残った左目で、眼前の機動装甲歩兵を睨み付けた。

1 始まりをもたらすもの・4

「無意味だって、分かってる。だけど……」右目から、涙が零れた。「それでも僕は、意味が欲しいんだ！ 自分の命が、言葉が、誰にも響かない、無意味なものだって、認めたくなかつたんだ！ まだだよ、まだ終わりたくない。やっと、僕はできるかもしれないんだ。僕にも、ここに存在する意味があるかも知れないんだ。だから僕は……」

両目を開き、新人は叫んだ。

「僕はまだ、死にたくないんだよっ！」

目の前に、光が見えた。コクピットに弾丸がめり込む。そして電送系がスパークし小爆発、火を吹き　　ベルキャット　　が斃れた。

誤射　　ではない。敵の兵装に、単発、高貫通力の武装は無かつた。アサルト・ライフルは、連射での使用が主であり、散弾砲は、口径にもよるが、コクピットだけをピンポイントで破壊するには適さない。殆ど不可能といってもいい。ならば、答えは決まっている。「味方……」

「長々距離からの狙撃だな。HALでこんな真似をできる奴を、俺は一人しか知らない……。全く、運が良かったよ」

耐え切った。安堵が、全身の力を奪い去った。縮こまった肩が痛み、両手の指は震えている。一〇分振りに、呼吸を意識した。

システムはダウンしていない。ぼやけた画面を操作し、目視で周辺を観測する。頭部が破壊されたため、レーダーが使えない。ようやく取り戻した統率をまた手放しかけている敵群の彼方に、数機のストライクリザード　　が見えた。

先頭の一機が把持するHAL用対物スナイパー・ライフルの銃口から、硝煙が上がっていた。機体の基本構造は、量産モデルと変わらない。違うのは頭部の形状だ。額に羽根飾りを模した装飾が突き出し、その根本、丁度眉間に当たる部位にもう一つのカメラ・アイ

が設置され、光を放っている。

長距離狙撃時の補助センサー・ユニットだ、とジェズイットは言う。代わりに、ライフル本体にはスコープらしき物は見当たらない。狙撃砲を対ロボット兵器に使用するのは、極めて珍しい部類に入る。拠点攻撃や施設破壊に用いるのが主なためだ。また、動き続けるのが基本中の基本であるHAL戦闘に、足を止める必要がある狙撃砲がマッチしないことと、使いこなせる技量を持つ人間が殆ど存在しないことも、大きな理由の一つだ。

機を降りれば優秀な狙撃兵であろうと、ストライクリザードに乗っても優秀であるとは限らない。HALにおける体性感覚、望む動きと実際の動きの一致。即ち、B2システムをいかに使いこなせているか、が要求されるのだ。

だが、あの機体はそれをいとも簡単にやってのけた。時速二〇〇キロメートルにも達する、高速走行下であるにも関わらず。

『そのリザード！ 聞こえつか？ こちらは、第一六特殊機甲中隊所属、マイスト・リーズ曹長。生きてたら、所属と官姓名を』

どうにか使用可能だった通信機から、はしゃいだような若い男の声が聞こえる。本来ならば映像も出るはずなのだが、この損傷でそこまでは望めない。声がノイズに埋まらないだけ良い。

「ああ、聞こえている」機器の操作に戸惑う新人より先に、ジェズイットが応えた。「こちらはカーバネル・A・ジェズイット大尉並びにシント・ミヤケ二等兵。援護に感謝する」

『やっぱりあんたですか！ 補給物資を動かすなんて無茶をやる人間、中尉以外に思いつかなかったんでね。飛ばしてきて正解だった』

「今は大尉だよ、マイスト・リーズ軍曹殿」

『はいはい、大尉殿。ちなみに俺も、今は曹長です』

「さつさと片付けてくれると助かる……俺が失血死するんでな」

『へえ、あんたでも死ぬんですか』

「口より先に手を動かせと、何度言ったら分かる？」

『了解。そこで大人しく寝てて下さいよ！』

知り合い、なのだろうか。新人の疑問にジェズイットは、俺は運がいいと重ねて呟き、勝利を確信した笑みを浮かべて言った。

「俺の元部下たちだよ。全く、デカい口を聞くようになった」
ジェズイットは、また笑う。

状況を飲み込めない新人にも、分かることがあった。自分は運がいい。彼らは強い。そして敵は、運が悪い。

頭上で、軽い爆発音。ようやく息を吹き返した脱出機構が、スクラップと化した。ストライクリザードの頭部を吹き飛ばしたのだ。両手両脚のリングを引き剥がし、ヘッドギアを筆取り取って新人はコクピットの外へと這い出す。

陽光を全身に浴びた。だが、気分は良くない。頭が重い。徹夜した後のような頭痛。脳が中心が疲れ切っている痛みがする。宙を舞う、夥しい量の砂が頬を打つ。カーキ色の野戦服は、血と汗と反吐に塗れて汚れている。

だが、悪い気分じゃない、と思う。決して良くないが、悪くない。脚を抱えるジェズイットを引き摺り出し、戦場を俯瞰する。現れた味方は総勢三機。残存敵機は五機。壊れかけのモニターより、ズーム機能は無くとも自分の目で見たほうが余程良い。

従えていた二機を散開させ、遠距離、敵機の射程を遙かに上回る距離から隊長機　マイスト・リーズ機の対物スナイパー・ライフルが火を噴く。

「上半身を半固定しているな」胸の装甲の上に腰掛け、ジェズイットが言った。「足回りのセンサーから得られる地形情報と下半身の拳動をリンクさせ、上体を相対的に水平移動させている。つまり、操縦者からは、縦軸の彼我相対速度を無視できる、ということだ」
「狙撃の際に考慮しなければならない要素を、操縦技術で一つ消去している、ってことですか？」

「その通り。あの芸当は、奴にしかできない。本当に優秀だよ、あいつは」

「マイスト・リーズ曹長？」

そつだ、とジエズイットは短く応えた。繋がらないな、と新人は思う。

最前線とはいえ、目立たない、使い捨ての輸送中隊と、今や戦場の主役の名を欲しいままにしている ストライクリザード 特殊機甲中隊。何の関係も無い、叩き上げの軍人とヒロイックな兵士の典型には見えても、かつての上官と部下にはとても見えない。

先刻の彼の言葉が、新人の脳裏に蘇る。

『俺はもつと格好悪い。俺ほど多くの部下を失った人間を、俺は他に知らない。傷を負っても自分だけは生き延び、今も部下に全部任せて自分はこのザマだ。俺は信じるに足る人間ではない。裏切られ、後ろ指差され、泥と血に塗れるのが相応しい、人間の屑だ』

(何があつた……?)

訊けば、答えてくれるだろうか。彼の横顔は、何も言わない。左腕の傷跡が、砂煙に隠れて見えなくなる。

「ミヤケよ、狂気が生まれるのは、どんなときだと思う?」唐突に、ジエズイットが口を開いた。

「狂気……ですか? 見当付かないですけど」咄嗟にそう答えながらも、両親の顔が、ふと浮かんだ。

「なら、教えてやる……。愛することを禁じられたときと、信じることを禁じてしまったときだ」

「は……?」

「後は、自分で考える。一六歳だろう?」それきり、ジエズイットの目は戦場へと戻る。

何を考えるというのか。狂気の問答が、今、彼がここにいる理由に繋がるともいうのか。考えれば考えるほど、頭の中が混沌としていく。答えは出ない。彼の瞳の色が、狼のそのような琥珀色であることに、新人は初めて気が付いた。東の人間にしては珍しい。

狙撃砲が、ベルキャットの四肢を奪い、無力化していく。だが、意図したのかそうでないのか、最初の一撃のようなコクピットへの直撃弾はない。

「さつきは見事にコクピット直撃だったのに、どうして……」

「敵を我々から引き離すつもりなんだろう」ジェズイットから、即答が返る。「少量だがまだ、このリザードには推進剤が残っている。引火したら、俺とお前は消し炭になる」

「じゃあ、早く離れて……！」

「眩暈がする。さすがに、血が出すぎた。よって、故に、離れない……。安心しろ、まだ死なない。俺にはまだ、しなければならぬことが山ほどある」

いつの間にか、顔が青白く 本当に青白くなるのだと新人はまた場違いに感心し 変化していたジェズイットは、右手でこめかみを押さえて言った。

「お前は、離れている」

「離れません」新人はすぐさまそう応え、左肩装甲の上へ腰を下ろした。「引火なんか、しませんよ。僕たちは、運が良いんでしょう？」

「信じているのか？」

「いいえ、分かるんです」新人は答えた。「何となく、ですけど。行動の結果がどうなるのか、見えるんです。周りを見ることだけは得意ですから」

自分を消せば、周囲の情報が身体に流れ込んでくる。後は、それを読み取れば、何がどうなるのか分かる。だが、分かったところで、行動しなければどうにもならない。分かったからこそ、行動をしないことだってある。

「ネガティブなだけで、信じていれば不可能なことはない、っていう夢物語と、似ているのかもしれない。だけど今は、馬鹿馬鹿しい夢物語でも信じたい気分なんです。どうでもいい、じゃなくて……どうにかなる、とでも言いましょうか」

「行きすぎた夢や信頼もまた、狂気を生む」

また分らない。彼は、一体何を伝えようとしている？

訝しむ新人を無視したのか、気付かないのか、ジェズイットはま

た戦場を見詰め、呟く。

「止めは……近接格闘戦で確実に無力化する気だな」

自分の心の行く末も、ジエズイットの言葉の意味も、今は分からないままで良い、と新人は結論する。考えることは、後でもできる。新人は今、生きている。

敵の数は、二体を残すのみだ。新人が目を戻した直後、内一体が頭部を破壊され、コクピットを貫かれて沈黙した。広く用いられているタイプ　新人が使った物よりも大型の、対装甲・超音波振動ナイフだ。

掌でナイフを一回転させ、太腿のラックに収めたその　ストライクリザード　の脚は荒地戦仕様ではなく、二脚の、『市街戦仕様』と呼ばれるタイプだ。特徴的な、重心制御補助用の制動尾ユニットが、腰の後ろで鞭のようになっている。加えて、この機体は頭部の形状も違う。二つ目ではなく、目の辺りがまるでサンングラスをかけたような、黒い一体の樹脂プレートに覆われている。

改めて三機を見直すと、何れも標準の型からは少し離れている。

「シールド・アイ仕様でしたっけ。感度の高いセンサー群を保護するための」

「そうだ。前線では、工場から出たままの姿でHALを使う奴なんて殆どいない。内面を合わせるのがB2システムなら、外面は改造で、操縦兵に合わせる。可塑性が高いのも、ストライクリザード

……HALの特徴だな。戦車では、こうはいかない」

「あれの操縦者とも、知り合いですか？」

「ああ、良く知っている。上手くやるようになった」

二脚の機体は武装をアサルト・ライフルに持ち替えると後退。一転して支援射撃に専念する。敵に、一体だけを意識させない　常に多数と戦っているという意識を植え付けるためだ。そして入れ替わりに、荒地戦仕様の一機が、最後の一体に肉薄した。巧い、と新人は舌を巻く。

生き残った　ベルキャット　が、右手のアサルト・ライフルを目

の前に迫った ストライクリザード に向ける。一直線、進行方向の軸が射線と重なっている。だが、危ない、と思う間も無く、その掌は遠方からの狙撃に撃ち抜かれた。残った手で手斧を構えようとすると、市街戦仕様の機体が張った支援射撃の弾幕に怯み、動作が一瞬、遅れる。そしてその一瞬は、命運を分かつ。

推進器の轟音が聞こえる。フルドライブ、時速二〇〇キロメートル超。カタログスペックの限界値、HALMO1の性能を証明する加速と共に、右手に構えたトンファが撃ち込まれる。装甲が変形する鈍い音。この荒地戦仕様機の頭部もまた、シールド・アイ仕様だ。使われた様子のないアサルト・ライフルが背中に固定されている。

『まだ終わりじゃない!』

通信機から、声が聞こえた。女 それも、まだ若い、少女と言つても良いほど幼い声だ。聴き覚えがある、と新人は思う。浮かんだ一つの名前を、記憶の奥底に沈め直す。

駄目押しとばかりに、トンファの先端が展開した。銀色の電極が露わになり、装甲に放電針が突き刺さる。

「電撃兵装か……優しいな。あれは、誰だ」ジエズィットが呟く。

青白い光と共に、炸裂音。ベルキャット が力を失い倒れる。

電流は機体中枢を駆け抜け、駆動・制御系をズタズタにして、消えた。

ロボット兵器の駆動系には、一般に形状記憶性を持つ炭素繊維束が用いられている。形状記憶カーボン・ファイバー(Shape Memory Carbon Fiber、略称SMCF)と呼ばれるこの素材は、カーボンナノチューブの編み上げ構造に少量の希少金属粒子を添加した物だ。これに対し、外部から一定の電圧荷パターンが加わると、特異な形状へと変形する運動へと転換させることができる。このパターンを多種多様に変化させることで、人型ロボット兵器は柔軟な駆動を実現した。また、電圧パターンの種類はほぼ無限であり、B2システムからのフィードバックにより、一機

一機違った駆動のプログラミングが半自動的に構築される仕組みになっっている。

つまり、コクピットから右腕を挙げる操作が伝達されると、B2システムがそれを右腕を高く掲げて拳を作る動作に最適化し、対応した電圧パターンを各部のSMCFへ流し、既に構築されていたプログラム通りに対応する形状へSMCFが変化する。結果、今、目の前でガッツポーズを作っているマイスト・リース曹長機のような、柔軟な動作を生むのだ。

『いようし、掃討完了！』気取った声が外部スピーカーから垂れ流される。

電撃兵装は、そのSMCFの形状プログラミングを高圧電流によってリセットする兵器だ。優しい、とジェズイットが形容した理由はここにある。扱い方次第では、敵を破壊せずに無力化することも可能なためだ。

銃は撃ち抜き、ナイフは切り裂く。物理的な破壊によって、敵に勝利する。だが、電撃兵装はそうではない。SMCFの駆動を不可能にするだけであって、中の操縦兵に与える影響は比較的少ない。故に、優しい。

金属が軋む音が聞こえる。同時に、視界に影が差す。風圧で砂が目に入る。

全ての敵を屠った三体のストライクリザードが、目の前に集結していた。

『ご存命でいらっしやいますかね、大尉殿』

再び、スピーカー越しのマイスト・リースの声。ジェズイットは、左腕を易々と挙げて応える。拳がらないと言ったはずの左腕を。

他方からはもう一人が市街戦仕様の機体を降りて駆け寄ってくる。女性のような。黒地の操縦服は、高速機動時の衝撃を軽減する。両腕と両大腿部には、操縦席のリングが丁度収まる形の窪みがある。簡易な防弾能力もあるというスーツ越しでも、女性の身体の線は隠れていない。新人は、思わず目を背ける。

「ヒールレイス・リヴェツサ……やはりお前か。相変わらずのようで、安心した」

「人間、そう簡単に変わりはいしませんよ、大尉」

彼女 ヒールレイスはジエズイットの肩を難儀そうに担ぎ、数分で医療班が到着する、と言いながら彼を引き起こす。そして蹲る新人に目を留め、間の抜けた声を上げた。

「ありや、何でこんな坊主がいるのよ？」

新人の肩が、小さく痙攣した。母の叫びが、聴こえた気がした。何故ここにいる、お前なんか要らないと、何度も何度も、繰り返して怒鳴られた記憶が、意識の表層へと染み出してくる。消える、引っ込んでいろ、と新人は念ずる。自分は自由なのだ、縛る物は何もないのだと自分に言い聞かせる。

そして伏せていた顔を上げたのと同時に、彼女の人差し指が、新人の額を小突いた。

「なーに縮こまってんのよ。取って喰いやしないっつーの、このガキ。徴兵組？」

「痛いです」

「非常時で他に手段が思い付かなかったから、俺が乗せた。筋は良いぞ」ジエズイットが言う。

嘘だ、と新人は思う。

（あなたの腕は動く。管制モードを調整すれば、片足でも動かせるいことはない。あなたは、一人でも戦えた。だったらどうして、僕を乗せた？ 僕を乗せなければならぬ必然は、どこにある？）

何か理由があるに違いない、と確信する。若者を 新人の人生にプラス影響を与えるために、敢えて試練を与えるなどという感傷には基づかない、打算的な理由が。カーバネル・ジエズイットは、感傷で死を選ぶ男ではない。彼はもつと、格好悪い。

「へえ、訓練も無しにやらせたんですか？ また無茶を……」ヒールレイス・リヴェツサは呆れている。

「あの……」

自己紹介位するべきだろうか、と思い、新人はおずおずと口を開く。目の前で自分の話をされるのは、至極居心地が悪い。

「ヒールレイス・リヴェツサ。階級は軍曹。見ての通り、HAL乗りをやってる。よろしくね、少年」

「シント・ミヤケ、二等兵です」

先を越されたと歯噛みしながら、東の言葉で、新人も応えた。差し出されたグローブに覆われた手を握り返しながら、先程の、彼女のストライクリザードが見せた機動を思い出す。派手さ、豪快さは見受けられなかったが、地の技量の高さで経験の裏打ちが無ければ、あのように巧みな物理的にだけでなく精神的に、敵を追い詰める戦い方はできない。相当な熟達者であることは間違いない。彼女も元部下だったとジェズイットは言った。戦い方は地味だが、実生活の方は派手好きなのだろうなと、また新人は場違いな感想を抱いた。

もう一機のストライクリザードを見上げる。荒地戦仕様の脚に、優しいと言われた電撃兵装、スタン・トンファ。小刻みに頭部が動き、新人を照準している。黒いシールド・アイの裏側は、見えない。まるで、見られることを、読み取られることを拒絶しているかのように。

通信機が拾った少女の声を思い出す。「彼女」であるはずが無いと、再び新人は否定する。彼女の声を、覚えているか。彼女の容姿を、覚えているか。

思い出せなかった。だが、痛みは忘れない。忘れることができない。

ストライクリザードは、何も言わない。

怪我人の收容等を後続部隊に任せ、第一六特殊機甲中隊の面々に新人とジェズイットを加えた一行が現地を後にしたのは、およそ六〇分後のことだ。

新人は、補給物資の三機のストライクリザードの内、唯一残

つた機体　新人が壊したのが一つ、敵の攻撃で破壊されたのが一つ　を駆り、使い物にならなくなったトレーラーに、機体の残骸を積み上げて牽引していた。最強の陸戦兵器がスクラップ運搬とは、釈然としないが仕方ない。

向かう先は、国境にほど近い場所に位置する共和国軍基地だ。元々は空軍の管轄だった物を、曖昧な位置づけであるHAL運用用として陸軍が乗っ取った　と、いう噂がまことしやかに流れているが、真偽のほどは定かでは無い。事実なら、人型強襲陸上戦闘機の存在は、それほどまでに大きな物だという証左でもある。ともかくにも、現時点では数少ない、HALが拠点とできる施設の一つだ。整備一つ取っても、現用兵器の常識など、かの大蜥蜴たちにはまるで通用しないのだから。

同期の新兵は、新人を除いて全員が、物言わぬ姿と化していた。生存者は、新人とジェズイットを含め一五名。三〇〇名近いの味方兵士がいたことを考えれば、正しく壊滅と言うに相応しい状況だった。ちなみに、死者の中にはこのHALのパイロット要員も含まれており、新人がこのように動かししている。やれと言われればやるしかないし、拒否する理由も、権利も無い。

原動機の一定の振動が、足元から全身を揺らす。リングを通した手足の部分が、血液の通る、拍動に合わせて痛む。

だが、死んだ者たちの痛みは、これとは比較にならないのだろうか。と新人は考える。彼らは、何を思ったのか。何を、望んでいたのか。彼らの声も、顔も、思い出せない。忘れてしまったのか。或いは、初めから記憶などしていなかったのか。

振り向けば、一瞬前まで自分が身を置いていた、戦場だった荒野が視界に入る。黒い煙が一条、空へと伸びている。視線を、精神を引き摺られる。

死者はは何も語らない。だが、沈黙とは時として饒舌である。

彼らの声が、聴こえた気がした　『助けてくれ、新人』、と。

頭を振り、歯を食い縛り、その幻　枷を振り払う。だが、頭の

中に響く声は止むことを知らない。自由であろうと足掻いても、決して自由にはならない。記憶の底に封印しようとしても、止めることはできない。声が、思念が、溢れ返る。

それでも尚、彼らの顔を思い出すことができない。

（僕は、彼らを知ろうとしたのか？ していない。何も、知らない。それなのに、どうして……）

彼らの存在は、こんなにも大きいのか。

前触れも無く、通信音が鳴った。救われた心地で、新人はそれに飛び付く。

「はい？」

『死んだ仲間のことでも考えているの？』

救いでは無かった。

声の主は、彼女だった。あの、女というには幼すぎる、少女の声だ。隣に行く機体　スタン・トンファを備えた荒地戦、シエード・アイ仕様の　ストライクリザード　だ。新人は、轟然として主映像機、即ち頭部をそちらへ向けるが、当の相手は、通信を行っているという事実を隠すかのように、黙々と走り続けている。画面に流れる表示は、それが二機間直接の、プライベート通信であることを知らせていた。

再び浮かんでくる名前を押し込めようとして、追い討ちを掛けるかのような言葉が、新人に突き刺さった。

『戻ってはこないのに、どうして？』

そう、戻ってはこない。それでも、人間は悲しむ。喪失は、耐え難い苦痛を生む。そんな簡単なことが、何故分からなかった？

（僕は、どうして……）

あんなにも残酷なことを言ってしまったのか。彼女　巴澄美琴　に対して。

新人にできたのは、ただ通信機を切ることだけだった。そして何度も何度も、彼は自分を罵り続けた。馬鹿と、間抜けと、人間の屑と。

砂塵の彼方に見えた街並みが、歪んでいる。塵気楼か 或いは、
自責の涙だった。

That's the end of #1 "Draft Ca
rd The Bringer of Beginning"

1 始まりをもたらすもの・4 (後書き)

簡易設定資料 ストライクリザード

制式名称 HAL MO1A

呼称 ストライクリザード (Strike Lizard)

生産形態 量産型

動力源 疑似核融合炉

全高 (頭頂高) 七・六〜八・二メートル (脚仕様により変化)

重量 八・六トン

最大連続駆動時間 約八〇時間

最高速度 時速一六〇〜二〇〇キロメートル

共和国軍の大型二足歩行兵器、人型強襲陸上戦闘機 (Humanoid Assault Landfighter) の第一期量産モデル。「初めに敵ありき」、帝国の人型兵器に対抗するために開発された人型兵器であり、一対一での性能ならば、帝国のベルキヤットを凌駕する。

二足兵器の登場当時、共和国首脳部はその有用性を軽視していたが、圧倒的な対地攻撃力、汎用性、精密性を受け、急遽開発されたのがこのHAL MO1である。威圧、象徴性を持つ兵器によって付けられた傷には、同じ兵器を持って報いてやろうという、共和国の反骨精神が如実に現れた結果でもある。

開発に先行されたという焦りから、一機で多種多様な戦場に対応させようという意図が生まれ、各部装甲には多数のハードポイントが設けられている。結果として、近接格闘戦武装から対地制圧・支援用の大口径砲まで、実に多種多様な武装を取り扱うことができ。また、フェイス周辺は、用途に応じて顕著に姿を変える部位で

あり、現場では「如何にフェイスを男前にするか」が一種のステータスになる、という奇妙なブームも起こっている。

脚部パーツにも、数種類のバリエーションが存在する。主な物には、約三・五メートルの『爪先』をジェット・スキー代わりにし、高速機動時の安定性を追求した『荒地戦仕様』、二本指と長く伸びた踵で大地を踏み締め、尾状の重心制動基を備えて敏捷性を追求した『市街戦仕様』等がある。

このように、ストライクリザードは、パーツの組み合わせや改造に自由度が高く、パイロットの好み、裁量に合わせて大きく姿能力を変える。これが、内面のシステム、駆動系の特徴と合わせ、『人に合わせてくれる兵器』、また『最強の陸戦兵器』と呼ばれる所以である。

形式番号のHALはカテゴリを、Mはマスプロダクツモデルであることを、Aは後期生産型(M01B)が登場した際に新たに振られたものである。

HAL M01は量産機である。だが、同時に人型強襲陸上戦闘機の実験機(戦術、運用法も含め)としての性格も持ち合わせている。すなわち、ストライクリザードは、次世代、完成されたヒューマノイド・アサルト・ランドファイターへの試金石でもあるのだ。

基本カラーは暗赤色。2つのカメラ・アイを持ち、スマートで凶暴なフォルムは正しく、機械仕掛けの蜥蜴人間である。

帝国側のコードネームは ドラゴン。

#2 戦いをもたらすもの・1

『スカーフ、エンゲージ』

『索敵範囲内敵機数、二』

『パワーレベル、コンバット。戦闘機動を開始』

無感情な機械音が、そこに存在する事実を次々と突き付ける。広範囲レーダーにはそれが敵機であることを示す赤い光点が2つ、明滅している。二対一、決して有利な戦いではない。

前方から射撃。咄嗟に進行角を変化させ、射線上から逃れる。

「もう撃つてくるなんて……！」

火器管制画面を呼び出し、主武装をアクティブに。同時に、また合成音声ががなり立てる。

『榴弾・散弾砲有効射程範囲内敵機数、〇』

『接近を推奨』

その声に従い、新人は両脚のペダルをもう一段踏み込み、ストライクリザードを加速させる。側面モニタに流れる景色も無味乾燥な岩肌ばかりだが、速度を上げて、遙か後方へと飛び去っていく。自分自身の、過去のように。

再び敵機からの射撃。フルオート連射されるアサルト・ライフルの弾丸の一部が、右半身の装甲を叩く。即座に左手親指のボールを動かして、ダメージ・コントロール画面を開く。損傷は、軽微。戦闘機動に支障無し。HALは、そう簡単には堕ちない。それでも、新人のこめかみを、汗が伝う。

円弧を描きながら、曳光する火線を避け、二つの、敵接近を警戒したのか固まっている光点へ向けて機を走らせる。

敵性体　二機のベルキャットが、背中合わせになっていた。交互の射撃が、ストライクリザードを追いかける。速度を更に上昇。フルドライブ、時速二二〇キロメートルに達する。追いつけるものか、と新人はほくそ笑む。弾丸が空を裂く。性能ならば、こ

こちらが上だ。

周囲を旋回しつつ円周を縮める。射程内。焦るな、と自分に言い聞かせ、一呼吸。無闇に撃つな。必殺の隙を見つける。関数の極値を見極める。こちらの弾丸一発が、最大の効果を生む一瞬を。その時、一方の敵機の弾丸が尽きた。

「今っ！」

両膝のロックを一時解放。安定走行のために半固定されていた膝・足首関節を、転倒しない。摩擦係数の許す限界まで屈曲。円弧だった軌跡が変わり、中央へと向かう太極の曲線を描く。突撃、敵、正面。ロックオン、砲サーフティ解除。

メイン兵装、七ミリショット・キャノンの引き金を引く。散弾砲の名に相応しくなく、外見はアサルト・ライフルにも似るこの武装の最大の特徴は、大きく開いた銃口が縦に二つ並んでいることだ。上が射角の広い散弾用。下がライフリングの施された、榴弾用。それぞれ便宜的にバックショット、スラッグショットと呼び分けられている。複数種の弾丸をワンタッチで撃ち分けることが可能なのだ。放たれた無数。二〇〇以上の散弾を、二機は左右に飛び退いて避ける。だが、完全に避け切れるものではない。致命傷や行動を制限するには至らないが、弾丸の一部は、マガジンを入れ替えていた方のベルキヤットの、灰色をした装甲を打つ。バランスが、僅かに乱れている。

「まだ、これから！」

ターンしながら、敵機が体勢を立て直して次のモーションに移る前に続けざまに二発。だが、こちらも安定した体勢で照準できなかつたためか、右肩を吹き飛ばすに止まる。思わず舌打ちが漏れる。

この一手で決めたかった。強襲で一对一の形を作り、性能差で圧倒するのがベスト。もし、仕損じたら？

傷を負わせた一機に止めを刺そうと、殆ど無意識で狙いを定めた瞬間。背後に回っていたもう一機の銃口がこちらを向いていた。咄嗟に緊急跳躍。再び下半身のロックを解除し、身体のパネとノ

ズルを偏向させたスラストから吐き出される多量の運動エネルギーで、右へ。機体が一瞬、宙に舞う。

『左腕部損傷、重心制御パターン変更』

『爆発の危険有り。左肩部より切り離しを推奨』

衝撃と、僅かに遅れてエラー・メッセージ。

回避し切れなかった弾丸が、左腕の肘から先を吹き飛ばしていた。断続的に、オレンジ色の火花が散っている。推進剤に引火したら、一卷の終わりだ。左右重量バランスの急激な変化は、安定走行の重大な障害になるが、仕方ない。制御システムの自動調整機構が優秀であることを信じる他無い。

親指を動かし、パージポイントを指定。

「くそっ……！」

悪態を一つ。自分の左腕の、操作に対する寄与を極限まで下げ、壁の赤い、拳大のスイッチを叩く。機体が大きく震える。緩衝剤が白い煙を上げて吹き出すと共に左肩関節が外れ、肘から先が失われた左腕が地面に落ちる。

「再セットを！」

重さの中心がどこにあるのかが分からなければ、ハメートルの巨体が時速二〇〇キロメートルで走行できるはずが無い。腕が落ちた状態で不用意に加速すれば、また転倒する。脚切り離しなどという荒業は、そう何度も通用する物ではない。あの時は、生き延びることができたのが、不思議なくらいだ。

重心制御は、B2システムを介した操縦者からの直感制御と、地形情報等を総合して自動で行われる。腕を丸ごと失ったら、一呼吸程の間が必要になる。

減速し、一度距離を取って仕切り直そうと、新人の、ストライクリザードの眼が周囲を走査した、その時。方向転換した正面に、手斧を構えた隻腕の巨人が立ち塞がった。こちらの初撃、二撃で右肩を吹き飛ばしたベルキャットだ。

零距离。マズい、と呟き咄嗟の動作でにショット・キャノンに向

ける。照準、ロックオン 間に合わない、と直感が叫ぶ。振り下るされる斧の方が、明らかに早い。

ならば、どうする。狙うまでも無く、ロックオンするまでも無く、引き金を引けば的中する方法。斧、回避できないのなら、防御。

「……」

視界が一瞬、狭まり、暗くなったかのような錯覚が、新人を捕らえた。目の前の一点しか見えない。そこへ向かって進めば良い一点だけが、光を受けている。こうすればいいと、誰かが 或いは自分自身が言っている。どうすればいいか、新人は理解する。これが正しい。こうすれば次へ進める。ここから先へと、歩むことができる。

「ここだ」

両腕が、独りでに動く。鈍い音を立てて、手斧が止まる。軽い衝撃がすり抜ける。

七ミリの銃口が ベルキャット の手首ジョイント部に突き立ち、完璧なバランスで受け止めていた。ほんの僅かでもずれていたなら、散弾砲か ストライクリザード 本体のいずれかが、超音波振動する手斧に切り裂かれ、破壊されていただろう。これが最善であり、これ以外の選択肢は無い。新人には、それが分かった。

冷静に、右手人差し指のトリガーを引く。一発、二発。超至近距離で炸裂した散弾が、敵機の腕、そしてコクピットを粉々に打ち砕いた。

そして残る一機を、即座に視界に収める。数値を見ていては間に合わない。相対距離を目算、散弾では決定打にならないレンジ。だが、向こうのアサルト・ライフルの射程内。ならば。

「スラッグ弾装填、当たれっ！」

こちらなら、散弾より射程が長く、威力も命中精度も段違いに高い。視界の隅で、火器管制画面が変化。いける、と呟き、トリガーを引く。

螺旋に刻まれた腔線から、炸薬を充填した一発弾が、機動装甲歩

兵の四ツ目を破壊せんと撃ち出されたのと同時　分一〇〇発のアサルト・ライフルが、　ストライクリザード　の双眼へと吸い込まれた。

ブラック・アウト。

「少しは、マシに戦えたかな」

『撃墜されました』の表示が画面に明滅し、新人は現実へと引き戻された。汗で全身に張り付いた服が、気持ち悪い。これが敗北の味なのかな、と思い、違う、と思い直してヘッドギアを外す。頭が、軽くなる。

ふう、と息を一つ吐くと、足元のスイッチを捻る。同時にモーター音。頭上のドームがゆっくりと開き　新人は、HALコクピットの形を模したシミュレータから降りた。

動く機体も飛び交う弾丸も仮想世界の映像とはいえ、シミュレータの内部構造は実機と何ら変わらない。ただ本物の　ストライクリザード　に繋がっていないだけだ。戦闘機動の仮想再現にはかなりの容量を喰うらしく、外見は、実機から切り離れたコクピットを一回り大きくしたような形だ。増えた分には、演算機が積み込まれているのだろう。また、機械ハードにかかる負担も相当なものなようで、一〇分の稼働毎に最低一〇分のインターバルを取ることが規定されている　もつとも、徹底はされていないが。

ここは、共和国の西の果て。街の名を、ピル・ソアテという。

あの日　初めての戦闘を経験した日の明くる朝から、ここが新人の配属場所となった。例の、壊滅した輸送中隊の人員は再配置され、同時に、この街を根城にする、今はまだ数少ないHAL運用部隊の一つである『第一六特殊機甲中隊』は、二三輸送中隊の生き残りを吸収する形での再編成を受けたのだ。カーバネル・A・ジエズイットは、特殊機甲中隊長への復帰が決定していた。「暴れまわる方が俺の性に合っている」と言っつて、彼はいつものように笑っていた。

どういふ事情かは知らないが、更迭された人間が、こつも簡単に

部隊長　それも一番華々しい、HAL乗りとして捲土重来を果たすことに、新人は違和感を覚えていた。何か、ジェズイットを一線へ連れ戻さなければ鳴らない理由があるのか、或いは、想像も付かない理由が。本人に問い質しても、曖昧に笑うばかりで答えてはくれない。手続きだつて、早すぎる。

（上に疎まれてるんじゃないのか……？）

疎まれているなら、なぜ彼にとっては天職とも言えるHALに乗る資格を与える？　矛盾している、と思う。だが、想像も付かない理由なら、想像しても仕方ない。

（まあ、いいか……）

新人は、考えないことにした。

そして彼は、一六特機隊の、七人目のHAL乗りとなった。先刻の『スカーフ』は、彼のコール・サインだ。傷跡の七番で、スカーフ7。

七番目とは即ち、他に六人の操縦兵が存在することを意味する。

その内の二人が、疲れ切った新人を待ち構えていた。

「ふむ、ヘーゲル・シュミット社製七ミリ榴弾・散弾砲。どうやら確定のようだな」

先に口を開いたのは、向かって右に立った坊主頭の男だった。年の頃は二〇代、としか新人には判別できない。格闘技を嗜んでいた（と、新人は聞き及んでいる）らしく、体付きは均整が取れている。身長はそれほど高くない　とはいえ、一六〇センチをメートルを少し越えた程度の新人に比べれば十分高いのだが　にも関わらず、彼の身体は酷く大きく見える。ジェズイット大尉とは違ったタイプの圧力がある、と新人は思う。

新人は一六特機隊に配属されて、もう一週間になる。坊主頭の彼とも、面識はある。だが、彼の名前を思い出せなかった。階級は伍長、出身は新人と同じ、南西部。だから、倭名だということまでは、分かる。

思い出すより先に、彼は言った。

「いかがですか、曹長殿」

水を向けられたのは、隣でシュミレータのハッチに腰掛けた、マイスト・リーズ曹長だった。先日の戦いで、新人は彼に命を救われている。あの、狙撃仕様機の操縦兵だ。

「ああ、一番マトモな戦いだっただぜ。ギリギリ及第点つてとこだな。疲れただろ、シント？」彼は、肩を掠める程度の金髪を、鬱陶しそうに払って言った。

彼の名前の方はしっかり覚えているのだな、と新人は自分の現金さに苦笑する。

今のマイストは、一六特機隊の副長を務めている。ジェズイットの不在時には隊を率いていたのだから、あからさまな降格だ。それでも、不満を持っている様子は無い。むしろ、降格できて良かった、ようやく重荷を下ろせた。そんな、現状の方が幸福だと言わんばかりの態度が目立っていた。

隊を再編成する旨が通達されたときの、マイスト・リーズの複雑な表情を、新人は一週間近く経った今でも思い出す。落胆しながらも安堵した、まるで悪戯を見咎められた子供のような顔だった。決して、減俸で青ざめているような顔では無かった。

責任を負うことが嫌なのか。ジェズイットの下にすることが安息なのか。或いは　自分は責任を負ってはいけないと思っているのか。　

「どうした？　さすがに六連戦は疲れたか」

今となつては珍しい、マイストの透き通った碧眼が新人を覗き込んだ。青い目は遺伝的に弱い。かつてはともかく、今は淘汰され、人口比の数パーセント程しか存在しない。共和国内なら、北西部系の人種に僅かにいるだけだ。

「はい……。疲れました」

ニュー・カマーの武装選定と、ルーキー歓迎の意味もあつた今日の訓練だ。これもある種の宿命なのかもしれない、と新人は思う。自分の名前を音読みすれば、そのままニュー・カマーの意味になる

と、彼は一人頷く。東や北の人間には、分かるまい。

「センスあるぜ、お前。さすが大尉が見込んだだけのことはある。微分すれば、俺より勝ってるところもあるくらいだ」

「微分？」

「ある一部分、限定した領域ならば、つてことさ。具体的には、土壇場での、思い切りと精密さだな」腕を組み、マイストは言う。「な、マツシタ？」

「同意します」と、坊主頭

まつした はじめ
松下肇は応えた。

ようやく思い出せた、と胸のつかえが下りた心地で新人は息を吐く。

「ただなあ……ファースト・アプローチは確実に仕留める。あそこで撃墜してれば無茶な機動で機体に負担を掛けなくても済むし、弾薬の無駄使いもない。あんな機動ばかりやっていたら、整備のオッサン共に奢る酒代で破産しちまうぜ？」

マイストは、自分の言葉にうむうむと頷きながら言った。対して松下は仏頂面を崩さない。

「スラッグに換装するタイミングが遅い、と思った。自分なら腕を切り離れた直後に換えている」

なるほど、と新人は頷く。あの時換えていれば、射程の長い砲による牽制射撃ができた。接近されて、格闘戦に持ち込まれることも無かった。

「お前だったらあそこで砲捨てて格闘乱戦になりそうだよな、マツシタ」腕組みを解いたマイストが笑って言った。

「曹長殿なら？」と松下が応じる。

「円周上から狙撃だな。あの距離なら、いくら榴弾・散弾砲の銃身が短いつたって、直撃させて見せるぜ」

「あなたなら、そうだと思います」

「やっぱり？」

薄暗い室内に、二人の軽やかな笑いが吹き抜ける。新人の横を、すり抜ける。

他愛の無い楽しさを共有できる関係は、まだ築けていない。彼らがどう思っただろうと、新人は、心の底から笑いを共有することができない。輪から排斥されているわけではない。むしろマイストなどは、輪の中に巻き込まれようと躍起になっている節もある。それでも新人は、彼らの中に、自らを曝そうとは思わない。

信じることに、怖さは無い。ただ、自分には、信頼への意欲が欠如しているのだ。と、新人は思っていた。

「ただ、実機に音声ガイダンスは無いぜ。分かってるな？」

そう、考えるのは自分。判断するのは自分。命を賭すのは自分。そう思えば思うほど、新人が自分の周りに引いた一線は、ますます濃くなっていく。戦場では、誰もが一人だ。一人でいなければならぬのだ。ストライクリザード という名の、閉ざされた世界の中で。

「……はい」弱々しく、新人は応える。

同時に、手元の端末へ、シミュレータの情報が転送される。

「それ、ちゃんとセットしとけよ。得たモーションを機体にフィードバックさせないと、幾らシミュレータで頑張ったって意味無いからな」

了解、と新人は応え、二人に礼を言っただけでその場を後にした。

端末の画面には、ストライクリザード のコクピットに表示される物と同じ、火器・武装管制画面が表示されている。

装弾数は六×二、主に中距離近接戦で絶大な威力を発揮する兵装である、七ミリ榴弾・散弾砲 クロス・ファイア。目標物に触れた瞬間だけ超音波共鳴振動し、貫入、グリップに仕込まれた炸薬が弾けて装甲を破壊する、一二本の対装甲炸裂ダガー。そして超音波振動ナイフが一振り。

これらが、新人の機体に装備されることになった。

「あいつはああ見えて思い切りがいいから、散弾砲は似合ってると思うがな」とはジェズイットの言。

なんて皮肉なんだ、と新人は毒付く。

(僕の本質は優柔不断なのに)

一人の自分に何かが決められるのか。何かができるのか。新人には、全く分からなかった。それが本当に、自分の本質なのかさえも。

この大陸は、東西南を広大な海洋に囲まれている。そして北方には急峻な山脈が連なり、古来よりこの地域は文化・経済的に他から遮断され、独自のコミュニティを発達させてきた。無論、貿易等が一切存在しないわけではない。だが、あくまで『大陸』という地域は、一つの地域で完結している、という一種のプライドのようなものが、人々の精神の根幹に染み付いているのだ。

現在、大陸には二つの国家組織に大別されている。帝国と、共和国だ。

『帝国』は、大陸南西部に一大勢力を持つ、その名の通りの帝政国家だ。かつて 一世紀ほど前には共和制・民主主義が執られていたが、建国の理念でもある世界国家政策による国土の拡大と共に少しずつ統治が困難になり、中央集権、やがて現在の帝政へと移行した。

世界国家政策とは、多種多様な民族の集合体である人類、は強大な一国が統治しない限り平和も安定も得られない。その為、世界は緩やかに統一、帝国化(社会・政治的に)されなければならないという、帝国のあらゆる政策の基本になる思想のことだ。とはいえ、しばしば誤解されるのだが、これは侵略戦争を正当化しているわけではない。あくまで帝国の傘の下に全てを収め、一元管理を行う 一種の神として振舞うのであって、被支配地域の文化、経済様式を完全に破壊する物ではない。むしろ、社会基盤の整備等、支配される側のメリットも少なからずある。

国民の皇族に対する畏敬の念や、世界国家政策に対する信奉は、非常に強い。弱き物に手を差し伸べ、世界を遍く包み込む存在に、自分達が属しているという事実は、人々の間に自信と喜びを生む。支配地域が一つ増えるたびに、被支配地域もまた(帝国化されるこ

とで) 支配側になるのだ。皇族は、力を振るえど持てる権力を自ら放棄し分け与える存在 即ち、英雄として受け入れられている。

社会は、階級制度が敷かれている。だが、階級という言葉の響きに反して、世襲の力は極めて弱い。これは、誰もが一六歳と二五歳の時の二回、自由に自分の属する階級を選べることに、上層階級であればあるほど社会的デメリットは多いことに由来する。精神の自立がなされる時期に一度目の階級選択をさせ、自らに何が相応しいのかを理解させたうえで、経済的自立がなされる二五歳で、自分の未来を決める 結果的には、一度目で保留し、二度目で自分の親のどちらかと同じ階級を選ぶことが多いことが、統計で証明されている。ちなみに、階級はミドルネームで区別される(「ミドルネームに親の名は入らない)。階級の内訳は、第一層が騎士、第二層が戦士、学士、第三層が技士、農士、文士である。例外として、完全世襲の皇族が存在する。

このような社会制度により、帝国は理想的な人・物・金の流動性を保つことに成功している。

一方の『共和国』が成立したのは、半世紀ほど前のことだ。初めは三つの民族がそれぞれに独立した国家を持っていたが、自由貿易協定に始まる経済共同体から政治統合へと発展し、現在の姿になった。

地理的には大陸南東を占め、南と東を海に、北を山岳地帯に、西を砂漠に囲まれている。中東部には広大な沃野が広がり、計画的大規模農業が営まれている。また、天然資源に恵まれ、北部や南の一部では、各種鉱石の採掘が基盤産業になっている。港湾部は貿易、海上油田の存在により大いに栄え、高い国力と屈強な軍隊を有する。帝国の歪さ ある種の危うさとは対照的に、共和国は、独立と安定、自由と平等を旨とする民主主義で成り立っている。だが、今に至るまで、即ち、三民族による三国家が融和し、統合される以前は、安定とは程遠い闘争の世界だった。

自由であることは、エゴイズムの台頭と表裏一体である。換言す

るならば、体制への反発だ。故に、自由とは、そもそも生きるとは、戦って勝ち取るもの。勝者に許される権利である、という考えが根強い。

今の安定は自分達の祖先がが戦った結果として勝ち取った物だ、というエゴから生まれる誇りが、共和国を支えている。そしてそれは、愛国心という概念と等号で結ばれる。侵略に対しては頑として譲らず、力を持って相対するのが、共和国の流儀なのだ。

戦時の徴兵制度が議会を通過したのにも、そういう背景がある。平時は志願制なのだが、守るための戦いに疑問を持つ人間は、共和国にはいない。

斯くして、今がある。

現在 ストライクリザード の投入以来、戦況はほぼ拮抗状態だ。共和国内では、戦略的価値の高い、北西部や南西部の港湾地域を中心に、断続的に戦闘が発生してはいるものの、大規模な軍事行動には、双方が至れていない。

では、戦略的価値が比較的低く、周りを見回しても荒野ばかりの中西部は、ということ。

#2 戦いをもたらすもの・2

「意外と暇なんだなあ」三宅新人は、格納庫の何も無い壁をぼんやりと見上げながら呟いた。

この街の名、ピル・ソアテは、何でも地名が生まれた頃の 言語体系が今とはまるで違う時代に使われていた言葉で、『果ての街』を意味するらしいと、新人は小耳に挟んだことがあった。

中西部には資源が無い。特筆すべき産業も無い。あるのは四六時中、年がら年中燦々と淡々と降り注ぐ太陽の光のみ。そんな場所に都市が成立しているのは、偏にここが『果ての街』であるからだ。つまり、都市が存在していることで、共和国の枠内に入っている、という主張を行っているに過ぎないのだ。

帝国と共和国の国境線は、明確には引かれていないため。そもそも、明確に定めるだけの友好関係があれば、戦争状態には至っていないのだが。ピル・ソアテと、そこに駐留している部隊には、主権の及ぶ範囲を守るといふ大きな存在意義が課せられている。果ての街だからこそ、奪われるわけにはいかないのだ。

とはいえ、北と南が主戦場になっている現在、この街は安寧そのものだ。ほんの時折、郊外 放棄都市群の存在する国境エリアで散発的な小競り合いが起こる程度で、激しい戦闘が起こることは滅多に無い。市民は、日々の生活を楽しんでいる。

何も無い壁から目を放し、新人は、金属製のアームで、片膝を付いた状態に固定された ストライクリザード によじ登った。不恰好に長い爪先を乗り越え、装甲表面に作られた梯子代わりの突起に足をかけて、開き放しのハッチから内部へと身体を滑り込ませる。

出撃があるわけではない。大まかなメンテナンスは専門の人間が行うが、内部システムの調整には操縦兵自身の関与が不可欠なのだ。個人の癖や、動作の手順、戦闘スタイル等が如実に反映されるのが H A L であり、その自動調整された S M C F (形状記憶カーボン・

ファイバー)の電圧対応可変プログラムを、更に自分に合うように調整してようやく、HALは真価を発揮する。

モニタを起動、まだ確信を持って操ることのできない制御卓を操作し、パワー・レベルを平時へ^{ユージュアル}。ハッチ閉鎖。前に倒れていた頭部が、元の位置へ戻る。メンテナンス・モードへ切り替え、B2システムと動作の連携を限界まで低下させる。両手を動かすと、ストライクリザードの両腕がぎこちなく、筋肉の使い方知らない赤ん坊のように動く。

後は、コンピュータとの格闘だ。キーボードを引き出し、動作シミュレーション画面を起動。同時に、現実の機体は力を失う。手持ちの端末を接続し、先刻のシミュレータの結果を同期させる。B2システムのリンク係数を、〇・五まで上昇。イメージし、両腕両脚を操作。画面の中のストライクリザードが、対応して動く。

だが、微妙にずれがある。ライフルを構えてから、照準するまでの一連の動きが、思っていたものと違う。左腕が、付いてきていない。利き腕ではないから、意識の配り方が少ないのだろうか。

この齟齬を、手作業で修正する。何度も動かし、キーボードを叩き、考えていた動きへと近づける。

一段落付いた頃には、陽は既に傾きかけていた。だが、これを怠れば、待っているのは死だ。思うがままに動かせないハメートルの巨人など、棺桶と同義だ。

いつの間にか、額から汗が滴っていた。西部内陸の気候は肌に合わない、と新人は思う。モニタ越しに見える、開け放しの、滑走路に通じるシャッターの向こうには、憎たらしいほどの青空が砂にくすんでいる。太陽は、いつもと同じ満面の作り笑いを湛えている。新人の住んでいた南西部沿岸は、もっと過ごしやすかった。

同じ国でもこんなに気候が違うのだ。国土の広さが文字通り、骨身に染みる。自分が、遙か遠くの場所に来てしまったという事実も、また。

(でも、帰りたいとは思わないな)

あの場所　オンライン・カジノにのみ繋がった、閉じた扉の内側　が、自分の帰りたい場所だとは、新人は思えなかった。

ならば、今いるこの場所は、帰りたい場所なのだろうか、と自分に問いかける。ややあって、分からない、という答えが返ってきた。（分からないことばかりだな……）

分からない振りを、無意識の内に行っているのかもしれない。違う、という答えを出してしまいたくないから。

書き換えたプログラムをSMCFが読み込んだのを確認し、動力炉を停止。B2システムも止め、モニタの電源も落とす。ハッチ、解放。籠った空気が一気に溢れ出し、外の生暖かい　それでも、コクピット内部に比べれば新鮮な空気と混じり合った。

身を乗り出して辺りを見回すと、丁度、格納庫に三機の　ストライクリザード　が帰還したところだった。ルーチンワークである、郊外、国境地帯の哨戒任務だろう。

「足元に近寄るな！」と整備兵が怒号を上げている。各部関節には緩衝剤と共に、衝撃を熱へと転換して排出する機構が搭載されている。迂闊に近づけば、火傷では済まない。攻撃のためにあるわけではないが、この機構は多くの兵士の命を奪ったと言われている。ロボット兵器の黎明期、歩兵のみを相手にしていた頃のことだ。

三機のうち、先頭に陣取っているのはカーバネル・A・ジェズイット大尉の機体だ。余剰パーツと回収された残骸を組み上げ、改造を施し、一体へと仕上がったこの機体は、両腕が異常に肥大している。一・五機分のパーツを掻き集めたと聞いているが、それが何のためなのか、新人は知らない。大口径砲でも扱うのだろうか、と勝手な推測を巡らせてはいた。もっとも、そんな憶測をする暇があったらむしろ、一週間で組み立てを完了させた工兵たちの努力に、拍手を送るべきだろう。

後ろに控えた二機はいずれもシェード・アイ、センサ保護用の樹脂プレートで目の周りを覆ったタイプだ。一六特機隊には、二体しかない。即ち、先日のヒールレイス・リヴェッサと　巴澄美琴

だ。

一目見るや、新人は、乗り出していた身を、コクピットのシートの上へと戻した。

会いたくないな、と思う。一方で、話さなければならぬ、謝らなければならぬと思う。だが新人は、操縦席の奥に隠れている。

あの日の通信以来、彼女とはまともに口も聞いていないどころか、顔を合わせてすらいない。新人が、自責を意識したくないばかりに彼女を避け続けているためだ。

シートからは、外の様子は見えない。

「卑怯だな、僕は」

間違いを犯したと分かったなら、謝って、改めればよい。なぜ、そんな簡単なことすらできないのか、と新人は頭を抱える。

「やっぱり、人間の屑だ」

自分の独り言が短くなつた。少ないとはいえ、信頼することができないとはいえ、誰かと話しているからだろうか。と、新人はまた、何の関係も無い、場違いなことを考える。

ジエズイットの言葉を思い出す。

『お前は、屑でいいと思っっている。俺は、そうではない』

「僕は……」

凝として身を強張らせたまま、新人は深く。周りの音が聴こえなくなるほど、どれだけの時間が経ったのか分からなくなるほど考え、そして結論する。屑でいいとは思わないと決めたのだ、と。だから ストライクリザード で戦うことを受け入れた。

よし、と頷き、新人は、何も見えないコクピットの底から立ち上がった。

だが、そこにはもう、 ストライクリザード の姿は無かった。あるのは、力を失い、頭脳たる操縦兵が立ち去った、ただの巨大な機械の塊のみ。車両に牽引され、整備用のハンガーへと固定される姿を見送り、新人は落胆と安堵の入り混じった溜め息を吐いた。

落胆のほうが大きいことを信じつつ、機体を降りる。

「つと……」

足場を二三度踏み外しかけながら、どうにか地面に足を着くのと同時に、背中から、冷たい視線を感じた。

振り向くと、遠くに 彼女がいた。吹き込む砂混じりの風に、セミロングの黒髪が乱れている。だがその目はこちらを見据えて、動かない。生ぬるい空気が、新人の汗ばんだ肌から体温を奪う。

(どうして僕を見るんだ、君は！)

逃げ出したくなる思いを無理矢理抑え付け、新人は呻き、操縦服姿のままの彼女、美琴の方へ一歩、足を踏み出す。すると、見計らったかのように、彼女は踵を返し、格納庫から続き棟になっている建物の中へと姿を消した。

行ってしまうならそれでもいい、と誰かが言う。お前はそれでいいのか、と誰かが応える。

良くない、と新人が答える。

「待つてよ！」

叫びが、自分の口を突いて出たことに驚いた時には既に、新人の身体は美琴を追って、走り出していた。

点々とLEDの照明が点った廊下は明るい。白い明かりが、目を突き刺すように染みる。窓は無く、天井の低さも相俟って圧迫感が強い。

大人二人が、どうにかすれ違えるか程度の廊下の真ん中で、先を行く美琴が不意に立ち止まった。簡単に追いつき、新人も、彼女の三步手前で走りを止めて、すっかり上がってしまった息を整えた。

(一分も走ってないのにな……)

それだけ、B2システムの使用は疲労するのだろうか。或いは、彼女を追いかけることが、苦しいのか。

「何？」それ以上言葉を交わす気は無いと言わんばかりに短く、彼女は言った。

「あのさ、えーっと……」

何から、どうやって言ったら良いのか整理できず、頭の中の混乱を、そのまま言葉にすることしかできなかった。言うべきことを纏めてくれば良かった、と新人は後悔する。

落ち着け、と自分に言い聞かせる。何を思った、どうしようと思つた。何よりも大切なのは、何だ。

「僕には君の気持ちは分からない」

新人は言つた。背を向けていた彼女が、こちらを向いた。表情は無い。顔面の筋肉が、微塵も動いていない。それでも、目線は新人を射ている。思わず俯いて、視線を躲す。戦場で向けられた銃口に似ている、と新人は思う。

「君が失つた物が何なのか……家族とか、家とか、故郷とか、そういう意味じゃなくて」纏れた思考の糸を少しずつ解きながら、新人は言葉を編む。「それらが君にとっての何だったのか、僕には分からない。僕と君は違うし、君にとっての家族と、僕にとっての家族は違う物だし、いや、そうじゃなくて……」

違う、と声に出して叫びたかつた。家族の存在の重さが、人によつて違うのは当たり前だ。そんなことを言おうと思つたのではない。目の端で彼女の方を見る。表情は変わらない。まるでこちらを品定めしているかのようだ。

自分の心臓の拍動を聴きながら、新人は大きく息を吸って、吐いた。

「僕は君を知らないから、君の失つた物の大きさも分からないんだ。だけど、喪失つて何なのか、ちょっとだけなら、僕にだって分かる。どうしようもないことを、どうしようもないと諦めきれないのは当然だ。当然なんだよ。僕は、それを忘れていたんだ。ずっと、どうしようもないことに囲まれていたから……周りのことなんて全部、どうでもいいって思っていたんだ。だって、僕が何をしたらって、どうにもならないんだから」

新人は一度言葉を切り、黙つたままの美琴を見る。重なる目線が何かを伝えたのか。美琴の、漆黒の瞳が、僅かに揺らぐ。

「でも、だつたらどうして、僕はあの時……君に『戻ってはこないのに』と言い返された時、あんなにも苦しかったんだ？ どうでもよくなかないんだ。ほんの少し言葉を交わしただけの相手だつて大事なんだ。彼らの命に報いるためなら、自分の命を懸けて戦つたつていいつて、思えるくらいに。そうだよ、諦めることなんてできないんだよ。人間の屑でも構わないなんて、思えるわけがないんだよ。僕にはそれが、分からなかった。失うことがこんなに苦しいなんて、知らなかった。だから、美琴……」

新人は目を伏せる。彼女の顔が、視界から消える。

「君に謝りたかった。何度殴つたつていい。このままここから立ち去つてくれてもいい。だけど、ごめんつて、言わせてくれ」

これで良い、と新人は思う。言いたいことも、思つたことも、全部伝えた。だから。

（僕は美琴に、どうして欲しいんだ？）

求めている結果があつたわけではない。許しを願っているのでも、寛容が欲しいのでもない。伝えなければならぬという思いに、突き動かされただけだ。

彼女は何も言わない。新人は何も言えない。立ち込める沈黙に耐え切れず、彼女の顔へ視線を戻す。

新人を睨みつけていたあの冷たい視線が　床目を彷徨つていた。
「分かつてる。全部分かつてる！」

下を向いたまま、地に向かつて美琴は叫ぶ。握られた拳は、震えていた。

「言われなくても、あなたの考えてることなんて全部分かるの！だからあたしはあなたを許さなくちゃならないつて、分かつてる。でも……でも、あたしは、許せない！　あたしを踏み躪つたあなたも、あたしから何もかも奪つた帝国の奴らも！」　語気の強さにたじろぐ新人をよそに、彼女は続ける。「恨みや報復、憎しみだけで生きてちゃいけないつて分かつてるから、スタン・トンファを使った。叩きだけど、本当はあいつら全部、バラバラに引き裂いてやりたい。叩

き潰してやりたい。あんたを睨むだけじゃなくて、もう一度殴ってやりたい！ この衝動は、止められないの！」

「殴ってくれて構わない。僕はそうされて当然だ」

「喋るな！ 声を聴けば聴くほど、あんたが憎くなる。あんたを許せなくなる！」腕を抱き、唇を噛んで美琴は言う。「こんなの嫌

こんなあたしは、あたしじゃない。こんな自分が…… どんどん嫌いになる。どうして？ どうしてあたしは憎むことも、許すこともできないの？ いっそ流されるか…… 全部忘れてしまえば、楽になれるのに。あたしは戦う機械にも、父さんや母さんみたいな大人にもなれない！」

やはり彼女と自分は違う、と新人は思う。新人にとっては常だったこと 流され、忘れることを、彼女は許容できない。諦めることができない。彼女の存在は、新人のそれより遥かに確からしいのだ。

「新人、あたしはどうすればいいの？」

「え？」

「あたしは、衝動に任せてあんたを殴ってもいいの？ 復讐のために、戦場にいてもいいの？ 全部許すことなんか、できない！ 許せない自分が、許せない！」

叫ぶ美琴の目が、僅かに潤んでいた。少しだけ考え、新人は口を開く。

「それも人間だよ。感情に押し流されることも、押し殺すことも、どちらも正しいとは思わない。違う道だって、あるはずなんだ。どっちかからでも、何かの道を見つければいいんだよ、きっと。焦ることはないと思うけどな。僕は一六、君は一七なんだし、さ」

「達観してるのね」
「違うよ、達観じゃない。僕は、今だけで精一杯なんだ。だから、考えるのは後に回すことにした。今を、精一杯生きることにしたんだ」

「あたしは、そんな風に考えられない」

「考えられないからって、考えなくていいわけじゃない」

そう、何もできないから、何もしないのでは、かつての新人と同じだ。進歩のない自分を、肯定してはならない。

「僕に怒りを向けても、許してくれても、どちらでも良い。今は、答えは出さなくたって良い。だから……」新人は、目を伏せたままの美琴へ右手を差し出す。「僕の、友達になつてよ」

「……は？」目を丸くした彼女が、新人を見た。

「そうだよ。僕を見てよ。僕の手を掴んでよ。僕は君に……」

どうして欲しいのか、新人は今一度自分に問い直し、全ての記憶を呼び戻す。まだほんの僅かだが、新人にとっては途方もなく重い、徴兵されてからの日々を。そしてそこに確かに存在する、彼女を。

悩むこと 迷うことに疲れて、全てを投げ出し諦めてしまつては、新人と同じだ。それだけは嫌だ、と彼は思う。ならば、どうするのか。

浮かんだ答えは、極めてシンプルだった。

「僕は君に、笑っていて欲しい」

「でも、あたしは……」

また俯こうとする彼女へ、新人ははつきりと告げた。

「大丈夫。矛盾に耐えられなくなったら、僕が君を助けるから。僕がいる。ストライクリザードがある。君は、一人じゃない」

宙に静止する新人の手を、美琴の目が、じつと見詰める。緊張に、掌の温度が上がる。

彼女の右手が、ゆっくりと上がった。そして二人の間を彷徨い、新人の掌へ近づき、指先が、触れ合おうとした時 彼女は、手を引き戻した。

「どうして……」半ば悲鳴のように、美琴は言った。「どうしてあんたが、そんなこと言うの!？」

新人の全身が、鞭に打たれたように、ぴくり、と震えた。思考が凍り付く。頭の血が消え失せる。視界が一瞬、色を失う。

そして次に新人が認識できたのは、人影疎らな廊下を、靴音を鳴

らして走り去っていく、彼女の背中だった。

「僕は……！」

腹の底から声を吐き出し、新人は拳で壁を叩く。痛い、と呟き、両手を握り締める。

その肩を、誰かが叩いた。

「いよう、少年。残念だったな」

聴こえてきた東の言葉に、新人は頭をスイッチする。

「……見てたんですか、マイストさん」

「通りがかりに、たまたまさ」野戦服の袖を折り上げたマイスト・リーズ曹長が、肩を竦めた。

「盗み聞きなんて、性質が悪いですよ。出てきてくれれば良かったのに」

「出ていくにいけない雰囲気作つといて、なあに言つてやがる……」

まあ、お前は良くやつたと思うぜ、俺は」

「良くやつたつて、何ですか」

妙に上からの物言いに苛立ちながら、新人は応じる。上からでなければならぬという、強迫観念に駆られているかのようだ。

「あの子の表情があんなに変わるのを、俺は始めて見たぜ。お前よりちょっと前だったから……ウチに来て三週間は経つてる。なのに、俺はあの子の笑った顔どころか、能面みたいな顔しか見たことねえ。訓練期間の彼女は、どうだったんだ？」

言われて、新人は考える。美琴はどんな表情をしていたか。どんな目線を、自分に向けていたか。

「分かんないです。思い出せません」いつだってそうだ、と新人は思う。「肝心なことは、何も覚えていない。僕は、美琴の顔を見ているつもりで、見ていなかったんです。僕は彼女を見ていない。何も、見ていなかったんです。僕は、何も」

視線は向けていても、見てはいない。見てはいけなすとすら、新人は思っていた。現実からも、目の前の少女からも目を背けることが新人の生き方であり、そうすることでしか自分を保つことができ

なかった。

美琴に手を差し伸べようとしたところで、上手くいくはずがない。新人は、彼女のことを知らない、理解していない。彼女のジレンマを解く答えも、持っていないのだから。

「底抜けに優しいんだよ、きっと。だから人を憎む自分さえ、憎んでしまう」

「優しい……」

「まあ、あんまり気にするな。後は何とかしてやるよ」そう言って笑い、マイストは歩き出す。

「何とか？」

新人も、彼について歩く。格納区画から生活区画へ続く廊下に、人影は疎らだ。

「フォローも、リベンジの機会も、この俺が作ってやるって言うてんだよ。このままじゃ釈然としねえだろ？」

「確かに、そうですね」

わざわざお膳立てされることの方が、もっと釈然としない、と新人は思う。

(大体、彼に僕の何が分かる?)

傲慢だと分かっているながら、そう思わずにはいられない。余計なお世話だ、とも。

廊下の交叉点に差し掛かったとき、不意に、マイストが小さな声で言った。

「黙って、左見な」

口調の強さに驚きながら、言葉に従い左の、交叉するもう一方の廊下を見る。

「え……」思わず、新人は息を呑んだ。

そこに見えたのは、ヒールレイス・リヴェッサの渋い顔と 彼女の胸に縋り付いて嗚咽を漏らす、美琴の姿だった。

「これも、あなたが作ったフォローとやらですか」何も見なかったかのように平然と通り過ぎながら、新人は言う。

「いいや、通り掛かりに、たまたまさ」マイストは答えて笑い、「じゃあまた後でな、少年」と言つて、新人に手を振つた。向かう先は、格納庫らしい。

彼を見送り、新人は大きく溜め息を吐く。

「大尉の物真似は、僕にはまだ早いつてことか……」

誰にも聴こえぬ声で呟き、誰もいない廊下を、新人は足早に歩いた。見えない何かから、逃げ出すかのように。

#2 戦いをもたらすもの・3

『機会』が訪れたのは、それから数日後のことだった。

「哨戒……ですか」

「と、いう名の下に行われる威力偵察さ」

端末を抱えたまま薄ぼんやりとした新人に向かって、大仰なジェスチャーでマイスト・リーズは言った。照明が落とされた部屋で点る大型モニタの明かりが、隣に立つ長身の男の金髪を際立たせている。

ここは、ピル・ソアテ市街の西側に位置する軍事基地の、地下中央部を占める、HAL部隊専用の作戦管制室だ。この基地に所属する全て 七機の ストライクリザード の作戦行動や整備状況は、全てここで一括管理される。

所在無さげに周囲を見渡すと、各々の機器、コンピュータと格闘する管制員の姿が嫌でも目に入る。総勢、二〇名前後だろうか。そして、自分以外の操縦兵、六人の姿も。

壁に据えつけられた、新人の背丈を優に上回る大きさの画面には、国境 少なくとも共和国が主張する 地帯周辺の監視情報がリアルタイムで更新され続けている。光学映像然り、高空を恐る恐る飛ぶ早期警戒管制機（AWACS）然り。そして実際に地面を駆ける ストライクリザード や、有人観測所からの情報も、だ。

そして、ピリヤード台かカジノ・テーブルを大きくしたような、腰ほどの高さのステージには、国境地帯の地形を立体投影した画像と、各機の整備・出撃状況がモニタされている。案外起伏に富んでいるんだな、と考えながら、七つ並んだ ストライクリザード と、その装備品の模式図へ目を遣る。今は、全機が格納庫で待機中だ。

整備・調整中の箇所は、黄色く塗りつぶされている。例えば、『Scar2』、マイスト機は頭部のみが黄色、他は緑に表示されている。頭部の狙撃用センサ・ユニットに、何らかのトラブルが発生

したのだろう。だが、赤い表示でないところを見ると、深刻な状況ではないらしい。出撃不能なほどの故障・損害が発生していると、該当箇所は画面の中で、赤く塗られるのだ。

その他の機体も、どこかしらにトラブルを抱えているらしく、黄色の表示が点々と存在する。『Scar4』、松下機は市街戦仕様脚がトラブルのため仕様不可、『Scar5』 下に表示された名前には見覚えが無い は、両肩のオプション兵装にイエローの表示が点っていた。

その中で、即出撃可の全身緑表示が二機。新人と、美琴の機体だ。「いつまでもシミュレータばかり弄っているわけにもいかないだろう」ジェズイットが、指示棒を指の上で回転させながら言う。「書類上は初の出撃だ、ミヤケ」

「書類上？ この間のあれは……」

「さすがに、訓練期間を明けたばかりの二等兵が戦果を挙げてしまつと、色々と問題があるのだよ。上はいつでも頭が堅い」そう言つて、彼は親指で天井を指す。

この管制室が地下にあるのだから 基地指令のことでも指しているのだろうか、と新人は思う。

(或いは……)

もつと上。東の、軍上層部。カーバネル・ジェズイットという男は、そちらの方にもコネクションを持っていると聞いたことがある。抜け目なく情報を仕入れ、杭を引っ込め打たれないようにしたのだろうか。

考えすぎか、と新人は息を吐く。

「それはさて置いて……」

ジェズイット一同へ向けて言い、手元のコンソールで画面を操作すると、立体表示された地形図の一部が赤く描画され、起伏に沿つた長い矢印 おそらく巡回ルートだろう が表示された。

「武装した上でこの地域に展開し、帝国の動きを牽制……大まかにはそのルートを通り、できる限り交戦は避ける」押し黙っていた美

琴が口を開いた。「これでいいですか？」

「正解よ、ミコト。ただし、その小僧と二人で、ね」

「小僧ですか、僕は」

美琴の頭を撫でながら言うヒールレイス・リヴェツサに、新人は僅かな苛立ちを覚える。

女同士だからなのか、保護者の面影でも見ているのか、美琴は、ヒールレイスにだけは心を許しているように見えた。自分ではなくヒールレイスに。手本にしているのか、手本にさせたのか、彼女らの機体の装備も似通っている。まるで姉妹のようだ、とも新人は思う。姉妹という存在を目にしたことも無ければ、姉と妹という概念もいま一つ理解できなかったが。

隣に立つマイストのほうを見ると、にやけ顔で頷きを送ってくる。
(機会って、こういうことか……)

彼女と否応無しに二人きりになる機会。成程、と頷く新人をよそに、他方から手が挙がった。先日の坊主頭 松下肇伍長だ。スムーズに思い出せた自分に、新人は安堵する。

何だ、と促すジエズィットに応じ、松下は踵を揃え、肩幅に開き、手を後ろに組み、非の打ち所の無い『休め』の姿勢を取って言った。
「自分は反対であります、大尉殿」

「何故だ、伍長」

「ルーキー同士で組ませるのは、危険ではありませんか？ 人型強襲陸上戦闘機という兵器は、恰も人体の延長のように操れる反面、もし一度随意に動かせなくなると、操縦兵は容易くパニック状態に陥ってしまうことが報告されております。また、日が浅ければ浅いほど、その傾向が強い、とも。実戦のストレスが彼らにどういう影響を及ぼすか、未知数であります」

「分かっている。故に、お前とシュミットに後を追わせる。俺も慣らしを兼ねて出る。それに二人とも実戦は経験済みだ。不満があるか、伍長？」

シュミット、という聞き慣れない名前に訝しむ新人に向かって、

松下の隣、地形図卓の反対側から手を振る、見覚えの薄い人影があった。見た目は、若い。新人と美琴を除けば、恐らく最年少だろう。二〇台の前半くらいかな、と新人は彼を値踏みし、彼が『Scar 5』、五番目の操縦兵なのだろう、と類推する。

改めて彼の機体の簡易表示へ目を遣る。かなり激しい改造を施された、重砲撃戦仕様機だ。背中への迫撃砲に、両肩には戦闘ヘリにでも付いていそうな、蜂の巣みたいな形をした無誘導ロケット砲が装備されている。

整備に手間が掛かりそうだな、と思いながら彼、シュミットの方を見ると、親指を立て、白い歯を見せた笑みを送ってくる。

この無言のやり取りを知ってか知らずか、ともかく、松下は何事も無かったかのように言った。

「はい、不十分であると、自分は考えます」

「ならば、貴様の考えを述べてみる」

「近い場所でのフォローの方が有効かと、自分は考えます」

「哨戒の基本は二機一組だ。グラウンド・ルールを曲げることになるが？」

「彼らの将来のために、今回は曲げるべきだと考えます」

上官相手でも、松下は譲らない。彼はそういう男なのだ、新人はようやく理解した。どこまでもストイック、どこまでも厳格。裏を返せば。

（面倒な人なんだな）

美琴は腕を組んで何事か考え込み、ヒールレイスは肩を竦めて呆れている。そしてマイストは、新人のほうを向いて、小さく手を合わせた。その目が「悪い、しくじった」と語っている。

二人になる機会を作ることがそんなに重要なのだろうか、と新人は疑問に思う。今のままで何か問題があるか、と問われれば、無いと即答できる。彼女との距離が縮まることが嬉しいか否かと訊かれたら、答えは是、なのだが。

松下が言うのは正論だ。彼が言うことを否定するに足る理由は、

何も無いのだが。

「お前は頭の可塑性が足りねえんだよ、マツシタ」

新人の結論を代弁したかのように、深い溜め息と共にマイストが言った。

「将来のため？　なんかアレな響きつすね」青年　シュミットが、噴き出しそうになるのを堪えているような、心底愉快そうな表情を浮かべる。「許されざる関係……愛のためにしきたりを打ち破る二人……そして国境線への逃避行……ああ、なんだかカビの生えた悲劇を思い出すねえ」

「茶化すな、シュミット兵長」と松下は言い、シュミットの、短く刈り上げた頭を掴んだ。「ですが……彼らの単独任務に向けた演習としては、打って付けかと。バックアップを万全に行う、そして通常任務よりも簡略化させるといふ条件であれば、自分も彼ら二名のみを先行させることに反対は致しません」

表情を変えない松下に頭を締め付けられたシュミットの悲鳴に重なり、隣のマイストが安堵の息を漏らすのが聴こえた。同時に、空気が色が変わったのを、新人は感じ取る。

（上官に楯突く伍長、作戦要旨説明中に軽口を叩く兵長……。人間関係のためだけに、高リスクな作戦を立てる軍曹、曹長。拳句にそれをあつまり許可する大尉殿、か）

規格外だ、と新人は思う。だが、それも、人型強襲陸上戦闘機などという、規格外中の規格外を扱う部隊だからこそ、なのかも知れない、と新人は自分を納得させた。

とはいえ、そもそも、軍人らしい人間が半分もない。それぞれにはそれぞれの　例えば新人には徴兵という　理由があって、ここにいるのだろうか。銃を取るには余りにも似つかわしくない、マイストやシュミットのような青年が、戦いに身を投じているのにも彼らには、銃弾飛び交う戦場よりも、木漏れ日の降るキャンパスの方が似合っている、と自分のことを棚に上げて新人は思う。

（マイストさんは年食いすぎかな……二六だっけ）

ともかく、と逸れかけた思考を元に戻す。

真の意味で、この第一六特殊機甲中隊という世界の一員になるには、彼らのことを知らなければならぬ。何故、彼らはここにいるのか。彼らの言葉の意味、行動の理由。そして何故　彼らは戦うのか。

新人は何も知らない。余りにも知らな過ぎる。その事実を漠然とした不安に変わり、新人を、足元の覚束ない焦燥へと駆り立てる。

青年二人のことだけじゃない。ジェズイットのこと、ヒールレイス・リヴェツサのこと、松下肇のこと、美琴のことだつて、何も知らない。それでいいのかという自問には、駄目だという自答が即座に返ってくる。

不意に、誰かが肩を組んできた。

「大丈夫さ。心配すんなつてえの」見透かされたのか、と思わず身を強張らせた新人に、マイスト・リーズが言った。「共和国中西部はバランサーなんだ。特に攻める価値が無い故の価値、とでも言うのかな。ここに手を出すつてのは即ち、彼我間のミリタリー・バランスの崩壊を生むのさ。ピル・ソアテを陥とすつてことは、共和国を本気で潰すということであり、共和国も本気になる。そうなたらただの資源……経済の取り合いじゃなくて、プライドとプライドのぶつかり合いになつちまう」

「ま、相手もそれを分かつてるから、マジな戦いにはならないと思うわよ」ヒールレイスが、言葉を継いだ。「敵が余程の馬鹿でない限り、ね」

「その『余程の馬鹿』ですが」と、松下。「南から、帝国のエースが一人、こちらに飛ばされてきたとの噂を、小耳に挟みました」

「ああ、それ、あたしも聞いたわ。何だっけ、破碎柱使用の、確か……」

思い出そうと顎先に手を添えたヒールレイスに、シュミットが言った。

「スカルヘッド」

「ああ、それぞれ。ナイスよ、シュミット。確かクソ悪趣味な白塗り髑髏を装甲にくっ付けてるとか……」

何かが落ちる音がした。落ちたのは、ストライクリザードと操縦兵を繋ぐ端末。落としたのは、呆然と、思考がブランクになったかのように立ち尽くす、巳澄美琴の両手だった。

「す、すいません!」

彼女が止まっていたのは一瞬で、すぐさま落とした端末を拾い上げた。

(何だ……?)

訝しむ新人の思考は、すぐに遮られる。

「よし、決まりだ」ジェズイットが、一同へ向け宣言した。「やかましいのが黙ったところで解散と行こう。出撃予定の奴らは一〇分後に格納庫。いいな?」

周りに混じり、新人も「了解」と応えた。状況は、待つてはくれない。

見渡す限りの、赤茶けた荒野だ。だが、先程のグラフィックの通り、意外に起伏があるのだな、と新人は思う。一見すると、地平線の向こう側まで見通せそうだが、あちらこちらに点在する卓状大地や枯れ川の跡が、小さいながらも死角を作っている。手元のパネルに表示される、CG描画された地形図だと、それがよく分かる。見晴らしが良いようでも、見通せない場所は幾らだつてある。

ストライクリザードの足元に、灌木が見える。乾燥地帯特有の、緑色が妙に薄い植物だ。名前は知らない。いつか写真を見たことがあった、と新人が思い出したのに一瞬遅れて、両脚が、大地に僅かに生えたその植物を押し潰した。

あちらこちらには、建物の跡も見える。遺跡、というには文明的だが、とても人が住めるような状況ではない。築かれ、打ち捨てられ、朽ち果て、指を触れれば崩れそうなハメートルの巨人の指では、比喩にならないかも知れないと新人は苦笑し、建造物が、

点々と存在し、容赦の無い陽光と熱風に晒されている。

目を凝らせば、人で賑わうストリートの面影が残っているような気がする。消えてしまった部分を頭の中で補いながら、新人は、かつてここに存在したであろう灯火へ、思いを馳せる。かつては西の果てだった、ともするとピル・ソアテの未来の姿であるかもしれぬ風景は、ありもしないものの気配を感じさせる。

浮かび上がったのは、故郷の並木道だった。

(僕はまだ、あそこに戻りたいと思っているのか……?)

思い出も、未練も、何も残ってきていないあの街へ。友人も、会いたい人も 家族と呼べる人さえいないというのに。

戻りたいだなんて、思っていない、と新人は強く否定する。思い出せる街並みが、一つしかないというだけの話だと、自分を納得させる。

『不思議な風景ね』隣に行く ストライクリザード から、美琴の声が出た。音声のみで、映像は無い。

「不思議？」突然の言葉に、やや上ずった声で新人は応える。

『何も無い……何もかもバラバラだからこそ、色んなものが想像できる。思い出したいものまで、思い出す』

彼女の思い出したいもの、即ち、破壊された故郷の風景だろうか。どんなに嘆いても、願っても、決して戻ってはこないもの。

そう、戻っては来ない と言おうとして、新人は口を噤んだ。

『どうしたの?』

「いや……何でもないよ」

取り繕って、新人は前方に広がる、大きく、浅い窪地へ、 ストライクリザード の双眼をフォーカスした。

「あそこ、元は湖だったのかな」

『何でそう思う?』

「あれ」

新人の動きに追従し、暗赤に塗装された右腕が、窪地からやや離れた場所に転がる構造物を指差す。一見すると、何かの建物のよう

だが。

『船？』

「そうだね。魚とか貝とか、獲れたのかも。土壤が細かいし」

今のこの場所からは想像も付かないが、と新人は改めて、無限にも思える荒野へと目を戻す。

かつて、新人が生まれるよりも、共和国や帝国が成立するよりもっと前には、ここにはどんな世界があったのだろうか。緑が広がっていたのだろうか。水が流れていたのだろうか。人は、笑っていたのだろうか。

リセットされたか、シャッフルされたのか　この世界、大陸には、まるで、元あった全てを捨て、もう一度一から作り直したかのような不自然さが付きまとっている。

（実際その通りなのかも。大変動以前のことは何も分からないし、そもそも大変動が何なのかだって、ハッキリしていないんだ）

地球規模の地殻変動とも気候異常とも言われる、大変動。その具体的な記録は、何も残されていないのだ。何があったのかは、想像するしかない。今の状況を生むに相応しい、理由を。

不意に鳴った通信音に、新人は思考を妨げられた。後方に行く三機からの定時連絡だ。曰く、行軍に若干の遅れ、とある。

（気を遣われてるな……）

新人は、敢えてゆっくり歩を進めているに違いないジェズイット大尉の姿を思い浮かべ、溜め息を漏らす。

カーバネル・ジェズイット大尉の、先日目にした、腕の太いカスタム機、シュミットの重砲撃戦仕様機、そして松下の高速機動格闘戦仕様機の三機が、後続部隊の内訳だ。

『後ろ、遅れてるみたいね』

「そうだね……。合流予定ポイントまで後どれくらい？」

美琴が、計器を操作している音が聴こえる。こういうことは彼女に主導させたほうが上手くいく、と新人は学んでいた。

『このままのペースで進めば、三分掛からない』

「……進む？」と、尋ねた新人に、美琴は即答した。

『ここで待って、合流する』言って彼女は、窪地の淵沿いに機体を停止させる。

「それは……」都合が悪い、と新人は言いかける。進めば僅かなりとも、時間を稼げる。

ここまで周りにお膳立てされて、何も無いでは申し訳が立たない。彼女との関係がさして重要だとも思わないが、改善されるに越したことは無い。何せ、一六特機隊には三〇〇人からの人員がいるが、同年代なのは彼女くらいなのだ。今のままでは余りにも居心地が悪い。

『あたしはここを見ていたい』彼女の ストライクリザード が、何も無い、干上がった湖の跡を見る。『ここなら、何も思い出さずに済むから』

思い出してしまうのは、何なのか。分かりきっている答えに、新人は唾を飲み込む。訊いていいのだろうか、彼女の口から敢えて語らせることは、苦痛でしかないのではないだろうか、と僅かの間に逡巡し 新人は、乾いて貼り付いてしまった唇を引き剥がして言った。

「……故郷のこと？」

『うん。壊れた街を見ると、壊された街を思い出しちゃう……思い出しても仕方ないって、分かっているんだけど』

彼女が拳を握り、怒りと苦しみと、諦めに満ちた視線を落とす姿が、映像が無くとも目に浮かぶ。何とかしたいと思うが、どうにもならない。彼女の感情を、受け止めることができない。

そう、言葉で応えることはできても、何をすることもできない。何故自分はこんなにも無為で、こんなにも空虚なのか。空っぽな生き方しか、してこなかったのか。自分の存在を薄めることで、辺りに吹く風をやり過ぎさなければ、今日まで生きてこられなかった。そのような下らない言い訳を、後何回重ねるつもりだ、と新人は自分に問う。

言葉で、理由で、理屈で、無理矢理納得させなければ、自分の生き方一つ、肯定することができない。納得できず、苦しむ彼女の方が余程正しいのだ。この砂漠に散る砂一粒程の価値も無い理屈で、まやかしの納得をしている自分より。

今の自分が得ている肯定は、ジェズイットの言葉を逃げ道にした、仮初めのものに過ぎない。あの男の自己肯定と、新人のそれはまるで違う。力があるか、否か。違いによる結果として。新人は、ジェズイットの手を取った。だが美琴は、取らなかつた。
「くそっ……」

唇を噛み、暖かさを象徴する太陽が降り注いでいても尚、寂寥たる景色をひたすらに映し出すモニタを、新人は睨みつける。前後左右に流れる映像に、動くものは見当たらない。

結局、哨戒といっても敵に出会うことも無い。彼女との絶対的な距離を、縮めることもできない。何もかもが無駄。そう思った矢先だつた。

アラート音、センサに感。即座に、索敵画面が立ち上がる。二時方向、距離は。

「アサルト・ライフルの射程内だ！ 美琴！」
「分かつてる！」

叫ぶと同時に、身体が動く。動力供給レベルを戦闘時に^{コンバット}。同時に、ブレイン・バイパス・システムがリンク係数〇・六へ上昇させる。頭に痛みとは違う、違和感が走る。あの、『見られている』ような感触だ。だが、気にしている余裕は無い。

推進剤に点火、両脚が軋み、ストライクリザードが弓から放たれた矢のように疾駆する。直後、寸前まで、新人と繋がった、巨人の両脚が踏み締めていた地面を、弾丸が抉った。

後方へのGに顔を顰める。一呼吸の間に、時速一八〇キロメートルを突破。走行方向を転換し、敵の射程外へと退避する。交戦は避ける、と言われた。戦うにしても、敵の戦力も把握できず、こちらはルーキー二人。余りにも分が悪い。

「……いた」

枯れ川の溝を塹壕代わりにして、二機のベルキャットがこちらに射撃を仕掛けている。射線を避け、センサの情報を閲覧しようとして、新人は思わず手を止めた。

レーダーが死んでいる。敵機の接近を感知したのは、音響探知式のサブセンサだ。熱探知のものもあるにはあるが、この環境では誤作動も多く、余り当てにならない。とにかく、電波の跳ね返りで接近する機影を探知する機構がまるで機能していないのだ。

「電子戦仕様のモビリティ・アーマード・インフアントリがいる？どこに？ 敵は、あの二機だけじゃない！」

何故今の今まで気付かなかった。サブが優秀だったから良かったものの、もしここが市街地等の雑音が多い場所だったら、今頃自分は死んでいた。下らない物思い等に気を取られていて、ここが戦場だという事実を、忘れていたのか。或いは、目を背けていたのか。自分自身 この、操縦服のグローブに包まれた両手もまた、戦いをもたらすものだとということに。

何を思おうと、何を考えようと、弾丸は無慈悲に冷徹に、人の命を奪う。そしてヒューマノイド・アサルト・ランドファイター ストライクリザード のコクピットに座り、この手で引き金を引く限り、自分達もまた、奪う側の者に他ならない。奪われた、壊された、失っただけの存在では、ありえない。

新人自身を苦しめた、そして今も苦しめ続ける『どうにもならない力』の渦に、既に自分だって巻き込まれている 人を、苦しめる側として。

「ECMかECM、簡易なものでも付けて置けばよかった」
呟き、新人は現実へ戻り、事実から目を背ける。考えるのは後でもできると、自分にまた、言い訳を一つ。

再び、センサが敵を認識する。一〇時方向に、一機。目視確認、新人の両目が、目標を捉え。そして、驚愕に見開かれた。何かの錯覚ではないか、と二度三度目を瞬かせても、目に見えるものは変

化しない。右手に把持された武装も、胸に刻まれたエンブレムも。

「破碎柱装備、胸に罫體……」

名を思い出すよりも、敵意が、弾丸の形を取って向かってくる方が遙かに早かった。緊急の回避運動。出撃前に交わされた、会議中の操縦兵同士の会話。敵のエース、という言葉が、新人の脳裏に浮かぶ。そして勝てない、と頭脳が結論する。逃げろ、と。後続との合流を待て、と。

新人はその命令に従い、間合いを広くする方向へ進路を取る。そして、現状唯一の味方である美琴に、後退を促そうとして、視界の端に彼女の ストライクリザード を収めた時、新人は再び、驚きに身体が強張るのを感じた。

炎の尾を引き、両脚で足元の乾いた砂を巻き上げながら、 ストライクリザード が敵陣へ一直線に突撃していた。双方から撃ち掛けられるライフルの火線が交叉し、何も無い砂漠のキャンバスに、弾痕のドットを刻んでいく。

「無茶だ！ 何をしているんだ、君は！」

『うるさいっ！』

いつもより遙かに激しい、こちらを竦ませる怒気を孕んだ叫びが、新人の言葉を拒絶する。シールド・アイ センサ類保護のためのサングラスをかけたように見える ストライクリザード の瞳までもが、その名の通り影となって、言葉の当たる陽だまりを遠ざけている。見詰め合うことを、拒絶している。

語られていた帝国のエースの仇名は、『スカルヘッド』。それを聞いた時の彼女の、あからさまな動揺を、新人は思い出す。

「勝てるわけが無い、戻れ！」

『うるさいって言ってんのよ！ あれは、あの罫體は……』張られた弾幕に、ベルキャットの群れへ近づくことすらできない苛立ちをぶつけるように、美琴は叫んだ。『あたしの、両親の仇だ！』

#2 戦いをもたらすもの・4

一瞬、全身の動きが止まった。それが理由なら仕方が無いと、彼女が死へと走るのもどうしようもないことだと、理解してしまった身体が、動くことを拒絶する。止めなければならぬという意志が、伝達されること無く拡散し、自分の手足が、まるで別の誰かの持ち物になったかのような気味の悪い感覚が、胃の底から脳天へと這い登ってくる。

「だからって！」

新人は叫ぶ。気味の悪さを打ち払い、心のままに動かない身体を叱り付けるために。自分の自己肯定を、力のある、まやかしてないものへと変えるために。

『だから、何！？』

「死んで、終わりで、良いわけないだろ！」

『死なない！ 終わらない！ あいつはあたしが、この手で倒す！』

「一人でやったって、無駄なんだよ！ 何もできやしないんだよ！」

僕は知っている、と呟き、美琴の ストライクリザード の正面へと躍り出る。『邪魔するなら！』という叫びと共に彼女がこちらへ銃口を向けるのに構わず、速度を上げて接近。

真正面から衝突し、纏れ合うようにして、半ば倒れながらも新人は両足のペダルを踏む力を強くする。左腕を動かし、 ストライクリザード の腕が、彼女の機体の腰を抱く。

『離せ、馬鹿！』

「突っ込めば良いってもんでもないだろう！」

『うるさい、いいから離せ！』

「嫌だ！」

腰の後ろに据えつけられた推進器が炎を吹き、加速。速度が上がらない、と毒づきながら、新人は、美琴の機体を手近な岩陰へと引き摺り込んだ。

即座にダメージ・チェック。右半身の各部に着弾の損傷があるが、軽微だ。戦闘続行には何の支障も無い。HALを一機抱えた左腕の関節・駆動系にも、目立ったトラブルは見受けられない。

画面の向こうの右肩を掴み、通信形式を切り替える。装甲同士を接触させれば、ダメージ・コントロールにも用いられる、装甲板の複層構造内に張り巡らされた光ファイバーを介して、直接音声通信のやり取りが行える。電波通信に否応無しに付いて回る傍受の危険性が無いため、会敵時にはしばしば用いられる手段だ。

「落ち着きなよ。闇雲に突っ込めば良いわけじゃないって……君だつて、分かつてるんだらう？」

正面のモニター杯に映った ストライクリザード が身動きした。そして、影の落ちた両目が、新人ではない別の何かの方へと向いた。やはり、彼女だつて分かっている。だからこそ、新人の方を向いてはくれない。

美琴が大きく息を吸い込み、吐き出す音が聞こえた。

「ちよつと、話を聞いてもらえる？」

「……話？」 つい先刻までとは打って変わった落ち着いた口調に戸惑いながら、新人は応じる。

「ええ。あたしが……軍に入ろうと決心したときの話」 新人の返事も待たず、彼女は語り始める。止めどなく、だが、ゆっくりと。『あの日の朝までは、何も変わらない一日だったのよ。朝の空気がきれいだつたから、ちよつと遠回りして学校に行つて、遅刻して、先生に怒られて。いつものように授業を受けて、友達とどうでもいい話をして。それで、いつものように遠回りして家に帰ろうとしたら……』

彼女の ストライクリザード が動く。銃を握った右手には力が籠り、何も持たない左手は自らの頭を抱える。動作の同期を切断していない。することすら忘れさせる程の苦痛なのか、と新人の頭の、冷静な部分が分析する。

そう遠くない距離に、榴弾の炸裂音が聞こえるのにも構わず、彼

女は続ける。

『目の前に ベルキャット がいた。民間人の避難も何も無い。あの時の攻撃は本当に突然で、何の前触れも無かった。あたしは……必死で逃げた。だって、それ以外に、何の力も持たない人間にできることがある？ 無いでしょ？』

そうだね、と新人は相槌を打つ。敵群の中には曲射砲装備の支援仕様機もいるのか、とまるで目の前に彼女など存在しないかのような分析が、頭の中を止めどなく駆け巡る。

『今、色んな資料を見ていても、あの攻撃は本当に理不尽……と、いつか、合理性がまるで無いものだった。ま、そんな予測不可能な攻撃で、情報統制とかもやりようが無かったからこそ、あんな風に戦闘の様子がマスコミによって中継されることになったんだけど、あんたも、見てたんだっけ』

「うん、見た。僕に召集令状が来たのが、中継映像が途絶えたすぐ直後だったから、よく覚えてる」

『それで、共和国側も ストライクリザード を出して、後は野となれ山となれ。ほんの数時間前まで人々が普通に暮らしていた空間で、四三ミリが飛び交う光景が、想像できる？ 地獄絵図ってのはこういうことを言うんだ、ってあたしは思った。民族独立派のテロなんかより、もっと性質が悪い。爆撃機が空を飛べた時代ならともかく、あんな前時代的な戦争、ここ一〇〇年は起こってない。建材が焦げる臭いを、コンクリートが貫かれる音を、あんたは知ってる？』

彼女の問いかけに、新人は口を嚙む。木材独特の臭いと、有機溶媒が混じりあった煙、砂利が飛び散り、鉄筋が破壊される轟音。それ自体を想像することは容易くとも、破壊を目の前した人間の思いなど、新人には知る由も無かった。

『そう、あんたには分かんないのよ。分かりっこないのよ。泣きながら逃げ惑って、帰り着いた自分の家は粉々の瓦礫で、しかもそこにいた ベルキャット が……』美琴の言葉は、叫びへと変わって

いく。『父さんと母さんのいた家を踏みつけながら、笑ってたのよ！ 外部スピーカー全開で、壊すことが楽しくて仕方ないって、叫んでた！ 右手に持った棍棒を、何度も何度も地面に叩きつけて、左手のアサルトライフルを、当たり構わず乱射して！』

破砕柱　ブレイクロッドか、と新人は思い当たる。その名の通り、見た目は棍棒か、金属バットだ。他の格闘戦兵装のような超音波振動機構は取り付けられておらず、重量による純粋な破壊を目的とした武装である。

装甲板を切り裂くブレードが主流の今、破砕柱を使う操縦兵は少ない。そう、例えば。

つい先刻、一六特機隊の操縦兵たちが交わっていた会話を思い出す。それを聞いて、不意に端末を取り落とした美琴の表情、そしてたった今、目撃した敵の姿。

「あ……」

『あの場所で大笑いしてた、破砕柱装備の、あたしの故郷を壊したあの機体には、胸に真っ白な髑髏の装飾があった。そんな悪趣味な改造をする奴は、ただ一人』

「……スカルヘッド？　あの、帝国のエースパイロットだっていう、そこにいる？」

『そうよ。今日のアたしは運がいい。軍に入ったら、南西部戦線へ行ってリザード乗りになって、絶対にあのスカルヘッドを倒そうと思ってた。だけど配属されたのは西の砂漠。もう、生きた心地がしなかったわよ。目的を……家族の仇を討つこともできずに、名も無い兵士の一人として死ぬのかって思ったら、笑う気になんかなれない。表情を変えるのすら億劫だった。』

でも……奴がこっちに来てる、しかも今、ここにいるっていうなら話は別。あたしは、軍に入った目的を果たせる！　あいつにこの手で復讐できるなら、あたしは……』肩に掛けた右手が、彼女の機体の手に払われる。接触回線がダウンし、自動で通常回線へ復帰。そして、次第に強まる敵の電波妨害による激しいノイズの中に、美

琴の叫びが聴こえた。『今ここで、死んだっていい!』

新人は、沈黙した。君はそれで良いのかと、問い返そうとした言葉は音声にならず、只の空気の流れとなって口から発せられた。もう一度彼女の肩を掴むことも、止めると怒鳴ることもできない。止めてはならない、仕方の無いことだ、と繰り返す本能を、黙らせることができない。

短い、だが重い衝撃に我に返る。自らの ストライクリザードが押し退けられ、目の前から、彼女が離れていく。頭部のカメラアイが自動で追尾し、その後姿が大写しになる。

「待って!」

ようやく言葉を成した新人の叫びは、加速の轟音に掻き消された。そして彼女の、優しい武装と評されたスタン・トンファが使われぬままにマウントされた背中が、時速二二〇キロメートルで、遙か彼方の戦場へと遠ざかる。

追わなければならない。だが、追って良いのか? 追うべきなのか? 動けという意志と止まれという意志がぶつかり合い、迷いと焦りの火花を散らす。

「追え、三宅新人!」

そうして自分に別のところから命じてようやく、身体が動く。機動を停止していたため、自動で巡航時レベルまで落ちていた動力炉出力を戦闘時^{コンバット}まで上昇。両フットペダルを操作し方向転換、加速して遮蔽物から陽の下へと飛び出す。同時に、近接戦に備えて超音波振動ナイフの充填を開始。すぐ左方に敵一。主武装の七ミリ榴弾・散弾砲をアクティブにし、射程の長いスラッグ・ショットで牽制射撃を掛ける。いい加減な狙いでは直撃せず、遙か後方の地面に着弾し、低い爆発音が鳴る。

美琴に呼びかけようと通信機器を操作するが、死んでいる。敵の ECM の効果で、最早彼女に、一方通行の言葉を叩き付けることすらできない。くそ、と悪態を一つ漏らす。

「敵は何機だ、どこにいる!」

無意識のうちにそう叫んだ直後、数メートル脇に曲射砲の榴弾が炸裂する。更に速度を上げようとするも、メータは既に振り切れている。フルドライブ、最高速度。

前方二方向、左右からアサルト・ライフルの射撃。咄嗟に身を振り、速度が多少死ぬものにも構わず無理矢理な方向転換で左へ逃れるも、右肩へ着弾。即座に立ち上がったダメージ・コントロール画面が、戦闘に支障は無いことを伝えている。だが、右肩の接触通信機構が破壊されていた。そして舌打ちと同時に、目の前に爆炎が上がる。

「曲射砲の狙いが正確になってる……機動を読まれた？」

紙一重だった。もつとスムーズな回避運動を行っていれば、速度は殺されること無く、遠方からの敵支援砲撃が直撃していたかもしれない。正しく命拾いした状況に、意志に反して、冷たい汗が流れる。

落ち着け、と自分 コミュニケーションできる唯一の相手に語りかける。慌てるな、状況を整理しろ。そうしなければ、突破口は決して見えない。

「ECMで掻き回してるのが一機、後方から大口径の迫撃砲か手持ちのバズーカ……射角から考えて背部固定式の迫撃砲……で支援砲撃をしている一機、アサルト・ライフルで僕と直接交戦してるのが二機、か」

四対一。分が余りにも悪すぎる、と新人は毒づく。頼みの綱の味方とは、今の状況では連携など期待できない。だが、しかし。

「妙だな……」新人は呟く。

設計思想から、ストライクリザード は改修、改造や固定武装オプションの取替えが比較的容易に行える。そのため、こんな戦略価値の低い辺境に配備されている機体であろうと、見た目のシルエツトが変化するような改造を施すことも不可能ではない。例えば、先程模式図を見た、シュミットの機体のように。

(シュミット兵長、で合ってたよな……)

怪訝な顔の新人に陽気に笑って見せた彼の顔を思い出し、そしてすぐさま逸れかけた思考を叱り付ける。

そう、ヒューマノイド・アサルト・ランドファイター ストライクリザード は改修が容易な一方、モビリティ・アーマード・インファントリ ベルキャット は、構造・設計思想上の問題で非常に改修がしにくい 逆に言えば、一機で完成されている。帝国の尖兵であり、一つの姿に一つの意志、即ち帝国に仇成す者は容赦なく破壊するという思想の象徴でもあるためだ。

つまり、手持ち火器の変化はともかく、ECM装備や固定の曲射砲装備などという機能特化が許されるのは、ごく一部のエース部隊に限られる。

「そんな部隊が出張ってくるほど、帝国は本気ってこと？ それとも……」

出撃前にヒールレイス・リヴェッサが語っていたように、敵の指揮官が『余程の馬鹿』かつ相当の実力の持ち主なのか。

再び、進行方向上に爆発。同時に、左脚の一部にアサルト・ライフルが着弾し、途轍もなく分厚い扉をノックされているような音がコクピットの新人の耳まで届く。装甲を抜けたかもしれないがまだ戦闘には問題ないはずだ、と新人は再び自動で立ち上がったダメージ・コントロール画面を強制終了させる。

敵のエース スカルヘッドと仇名される相手も、今、ここにいる。

「合わせて五体……」

まともにもやり合ってもこちらがスクラップにされるだけだ、と新人は奥歯を噛み締める。連携、せめて手信号でも構わないからコミュニケーションが取れば、と思った時だった。

『聞こえるか、共和国の兵隊さん！』

一瞬、通信かと勘違いしたそれは、集音機が拾った、敵機が外部スピーカー越しに怒鳴り散らしている声だった。同時に、正面の卓状大地上に反応。熱、音響の各センサーが絶叫する。

目を上げると、髑髏があつた。

「来た！？」

「始めましてか？ 噂に聞いてて始めましてな気がしねえか？ また会つたなは有り得ない。なぜならこの髑髏を、二度拝める奴はいねえからな！」

「ちっ！」

右手に振り上げた棍棒を、一〇メートルはある高低差の加速に任せて振り下ろす。スカルヘッドの姿を認識したときには既に、身体が動いていた。右腕は主兵装の榴弾・散弾砲。クロス・ファイアを背中のラッチへ、同時に左腕は、左大腿部の武装ラックへ。武装管制画面を視線同調で呼び出し、左手の操作でアクティブな武装を切り替える。

飛び出したグリップを逆手に掴み、勢いに任せて振り上げる。直後、ブレードの研ぎ澄まされた金属が棍棒の凹凸の激しい表面に衝突し、オレンジ色の火花を散らした。

重量を一身に受けた左腕が軋む。高負荷が掛かった関節・駆動系のSMCFが発する悲鳴が、エラー・メッセージとなって画面に躍り、警報音となって耳朶を打つ。

棍棒自体に振動機構は無い。ならばナイフで切断できるか。と考え、左腕に籠める力を強めるも、刃が立たない。表面の微妙な、只の継ぎ接ぎにも見える凸凹に邪魔され、破断面を取れない。

「俺様の名はジョニー・メイフェン。人呼んでスカルヘッド！ 冥土の土産に覚えておきな、兵隊さん！」

「誰が！」

思わずそう怒鳴り返し、推力を限界まで上昇させる。このまま組み合っていたのでは埒が明かないのに加え、格闘戦では向こうの装備の方が明らかに上。一時離脱して体勢を立て直す他に無い。

腰背部のスラスタが火を吹き、同時にサブの推進システムである、両脚に搭載された振動推進機構が起動する。スキーを履いているとも喻えられる三・五メートルの長い足の接地面を、ブレードの

技術の応用で共鳴振動させ、推進力を得るものだ。副次的効果として、爪先にある程度の破断能力が生じる。

全てのパワーを爆発させた ストライクリザード が、半ばジャンプするように前進、すれ違いながらに棍棒を振り払う。

「近接格闘では分が悪い。でも、中・近距離での射撃戦なら……！」
ナイフを収め、再び七二ミリ榴弾・散弾砲をセット。加速を殺さずに一八〇度ターン、銃口を向け、バック・ショットで発砲。三連射、合計して六〇〇にも達する散弾の射角内に スカルヘッド の姿は無かった。

再び、センサに感。上だ、と気付いたときには既に、目の前にベルキャット の四つ目が光る頭部があった。

「あの一瞬の間に、台地の上に飛び乗って回避、更にこれだけの距離を詰めたっていうのか!？」

ベルキャット の両腕が伸びる。砲を持った右腕の手首が、灰色の掌で押さえつけられ、背後の孤立丘へと叩き付けられる。コクピットの衝撃吸収機構を通して尚有り余る衝撃に新人は歯を食い縛り、岩盤が砕け、飛び散った赤茶けた石塊が、 ストライクリザード の装甲に施された暗赤色の塗装を抉り取る。

『壊れちまいな、ドラゴン!』

掌同士が触れ合って開いた接触回線から、男 ジョニー・メイフェンの声が聞こえる。共通の規格であることに、ここが戦場であることも忘れて場違いに驚き、帝国の側におけるコードネームである ドラゴン という呼称に違和感を覚える頭の一部を殴り付け、新人も怒鳴り返す。

「ドラゴンじゃない、ストライクリザード だ!」

『どっちでも、壊れちまえば皆平等! そうだ、どんな物でも、どんな使われ方をしても、壊れちまえばみんな一緒なのさ!』

「破壊に、真理とやらでも見出してるつもりか!」

『ご名答!』 ベルキャット が右腕と、手に構えた棍棒を振り翳す。 ストライクリザード の双眼に、一筋の影が掛かる。『たま

らないぜ！　こんな単純なことなのに、誰も気付いていない……壊す楽しさは、俺様で独り占めなのさ！」

「ええい！」

咄嗟に、叩き付けられ力を失っていた左腕を動かし　ややレスポンスは遅いものの　破砕柱の握られた　ベルキャット　の首首を掴む。先刻から、モニタは真っ赤に染まっている。傷つき流れ出した血のような赤い色の照明が、コクピット内に明滅する。

「そんなの正しくない！　お前は楽しくたって、お前以外は誰も楽しくない……誰だって、それが分かっているから、お前のように考えることを否定する！　僕もだ！」

新人は、湧き上がる言葉をそのままに、髑髏のエンブレムへ叩き付ける。

（こんな男に……こんな男の気まぐれに！）

なぜ彼女は、あんなにも苦しめられなければならない？　快樂のために壊す、快樂のために戦う　歪みきった、本能と衝動の権化に。

腰のスラスタが断続的に吹かされ、背後の岩盤との衝突時に混入したであろう小物体を排除する。この過程無しの再加速は、エンジンの爆発を生む危険を孕んでいる。

踵を返し、膝に力を込め、前へ。関節部から、衝撃吸収のための緩衝剤が気化した白い煙が間欠泉のように噴き出し、脚の圧熱転換機構からは高温蒸気が排出されて、地面に僅かに生える緑を吹き飛ばす。

右手の砲を抑えられながらも、左手で敵の破砕柱を抑える。両手に組み合い、四つ目と二つ目が真正面に相対する。

『やるじゃねえか、兵隊さん！　名乗っておけよ、この俺様が記憶に留めてやるからよ！』

「誰が……っ！」

『おおっと！　必死の形相で応じるのは兵隊さんじゃない、まだ子供じゃあないか！　いや、子供だけど兵隊さんかな……声で分かる

ぜ、俺様にはな。しかし！』

ベルキヤット の両腕に、一層の力が籠る。一度は押し返した、組み合った腕がじりじりと、力任せな灰色に押し込まれていく。

「くっ……地力では、ベルキヤットの方が上か？」

『そおうだ！ その上コイツはこの俺様、ジョニー・メイフェン様 専用に特別にカスタマイズを許された機体だ！ そんじょそこの子猫ちゃんと一緒にしてもらっちゃあ、困るんだよ！』

やはりこの部隊は、相応の 自由な改造を許されるだけの実力を備えた敵。先刻の推測に、一片の回答がもたらされる。では、この攻撃は正式な作戦行動なのか、それともこのジョニー・メイフェンと名乗った男の独断に過ぎないのか。帝国が本気でこちらを潰しにかかっているのか否かは、そこで分かる。

「ジョニー・メイフェン……お前は、どうしてここにいる！」

『決まってる！ テメエら共和国の腑抜けたトカゲちゃんを、ぶっ壊して回るためだよ！ 俺様がこの地に立った記念だ！』

「身勝手な！」

『勝手に結構。上の馬鹿共はこの俺様を、破壊の権化と恐れられるこの俺様を、こんな辺鄙な場所に追いやりやがった！ だから教えてやるのさ……ジョニー・メイフェン、ここにありつてな！』

「状況を見れないのか！？」

『テメエが俺様の破壊衝動を満たしてくれるなら、その状況とやらを見てやるうじゃねえかよ！ 弾けそうだ！ S M C Fが、関節のオイルが、全てのセンサが、壊したくて壊したくて、爆発しそうだぜ！』

左の肘関節から、火花が散った。想定を遥かに超える高負荷を長時間に渡って掛けられたために、関節部に内蔵されたアクチュエータ機構が破壊されかかっているのだ。加えて、先刻の格闘兵装での衝突時に受けた、内部機構への損傷もある。

限界か、と舌打ちした、その時。右方から、全開で吹かされたスラスターの轟音が聞こえた。ベルキヤット は、一部の特殊な仕

様・装備を除けば推進剤を一切用いない。ならば近づいてくるこの音の主は ストライクリザード。コクピットに座るのは。 。
「美琴!？」

果たして、彼女の ストライクリザード が、真横からジヨニー・メイフェンの操る ベルキャット に衝突。纏れ合いながら、孤立丘や卓状台地の密集した見晴らしの悪い場所から抜け出し、砂塵を巻き上げた。なだらかな傾斜や僅かに突き出た岩盤はあるものの、自然の侵食作用が生み出した、HALの身長程もある障害物に囲まれたそのスペースは、まるで 闘技場のように見えた。あたかも、外からの干渉を許さず、孤独に、孤高に戦おうとする彼女の意志を、世界が汲み取ったかのように。

『 スカルヘッド ……ジヨニー・メイフェン!』

『 ははははっ! ガキの次はお嬢さんの声だ! 共和国軍はいつからハイスクールになったんだい?』

外部拡声器越しに怒鳴りあう二人の声が聞こえる。損傷確認。各部に細かいダメージがあるが、左腕が一番危険だ。戦闘継続可能なギリギリのレベルまで損害が及んでいる。だが、引くわけにはいかない。

彼女を追って、機体を加速させようとすると、目の前に曲射砲弾が炸裂する。同時に、二方向からアサルト・ライフルによる射撃が容赦なく襲い掛かる。

「くそっ! 邪魔を……」

無理矢理にでも前進しようとする、右半身に着弾。徹甲弾に装甲が抉られ、不気味な音を立てる。頭部を巡らせると、岩盤の影からこちらに突き出された銃口が見える。腹立ち紛れに、バック・ショットで応射。飛び散った散弾が岩を削り、粉塵が上がる。だが、直撃はしない。

「これ以上は、無理なのかつ!？」

他方から再び浴びせられる四三ミリの連射に、唇を噛みながら後退。ジヨニー・メイフェンと戦う美琴の姿が、遠ざかる。

『あんただけは、絶対に許さない！ あたしの故郷を滅茶苦茶にして、大声で笑っていたあんただけは！』

彼女の叫びに、スカルヘッドの高笑いが重なる。

『嬉しいよ！ 最高だ！ そうだ、そうやって向かってこい！ 俺様の破壊が今のお前を動かしている。俺様の意志が、今のお前を支配している。お前は最早俺様の奴隷なんだよ、小娘！』

『誰がお前なんか！』

『否定するのか、否定できるのか？ お前を突き動かす衝動……この俺様を、壊してしまいたいという意志を！ できないだろう！？ ならばお前も俺様と同じ、破壊を、戦いをもたらすものだ。二つの腕があれば拳を作って殴り合い、石があれば、そいつを憎い相手の頭目掛けて叩き付け、銃があれば引き金を引き、兵器があれば戦争をやるのが人間だ。俺様は、そんな単純明快、自然な姿に、全ての人間を誘いたいのださ！ お高いところに留まって、戦いを否定したり、戦争に変なプライドを持ち込んだりする輩が、俺様は大嫌いなんだよ！ 戦いたいから戦う。その何が悪い！？ 答えてみるよ、お嬢さん！』

『うるさい！ あたしはあんたが憎いから戦う！』

『そうだよ！ それでいいんだ！ 敵を得ることは幸いである。憎んでこれを討つことは、その次に喜ばしい！』

次第に遠ざかる二人の叫びに、新人は違う、と呟く。何かが間違っている。だが、何が間違いなのか、分からない。ジェズイットならどう答えるのだろうか、と想像しても、スカルヘッドの論理を否定できる言葉は浮かばない。

（もし僕が、誰かを憎んだことがあったなら、彼らを否定できるのかな）

自分を打ち捨てた両親に対してだって 新人は憎しみという感情を抱いたことが無い。あったのかも知れないが、既に記憶の彼方に消えてしまった。

「何もしなくていいわけじゃないんだ。間違ってるのは分かるんだ。

「ただ、何もできないし、答えだって分からない！ 僕は！」

接近警報。右からの火線をほぼ無意識の動作で回避。上方からの敵支援砲撃も、加速の限りで回避する。だが、一つの動作をする毎に、美琴の側から離れていく。ベルキャットの四ツ目が、こちらを照準している。近づくな、お前に何かを言う資格も、権利も、能力も無い。と、その目が圧しているかのような錯覚にさえ囚われる。

がむしやらかな応射で、弾丸が尽きる。カートリッジを排除。空いている左腕を動かし右腰から新しい物を取り出そうとするが、上手く動かない。損傷の蓄積が、正常な動作を阻んでいる。

「動けよ！」

乱暴な動作で弾倉を耑り取り、叩き付けるようにして装填。残弾〇のエラー表示が消え、各弾六つつの正常表示へと復帰する。そして即座に照準、射撃するも、当たらない。損傷による照準のぶれを、システムが補正し切れていないためだ。

「邪魔をするな！ 僕の前に立つな！」

マニュアル操作で照準を補正。ストライクリザードの銃を把持する両腕が、応えて微細に、かつ力強く動く。右手のトリガーを引く。強い反動に、照準が否応無しにぶれ、放たれた榴弾は標的を僅かに逸れて後方の岩盤を吹き飛ばした。

「そうだ……どんなに知った風な口を聞いたって、できる振りをしたって、僕には何もできない。力が無いんだ。センスがあるって言われてこんな兵器に乗ったって、弾の一発だって当たらない。空っぽで……僕の中には確かなものなんて、何一つ無い。だから、僕の言葉は、誰にも届かない！」

岩場に、ベルキャットの群れに阻まれ、もう彼女の後姿すら見えない。空爆を受けているかのような砲弾の炎と、アサルト・ライフルの弾丸が飛び交うことで、ただ逃げ回ることしかできない。できるなら、全部蹴散らして、彼女の手を掴みたい。だが、そうするには、力が、余りにも足りない。

#2 戦いをもたらすもの・5

「何だこの様は、三宅新人！ お前なんかが偉そうに、彼女を救えるとも思ったのか！？ 愚かだ、愚の骨頂だよ！ こうやって自分を、自分で無いみたいに、高いところから見下ろさないで、自分の馬鹿さ加減にすら向き合うことができない！ そうだよ、僕は馬鹿だ、人間の屑だ！ その証拠に……」

砂塵と弾丸、鋼鉄の巨体が交叉する戦場を越え、 ストライクリザード が見えない背中を求めて咆える。拳は、機能不全を起こす寸前まで強く握られ、双眼の視線は、捉えることが叶わぬ彼女へと注がれていた。

「僕は、彼女一人、振り向かせることができないんだ！」

できないのだと、認めてしまうと、諦めが鎌首を擡げる。それが現実なのだ、どうしようもないことなのだ、心の一部が主張する。「お前はそれで良いのか」というジェズイットの言葉が反芻され、良くない、と即座に答えを返しても、ならばお前に何ができるとその心の一部は捲くし立てる。

できないではないか、彼女に手を取らせることも、群がる敵を討つことも 彼女を、振り向かせることさえも。

正面からの接近警報に、我に返る。目の前に、武装を納め、身体を丸めた ベルキヤット が一機。体当たり、と気付いたときには既に、空間ごと揺さぶられたかのような衝撃に、シートに固定されたはずの身体が鞭打っていた。

そのまま、機体が横転し、カーテンが張られたかのような砂煙が上がる。両腕が操作アームのリングに喰い込み、頭を、左側面を表示するモニタへしたたかに打ち付ける。

「くそっ……ダメージは？」

悪態が口を突いて出る。たとえ何もできない、と絶望しようと、身体はここ数週間の訓練で染み付いた動作で、機体の損傷度をチェ

ツクする。ヘッドギアに詰まっている緩衝材のお陰で、鐘を打っているかのような断続的痛みはあるが、意識は明瞭だった。

「お前はどこまでも中途半端だよ」新人は呟く。「何かをやり遂げる力も無いのに望みだけは持ち、結局何もできない。それでも、諦めて運命に身を委ねることもできず、こうして惨めに足掻いている」

左腕の関節が完全に死んでいた。格闘戦はおろか、砲を支えることすらそのままではできない程、深部にまで損傷が及んでいる。転倒してしまった機体を復帰させようと、まだ動く右腕を、乾ききった大地に着く。ふと目を上げると、縦になった地平線が見える。

「どうしてだろうね。なぜ僕は足掻くんだろう。無駄でも、無理でも、動いているんだろう。止めれば良いのに。何もできないんだから、何もしなければ良いのに……」左腕の操作を完全にシステム操作のみに限定させながら、新人は、そこに誰かがいるかのように呟く。「昔みたいに、さ」

関節が、装甲が、軋む音がやけに大きく聞こえる。それはまるで、誰かが慟哭に咽び泣くかのように。

「泣いているのは誰？ 僕じゃない。何もできないのは当然なんだ。力が無いんだから。それに苦しむ理由も、悔しいと思う必要も無い」
「諦められるはずがないって言ったのはお前だろう！ どっちかずからでも何かの道を見つければいいと、偉そうに彼女に言ったのはお前だろう！」

「だけど、そうすることを、状況は許してくれない！」

目の前に、手斧を振り上げた ベルキャット の姿があった。シルエットが、他の機体と少し違う。頭部が大きく、背中にも張り出した何かのユニットが、一種異様な形を生み出している。まるで小さな円盤を据え付けたかのようなだ。

レドームか、と新人は直感する。通信を 言葉を交わすことを阻んだ敵。お前のせいで、彼女は遠くへ行ってしまった、と新人は毒づく。

「いいや、違うね。彼女を繋ぎ留められなかったのは、お前自身の

無力さだ。責任転嫁して、勝手に気持ちよくなるなよ。彼女を彼女としか呼ばない……名前を呼ぶことすら怖がるお前の弱さが、彼女を遠ざけた。状況のせいかな？ スカルヘッドのせいかな？」

「僕のせいだ！ 分かっているよ！」

「分かっているなら……」

どうすれば良いのか、の答えが、分からない。超音波振動する刃は、止まらない。

眼前で、光が爆ぜた。終わったと、無意味だと思いながらも衝撃に身構えた新人に降りかかったのは 誰よりも力強い、誰よりも確かで、そして誰よりも新人が信じる、男の声だった。

『強くあれ。言葉に逃げるな』

分かっているならどうするのか、の答えを、こつこつと簡単に言っている男。この声を、誰が聞き間違えようか。あの日 初めて ストライクリザードに乗ったときも、自分を叱咤し、目覚めさせ、奮い立たせてくれたこの声を。

「……隊長？」

ベルキャットが、袈裟懸けに両断されていた。真つ二つになり、力を失った灰色の巨体が崩れ、電波妨害が消滅する。途端にクリアになった通信回線に映し出されたカーバネル・A・ジェズイツトの顔は、見たことが無いほどに険しく だが、どこか安心を覚える、不可思議な表情だった。

陽光の下に立つ ストライクリザードが眩しい。彼の機体は純然たる二脚 両足に姿勢固定用のスパイクを備え、二脚故に難しい重心・姿勢制御を補助するための制動尾が付いた『市街戦仕様』だ。それだけでも新人にとっては見慣れないのに加え、過剰にも見える改造を受けて肥大した腕に握られた武器を見て、新人は驚愕を禁じえなかった。

「それ……刀、ですか？」

『四・三メートル超音波振動刀。俺以外に誰も使う者が無くて埃を被っていたのを、引っ張り出してきたのさ……俺のような埃を被

つた男には、相応しい代物だよ』

片刃の、僅かに反りの入った形状は、古代のサムライ・ソードを髣髴とさせる。そしてそれを背負った ストライクリザード の姿は 髑髏などより、余程恐ろしい。中に乗る者の気迫が、まるでそのまま剥き出しの戦意、即ち刃となつて空間を震わせているような、不気味な威圧感が、錯覚ではなく確かに存在している。

だが、味方にあつて、これほど頼もしい存在があるのか？ いない、という答えの代わりに 腕の改造は刀を振るためだったのかと納得しつつ 新人は安堵の溜め息を漏らした。

「死ぬかと思つた……」

「死が怖いか？」

「怖い、ですよ」

『ならば死ぬまで戦え。言い訳は、地獄でだつてできる。重要なのは、戦い続けることだ……』 刀に残つた形状記憶カーボン・ファイバーの碎片を払い、ジェズイットは言う。『お前を突き動かす衝動…… 生きたいという意志がある限り』

それだけ言い残し、ジェズイットを乗せた、刀を担いだ ストライクリザード は、弾丸飛び交う中へと身を投じる。

「僕を突き動かす衝動……」

どんなに駄目だと思つても、できないと理解しても、足掻き続けるその理由は、何だ。生きたいという意志か？

「違う。違いますよ、隊長。そうじゃないんだ。生きたいという意志は勿論ある。だけど今の僕は、それだけじゃないんだ。僕は……」
脳裏に、『彼女』の顔が浮かぶ。笑顔を作ることすら忘れるほどの絶望に、一人耐えてきた姿が。「彼女の、いや、巳澄美琴の、笑つた顔が見たい。隣を歩きたい。友達でありたい！」

『分かっているなら、簡単だ』

未だ地に伏せたままの新人の上に、新たな ストライクリザード から手が差し伸べられる。通信画面に映つたのは、余計な肉など一切無いのではないかと疑いたくなるほどの精悍な顔付きをした、

実直そのものの軍人、松下肇伍長の姿だった。

『目指す場所へ、只管に突き進めばいい。脇目も振らず、邪魔するものは全て蹴散らして、お前の心が、導くままに』

高速機動格闘戦仕様の機体は、彼のストイックな精神を反映したのか、装甲が異常に薄い。それでも、告げられる言葉は重く、差し伸べられた手には、吸い寄せられるような力がある。信じて、掴みたくなる力が。だからこそ、新人は掴むことを躊躇う。自分に、同じことができるのか。一度失敗している自分が、もう一度彼女に手を差し伸べることが、許されるのか。

『君にならできるさ、ミヤケ君』今度は、また他方からの声。『一六特機隊の皆が付いている。今の君は一人じゃない。だからあの娘を一人じゃなくすることだって、できるはずさ。このエール・シュミット兵長様が、保障するよ』

映ったのは、重砲撃戦仕様のカスタム機を駆る、シュミット兵長の姿だ。先程見かけたのと同じ悪戯な笑みは。心配無用、と力強く語っている。

君は一人じゃない。同じ言葉でも、こんなにも違う。自分が発するのと、彼の口からとでは。

『決めるなら急いでよ。ジャミングが消えて分かったけど、西北西の方向に伏兵がいる。四機だ』

唾を飲み込み、新人は思う。最早迷う理由など、どこにある？ やれるだけやってみる。いや、違う。

「やってみせます！ 絶対に！」美琴が、振り向いてくれるまで。松下の ストライクリザード が差し出した手を、今度は迷い無く掴み、横転した機体が一気に立ち上がる。途端に、太陽が近くなる。眩しさに目を細め。新人は、両手のグリップに籠もる力が我知らず強まるのを感じた。

『よっしゃ。そうと決まれば、背中は任せて、君は突っ込め』画面の向こうで、シュミットは愛嬌のある顔を綻ばせる。

『新手の足を止める、シュミット兵長！』アサルト・ライフル装備

のベルキャットを葬ったジェズイットが、自身の専用剣撃戦仕様機の双眼を西北西　索敵画面が四つの敵影を感知し警報を鳴らしている方角へと向ける。『俺が仕掛ける！　四体……試し切りに、丁度良い』

『敵の砲手は私に任せてもらおう』自信に満ち溢れた声で告げるのは、松下だ。『九〇秒で仕留める』

今一度、新人は自機の損傷をチェックする。左腕の損傷甚大、加えて全身に細かい損傷が及んでおり、無傷の装甲板など一枚も存在しないのではないかと疑いたくなるほど、ダメージ・コントロール画面は赤黄色に染まっている。主兵装の残弾、推進剤も残り僅か　後一度の戦闘が限度だろう。だが、しかし。

「そんなの、やり方次第だ……」

呟き、加速体勢に入る。自動で落とされていたパワー・レベルを戦闘時にまで上昇。歪んだ装甲が上げる金切り声も、廃熱風の轟音も、全てが、敵を求める　ストライクリザードの武者震い　あるいは、まるで「戦えないなどと、勝手に決め付けるな」と叫んでいるかのように聞こえる。

『急ぎなよ。きつとあの娘は、君を待つてる』

言うが早い自分には砲撃姿勢を取って測距を開始したシユミットに「了解」と返し、新人は両足下のフットペダルを、一気に床に着くまで踏み込む。一呼吸の間も無く加速。腹に沈むような大口径の砲撃音が、あつという間に遠ざかる。速度メータが、時速二〇〇キロメートルを指す。

上空を飛び交う砲弾が、流星のようにも見える。あれがもし本物なら、何を願おうか　と考えながら、新人は深手を負った自機の左腕を、騙し騙し動かしていく。そして、丁度射撃時に支えになる位置で固定。腕時計を確かめているようだ、と新人は苦笑する。

形状記憶カーボン・ファイバーは、その三次元構造内にパツケージされた希少金属粒子の作用により、通電パターンに反応する形状記憶性を獲得したが、代償として、炭素繊維に見られる凄まじい剛

性は、幾分低下している。電流による指示があつて初めて、SMCFは人間の筋組織にも似た柔軟な振る舞いを見せることを可能にしている。

では、あえてその電荷による指示をシャットアウトしたら、どうなるか。一切の通電を行わず、一度決めた形状を維持させ続けられる。SMCFは即ち、HALの多機能複層装甲の一部にも用いられている、炭素繊維複合材の塊と化す。アルミよりも軽く、鋼鉄よりも強固な材料へと変貌を遂げるのだ。

大地から生えてきたかのような岩場の隙間を縫い、僅かに残る家屋の跡を、超音波振動する爪先が打ち砕く。六〇メートル先に感あり。一方は敵、一方は味方。断続的なアサルト・ライフルの発射音が、耳を劈く。

逸る気持ちのままに走り、岩場の少ない、開けた場所へ出る。新人の目に飛び込んだのは、あちらこちらに傷を負い、白い色の汚れた髑髏。スカルヘッドと、右腕、右脚を失い地面に倒れた美琴のストライクリザードの姿だった。

「ジョニー・メイフェン！」
叫ぶと同時に、照準、射撃。完全に固定され、動かぬ左腕を添えただけでは正確さは到底望めないが、それでも、撃つ。激しい反動に、今度は右腕の関節までもが蝕まれていく。

髑髏を胸に描いたベルキャットが機敏な動作で飛び退き、左手に構えたアサルト・ライフルで応射してくる。砂を巻き上げながら、回避運動。両脚が悲鳴を上げ、股下のプロペラントが自動で投棄される。

『さっきの小僧か！ 逃げれば良いものを、甲斐甲斐しくも、やられた仲間を助けに来たか？』
「逃げるのはもう飽き飽きなんだ！ 敵からも、美琴からも、生きることからも！ だから……」

生への衝動、自分自身を肯定したいという意志。そしてそれが生み出す力。何もできないと否定し続けてきた、無駄だと絶望して

ばかりいた自分の一部を打ち払うように、新人は引き金を引く。このトリガーが、満身創痕の傷跡が無駄な足掻きだと言っのなら。
「お前を倒して、全てを証明してやる！」

バツク・シヨットへ切り替え、当てにならない照準レティクルを無視して完全な目算で射撃。三発で、散弾の残弾が切れる。再び、スラッグ・シヨットへと切り替え。

『んなもんが、この俺様に当たるものか！』
「当たらなかつたって！」

標的を逸れた無数の弾丸は、正しく鋼鉄の雨となつて 背後の卓状大地を抉り取つた。

メサ、とも呼ばれるこの、地面から突き出た奇異な岩盤は、乾燥地帯にはよく見られる地形だ。隆起、褶曲を繰り返した地盤が、遮るものなど何も無いままに自然の侵食に晒された結果として、元々は硬い層だった場所のみが、砂漠の中に点々と顔を覗かせているのだ。更にこれが侵食を受けると、孤立丘、ビュートとも呼ばれる、岩盤でできた尖塔のような地形を生み出す。何れも、HALの背丈より少し高い程度だ。

その、何億年にも渡る大自然の作用を耐え抜いた強固な岩盤が破片となつて、ベルキャットの上へと降り注ぐ。装甲を破壊するには至らなくても、判断を鈍らせ、高速機動用に踵に装備されているブレード・ローラーの動作を妨げるには、十分だった。

「貰つた！」

『まだまだあつ！』

体勢を乱しながらも、スカルヘッドの左手に構えたアサルト・ライフルの放つた弾丸が、こちらの脚部を捉える。命中したのは関節でも装甲板でもない 荒地戦仕様脚に最も特徴的な足のスキー、爪先部だ。

右脚の、簡易なブレード機能も持つその先端が砕け、足元が乱れる。自然、七二ミリ弾は命中することなく、遙か後方の岩盤へ着弾して爆炎を上げる。舌打ちを一つ。そしてもう一度照準しなおし、

今度こそ、と呟きながら引き金に右手の人差し指を掛けた、その時。
『そこまでだ、小僧！』 ジョニー・メイフェンの、外部スピーカ越しの叫びが聞こえた。

「何!？」

『動くんじゃねえ。動いたら……』

ベルキヤットの、銃を構えた灰色の左腕が、ある一点を照準している。そこへ目を遣り、新人は。

「卑怯なっ!」と、こちらも外部スピーカを入れ、呼吸も忘れ、叫んでいた。

『そうだ。見えるか？ 俺様の左腕は今、身動きの取れないあの……クソ生意気な小娘が乗ったトカゲちゃんをロック・オンしている。……どういう意味か、テメエにも分かるよな？ 分かるよな! テメエがわざわざ命張って助けに来たあの小娘の、ドブネズミよりもちっぽけな命は、このジョニー・メイフェン様に握られてるってことだ!』

美琴の ストライクリガード は、右腕と右脚が、強引に捻じ切られたかのように根元から欠損していた。シールド・アイは砕けてセンサが露出し、左腕にはスタン・トンファが握られたままだが、微動だにしていない。中の彼女は無事なのだろうか、と新人が奥歯を噛み締めると。

『……新人?』

スピーカ越しに、ノイズに呑み込まれそうな、弱々しい声が聞こえた。通信回線に切り替えることすら、していない。

「そつだ、僕だ! 無事なんだね? 怪我は?」

『さあ! 感動のご対面が死体相手の涙になるかは、テメエ次第だ、小僧!』 ジョニー・メイフェンが、高笑いしながら言い、ベルキヤット が、赤茶色の大地に倒れ伏す ストライクリガード へと歩み寄る。『まずは、この俺様に不遜にも突きつけてやがる、そのクソみてえな銃を棄てな!』

『駄目、新人!』 途端に、半ば泣き喚くような美琴の声が聞こえた。

『あたしは死んだっていいって、言ったでしょ！』

彼女は確かに言っていた。あいつに復讐できるなら、今ここで死んだっていい、と。そして新人は、そう言っただけで走り去る彼女を止めることはおろか、声を掛けることさえ、できなかった。

だが、新人は、彼女の言葉に頷かず。右手に構えた七三ミリ榴弾・散弾砲を、地面へと投げ捨てた。そしてゆっくりと、口を開く。
「君は、それで良いのか？」

『馬鹿！ 何で棄てた！ あたしになんか、構わないですよ！』

「もう一度言っよ。君は、それで良いのか？」

『うるさい、馬鹿！』

「良いだなんて、思えるはずが無いんだ」

『うるさい！』

「だって君は、優しすぎるから。人を……僕を憎む、自分自身を憎んでしまう程に」

『うるさいって、言ってるのよ！』

「君は分かっているはずだ……人の手は、戦ったただけにあるんじゃない！」

『ゴチャゴチャやってんじやねぞ、ガキ共が！』

新人の言葉はジョニー・メイフェンの怒鳴り声に遮られる。そしてベルキヤットの脚が、身動きできぬ美琴のストライクリザードを踏みつける。だが新人は、それに構わず言葉を継ぐ。

「君が手にしている物を見る！ 分かるだろう、僕の言いたいことが！ それこそが、君の優しさ……君の強さなんだ！ だから惑わされるな。心向くままに進め。それで何かが立ち塞がったときは、僕が君を助けるから！ 一人でいようだなんて、思っちゃ駄目なんだ。それで閉じ籠って、自分の中心さえ見失ってしまったら、昔の僕と同じなんだ。閉ざされた世界の中からじゃ、何も見えないんだ！」

一気に吐き出し、新人は独りで荒くなっていた息を整える。彼女は、沈黙している。ジョニー・メイフェンが何事か叫んでいるの

だけが、酷く遠くの場所で聞こえる。今はただ、自分自身の呼吸音しか聞こえない。何か、迷うかのように身じろぎする、倒れ踏みつけられた ストライクリザード しか、見えない。

『まあ何を騒ごうが teme はここで終わりだ、小僧。砲を棄てたつてことは……』

美琴の機体の頭部、シールド・アイ 影、と名付けられた、センサ保護用の樹脂プレートの一部が、砕けている。そこから見える内部機構、剥き出しの映像機器や対地・熱センサが、新人をフォローカスし そして、動く。

『 teme がそこから、俺様に手出しする手段は無いつてことだよなあっ！』

スカルヘッド の左腕が、倒れている ストライクリザード から、新人のほうへ向く。銃口の鈍い輝きに眉を顰め、新人は、両足のペダルを力の限り踏み込んだ。即ち、加速。向かう先は只一つ。真正面の、銃口目掛けて。

『馬鹿が！ 猛進するしか知らねえのか、クソガキッ！』

「そつだ！」

『なら、死ねよ！』

右足の先端が破壊されているせいで、スピードが出ない。ベルキヤット は、照準を確実に定めている。そして情けも容赦も無く、引き金が 絞られることは、無かった。

グレーに彩られた足の先端に、赤い腕が伸びている。それ即ち美琴の ストライクリザード の左腕が、スタン・トンファを突き付けていた。優しい武装とも称される、彼女の力を。

「そつだ、それでいいんだ！」

『クソ野郎が！』

新人の ストライクリザード が、出し得る限りのスピードで、スカルヘッド に正面から衝突する。世界がひっくり返ったかのような衝撃に耐え、力の限り、前へ。推進剤が尽きたことを知らせるアラートが鳴り、即座に、電気駆動のサブシステム、振動推進機

構を全開に。砕けた右脚から、空気を切り裂く不協和音が鳴り響く。スタン・トンファの攻撃は確かに命中したが、浅い。全身の駆動を完全に停止させるには程遠い。恐らく一瞬の硬直の後、すぐに復帰するだろう。

(だから……多少無理をしても、ここで決める！)

周囲を取り囲む卓状大地の一つに、纏れ合いながら突っ込む。轟音、そして粉塵と砕けた岩盤が瀑布のように雪崩れ落ちる下で、動かず、肘を直角に曲げて身体の前で水平に固定していた左腕を突き出し、ベルキャットの首筋を抑え付ける。

「これで終わりだ、ジョニー・メイフェン！」

「そんな腕で、この俺様をやれると思っただかよ！」

アサルト・ライフルを手放したベルキャットの左腕が、動かないこちらの左腕を、無理矢理に押し上げる。暗赤の塗装が剥げかけた装甲板が、掌の握力に潰されていく。やはり、電撃で得られたのは一瞬の硬直のみ。強風で煽られた鉄塔の下にいるかのような不気味な音が、新人の耳に届く。

「力勝負なら、こちらの方が上だ！」

「くそっ！」

既に限界値に達している動力変換効率のメータを睨み、こめかみを伝う汗の感触に苛立つ。もう何度目になるか分からない舌打ちをし、不調を訴える脚部対地センサを黙らせた時、西の空に、光の球が上がった。

照明弾 恐らくは、帝国側の撤退信号。ジェズイツトら三人の戦いは、既に勝利という形で決着が付いたのか、と新人は推測する。『撤退なんかするかよ……』光を浴びたベルキャットの腹中から、ジョニー・メイフェンの声がする。『俺様の辞書に、敗北の二文字はねえ！ スカルヘッド と恐れられ、帝国第三皇子に認められた、この俺様にはなあ！』

皇子、という単語に新人が反応する間も無く、左腕が力任せに押し退けられ、跳ねるように、ストライクリザードの全身が仰け

反る。緊急の姿勢制御プログラムが働き、どうにか踏み止まるも、右足の先が更に碎ける。左のスキーにも、ひび割れが走る。脚部の圧熱転換機構が、オーバーヒート寸前の警報を鳴らす。

そして、目の前には。

『壊れちまいな、ドラゴン！』

立ち上がったベルキャットが、右腕を振り上げる。その手には、破砕柱 ジョニー・メイフェンの象徴たる武装が、これ以上無いほど確かに把持されていた。

剥き出しの頭部目掛けて振り下ろされる棍棒、遅すぎる接近警報。歯噛みしながらも新人は、傷だらけの脚を動かし一步、前へと踏み込む。半分は直感で、半分は確信を持って。そして左肩の固定を部分解除し、押し上げる。

「ええい！」

『ちい、無駄な足掻きを！』

「無駄なんかじゃない！」

襲いくる衝撃に、思わず息が漏れる。踏み込んだために、頭部に直撃するはずだった破砕柱は、左腕に減り込んでいた。通常ならばそのまま吹き飛ばされても不思議ではないが、通電を一切止め、柔軟性を排除した左腕のSMCFは、鋼よりも硬い。ジョニー・メイフェン渾身の一撃をもってしても、破壊しきれぬ程に。

だがそれでも、左腕の軋む音は、不吉に響く。

「まだだ、まだ踏ん張ってくれ、ストライクリザード！」新人は叫ぶ。己が操る木偶へ向けてか、或いは己自身へ向けて。「お前はやれるはずだ、できるはずだ！ 無駄なんかじゃないって、証明して見せる！」

右腕を動かし、脇の下の武装ラックへ伸ばす。同時に、肩口から左腕が千切れ飛び、振り抜かれた棍棒が、大地を穿つ。

「これで……」最後に残った武装、対装甲炸裂ダガーを、右手の指の間に挟んで三本引き出す。「終わりだっ！」

どうすればいいのか、どうすれば勝てるのか。そんな疑問や観念

論は、どこかへ消えた。超至近距離、気付いた時には雄叫びを上げながら、新人は渾身のショート・フックを、スカルヘッドの左側頭部目掛けて叩き込んでいた。

衝撃に反応して超音波振動し、対象の装甲内部へと貫入した上でグリップに仕込まれた炸薬を炸裂させ、内部機構ごと対象を破壊するのがこの対装甲炸裂ダガーだ。本来は中々近距離戦において、投擲して使用するものだが、使い方次第では必殺の武器になり得る。

ベルキャット の腕が、ガードに動く。ストライクリザードの拳が、ボクシングの要領で組まれたそのガードに触れる。三本のうち、二本のダガーが阻まれ、拳の半分が多機能複層装甲に衝突して、指の跡を刻みながら砕ける。

それでも尚、新人は拳を伸ばす。幾度と無く見せつけられ、睨まれ、見下ろされた、あの四つ目へと。

「届け！」

薬指と小指を失った拳。人差し指と中指の間に辛うじて挟まれたダガーは、新人の叫びと共に、ベルキャット の左頬へと突き立つ。その衝撃に呼应し、ブレード部の振動機構が始動し、手を離すと同時に貫入を開始。手を引き、全身が悲鳴を上げる機体に鞭打つて後退すると同時に、グリップ部に仕込まれた成型炸薬が弾け、小爆発を起こした。

ジョニー・メイフェンの、悲鳴とも嬌声とも罵声とも付かぬ声が響く。コクピットに届かなかったことに、新人は歯噛みする。だが、これで頭部の主映像機、センサ群は全て黒焦げになり、機能していないはず。

「どうだ……」

声が止んだ。ベルキャット は倒れない。構えた棍棒が下ろされ、先端が地面に着く。同時に、ストライクリザード の右腕も、想定上限を越えた衝撃に内部骨格が破損し、力を失う。

ベルキャット の煤に塗れ、焼け爛れた頭部が、小刻みに動いている。左手首はダガーにより破壊され、胸の髑髏は白い塗装が殆

ど剥がれ落ちている。脚周りに目を遣ると、高速移動時用のブレード・ローラーが砕けている。

対する新人の ストライクリザード は、左腕が肩から捻じ切れ、両足スキー部は先端が喪失。右手のマニピュレータも、ナイフ一つ満足に握れない程の損傷を被っている。全身の装甲は弾痕だらけ。SMCF東の黒色が露出している箇所さえある。

最早互いに、戦闘不能。遠くに爆発音だけが聞こえる。この状態では何もできない。味方と合流するのが得策だが、後ろに全く身動きが取れない美琴の機体がある以上、退くわけには行かない。そう思つて、健在な頭部のカメラを黒煙を上げる ベルキャットの頭部にフォーカスした時、先刻までとは打って変わって落ち着いたジョニー・メイフェンの声が、砂に霞んだ大気を震わせた。

『名乗れよ、小僧』

唐突な要求に戸惑いながらも、新人は確信を持つて応える。

「共和国陸軍、第一六特殊機甲中隊…… スカーフ、シント・ミヤケ一等兵だ」

『……覚えた』短く言うと、ベルキャット がややぎこちない足取りで踵を返す。『次に会った時が、テメエの死ぬときだ』

「……どうかな」

副映像機だけでよくやる、と思いつつながら、新人は、立ち去つていく灰色の後姿を見詰める。未だ輝き続ける照明弾が目眩しい。

(勝った……?)

敵が撤退しようとしている。そして自分は生きて、その姿を見送っている。これを勝利と呼んでも良いのだろうか、現実感を半ば喪失しながら新人は思う。

『調子に乗るなよ。テメエの勝ちじゃねえ』こちらを向くこともせずにもっとも向いても意味はないのだが ジョニー・メイフェンは叫び、そして自身に言い聞かせるかのように呟く。『だが、俺様の勝ちでもねえ』

「そつだ。僕の負けじゃない」新人は言い、傾き始めた陽に目を細

める。

『俺様の負けでもねえんだよ』

ベルキヤット が跳躍し、よろめきながらも卓状大地の上に飛び乗り、こちらを向き直る。散弾の射程外、と新人は呟く。

『あばよ、 ストライクリザード』 煙を吹いている頭を、まるで笑っているかのように小刻みに震わせながら、ベルキヤットの外部スピーカが唸る。『また壊しにきてやるよ、一等兵!』

それだけ言い残し、再跳躍。視界の外へと、遠ざかっていく。紅に色づき始めた陽光に、スカルヘッド は、途方も無く小さい、取るに足らない一つの影へと姿を変えた。

「勝てなかった」

でも、負けなかった。

事実を噛み締めるほどに、心臓の鼓動が独りでに高鳴る。眼を閉じれば、たった今までの戦闘の光景が、古い映画のフィルムを見ているかのように、瞼の裏の暗闇に浮かび上がる。

不意に、通信音が鳴った。我に返り発信源を見ると 美琴からだ。慌てて、通信をオンに。彼女の姿が、スクリーンの一部に映し出される。

『新人……』

「良かった、怪我は無い？ 損傷酷いけど、爆発の危険は？ 脱出装置は生きてる？ いや、補助があれば機体は持ち帰れるか。今、大尉達に連絡を……」

何を言ったら良いのか分からず、早口でとにかく思い付いたことをまくし立てる。倒れた彼女の機体に慎重に歩み寄り、肩を貸そうとして、「噛み合わないな」と新人は呟いた。右脚が壊れた相手に肩を貸そうにも、こちらには左腕が無い。

とにかく右腕で立ち上がらせながら、さっき自分は彼女に何を言っただか、思い出そうとする。何か言わなければならぬと無我夢中で、色々なことを言ってしまった気がする。

また殴られるようなことを言っただけはないだろうか、それとも、

何かとんでもないことを　と、恥ずかしさ半分の冷や汗が体を伝った。

『新人』

「な、何？」

思わず上ずる声。それを聞いてか聞かずか、彼女は小声で、消え入りそうな声で言う。伏せられた目線は、左腕の先の操作卓辺りを彷徨っているのだろう、と新人は思う。

『ごめんね、新人』

「あ……うん」

違う、と思わず叫びそうになる。言いたいののは、曖昧な相槌なんかじゃないのに。

『ごめんね。あんたは、こんなにあたしのことを思ってくれてたのに、あたしは……』

「いいよ、言わなくて。分かるよ。全部、分かるから。やっと僕は君のことが分かった。だけど今まではそうじゃなかった。君が何を考えてるのか、君は何を思っているのか、君がどうしたいのか、まるで分かってなかったんだ。だから、美琴」新人は、一度深呼吸して、言った。「ごめん、だなんて、言わないで。謝るのは僕のほうだ。それに、君にそんな言葉は似合わない」

こちらを向いた美琴の目を真っ直ぐ見返し、新人は、どもりそうになるのを必死で堪えて言った。

「『うるさい』って怒鳴って僕を小突く君の方が……僕は、好きだな」

そしてすぐさま、前方ディスプレイに映る、空を流れる雲へと、視線を逸らす。馬鹿なことを言った、と新人は即座に後悔する。だが、嘘は無い。

後で殴られるかも知れないな、と思いながら、画面に映る彼女の姿を横目で見つめた。目線が一瞬、交叉する。

『……うっさい、馬鹿』

そう言って、明後日の方向を向いてしまった美琴の瞳は　今に

も涙が零れそうなほど、潤んでいた。差し込む陽の光が、漆黒の瞳孔を、宝石のように輝かせる。結ばれた唇、水滴を乗せた黒い睫毛。彼女の横顔に、新人は一時、呼吸を忘れた。

『でも、ありがとう』

彼女は笑う。ぎこちなく、不器用に、凍り付いた感情を融き解すように。だがその目は確かに、新人へ向けられている。今、彼女の瞳には、自分しか映っていない。その事実には、心臓が跳ねる。身体が熱くなる。

今なら、この砂漠に吹く熱風さえも心地よいかもしれない。紅色に染まり始めた空を見上げ、新人は、いつの間にか微笑んでいた自分に気付いた。

That's the end of #2," Arms, The
Bringer of Encounter".

#2 戦いをもたらすもの・5 (後書き)

簡易設定資料 ベルキャット

制式名称 MAI 03G

呼称 ベルキャット (Bell Cat)

生産形態 量産型

動力源 疑似核融合炉

全高 (頭頂高) 七・九メートル

重量 九・三トン

最大連続駆動時間 約七〇時間

最高速度 時速一四〇キロメートル

帝国の大型二足歩行兵器、機動装甲歩兵 (Mobility Armored Infantry) の主力量産モデル。圧倒的な火力と装甲をもって帝国の敵を殲滅するというコンセプトで開発された。

帝国が戦いの大義に掲げる世界国家政策において、帝国とは即ち、全てを統べる存在である。国家そのものが肥大化するにつれ、統治には皇帝という絶対者が必要となり、戦場にもまた、帝国を象徴する存在が要求された。立っているだけで『ここは帝国の主権内である』と主張できる兵器が、求められたのだ。

そんな中で登場したのがMAIと呼ばれる兵器群である。開発には皇族と、皇家に近い騎士階級の家門が深く関わり、戦士然としたこのベルキャット 以外にも、示威、象徴的なデザインを持つ機体も存在すると噂されている。

実戦投入当初は、戦士階級の一部等からは存在を疑問視する声もあったが、陸の如何なる地形にも対応する汎用性に加え、巨人であ

るが故の威圧感。まさに帝国の理念を体現した機体は共和国の兵士たちに恐怖の対象とされ、『力を持つ象徴』という当初のコンセプトは、鮮やかに達成された。

重厚な装甲と太い手足に見合わず、駆動系のSMCFの柔軟性の寄与により、敏捷性は高い。最高自走速度のカタログスペックは時速一四〇キロメートルとあり共和国のストライクリザードに劣るも、最終的にはパイロットの技量に依るところが大きい。人と同じように動く兵器に、限られた特徴である。

印象的な四つの眼のうち、二つは光学映像を、残り二つが各種センサーとなっている。また特筆すべき点として、推進に燃料の類を一切用いない。全身の駆動は、融合炉と熱電素子が生み出す電力のみによってなされる。走行は、脚による自走と踵に取り付けられたブレード・ローラーによって行われる。これはその名が示すとおり、超音波振動ブレードの技術が用いられた振動推進と、旧来の車輪駆動のハイブリッド方式である。

形式番号のMAIは、モビリティ・アーマード・インフアントリというこの兵器のカテゴリを、Gはグラウンド、即ち陸戦型であることを示す。

装甲は灰白、ダークグレー等のモノトーンで統一され、居並ぶ姿は正しく、帝国の尖兵に相応しい。

共和国でのコード・ネームはゴリアテ。だがベルキャットという本来の名称で呼称されることが、現場サイドの個人単位では増えつつある。

3 困惑をもたらすもの・1

誰かに敗北を喫したのはいつ以来のことだろう、と男は記憶を呼び起こそうとした。だが、傷の痛みが、考えることを妨げる。

彼は気の長い人間ではない。いつまでも考えるよりは身体を動かすことを好む。むしろ、身体が勝手に動いている。彼にとって、考えることは、力を振るえぬ者の逃げの手段であり、彼は自分自身がその力の振るえぬ者、即ち弱い存在だとは思っていない。

故に、彼は思考を止めた。今の自分は、ある敵を打ち倒すことができずに、機体到大損害を被って撤退を余儀なくされた。忌々しいこの事実だけが、揺るぐことの無い真実だった。

眼を閉じれば、あの光景がすぐに蘇る。どんなに弾丸を撃ち込んでも、棍棒で打ち据えても向かってきて、遂には自分に敗北者のレッテルを貼った、あの敵の姿が。

「ストライクリザード……！」

口に出せば出すほどに、憎しみが募る。できるなら今すぐにでも再び出撃し、かの機械蜥蜴を粉々に破壊したいと、男は願った。

だが、彼の身体も彼の機体も、それを許さない。ベルキャットは頭部を焼かれ、無数の傷跡を穿たれ、栄光の髑髏は黒く汚れている。噛み締めた唇から赤い血が伝い、全身の打撲傷と顔に負った火傷が痛んだ。

幸か不幸か命に別状は無く、今こうして、男 ジョニー・メイフェンはベッドに縛り付けられることも無く、満身創痍の愛機を見上げることが叶っている。左頬にガーゼを当てられ、身体のおちらこちらには、薬臭い湿布が貼られている。落ち窪んだ目には影が差していたが、その瞳は爛々と輝き、大きく裂けた唇を開いて高笑いを上げた彼の姿は、この世に生を受け直した骸骨のようにも見えた。近寄れば、黄泉の国へと引き摺り込まれそう。

だが、見れば誰もが恐れるだろうその背中に、声を投げかける人

影があつた。

「楽しいかい、ジョニー・メイフェン」

「ああ、アンタか」聴き覚えのある声に、彼は、人影の方を振り返った。「最高だよ。こんなに、心の底から壊したいと思う相手は、二人目だ」

「一人目は僕、かな？」

そう言つて笑つたのは、一人の少年だった。見た目は一五、六歳に見える。黒いスーツの上にブルグレーのロング・コート。足元は赤い紐のショート・ブーツ。襟元は、これも赤いタイで結ばれている。帝国の前線基地であるこの地の気候にも、彼の見かけの年齢にも見合っていない服装は、それでいて何故か、奇妙な統一感と安心感を見るものに与える。そしてそれは、ジョニー・メイフェンとて例外ではない。

少年が、肩に掛かるほどの銀色の髪を煩そうに払う。その姿にしばし目を凝らしていた彼は、赤い唇を再び大きく歪めて言った。

「勿論。俺様はアンタが大好きだからなあ」そう言つて、頭一つほども背丈の低い少年の顔を覗きこむ。「いつかアンタを壊せるなら俺はどんな奴だつて壊してやる。南の分からず屋みために俺の戦いを邪魔することもしない。ベルキャットを奪うこともしない。代わりに俺は、アンタに忠誠を誓う。そういう約束だろう？」

「ああ、そうだ。僕は君の力を認めている。君の存在は帝国に不可欠だと思つている。だから……」少年は、自身の後ろに控えた二人の男へ向け言った。「そんなに怖い顔をするなよ。ゼリア、エド」

一人は、白髪の混じつた壮年。もう一人は、まるで女性のように長く伸ばした金髪を、後ろに束ねた青年。いずれもスーツ姿だが、シャツの上のボタンは開け放たれている。彼らの両手を包むグローブが、M A I 操縦服に付属するものと同一規格であることに、ジョニーは気が付いた。

作業服姿の人々が忙しなく動き回る、前線基地の機動装甲歩兵格納庫という中で、少年を中心とした整つた身なりの三人は、明らか

に異様だった。だが、誰も咎めようとはしない。それどころか、彼らを遠巻きに　まるで、見えない壁が存在するかのように見詰めることしかない。

「ですが、余りに無礼が過ぎる！」男の一方、金髪の青年が言った。表面上の年齢は若く、二〇の半ばくらいに見える。「ジョニー・メイフェン。お前は、自分が誰に向かって話をしているか、分かっているのか？」

「分かってるさ。俺様のご主人様だろ？　そんでアンタは……」若者の方を指差し、ジョニー・メイフェンは言った。「エドゥワーズ・ライガス。近衛騎士団の名門の三男坊だ」

若者、エドゥワーズの眉がぴくり、と動く。自分の言葉が十分彼を苛立たせたことを認めると、ジョニー・メイフェンはくぐもった笑いを上げた。

「おつかねえなあ。そう構えるなよ。俺もアンタも、同じ帝国軍だろ？」

「貴様のような者と……！」

本来、近衛騎士団の任務は帝都の護衛にある。代々その要職を務め、モビリテイ・アーマード・インフアントリの開発を主導したのがライガス家だ。だが、エドゥワーズは本来いるべき西の灯火を離れ、この東方の辺境の地にいる。その理由が、喜ばしいものであるはずが無い。

家という名の温室を立ち去り、敢えて風雨に身を晒す。それは、見る人にとっては尊いものかもしれない。だが、戦士階級であるジョニーにとっては、世間知らずな騎士階級の道楽にしか見えない。まるで女のような容姿も相俟って、鬱陶しいという感情だけが、口を突いた。

「『三男坊』って言われてイラつく理由が、俺様には分からねえがな」

貴様、と気色ばむエドゥワーズに、凶星か、とジョニーはほくそ笑む。誰も生まれを選ぶことはできない。三男に生まれ、一族内の

権力闘争に敗れ、帝都内でのポストにありつくこともできずに、前線で戦うことを余儀なくされる。よくあるシナリオだ、と彼は思う。

「薄汚い戦士風情が、人を愚弄するのも大概にしてもらおうか。これ以上貴様がその涎に塗れた唇を開くのならば……」彼は左手のグローブに手を掛けた。「自分にも、考えがある」

「はははっ！ 決闘か？ 面白えじゃねえか！ だけどよ……」ジヨニーは両手を広げ、自分の身体を示した。「手負いの薄汚い戦士風情に手袋を投げるのが、騎士様の誇りとやらなのか？」

「何なら、今すぐここで、貴様を死体にしてやっても構わんが？ 本来なら貴様なぞ、形式に則ることにすら値しない」

狂気を秘めた瞳と、流麗な切れ長の瞳が睨みあう。地獄の底から這い出してきたかのような男と、絵画の中から脱け出してきたかのような青年。神と悪魔の遣い同士が睨み合っているかのような光景に終止符を打ったのは、少年の一言だった。

「そこまでだ、二人とも。目的を忘れるな、エド」
「ですが！」

「僕は彼を認めていると言った。同じことを何度も言わせるな、エドゥワーズ」
「ヴィン・ライガス」

ヴィン その個人が騎士階級の人間であることを示すために、ファーストネームに等号で付記されるミドルネームを殊更に強調され、エドゥワーズは不承不承といった体であるうと、黙る他なかった。自身がどんな場所にしようと騎士であり、決闘などと容易に口にするべきではない、という自覚を思い起こされたのは言うまでもないだろう。だが、それ以上に。

（あんな眼で見られたら、誰だって黙るさ）

エドゥワーズを睨んだ少年の瞳に、ジヨニーは、感じ方すら当の昔に忘れたはずの恐怖を思い起こされた。見るものを奈落の底へと引き摺り込む、海の底から空を仰いだかのような、天上の輝きを包み込んだ深い藍色。美しさとは、行き過ぎれば恐怖の対象となるの

か、とジョニーは自分の目線までもがその瞳に吸い込まれるのを感じた。

エドゥワーズの、女性的美しさとはまるで違う。生きているのか死んでいるのか、手を伸ばせば触れることができるのか、そこに本当に存在しているのか。そんな神に対する畏怖にも似た感情を、少年の美しさは呼び覚ます。例えそれが、あらゆる物を破壊することにしか生き甲斐を見出せぬ、ジョニー・メイフェンのような男であろうとも。

南 新仙台青葉区での戦闘は、ジョニーが独断で起こした物だと言っても過言ではない。戦争など遠い世界の出来事だと思っている人々に対する義憤にも似た怒り、作戦行動に縛られ、自由に戦うことが許されない軍という組織。まるで自身の肉体の延長のように動く、ベルキャット を持ちながら、自分の望みが何一つ叶わないことに積もり積もっていた彼のフラストレーションが爆発したのが、あの日の戦闘だった。

彼の望みは果たされた。唐突な戦闘に報道は興奮し、疾駆するジョニー・メイフェンの機体と スカルヘッド の名は瞬く間に広がり、共和国の兵士ならば一度はどこかで耳にしたことがあるほどの存在になった。そして彼の破壊衝動はかつて無いほどに満たされ、足元で泣く一人の少女の姿など眼に入らぬほどの歓喜と興奮が、彼の肢体を震わせた。土は土に、灰は灰に、塵は塵に。古より伝わる文句こそが真理であると、自らを包む粉塵と黒煙の中、彼は確信した。

だが、彼にとっての天よりもたらされた神託は、他の者にとっても同じく神の言葉では、あり得なかった。そして己の常識・尺度を以って理解し得ない物を差して、人は狂気と呼ぶ。

「ベルキャット に乗ることを許されず、激戦地から離され、東の辺境に左遷され……折角知った破壊の喜びを、二度と得られないんじゃないかねえかと震えていた俺様を、救ってくれたのは、アンタだった」

ジヨニー・メイフェンは、少年の瞳を見る　或いは、見入られる。現世の物とは思えぬそれに、囚われる。

「そうだよ。君は有能だ。人々は君の才を理解しようとしなない。君が力を発揮できる術を知らない。だが僕は、知っている」少年は、紅色に染まる口元を、僅かに綻ばせた。「だから、教えてくれないか？」

「何をだ？」

「君と互角以上の戦いをした敵のことを」

「いいぜ」ジヨニーは即答し、不気味な笑みを浮かべた。「ただし、条件がある」

「条件？」

問い返す少年に、彼は傷だらけになった自身の愛機を、顎で示して言った。

「新しい機体を、くれよ。この俺様に相応しい、スペシャルな代物をよ」

「そんなことか……。それなら既に、組み立てに入る所だよ。少しテストが要るからもうしばらく時間が掛かるが……。見れば、きつと気に入る。君にこそ相応しい機体に仕上がることは、この僕が保障しよう」

「流石アンタだ。分かってる」

「ああ。話してくれるかい？」

柔らかい、埋もれてしまいそうな少年の笑顔に、ジヨニー・メイフェンは一瞬我を忘れ　そして大きく頷いた。

「勿論だよ……帝国第三皇子、ライドロイ・エスカータ殿」

「世の中には絶対に自分と波長が合わない、どう考えてもどう妥協しても気に食わない相手つてのがあるものよね。そりゃ少し考えてみれば当然のことなんであって……。自分と関わり合いのある人間を好きと嫌いに二分したら、あんたはどっちの方が多くなる？」

「うーん、好きな方が多いかな」と、新人は応える。

「それはあんたが人に興味を持たないからよ」美琴が、新人の目を覗き込むように言った。「寛大でもできた人間でも何でも無い。普通、誰かが誰かを知れば、その人間が許せるようになって、好きになる。だけどあんたはそうじゃない。表層だけを知って嫌うことすらできないほど、あんたは他人に触れようとしない。嫌いになるのが嫌なのか、そもそも知りたいという、人間の当然の欲求って奴があんたの中から欠如してるのかどうかは、知らないし知りたくも無いけど」

「ふうん……僕は、そうなのか。それで、君は？」

「え？」

「好きな人と嫌いな人、どちらが多い？」

「そうね、あたしは……」彼女は工具を置いて腕を組む。「嫌いな方が多い。嫌いになってしまった人の数が、余りにも多すぎるのよ。自分でも、把握しきれないくらいにね。気が短いから、誰かをちゃんと見ることが苦手なの」

「ちゃんと見る？」

「知る、ってことかな。それをしないから、表の感情で人を嫌う。人が何考えてるのかを見ようとしてもしないで、行動だけで判断しちゃう」

「うーん、何ていうか、それって凄く男性的なような気がするな」

美琴は眉を顰め、手に持ったスパナを新人へ向けた。

「死んどく？」

表情は笑顔だ。だが、顔の筋肉が痙攣している。新人は苦笑いを返し、目線を泳がせた。

「まあ、言ってることは分からないでもないわよ。相手の行動を見て人間を判断し、自分の行動を否定されると怒るのが、男って生き物だって、ヒールレイスさんが言ってた。女は相手の感情を見て、自分の感情を否定されると怒る」

「……つまり、どういうこと？」

彼女は呆れたように一つ息を吐き、こめかみに指を当てて少しの

間、何かを考え、そしておもむろに口を開いた。

「あの時……何であたしを助けにきた。あたしには助けなんか要らなかつた。大人しく味方機の後方に下がっておけば、機体にこんな損傷を負うことも無かつた。馬鹿を通り越して、愚かね。別にあんたみたいなルーキーが、あのジョニー・メイフェンと、無理して戦う必然はどこにも無かつた」

「それは……！」

気色ばむ新人を制し、彼女はスパナを掌の上で一回転させた。

「ほら、怒つた」

「あ、成程」

遊ばれた、と嘆息する新人の前で、得意顔の美琴の指の隙間から、捉え損ねたスパナが落ちる。緩やかな回転が掛かつたまま落下し、彼女の足の先へと衝突。

「痛っ！」

「そんなに痛くも無いでしょ。靴履いてるし」

「あたしにとっては痛いの。んで今のそれ、感情の否定。あんた、女の子に嫌われるわよ」

「あ、成程」

そんなもんなのかな、と新人は溜め息を吐く。感情を否定することと、行動を否定すること。理性的に、世間一般で言う大人の考え方をすれば、感情の否定に苛立つのは独り善がりに過ぎず、たとえ感情が是としなくとも、行動自体は肯定すべきだ、と新人は考える。

（嫌いな奴でも仕事はできるから評価する……？ 比喻になつてるのかな、これ）

そう考えてみると、女性という存在が酷く子供染みたものに見える。精神が未成熟で、身勝手に、自己中心な人間。だが、それは、自分自身が男だからなのだろう、と新人は自分を納得させた。きつと女性の眼から見れば、男性という存在は、馬鹿げた、大人になれないものと映るのだろう。

「まあ、そんなことはどうでもいいのよ。心の底からどうでもいい。今は……」美琴は、目の前に積み上がった工具　スパナあり、レンチあり、ドライバーあり　を見遣った。「これを片付けないと」「そうだね……」

新人はまた、溜め息を吐く。一息ごとに、肩に、金属の重りを乗せられているような怠さが加わっていくような気がして、思わず全身が頂垂れた。

前回の出撃の結果、新人と美琴の　ストライクリザード　は、機体骨格部にまで及ぶ、大破寸前の状態に至るほどの損傷を受けた。その理由は、偏に命令無視だ。積極的な交戦は避ける、という指示を受けていたのにも関わらず、美琴は自失の余り、新人はそんな彼女を制止せず、結果として、隊を危険に晒し自機に重篤な損害を与えた。

新人とて、戦時下の簡易なものとはいえ訓練を受けてきている身。軍とはどういう組織か、理解しているつもりだ。それなりの罰があることは、覚悟した上での行動であった　　実際のところ、そんなことを考えている余裕が無かっただけの話なのだが。

兎にも角にも、軍の最新鋭兵器を私情で使用したのだ。営倉入りや始末書では済まないだろう、と肝を括ってジェズイットの執務室へ出向いた新人と美琴が命じられたのが、この気の遠くなるような作業だった。

「工兵の皆さん愛用の整備器具の整備……」凝った肩を回し解しながら、新人は呟く。

目の前には、堆く積みまれた整備用具の山がある。普段は専用のボックスに、最も効率の良い配列で整理されているそれらは今、一つの巨大な金属の塊となって、磨かれる時を待っている。手持ちの物から、装甲の補修時に、飛沫から目を守るために用いる保護グラス

果ては超音波振動ブレード研磨用の大型グラインダーまである。これらを片っ端から磨き上げる、というのが彼らに科せられた作業だった。整備の苦労を、少しは身をもって味わえ、という意味な

のだろうか、と小首をかしげた新人に、美琴が言った。

「並びにゴチャゴチャの格納庫の整理ね。まあ確かに、装甲板の使い物にならなくなったのとか、壊れた機体の指関節とか、あっちこっちに放置されてる現状は、あたしも如何なものかと思うけど」

彼女の言う通り、格納区画は整然と言うには程遠い。雑然、と
いう言葉を体現したかのような空間が広がっている。常に改造を加え続けるのが、ストライクリザードであり、そのためのパーツはヒューマノイド・アサルト・ランドファイターの普及率がさして高くない状況を考えれば、一片までもが貴重品だ、ということとは理解できるのだが。

「あれかな。僕の機体のハンガーの、丁度真ん前に黒焦げの残骸が放置してあるのは、やっぱり当て付けなのかな。この間発進させる
とき、躓きかけたんだけど」

Scarf、新人に割り当てられたハンガーは、格納区画の中でも一番隅に当たる。そして目の前には、新人自身が初回出撃で敵に撃破された ストライクリザード の残骸が、これ見よがしに放置されていた。使えるパーツは悉く抜き取られ、最早文字通りの骸と化している。

「そいつぁ違うぜ、坊主」と、すぐ側で作業をしていた整備兵から答えが返ってくる。「お前さんへの戒めになれば、という俺たち整備組一同からの熱いメッセージだぜ？ ありがたく受け取れよ」

「はあ、そうなんですか」
「まあ邪魔だからそこに放り出してるだけなんだけどな！ 捨てるのも勿体無いだろ？」 親指を立て、彼は豪快に笑う。「お前が一回でも無傷で帰ってきたら退かしてやるよ。仕事が減って暇ができるからな！」

「無傷で、か……」 笑い声を残し、早速次の作業場へと立ち去っていく彼の背中を見送りながら、新人は呟く。「なるべく早くが良いな」

「ちなみに、統計データ上だと、一〇パーセントに満たないわよ」

工具磨きの手は止めずに、美琴が言った。

「何が？」

「HALが出撃して、戦闘して、無傷で帰ってくる確率」

「へえ……」

六〇機で構成される、一特殊機甲中隊が全機出撃して、一機いるかいないか。意外に低いのだな、と新人は思う。先日の戦闘など、松下もシュミットも、そしてジェズイットも、機体に傷一つ付けずに帰還した。砲戦、遠距離支援を主とするシュミットはともかく、近接格闘戦仕様の松下や、あんな長物 専用のラックで壁に固定された、四・三メートル超音波振動刀を視界の端に捉えつつを担いだジェズイットまで、只の一度の被弾も無しに戦闘を勝利へ導いた。

（それだけ、彼らの技量が凄まじい、ってことなのかな？）

確率で見れば、一割未満の偉業を、こうも容易く達成してみせる人々。戦慄にも似た震えが自分の奥底から湧き上がるのを、新人は感じた。

「こら、手を休めるな」

「痛い」

レンチで頭を小突かれ、新人は手元の作業に戻る。磨き終わったものから、整備士の七つ道具入れとも呼ばれるケース内の定位置へと放り込む。蓋の部分に、『使ったら戻せ！ 借りたら返せ！』という文字が、黄色地に黒で書かれている。

並んだケースを見て、ふと浮かんだ疑問を、新人は口にした。

「ねえ美琴、一六特機隊の、HAL整備担当の人って、何人位か覚えてる？」

「えーっと……何人だったっけ。細かい数字は忘れちゃった」

「じゃあ、と応じながら、新人はボード状の端末を取り出し、計算を始めた。

「理想とされるのが、HAL一体に付き六〇七人。一六特機隊の場合は慢性的に不足してるから、五人で計算しよう。五掛ける七で、

三五人。それに加えて小火器専門担当の人が……」

「小火器って言っても、殆ど大砲みたいなものだけだね」

「三人だっけ？」新人は美琴の冗談を無視して尋ねる。

「四人。制式のH・Sのなら良いけど、ベツカード社製には現場が対応しきれないから、東の本社から出向してきてる人がいるはずよ。一応、扱いは軍属だったと思ったけど」

H・Sとは、ヘーゲル・シュミット社の略称だ。主にHAL用の銃火器を製造・販売するメーカーで、一社だけで国内シェアの実に四割を占める。手持ち火器として最も一般に用いられる四三ミリアサルト・ライフルは、このH・S社の主力商品の一つである。戦時特需の勢いに乗り、競合他社の買収にも乗り出している、とも噂されているが、真偽の程は定かではない。

その競合他社の最たるものが、ベツカード社だ。HAL自体が産まれて間もない兵器である関係上、火器の規格も未だ統一の過程上にあり、ベツカード社のアサルト・ライフルが三九ミリという規格を採用していることから、それは見て取れる。

企業体力も資本もH・S社の方が一枚上手だが、ベツカード社の火器を好んで用いて離さない物好きも中にはいる。ヒールレイス・リヴェツサ、そして巴澄美琴は、その好例だ。彼女ら曰く、口径が小さくとも発射速度や集弾性に優れているとか、乱暴な扱いにも耐える、とか。

「じゃあ四足して、三九。後はブレード、格闘兵装担当の人が三人、で合ってるよね？」

「そうね、ジエズイット大尉自身を、数に数えないのなら」

「ああ、そうか……」

先日の戦闘で自分を救った一振りを、新人は思い出す。あの四・三三メートル超音波振動刀は、北東部に本社のある企業、クリサンセラム鋼業から提供された、試作兵器なのだという。

一般に、三メートルを越えると超音波振動ブレードの製造は極端に困難になると言われている。そこで、現代の技術の限界点を測る

ために作られたのが、あの刀だ。ジェズイットの古い友人が会社の役員を務めているために、やや灰色な手続きを経て、この一六特機隊へやってきたらしい　と、新人は耳にしていた。

「あの刀、刀の整備は自分でやってるもんね」

試作兵器だからなのか、他に理由があるのか、忙しい合間を縫っては、あの男は刀に研磨機を当て、切れ味を確かめている。今は、左腕に傷を持つ彼の姿は見えない。

「どうも、謎の多い人だな、と新人は思う。」

「どうということなんだろう」

「何が？」

問い返されて初めて、考えが口に出てしまったことに気付く。そして、隠す必要も無かった、と思い直して新人は言った。

「あの刀、埃を被っていたのを引っ張り出してきた、って言った。つまり、あの人が、何があったのかは分からないけど、HALを降ろされる前から、あの武器を使ってたってことだ。でもそれって、おかしくない？」

「おかしいって、何が」

「時間だよ。　ストライクリザード　の初実戦投入は、公式には三ヶ月少し前……あの新仙台市街を強襲された時だ。僕の初戦の件もあるから、公式発表が全てだとは思えないけど、僕がああ壊滅した輸送中隊に配属された時、大尉は少なくとも半年はあの場での任務をこなしていたはずだ」確証は無いが、あの場にあった空気は、一ヶ月やそこらで生まれる軟な連帯感ではなかった。「そうすると、まともに考えて、大尉が以前乗っていたのは、同じHALでも ストライクリザード　じゃなく、テストタイプの　リザード　だ。そうだ、確か、開発に関わっていたって、言ってた……」

「んー、なんかあたしには話が見えないんだけど」

「つまり、過去に乗っていた機体で、あんな刀を扱える筈が無いんだ。制式量産されたHAL M01でさえ、あれだけの改造を施せなければ使えない刀を、試験型の機体が振り回せるわけがない。大

尉の機体も、元はつい最近ロールアウトした、M01B、後期生産型なんだよ?」

新人が今乗っている物、ジェズイット機のベースになった物、そして焦げた残骸となった物の三機が、一六特機隊では後期生産型、と呼ばれる仕様だ。基本スペックの上昇と、コクピットの居住性の向上が主な変更点として挙げられる。

「普通に、ストライクリザードと一緒に持ってきたんじゃないの? 埃被ったてのは、只の比喻でさ」

「それは絶対に無いよ」新人は断言した。「あの ストライクリザード は、僕の機体と一緒にトレーラーに乗っていた物だ。僕の初めての戦闘の時にね。あの場に残っていた物資の中に、刀も、それらしい包みも無かった」

「気になるんなら、本人に訊けば?」素っ気無い、いつもの調子で美琴は言った。「どうでもいいけど、作業、全然進んでないんだけど」

「そうだね。日が暮れちゃうよ?」不意に、頭上から声が聞こえた。「あれ、シュミット兵長。どうしたんですか?」

頭の後ろで手を組み、口笛を吹きながら現れたのはエール・シュミット兵長だった。彼には待機も出撃の命令も下っていないはずなのに、なぜこのHAL格納庫にいるのだろう、と新人が訝しんだ矢先、彼が口を開いた。

「いや、ちよつと制御システムにバグが出ちゃってさ。火器の積み過ぎで、管制・切り替えがどうも上手く行かなくなったのだよ。ほら、出撃のたびに色々火砲を変えてるからさ。前回までのデータと今のとを、ミスって処理してるみたい」

「でも、全く動かないわけではないんですよね?」美琴が、器具手入れの手を止めずに言った。「確か、発令所の表示はイエローでしたけど」

「いやー、できれば動かしたくないんだよね……。ちよつと、それ以外にも色々弄ってるから」

あれ以上どこを改造するのだろう、と新人は考える。背中に超大口径の迫撃砲が二門、両肩には多連装ロケット、そして機体の各部に内蔵式の機関砲まで搭載しているのが、彼の重砲撃戦仕様機、通称 シュミット・スペシャル である。ストライクリザードの最大積載重量を知りたければ、彼の機体を見ると言われるほど、その改造具合は極端だ。

「それ以外って、何ですか？」

小首を傾げながら尋ねた新人に、シュミットは即答した。

「塗装」

「塗装ですか？」

「うん、塗装。ダークレッドが悪いとは言わないけど、オリジナリティって奴が欲しくてさ」

「どんな色にするんです？」

「それは出来上がってからの楽しみ。いやー、基本的に ストライクリザード の改修費は経費だけど、塗料は自腹なんだよね。ああ、金が無い金が無い」

確かに、勝手気ままに様々な色に塗り替えられては、部隊としての統一性、ひいては軍の威厳にも関わってくる。自腹でなら容認、というのが釈然としないが、そうまでして塗り替えようとする人間はまずいないためにルールが作られていないのだろう、と考えれば納得がいく。

「砂漠迷彩」不意に、美琴が手元に向けていた顔を上げて言った。

「ですよね、兵長」

「え、何で分かった？ テレパシーとか、超能力とか？」

ぴくり、と震え、うろたえて言うシュミットに、美琴は一点を指差して示した。シュミット・スペシャル の足元だ。新人も、釣られて目を向ける。先程から全く減っていない工具の山が目に入ったが、見なかったことにした。

「……凄い量だ」

そこには、まるで工務店の一角を丸ごと切り取ってきたかのよう

なペンキの山が築かれていた。整然と積み重ねられた様は、著名人のパーティで見かけるシャンパン・タワーを髣髴とさせる。尤もこちらには味わうことが出来ない。むしろ、飯の種を削って生み出されたものなのだ。

ラベルや、はみ出たペンキから色が分かる。グレー、イエロー、オレンジ。上手く混合すれば、成程、見事な砂漠迷彩が出来上がりそうだ。

「でも、この辺の地形だったら、かえって目立つような気がするんですけど」新人は、出撃するたびに目にする、ピル・ソアテ郊外の荒涼とした大地を思い出す。「確かに砂漠、って呼ばれてはいますけど、この辺は土壌に鉄分多いから真っ赤じゃないですか。かなりごつごつした岩場もありますし。そりゃ、もうちょい北西の、遺跡群のあたりまで行けば、それこそ東の人たちが思い浮かべるような砂漠に近いですから、こういう砂漠迷彩も効果ありそうですね。」
寧ろ元のダークレッドの方が……」

「いいじゃないの。塗装はロマンだよ。自分仕様の象徴ってやつさ」
「趣味と実益を兼ねたわけでは……？」

「最初は兼ねてたつもりなんだけど、いつの間にか趣味が圧勝してた」

なぜか得意げに笑って言うシュミットに、新人は嘆息する。そして 彼が戦場に相応しくないとこの確信が、一層強くなる。彼は、なぜ軍人であることを選んだのか。正義感でも復讐心でも、まして徴兵でもないのに、何が彼をして銃を取らしめたのか。

(銃……?)

銃、という単語を思い浮かべたとき、何かが引つかかった。すぐそこにあるのに掴めない、目隠しをされているような感覚が湧き上がる。目の前の青年と、銃。エール・シュミットと。

「あ」

思わず声が出た。答えは極めて簡単だ。今まで気付かなかったことが驚きに値するほどに。

HAL用銃火器メーカー、H・S、ヘーゲル・シュミット社だ。

偶然に過ぎないのだろうが、シュミット、という名が共通している。

「ひょっとして、兵長、H・Sに縁のある人ですか？」

冗談めかして新人は言う。「まさか、たまたまだよ」と言っ
てこちらの肩を叩くか、「その通り……よく分かったな」とおどけて見
せるか。彼ならば、まずこのどちらかの反応が返ってくるだろう。

だが、彼の答えはまるで違った。

「関係ねえよ。俺は、あんな会社と何の繋がりも無い。H・Sなん
ざ、どうでもいい」

聞いたことも無いほど冷たい、触れれば切れそうな声でシュミッ
トは言った。だから触るな、それ以上追求するなと、彼の茶色い瞳
が語っている。まるでロック・オンされたかのような緊張感が新人
の中を突き抜け、冷汗が背中を伝った。

「ああ、そういえばここに来た用事を忘れてたよ。大尉から伝言。
作業終わったら報告に来てさ」

そう言って笑い、立ち去って行く彼の姿は、既にいつもと同じ、
エール・シュミットだった。

#3 困惑をもたらすもの・2

執務室、という呼び方は些か大仰なのではないか。新人がこの部屋に立ち入ったとき、最初に抱いた感想が、それだった。

部屋の中にあるもので家具と呼べるのは、棚が一つとスチール製のデスク、そしてジエズイットが座る、これも味気の無い、金属が剥き出しになった椅子のみ。キャスターすら付いていない。

余りの殺風景に暫し動くことを忘れた新人と美琴を手招きしながら、ジエズイットは立ち上がる。最後にワックスをかけたのがいつなのか、少なくともここ数年ではないことが一目で分かる床に椅子を引き摺る音が、狭い室内に大きく響いた。

「ご苦労。疲れているだろうが……ご覧の通り、座るところは無い。勘弁してくれ」

デスクの上には散乱する書類と、照明スタンド。それにコンピュータのディスプレイがある。技術の進歩とは素晴らしいな、と新人は思う。全ての機能を厚さ1センチ程のボードに集約したために、この狭い部屋の中でも十二分に利用できるのだから。そして最先端のデジタル機器が稼動しているすぐ隣で、極めて前時代的な紙媒体が幅を利かせている光景が、新人の眼にはなぜか滑稽に写った。

ジエズイットが腰を摩りながら椅子に座りなおす。頭上で回る換気扇の音が、妙に気に障る。デスクの上のペン立てには、不揃いな筆記具が無造作に押し込まれている。

「さて、先日のお前たちの失態についてだが……」彼は画面を軽く叩きながら言った。「ルーキー、特に若い、センスのある者にしばしば見られる錯乱症状、ということにしておいた。自他の境界線が分からなくなるといふ、あれだ。お前たちも、聞いたことくらいはあるだろう」

美琴と顔を見合わせ、そして同時に頷く。先日の出撃前に、松下が懸念として挙げていたことだ。

自分のもう一つの手足のように動く ストライクリザード。だが、あくまで『ように』であって、現実の手足は自分の目の前にある。若く、経験の浅い操縦兵は、時として 引っ切り無しに装甲を叩く弾丸の音が与える、戦場の精神的ストレスも相俟って 自分の肉体を認識できなくなる、自失的パニック症状に陥ることが報告されているのだという。

「自分を知ることができない、自身が確立していないこと、が若さの定義なのかも知れんな」

ジェズイットは、マグカップに入っていた飲み物を啜った。新人のいるところまで香りは届かない。冷たい物なのか、暖かった物が冷めたのか。十中八九、後者だろう、と山積みになった書類の束を横目で見遣りながら、新人はぼんやりと思った。

「それはともかく」咳払いをし、彼は続ける。「幾ら特殊機甲中隊がその名の通り『特殊』だとしても、今回のような件が続くと、組織として成り立たん。整備などは、命令違反の馬鹿が作った傷を、何で自分達が整備しなければならぬ、と不満に思うことだろう。もっとも今はまだ、やんちゃな新人程度の認識で済んでいるが」

先程の整備兵の態度を思い出す。確かに、不満よりも、まだルキーナなのだから、という一種の諦めの方が勝っているように思える。そこでだ、と区切りを入れ、彼は新人と美琴へ交互に視線を向けた。

「お前たちに、日頃の整備への礼を思い出させんとあんなことをやらせてみたのだが……実はもう一つ目的があつてな」

「目的つて、何ですか？」

間髪入れずに美琴が言う。勿体付けるな、早く言え、と彼女の瞳は主張している。

(らしいと言えば、美琴らしいんだけど)

気の短い彼女に配慮したのか、それとも新人の小さな溜め息を聞きつけたのか、ジェズイットはそれ以上勿体振ることもなく言った。「報道が来る。フリーの、ジャーナリストだそうだ。何だつてわざ

わざこんな何も無い場所に来るのか、そもそもどうやって頭の固い上の許可を取ったのかは、俺の知るところでは無い、が……」

確かに、戦場カメラマンの向かう先は、砲撃に潰された家屋や傷ついた兵士の多くいる激戦区。今ならば、北か南が正しいような印象を受ける。先日の新仙台での戦場に、報道が群がったという事実が、それを証明している。

「何でこんなところ撮るんでしょう。北の鉱床地区の攻防でも記事にした方が、値が付きそうな気がしますけど」

自分ならば、時折起こる戦闘以外は呑気なものなピル・ソアテの記事なんかよりも、そちらの方を読んでみたい、と新人は思った。

「疑問は尤もだが、とにかくそういう命令が来たのは事実だ。そして命令に従うのが、軍人の仕事だ。その意味まで考えてたら、日々生きることで一杯の頭がパンクする。だが……」一呼吸置こうとして、あからさまに美琴が苛立ったのに気付いたのか、ジェズイットはやや慌てて言葉を継いだ。「自分を知らないのが若さなら、そのために悩むことができるのも、また若さという物だ。そして悩むための材料なら、幾らでもこの俺が提供しよう。ヒントは、取材内容だ」

結局大げさでわざとらしい言い方になるのだな、と新人は隣の美琴を眼で宥めながら、ジェズイットの謎掛けを解こうと、腕を組んだ。

取材内容が違う、つまり、今さっき想像したような、戦場の痛みや破壊をカメラに収めることが目的ではない、ということだろう。

他に無くて、ここにある物。兵士達の呑気な漫才と、スクランブルが減多に掛からない ストライクリザード 位だろうか。

「兵隊さん達の愉快的日常と、戦闘が減多に無いおかげでいつも新品同様の ストライクリザード 位しか、あたしは思いつかないです」と、新人の思考を代弁したかのように、美琴が言った。

「それだ。 ストライクリザード 。ジャーナリスト様の取材対象は、我らが人型強襲陸上戦闘機なのさ。軍にとっては兵器のPR、

大衆にとっては謎の多い兵器の全貌が明らかになる。新聞は売れる。国威の掲揚にも繋がる。何とも魅惑に満ちた企画だとは思われないかね、二人とも」

「そうですね……」新人は、曖昧に返事をする。

自分が徴兵を受けていなかったら、どうだろう。戦場を自在に駆ける巨大人型ロボット。シャープなフォルムに生きている人間のようになしやかな駆動。そこにどんな技術が用いられているのか、従来兵器と全く異なるHALは、どういう戦いをするのか。

（興味、あるな）

一時立場を忘れ、新人は思う。そして目の前で顔を顰めるジェズイットの姿に、意識を引き戻された。

「下手をすれば、この基地の写真が全国紙に載るかもしれない。少しは見栄えを良くしようと思ったのだよ。少なくとも、油塗れの工具の山や、ジャンクパーツに頭を突っ込んで漁り回る操縦兵の姿、勝手に規格外の色に塗られた最新兵器の写真など、撮られるわけにはいかない。共和国の恥晒しだ」

（恥晒しだそうですよ、シュミット兵長……）

今頃嬉々として愛機を砂漠迷彩に塗り替えているであろう彼の姿が眼に浮かび、新人は無駄になることが約束された彼の努力と、更に寒くなるであろう彼の懐を思っ溜め息を吐いた。そして同時に一瞬だけ見せた彼の冷たい視線を思い出す。

あの視線の理由を、ここで尋ねてみようか、とも思い付く。シュミットだけじゃない、ジェズイット自身の今にも、沸々と、瓶の底から立ち上る泡のように、様々な疑問が現れては消える。なぜ自身を人間の屑と呼んだのか。特殊兵器のテストまで任される人間が、なぜ ストライクリザード から離されあんな輸送中隊の指揮に甘んじていたのか。

知るには、彼の過去を暴かなければならない。そう思うとまた、まるで別人のように態度を変えた、シュミットの姿を思い出す。触れていいのか、訊いても許されるのか。

躊躇う新人が決断を下すよりも、ジェズイットが再び口を開く方が先だった。

「そこで、だ。上からの指令によれば、記者様相手に我々一六特機隊の人間が、ストライクリザードのプレゼンテーションを行えとある。更に、余裕があれば操縦席内に同乗させる、とも」

「乗せるんですか？ 民間人を？」

そう言った美琴は、今にも場所と階級を忘れ、「ふざけるな」と叫びだしそうな様子だった。だが、基地を一步出ればそこはもう戦場であることは間違いない。民間人を乗せる、という指令が下ること自体が、馬鹿げているのは事実だ。

「ああ、乗せる。流石に内部の撮影はご遠慮頂くが」

「具体的には、どうなるんですか？」新人は尋ねる。

「戦闘時のスペックなどよりも、用いられている先端技術の数々を、大衆に知らしめた方が受けが良いだろう。ライフルの初速度や破壊力よりも、ロボットが如何にして大地を駆けるのか、の方が、戦場から遠い人々には受ける」ジェズイットは、机の上のディスプレイを叩く。「コイツの利点、特徴くらいは説明できるようにしておく。何を隠そうこのパネル、ストライクリザードの操縦席にある物と同一規格だ」

「なっておけ？」

「ああ、言っていないかったか。記者様の相手は、お前の任務だ」

一瞬膝の力が抜けかけたのを慌てて取り繕い、新人は問い返した。「僕、ですか？」

「ああ。懲罰の一環だと思え。それに、自分が命を預けている物を知るのは、必要なことだ」

「整備の方とか、メカニックに詳しい方ではなく？」

「ヒロイックな少年兵士の方が、大衆受けが良いだろう」

完全に貧乏くじだ、と新人は頂垂れる。適任は他に幾らでもいるだろうに。例えば。

(松下伍長とか、何聞かれても無表情ですらすら答えそつだ)

とにかく、自分には向いていない。隣を見ると、美琴がほくそ笑んでいる。曰く、ざまあみろ、と。

「ああミスミ、勿論お前も一緒にだ」

「うげっ」と、彼女の口から無防備な声が漏れた。

「うげとはなんだ、うげ、とは」

ジェズイットは声を上げて笑う。彼女が一緒なら、あながち貧乏くじでも無いのかも知れない、と新人は、自分の頬が僅かに緩むのを感じた。

とはいえ、仮にも最新兵器、言うならば歩く軍事機密である ストライクリザード の中に、口に戸を立てる気すらない民間人を入れることが、果たして、広報、戦意高揚という利益と釣り合うのだろうか。

そんな新人の疑問を感じ取ったのか、ジェズイットは小さく笑って言った。その表情に、新人は何故か 反射的に、言いよの無い嫌悪感を覚えた。たった今までの、少しだけ明るい空気が、あつという間に掻き消されるのを、新人の全身の皮膚が感じ取る。『そういうこと』には敏感な自分に、改めて嫌気が差した。

「ああ……機密流出の危険なら、そこまで敏感になる必要は無い。アレに関して言えば、機密などあってないような物だからな」

見たことがある。この表情を知っている、と新人は思う。

「どういうことですか？」美琴が言う。

「過去に帝国に強奪されているんだよ。HAL MO1のテストタイプに当たる、PO1 リザード がな」

嫌な感じが増していく。これ以上訊いてはいけないと、新人の中で、何かが警告している。だが何故だ。どうしてこうも、他愛も無い話の一部にしか見えない会話と、ありふれた表情に、顔を背けたくなるような違和感が付きまとうのか。

もう一度、ジェズイットの表情を、狼のそれに似た琥珀色の瞳を見た新人は、一瞬でその理由を悟った。

(あの笑いだ……)

自らを人間の屑と評したときの、自身を痛めつける被虐趣味な笑い。いつもの、芝居が掛かった傲岸不遜な態度とは全く違う、影の落ちた、殻の中に閉じ籠った表情だ。影の名は自己嫌悪であり、殻の名は即ち過去。

立ち入ってはならない、と新人の本能が命じる。シュミットの殻が触れるものを傷つけるのなら、目の前の男のそれは、彼自身の中へと突き刺さり、傷つける。だが新人の思いをよそに、美琴は早口に言った。

「それじゃ、殆ど内部構造はバレちゃってるってことですか？ 一体どうして、そんなことが……」

「俺の失態だよ」

「え？」

問い返す美琴の言葉が、酷く遠くに聞こえる。

立ち入ってはならない場所を覗き見られたなら、普通の人間は隠そうとする。凍て付いた言葉で新人を遠ざけた、シュミットのように。だがこの男は違う。覗かれたのなら、曝け出す。そして自分の無価値さを、相手に認めさせようとする。

「俺がテストを担当していた部隊で、裏切り行為を働いた男がいた。そしてそいつの手によって、リザードは帝国にもたらされた」
カーバネル・ジェズイットは、服の袖を捲って腕の傷跡を露にした。
「この傷は、その時に付けられた物だ」

ふと、何かの気配を感じ、その男は窓の向こうに見える東の大地へ視線を向けた。煤けた窓に切り取られた風景は、大地の赤と、空のくすんだ青に二分されている。見れば嫌でも、ここが白亜と黄金の都からは遠く離れた、帝国の最果てであることを認識させられる。基地内に居ついていらしい野良犬が一匹、彼の視線を受け止め、そしてすぐにどこかへと走り去っていく。毛並みも悪く、肥えるには程遠いがどこか、人を寄せ付けず、それでいて一人荒野を彷徨うこともしない。既に薄汚れたプライドにしがみ付いているかの

ようなその様を見て、忘れようもないアンバー・グレイの瞳を持つ男の姿が、彼の心中に去来した。

貴方はあの野良犬と同じだ、と彼は呟く。泥に塗れて餌を漁り、下らない自分を見せ付ける。自分ならば、いつそ。

「どこを見ている、ゼリア」

ゼリア・ロージエスト 即ち己の名を呼ばれ、彼は我に返った。二周りほど小さな体躯の声の主は、眼にかかる銀髪を指先で払う。彼の主、世界を統べるべき存在、帝国の第三皇子。ロイ、のミドルネームは、皇族にのみ名乗ることを許された名だ。

リイドウエルクタ「ロイ・エスカータ。貴方は私の全てなのだ、とゼリアは心中に呟く。

「思い出していたのです」

「何を？」

色素の具合か光の加減か、時折髪の色と同じ銀に輝く瞳を向けられ、彼は口籠った。

脳裏に過ぎるのは、かつて友であった、憧れた男の姿。野良犬の視線は、いつも彼に『あの男』のことを思い起こさせる。

「皇子！」ゼリアの思考は、騒ぎ立てた青年の声によって妨げられた。

「なんだい、エド？」

「何度でも申し上げます……やはり自分は、あのような男を取り立てるべきではないと考えます！」

拳を握り締めた青年、エドウワーズ・ライガスの見事な金髪を眺め、彼は己の頭髪を掻く。三十半ばの容姿年齢に見合わず、白い物が目立つ。半年前より、明らかに増えたな、と窓ガラスに映り込んだ自分の姿を見て、彼は嘆息する。時は流れる。時代は変わる。故に自分も、変わらなければならない。

いつまでももがき続けて、無様な現状維持を続ける貴方とは違いますが、引き下がることなくリイド「ロイに噛み付いている。

「あのような下賤な男を、何故！」

「何とかと鉢は使いよう、と言っただろう？ アレはアレで、役に立つ」

「誤れば、御身を傷つけます」

「僕が誤ると？」

「あの男は余りに危険すぎます！」

「言っちなよ。彼は有能だ。それに僕は、ああいう存在に興味がある……恐怖というものを、まるで知らない男にね」

「ですがっ！」

堪りかねて、ゼリアは口を開いた。

「ならば貴君は、まず私を弾劾するべきだとは思わないか？」途端にエドゥワーズの氣勢が弱まったのを見て取り、彼は続ける。「重要なのは、帝国と我が君のために何を為すか。戦う力を持つか、否か。趣向も過去も、関係ない。現に私は……」

リイド「ロイの美しい顔が自分の方を向いたのを眼の端で捉えながら、彼は言った。

「半年前まで共和国の尉官だった」

即ち 裏切り。悔いてはいない。唾棄すべき過去と、美しき今。どちらが正しいか、今のゼリアにとっては、考えるまでもなかった。「貴方は良いんだ！ 貴方の忠節が本物なのは、良く知っている。

下らない過去など、吹き飛ばすほどの。だがあの男……ジョニー・メイフェンは違う。自分が思うがままに戦いたいがために、皇子の温情を利用している！」

「奴の本心など分からん。人の本心など分からん」

本当にリイド「ロイに心酔しているのか、それとも、砂糖に群がる蟻のように、破壊することを許してくれるから付き従っているだけの幼稚な存在なのか。或いはそれとも、皇子を害そうとしているのか。本心は分かりそうにない、とジョニー・メイフェンの 今 は既に聴取を終え、病棟に戻されている 目の落ち窪んだ不気味な顔を思い出し、ゼリアは腕を組んだ。

「だが……奴の持ち帰った情報には、価値がある」

「第一六特殊機甲中隊？ あんな奴ら、気にするほどの相手では……」

スカルヘッド を倒した程度で、と高慢にせせら笑うエドワード。この男のプライドの高さは強さであり、弱点にもなり得る。ゼリアがそう分析したとき、何かの物思いに耽るかのようにぼんやりしていたリイド。ロイが口を挟んだ。

「僕は気になるよ。ジョニー・メイフェンに打ち勝ったという少年のことが」

「何といいましたかな。確か……」

「シント・ミヤケ。傷跡の七番。話を聞く限りは、僕と年の程も近そうだ……」

唇が微笑みを作り、瞼が半眼に閉じられる。まるで、目の前で繰り広げられるオーケストラの演奏に聞き入るかのような表情に、ゼリアは、思わず言葉を飲み込んだ。

「会って見たいな、彼に。僕とは違う、僕に歩むことが叶わなかった道を歩んできて尚、戦う力を持っている……。凄く興味が湧くよ。僕のように、そうあるために生まれ、育てられたわけでもない存在が、なぜジョニー・メイフェンと比肩し得るほどの力を持つのか」

周りの音が一切消滅したかのような錯覚が、ゼリアを捕えた。リイド。ロイの呟きだけが、水面を掠め飛ぶ小鳥が立てる細波のように、無の中で脈打っている。震える鼓膜が、魂までもを震わせる。

これは、歓喜だ。何物をも寄せ付けぬ圧倒的陶醉、あらゆる物を包み込む超越的静謐。

「僕はね、僕をこの鳥籠から解き放ってくれる存在を、生まれてからずっと探し続けている。僕は血と、運命と、あの女の奴隷なんだ。そうさ……」リイド。ロイの指が、コートの襟を掴んだ。「同じ結果でも、違う過程を経てきた存在を、僕は知りたい。その少年を知れば、僕は……変わることもできるかもしれない。鳥籠を破る力を、得ることができるかもしれない」

「力なら、我らの ペガサス が。組み上げも間も無く完了します」
エドゥワーズ・ライガスが言った。高慢さは消え、只の一人の従者へと、その姿は戻っている。ライド＝ロイの前では、あらゆる物が意味を失う。下らぬ感傷も、どんな疑問も、忘れたい痛みも、全てがああ微笑の中に溶け込んでいく。あの女、という一言も、ゼリアは、気に留めることすら許されなかった。

「そう、そのことで、君に頼みがあるんだ、エド」
「何なりと」

「搭載予定の……例の武装のマイナーチェンジ・テストは、今日だったね？」

「はい。ベルキャット に試験的に搭載し、意図的に敵の監視網を刺激した上で、かの竜を引き摺り出し、威力と有効性をテストします」

「傷跡の七番 を、殺さないで欲しい」

「は……畏まりました、我が君」

先刻まであれほど騒ぎ立てていたのが嘘のように、理由を問うこともなく素直に、エドゥワーズは応じる。問わせることさえ許さぬ

いや、問おうという意欲さえ失わせる魔力が、今のライド＝ロイの言葉にはあった。言葉だけではない。隣に立っているだけで、まるで母の腕に抱かれているかのような、途方もない安心感に全身が包まれるのだ。

この魔力の正体は何なのか、ゼリアには想像も付かなかった。生来の物なのか、体得した物なのか。これが、全てを統べるべく約束された者の力なのか。彼の存在そのものが、本来の故郷を離れたゼリアがここにいることを肯定しているようにも思えた。

そう、彼は貴方とは違う、とゼリアは呟く。

「どうした、ゼリア」

「思い出していたのです」

「何を……いや、誰を、かい？」

ライド＝ロイは微かに笑う。この笑みは全てを たとえそれが

ジョニー・メイフェンのような男であろうとも　許し、銀の瞳は
全てを見通す。

「奴……ジョニー・メイフェンの話にあった指揮官機です。サムラ
イソードを担いだ　ストライクリザード　乗りを、私は一人だけ知
っている」

記憶のあらゆる場所に焼き付いて離れない、あの後姿。刀を使う
人型強襲陸上戦闘機は、共和国広しと言えども『あの男』を置いて
他にいない。

「ふうん、誰だい？」

「カーバネル・A・ジェズイット。私の、元上官だった男です」

#3 困惑をもたらすもの・2 (後書き)

次回更新予定 二月二十八日

#3 困惑をもたらすもの・3

軍と言う組織には、基本的に男が多い。それは、社会的性差という概念が、既に歴史の教科書の一ページと化した今日においても、変わることは無い。スポーツの男女の記録が限りなく近づいた今であつても、軍隊が、古典的とも取れる女性少数な職場であり続けているのは、一種の本能のようなものが働いているのかも知れない。戦いに行くのは男、銃後の守りは女。先日の感情と行動の話に、何か共通するところは無いか、と探しても何も見出せず、新人は溜め息を吐いた。

「やっぱりさ、『全ての男は馬鹿であり、女に使役される存在である』っていうあたしの理論、間違つてないと思わない？」

頭に手を当て、呆れ果てながら言うヒールレイス・リヴェッサに、新人は適当な相槌を打った。先日まで黒だった、ベリーショートの色が、アッシュ・グレーに染まっている。

「間違つてないと思います。絶対に正しいと思います。真理です。宇宙の法則です」

早口で捲くし立てる美琴。彼女は、というと、相変わらずのセミロングだ。女の子の髪はどれくらいの速さで伸びるのだろう、と思考が下らない枝を伸ばす。

「あんたもそう思うよね、新人？」

「そうだね……」

弱々しくそう答える以外の選択肢は、新人には無かった。左をヒールレイスに、右を美琴に挟まれ両側から睨まれていては、どうしようもない。

(それもこれも……)

やってくるジャーナリストが女性で、しかも美人だという噂を聞いたと途端に大騒ぎを始めた整備、格納庫保守点検要員の面々そしてそこに混じって妄想の花を咲かせ始めたマイスト・リーズと

エール・シュミットが悪いのだ。

当然、応接を一手に任された新人には少しの嫉妬と、そして山のような期待が課せられる。曰く、彼の整備は機械でも身体相手でも天下一品だと伝えてくれ、彼の誘導なら滑走路でも人生でも安泰だ、書類整理で鍛えたペン捌きは君との婚約届けを書くために、磨き上げた複層装甲で一生君を守ります、成型炸薬よりも熱い愛を贈ります、エトセトラ、エトセトラ。

「間違っていないかもしれない……」

「お、分かっているね、少年。将来良い婿になるよー！」ヒールレイスは声を上げて笑い、「んじゃ、また後でね」と言っただけで立ち去っていく。

今日の格納区画は、明らかにいつもの緊張感に欠けている。仕事をこなしていないわけではないのだが、誰もが楽しげな気分なために、頭の中に眠気の弾丸を撃ち込まれたような散漫さがあった。

（気持ちは分からないでもないんだけど）

男性の幻想する女性像を打ち壊すことにかけては一流の、ヒールレイス・リヴェツサの背中を見送りながら、新人は一人ごちた。馬鹿と、奴隷とまで言われて喜ぶ男がいるか。南の古い言葉で言うところの柔弱女振りが足りない。いや、世間は広いから喜ぶ男も「痛てっ」？

風が巻き上げた砂埃が眼に刺さり、新人は眼を瞬かせた。

作業スペースから一步外へ出たところで、新人と美琴は来訪者を待っていた。ぼけた色のアスファルトとコンクリートの中に僅かに植えられた木々や芝生、外延部を一周して覆う金網、そしていつもと変わらぬ青い空。ピル・ソアテの風景は、昨日をコピーしたかのように変わり映えがしない。吹いては止みを繰り返す風で砂が口の中に入り、新人は唾を吐いた。

「来た」

美琴がぼそり、と呟く。敵が来たかのような言い方をしなくても良いものを、と思いなから視線を向けると、丁度一台の軍用車両が

ブレーキ音を上げて停止したところだった。

(記者一人に、わざわざ迎えを出したのか?)

ジャーナリストとは、そんなに優遇される職業だったか。それとも、知る権利を楯に取り、存在するかも怪しい大衆の意思を代弁しているかのように振舞うマスメディアが、増長し切っている現場が即ち、今見ている光景なのか。

後部座席で畏まっているであろう女の姿を想像する。高慢、それもヒールレイスのような気さくなものではなく、相手を徹底的の下に見なければ気が済まない類の女。メディア、大衆の意思を味方に付け、国家の広報までも今の自分が担っているのだという、現場から乖離した虚栄。嫌いなタイプだな、と新人は呟いた。自分の足で歩くこともしないで、真実が伝えられるものか。

スモークガラスで見えない後部座席へ眼を凝らす。だが真つ先に開いたのは予想に反し、運転席だった。

「ああんもう、どうして西はこんなに暑いのだよ！」姿を見せるなり、女は大声を上げた。「気候のせいではカメラが壊れても、神様は弁償してくれないのよね」

グリーンのカーディガンに白いストラップス。瞳は、澄んだ青色だ。縮れた金髪はショートの整えられ、首から提げた、年季の入った一眼レフをおもむろにこちらに向けた彼女は、歯を見せて笑ってシャッターを切った。

「サラ・ウェイ。ご覧の通りの写真屋よ。よろしく」

「はあ……よろしく、お願いします」

差し出された手に、新人はぎこちなく握手を返す。続いて美琴とも。彼女もまた、サラの雰囲気には圧倒されているのか、動作にいつもの機敏さが無い。

「ああ、ちなみにこの車、塗装でそれっぽく見せてるけど私の仕事用だから。驚いた?」

「はあ……」

「雰囲気は吞まれたらまともな取材はできない。常に相手を圧倒す

るのが私のポリシー。相手を呑めば、見えないものも見えてくる。例えば……」彼女はまた、新人と美琴へ向けシャッターを切る。「驚いた君らの見せた、内地にいる子供と何ら変わらない表情」

青い両目が、呆ける二人へウインクを送り、新人は慌てて表情を取り繕った。

「ええと……それじゃあご案内します」

憮然とする美琴を急ぎ立て、新人は先に立つて歩き出す。向かう先は格納区画、ストライクリザードの下だ。

「一通りの撮影許可は降りてるはずなので、気兼ねなくどうぞ」

「遠慮なんて、遙か昔に落つことしちゃったわよ」

「じゃあ警察に届いてるかもしれないですね。一応 ストライクリザードの、規制線内での撮影は控えてくださいね。警察どころか、軍に捕まってスパイ容疑掛けられるかも知れないですから」

振り向いた新人に、再び向いたレンズ。シャッターの降りる音がする。

(やり辛いな……)

確かに顔立ちは整っているが、いや、文句なしに美人だからこそやり辛い。今頃上の空で作業をこなしているだろう男達の姿が眼に浮かび、新人は苦笑した。彼女には、ファインダー越しの眼しか存在しない。レンズの中には納まっても、きっと眼中には入らないのだろう。

「うーん、さすがに軍にしょっ引かれるのは御免被りたいかな」

じゃあ、気を付けて下さい、と返して、格納庫の開け放たれた扉を潜る。途端に、男達の間流れる空気の波が変わったのを、新人は感じ取った。妙に火花の勢いが強い溶接、いつに無いスピードで行われる物理的損傷チェック。資材運搬用の屋内電気自動車は、倍位の速度で、何故かいつもよりも広い格納庫内を疾駆している。

(ああ、整理されて物が減ったから広いんだ……)

やはりヒールレイスの理論は間違っていないかもしれない、と新人は溜め息を吐いた。

「あれは、何？」

サラ・ウエインが隅の一角を指差して言う。格納庫の最奥、七番即ち新人に割り当てられたハンガーの、正面。放置されたままの、黒焦げになった ストライクリザードの残骸だった。

「ある一人のバカな兵士がおりまして」黙っていた美琴が急に口を開いた。「訓練も無しにその場の勢いでHAL動かして戦闘をやるという暴挙を犯したバカがおりまして。その結果です。バカなので自分のバカさ加減を整備・出撃の度に理解させようと黒焦げのまま放置しているのです。無茶ばかりやるバカなので」

「へえ……撃墜されたときの機体なんて、縁起の悪いものを置いておくのは嫌うと思っていたけれど。南の人は、特にそういうこと気にするんじゃないか？」

サラの視線が、新人と美琴の全身を撫でた。

黒い髪に殆ど黒に近い茶色の虹彩は、共和国南部に主に居住する倭人、と呼ばれる人種に特徴的なものだ。新人もこれに属している。言語体系も用いる文字も違うため、こういうちょっとした誤解はしばしば起こるのだ。

「いえ、必ずしも縁起が悪いってわけでも無いですよ。そもそも、縁起云々なんて解釈一つですし、そういうルーズなのが許されるのが倭系の特色でもありますし。柔軟性、って言い換えられるかもしれません」バカ、と連呼されたことはさて置いて、新人は言う。「例えば今回なら、自分の失敗を毎回見返すことで、同じ徹を踏まないうという思いを強くすることでできます。それに、あれに乗っていたバカは僕だから言うんですが、あそこまで破壊されても軽症で済んだんです。むしろ、ラッキーです。あれに躓いてから出撃したら、無傷で帰ってこれるような気がします」

「成程ね」。他に何か、ゲンを担いでやってることってあるかしら？」

新人は腕を組む。乗り始めて日が浅い分、ジnkスのようなものにも縁遠い。出勤は何度かこなしたものの、本格的な戦闘は、未だ

に二回　初出撃と、ジヨニー・メイフェンと戦った時の二回だ。拳句どちらも機体をボロボロにして帰ってきたのだ。ゲンを担ぐにも、比較できるラッキーが無い。ある意味では自分らしいのかもしれない、と新人は嘆息する。

「僕は特に無いですね……」

「あたしも無いです。ちなみにこれ、あなたの取材ですか？」

「ええ。私個人の、かな。公の目的は　ストライクリザード　を世に知らしめること。人のジnkスを聞いて回るのは、私の趣味。こういうことがあつたらこうする、っていう何の根拠も無いルールは、誰しも一つくらいは持っている物なのよ。正しいか否かは別にしてね」

「訊いて、面白かったルールは何かありますか？」

腕組みを解いて尋ねた新人に、彼女はカメラを降ろして応えた。

「面白かった、というか、最低なのが一つあるわよ……。『金髪で青い眼の女の子を見かけたら、俺は例外無く声を掛けることにしている』っていうのが」

「何ですか、それ」と、美琴が唇を引き攣らせる。

「読んで字の如くよ。その男自身も金髪の青い眼で、ちよつと振り向いてしまつかも知れない位の良い男なのよ。顔はね。あくまで顔だけはね！　そいつ曰く、『金髪碧眼は遺伝的に弱い。だから俺と交配して種の多様性を守らなければならない。人類の未来のために俺は君を愛さなければならぬ。俺と付き合ってくれ』って。最低だと思わない？　本当に、男の屑よ、あいつは！」

「最低ですね」頷く美琴は、ヒールレイス理論を肯定する材料を得て、何だか満足げだった。

「恋人だったんですか、その人？」鈍い勘を存分に働かせて、新人は尋ねる。

「ええ！　人生の汚点だけどね。全く、あのバカは。お節介なくせに、人の言うことは聞かない。何が『自分の可能性を試す』よ！　大学休学して、何思ったかいきなり軍に入るとか言い出して、スナ

イパーだなんて気取って、英雄になつたつもりで……」深く溜め息を吐き、サラは言う。「今頃、何してんだか」

再び、新人の勘が働いた。スナイパー、金髪碧眼、軽佻浮薄。お節介で、気取るのが大好きで、それでいて技量でもって見れば右に出るものはいない狙撃手が、この部隊にいなかったか？

まさか、と呟く。そのとき、新人の視線の向こう、サラの背後から、渦中の青年が姿を現した。

「おおい、シント。あれ知らねえか？ 照準補正用の……」

ボード型の端末を小脇に抱えたマイスト・リーズは片手を軽く振りながら歩み寄り。そして、靴底が床に張り付いたかのように動きを止めた。

「……サラ？」

「マイスト？」

彼らは暫し見詰め合う。いつの間にか、格納庫中の音が止んでいる。全ての人間が、ありとあらゆる作業の手を止め、二人を注視していた。先日の整備兵も、エール・シュミットも、いつの間に現れたのかヒールレイス・リヴェッサも。だが、広い空間で全てが静止した中でも、松下肇だけは呑気にジャンク・パーツ漁りを続けている。

どれほど時が経つただろうか。永遠にも思える一瞬の後、再び時間は何事も無かったかのように流れ出す。

「マイスト……」

サラ・ウェインが何故か顔面蒼白なマイストにパンプスの靴音を鳴らして近づき、右手を高く振り上げ。

「つまり修羅場だね」と新人。

「うっさい、バカ」と美琴。

「色男は辛いのだ……」マイストの言葉は、読点を刻むことは無く。爽快な平手打ちの音が、乾いた空気を突き抜けた。

人がいて、街があれば夜は華やかになるものだ。太陽の光という

カモフラージュを失い、闇を纏った街は、いつもとまるで違った顔を見せる。だが昼と夜、真の姿がどちらなのかは、街並みを歩く人間が決めることだ。

そして、この街の場合は夜なのかもしれない。ピル・ソアテ市の西側に位置する繁華街の灯りを窓越しに眺めながら、新人は呟く。明滅するネオン・サインに怪しげなスモッグ。西果ての街の夜は、己の渴きを酒で癒そうとする男達の領域だった。

「まあさすがに、売春婦の類はいないけどね。最近この街も規制が厳しくなっただけだ」

半分ほどに中身の減ったグラスを揺らし、テーブルの反対側に座るヒールレイス・リヴェツサは言った。空いている右手には、吸いかけの煙草。染み出すように立ち上る煙が、薄暗い照明の中で白く光っている。

「昔はいたんですか？」

「さあ？ 昔のこの街は知らないから」

「そんなことよりっ！」隣で、音を立ててグラスを置いた美琴が言った。「いいんですか、こんなことして？」

「いいのいいの。興味あるでしょ、彼らの話」

ヒールレイスは、火の点いた煙草で店の一角を指す。その先に見えるのは、カウンター席に並んだ二つの背中だ。二人とも金髪、男は項を覆うほどに長く、女の方は地なのかパーマなのか、強いウェーブが掛かっている。マイスト・リーズとサラ・ウエインだ。互いに押し黙ったまま、口を開こうとしない。

この店は、運営しているのがかつて勇名を馳せた退役軍人だとかで、軍関係者の溜まり場になっている。いつ何時でも、見回せば、そこかしこにどこかで見たような顔を見出せる。ジエズイットが酒を奢ると言えば、ここに来ることと同義だ。一六特機隊の人々もまた、しばしばここに現れることは同じであり。

「いやー、来るかと思って張ってたら本当に来るとはね。全く、マイストの考えは読みやすいわ」

つまり、待ち伏せて彼らの話を盗み聞こう、というヒールレイスの目論見が、見事に成功してしまったのだ。尤も、新人と美琴は、半ば無理矢理に共犯者にされたのだが。とは言え、かつて恋人同士だった二人が再会し、酒を酌み交わして何を語るのか。新人にも、全く興味が無い訳ではなかった。それ以上に、マイスト・リースという男について。

言葉や行動の端々に覚える、彼への違和感。彼には戦場は似合わない、と新人は度々、どこかでピースを嵌め違えたジグソーパズルを見ているかのような気分になっていた。彼の動機を 軍に身を置く理由を知ることができれば、少々の後ろめたさは無視しても良いかも知れない、と新人は自分を納得させる。

相手を知ること 今まで新人は、そんなことを考えたことも無かった。『嫌いになるのが嫌なのか、そもそも知りたいという、人間の当然の欲求って奴があんたの中から欠如しているのかどうか』という美琴の言葉を分類に借りるなら、明らかに、新人は後者だ。誰とも関係を作らず、一人でいるうちに、誰かと関わりたいという欲望が失われていった。能動的に消したのではなく、川面に落ちた血の雫がやがて見えなくなるように、失われたのだ。

何が自分をそうさせたのか。なぜ欲求が消えてしまったのか。明確に答えを出すことはできない。だが、理由を突き詰めようとする、と、忘れようの無い両親の、卑しい物を見るような視線が、閃光の中に蘇ってくる。光、フラッシュ、ストロボ。どうあっても、逃れることはできない。一滴の雫が流れの内に消えても、この身体には、幾億滴の血液が鼓動している。

知りたいという欲求は、抵抗だ、と思う。流されたものは取り戻せるのか。いや、そもそも自分は本当に、知ることを望んでいるのか。

「新人？」

美琴の黒い瞳に覗き込まれ、新人は我に返った。いつの間にか、グラスを握り締めていた。カクテルに使うための物を無理を言っ

分けてもらった牛乳の表面が、手の震えに合わせて波紋を刻んでいる。

「いい年なんだから、しつかりしろっての、クソガキ」煙を吐き出し、ヒールレイスが言う。

「いい年で、クソガキなんですか」

「そんなのはどうでもいい。大体、酒飲むところでミルクって、女子供かカウボーイかつつの」

「その中なら、僕は子供です」

「ああ、ちなみにあたしはレディだから」

彼女はグラスに残っていた液体を一気に飲み干す。ウイスキーの類なのだろうが、銘柄は知識が無いので分からない。そして、脈絡の無い言いがかりを付けることがレディの定義なら　　という一言を、新人は飲み込んだ。

「あちらさんは、まだだんまりなのかしらん？」

声を低くし、ヒールレイスは、金髪の男女の方を顎で示して言う。それとほぼ同時にサラの方が身動きし、思わず新人は、見付かったのかと身体を強張らせた。

「大丈夫、まだバレてない」何故か楽しそうに、声を弾ませて美琴が言う。「始まるみたいよ」

狭い店内には、緩やかなジャズが流れている。大きすぎず、小さすぎない、即ち隣の人間の声は良く聞こえるが、違うテーブルの声だと掻き消される程度の絶妙な音量だ。だがそれでも、少し意識して耳を澄ませば人の話し声位、簡単に聴き取れる。扉を閉じたままコンピュータの画面に向かい、居間で交わされる両親の会話に、脅えながら聞き耳を立てていたことを思い出し　　直ぐに、記憶の湖底へと沈めた。

先に口を開いたのは、マイストの方だった。

「何で……ジャーナリストなんてやってるんだよ。アナウンサー志望じゃなかったのか？」

「あなたを追いかけるため、って言ったら？」

「信じねえよ。お前はそんな、男みたいな未練がましい女じゃねえだろ？」

「そうね。あなたと私は、二年前に終わってる」

「じゃあ何で、こうして酒を飲んでいる？」

「思い出に浸れる程度には、私も大人になったってこと」

二人はグラスを重ねる。軽やかな音が、新人の耳まではつきりと届いた。

「もう二年になるのよね……あなたが、天に与えられた二物を捨ててから」

「そんな、大した物じゃねえよ」

「一八歳で大学の理学部を出て、違う視角から物を見たいと言って法学部に入り直した男の言うことかしら？」

「若かつたんだよ。力の使い方を知らなかった。目の前のものに全力で使うことしかできなかった」

「拳句クレイ射撃の学生チャンピオンだもんね。天才ってのは、あなたみたいな人のためにあるのかも知れないって、初めてあなたに会ったとき、私は本気で思った」

「止めてくれ、お願いだから」マイストはグラスを呷る。「褒められるのは嫌いなんだ。知ってるだろ？」

「そうね。あなたは、常に凄いとやわれ続けて……褒められ煽てられ期待されて生きてきた」

バーテンダーが、マイストの前に無言で新しいグラスを置いた。すぐに口を付け、マイストは言う。

「そうだよ。俺は、誰かに叱って欲しかった。期待とか、羨望とか、要らねえんだよ。俺は、俺の手綱を締めてくれる人が欲しかっただけなんだ」

「だから私と付き合った」

「ああ。お前も俺を褒めはした。だけど、お前は俺を叱ってくれた」
「青い眼の話でしょう？ あんなもん、私でなくたって怒鳴りつけてやりたくなる。色んな人のジंकス・ルールを訊いて回ったけど、

初対面の人間にあんなこと言う男は、あなた以外にいなかったわよ？　どんな才能があったって、関係ない。あなたは只の馬鹿よ」

「いや、でも青い眼が劣性遺伝するのは事実なんだぜ？　過去には白人の半数以上が青い眼を持っていたのに、今じゃ一割にも満たない。数字が証明してる」マイストは、グラスを暖色のランプに翳す。「だけど、それだけじゃねえんだ。お前は俺に、馬鹿って言ってくれる。俺に何も負わせない。だから俺は、お前に依存できた」

マイストの背中が、妙に小さく見える。申し分ない実力なのに、頼り甲斐のある男のはずなのに、常にどこか危うい、という自分の分析が的外れでは無かったことに、新人は頷き、だが一方で納得できなかつた。彼に、依存したいと思ってしまう。

どんな標的でも直撃させる技量、ふとした時に、肩を押してくれる存在。マイスト・リーズを見てみると、この男なら頼れる、頼りたいと思ってしまう。そして彼自身も期待されれば応えようとして、そして、容易く応えてしまう。

ふと、目の前に座るヒールレイスが眼に留まる。空のグラスを弄びながら、彼女は、呆れとも、驚きとも、哀れみともとれそうな視線を、矮小な男の背中に向けていた。彼の過去を、ヒールレイスは知っていたのだろうか。

「だけどき、それって違うんだなって気付いたんだよ。俺はお前が好きな訳でも、愛していたのでも無い。叱ってくれるから、居心地が良くてお前にしがみ付いていただけだったんだよ。俺にとって、お前は只の記号……道具だった」

「だから何もかも捨てて、軍の誘いを受けたの？」

「ああ。その時丁度、軍は新型兵器の試験を行う人間を探していたんだ。今のHALの原型さ。当時は何かと制約が多かったブレイン・バイパス・システムを扱えてかつ、移動目標への狙撃能力を買われてな。運良く俺はB2に馴染めたし、クレー射撃は役に立った。尤も初めは、ロボットなんて呼べるような代物じゃなかったけどな。

結局、俺は逃げたかったんだ。今までの俺を作っていた全部から

全く新しい場所に行きたかった。そうやって俺自身をギリギリまで追い込めば、誰かが俺を叱ってくれる。俺自身を傷つければ、誰もが俺から眼を背ける。『自分の可能性を試す』とか『自分を追い込んでこそ男』とか、気持ちのいい題目で、英雄になったつもりで、俺自身を騙しながらな」

マイストの背中が、風に吹かれた炎のように揺れる。そして寸時の沈黙を飲み込んだサラが言った。

「今も、そうなの？」

「さあな。俺自身が何考えてるのか、分かんなくなっちゃった」

それだけ言い切り、マイストは口を噤んだ。後には沈黙が残る。ヒールレイスは、彼の背中をじっと見詰めている。

気まずさを誤魔化したくて、新人は温いミルクに口を付ける。そして、全く同じタイミングで炭酸水のグラスを傾けた美琴と眼が合い、溜め息を吐いた。

マイストが何故、軍という場を選んだのか。知りたかった理由は全て分かった。だが、知ったからと言って何ができるわけでも無い。彼の問題を解決する手段を、新人は持っていない。いや、新人だけじゃなく、誰も持っていないのかもしれない。彼を騙しているのは、彼自身なのだから。そして次第に、どす黒い罪悪感が、新人の心を侵食し始める。

何もできないのなら、何故知ろうとした。知る必要などなかったのに、何故。

結局は、エゴイズムに満ちた、下らない好奇心だ。秘密を持たれることへの不寛容。そしてもう一度、自分に問う。

(本当に知りたいと思っっているのか……?)

肯定して、自分の醜い感情を認めるか、否定して、全て無かったことにするか。どちらが正しいのか、どちらを選ぶべきなのか、分からない。誰でもない、自分自身の感情だというのに、自分がどうしたいのか分からない。

店内が俄かに騒がしくなった。扉の方を見ると、一〇人程の軍人

と思しきグループが入店してきた所だった。中にはどこかで見たような顔も混じっている。一六特機隊の人間なのか、と新人は考えあぐねる。整備の人間だって 先日の議論は中断されたが、五〇人近い人員が存在するのだ。その全てを記憶しきれるはずが無い。

「行くよ、二人とも」

唐突にヒールレイスが立ち上がる。既にグラスとテーブルの間に数枚の紙幣が挟まれている。支払いを済ませても、優に釣りが返ってくる額だ。言うが早い、喧騒に紛れて扉の方へと歩いていく彼女に付いて、新人と美琴も顔を見合わせ、席を立つ。

店の扉を潜る瞬間、新人は、カウンター席に座るマイストの方へ視線を向ける。店内の騒がしさも耳に入らず、横顔が新人の方を振り返ることもなく、ただ中途半端に残ったグラスの中身を、青い瞳は呆然と見詰めていた。

ストリートへ出れば、直ぐにネオン・サインの洪水が襲い掛かってくる。金を掛けているらしい一部の店先には、立体映像の看板が躍っている。

「あいつは、生身の人間を撃つたことが無いんだよ。軍人で、曹長なんて階級を貰ってるくせにね」

汚れたペーブメントを一定のリズムで踏み付けながら歩いていたヒールレイスが、急に立ち止まって言った。車が一台脇を通り過ぎ、彼女はそれに舌打ちしながらライターで煙草に火を点ける。

「民間から、ヒューマノイド・アサルト・ランドファイターの開発協力って形式で軍に入ったから、あいつはまともな訓練も受けていない。小銃の分解清掃くらいはできるだろうけど、本気で喧嘩したら、曲がりなりにも訓練受けてきてるあんたたちの方が強いだろうね」

こちらには背を向けたまま、彼女は煙を吐き出す。ライトに照らし出された微粒子は、ものの数秒で拡散して見えなくなる。

「共和国は、形も振りも構わず、帝国に対抗するためだけにHAL

を作った。国内に存在するありとあらゆる技術の粋を集め、人の形を作った。それで今はどうか、性能で上回る ストライクリザード を配備させることに成功し、ギリギリのところまで戦力の均衡を保っている」

煙草の先端から、灰が落ちた。眉を顰め、黙ったままの美琴に変わり、新人は言う。

「形振りの塊が、国家つてものじゃないんですか？」

「ええ。だから今の共和国は、ある意味破綻してるのかも知れない。戦場での死人は減つても、犠牲になる人は山程いる。徴兵されたり、家族を失つて軍なんて場所を選んでしまったあんたらも、逃げ続けて、気が付いたら戦場で人殺しになっていたマイストも。生身の兵士を撃つて、生と死を知る過程すら吹き飛ばされてね」

「知ってたんですか？ 今の話」

「勿論。付き合い長いからね……。あいつは運が悪かったのよ。こんな世界じゃなければ、あいつは戦う必要なんて無かった。たとえロボットというカーテン越しでも、人を殺さなくて良かった。ただ運が悪くて、一六特機隊の副長なんて務めてるけど、本当のマイストはそんな器じゃない。あいつには、戦場なんて似合わないのよ」

だからなのか と新人は得心した。マイストが、少し過剰に思えるまでに、自分のことを気に掛けるのは。自身が副長でなければならぬ、上官なんだという責任感。そして、生身の人間を撃つたことが無いという劣等感。自分の薄さを隠すために、彼は無理をして、自分を傷付ける。

「だから、二人とも……」 ヒールレイスは煙草を踏み消し、新人と美琴の方を振り返った。「あいつを責めないで。あいつは優秀で器用だけど、それ以上に馬鹿で間抜けで不器用だから。あいつは本来戦場にいちやいけないタイプの人間なのよ」

彼女は、ネオン・サインの一つを見上げる。そして再び新しい煙草に火を点け、光の向こうの、どこか遠くを見通すように目を細めた。

「戦うのは、あたしみたいな人間だけでいい」
その呟きは、誰に向けたものなのか。新人には、分からなかった。

#3 困惑をもたらすもの・3 (後書き)

次回更新予定 三月七日

#3 困惑をもたらすもの・4

三宅新人の朝は、憂鬱だった。

大概の人間の例に漏れず、新人もまた、朝に弱い。毎朝爽快な目覚めを味わう人間は、どんな魔法を使っているのか、願わくば呪文の一つも教えて欲しいと、何の実も無い愚痴を零してばかりの人間だ。だが今日の憂鬱は、いつもよりも遙かに大きい。人間の感情という量りようの無いものを、あえて比較しようと試みるのならば、「ストライクリザードの装甲は、基本的には五層構造になっています」

黒地に、操縦席の構造にフィットする部分だけが灰色に色分けされた操縦服姿で、新人は言う。相手は、訓練用の、身動きすら難しい対衝撃服で膨れ上がり、少々滑稽にも見える姿のサラ・ウェイんだ。

結局紆余曲折を経て、新人が彼女を同乗させることになった。美琴と二人で、どちらが乗せるのかを争い、争いにならずに決定。マイストに頼もうとも思ったが、昨日の会話を聞いてしまっただけに、彼に何かを頼むことは躊躇われた。

「それにしてもこの服、動きにくいわねー。もうちょいどうにかならないの？ これじゃカメラも構えられない」

「ストライクリザードは、基本的に単座仕様です。僕のM01B、後期生産型はスペースに余裕があるのでどうにかもう一人なら乗せられますけど、乗せるためにスペースがあるわけじゃありません。どんな衝撃が掛かるか分からないですし、一応簡易なものとは言え身体を固定する器具はありますが、危険なことには変わりありません。どうせ写真を撮らせる訳にもいきませんし、我慢してください」

一方的に捲くし立て、新人は、肩膝を付いて頭部を前に倒し、コ

クピット内部を露出させている自身の ストライクリザード へよじ登った。

脚は二足の、市街戦仕様に換装されている。荒地戦仕様よりも、二脚という特性を存分に生かせる一方で、操作にはより一層の繊細さが要求される。操縦兵の中にはこの市街戦仕様を上手く扱えない者も多く、ともすれば不恰好にも見える荒地戦仕様の方が、一般には多く普及している。とはいえ、最大速度では荒地戦仕様に分があるのだが。

太腿の上に立ち、新人は暗い赤色に塗られた装甲を拳で軽く叩く。「最外層は炭素繊維複合材です。熱硬化性樹脂の内部に格子状の炭素繊維構造を織り込んで積層し、軽量性と強度を両立しています。第二層が、超軽量発泡金属層です。その名の通りで、金属粒子の間にミクロン単位の間隙を、規則的に、最密構造に配置することで、衝撃吸収の役割を担います。言うならば、鋼鉄製のスポンジですね。ちなみに、泡の配置を拡大して見ると、黒鉛みたいな、キレイなハニカム構造の連続体になってるそうです。ここまですら表層、喩えるなら皮膚ですね。

そして第三層が形状記憶合金層です。これは、表層にダメージが発生したときに効果を発揮します。衝撃と、表層の侵襲を感じて収縮することで、損傷の拡大を防ぐ働きをします。合金が筋肉のように縮んで、傷を埋めるんです。続いてその下にあるのが第四層、極細光ファイバーセンサー層です。これも三層目と同じく損傷に対応するための機構で、損傷を受け、センサー部位の屈折率が変化すると、対応する電気信号が機体中枢に送られ、ダメージとして認識されます。言わば、神経ですね。そして第五層には再び炭素繊維複合材。サンドイッチ構造です。更に、肩や掌の部分にはもう一層の追加構造が……」

「成程、何だかよく分からないけど分かったから、後でレポート提出してくれない？ 評価には色を付けてあげる」

「僕は不登校でしたから、宿題なんて出したこと無いです。それに、

自分の命を預ける機械のこと位、知っておけと隊長が」

「へえ……HAL乗りつて、意外と大変なのね。私には務まらないわ」

「大丈夫です」登るのに難儀するサラの手を掴んで引き上げながら、新人は言った。「僕も半分も理解してませんから。それに……」

「それに？」

彼女は早くも息を切らしている。そして新人は、依然完全に整ったままの自分の呼吸を発見する。

「本当に大変なのはこれからです」

マンホールよりは少し大きい位の開閉部に身体を滑り込ませ、その後からつかえながら降りてくるサラの身体を受け止め座らせ、シート後部に設置されたハーネスを締める。きつい、という文句を無視し、新人は、両腕をリングに通してグリップを握り、両膝をパネルに固定。ペダルの具合を確かめると、操作系を起動させた。

動力系は既に始動している。全身に十分な電力が行き渡り、いつでも戦いへ赴ける状態で待機している。パワー・レベルを巡航時にまで上昇。膝を床に着いていた機体がオートで立ち上がる。前方、後方、両側方を映し出すモニタ上の景色がスライドし、誘導員の姿が遙か下方へと流れていく。

「意外と、高いでしょう？ これで見上は、頭頂高八・二メートルです」

「あれ、でも ストライクリザード の基本姿勢は、膝を曲げた爪先立ちみたいな前傾姿勢じゃなかった？」

「はい。その姿勢で、八・二メートルです。ですから、整備の時とか、関節を伸ばしきった状態だともう少し高くなりますね。だから全高じゃなくて、頭頂高って表記されるんです」

軽くペダルを踏み込み、膝パネルの角度を調整。ペースと、一步の踏み込みの深さと方向がこれで決定される。同時に、腕を振って重心バランスを保つ。操縦は、B2システムのサポートがあるためにそこまで神経質になる必要は無いものの、荒地戦仕様と比較すれ

ば遙かに繊細さが要求される。

ブルーのベストを身に着けた誘導員が、指示棒を振っている。それに従い、もう数歩、開きっぱなしの扉の方へ進んだ矢先に、足元から衝撃が走った。

右下。咄嗟にモニタを見る。大地を割って進むための爪が、黒焦げになった。ストライクリザードの残骸に引っ掛かっている。

「ちっ！」

つまり、躓いたのだ。スキーのお陰で安定性の高い荒地戦仕様ではない、極めて不安定な市街戦仕様で。

身体中が揺れる。左脚を踏み出しても間に合わないと直感。ならば甘んじて倒れるかという。。

「そもいかないんだね、これが」

ストライクリザードの、制動尾が唸った。その名の通り、腰の後ろから四メートル程伸びているこの機械の尾は、中枢が重心の乱れを感知すると自動で駆動し、鞭のようにしななって遠心力で機体を立て直す役割を担っている。楔形のパーツが多数連結した外見は脆弱で軽そうに見えるが、内部には細い形状記憶カーボン・ファイバーの束が通されており、強度は十分にある。先端も比重の高い希少金属を用いた特殊素材で構成されており、十分な運動量を生み出すことができる。

首根っこを掴んで起き上がらされたような感覚と共に、正常位置へ復帰。足元から、誘導員の怒号が聞こえる。彼が指差す方を見ると、コンクリートの壁面が、勢い余った制動尾の衝突によって抉り取られていた。

「す、すいません！」外部スピーカーをオンにして新人は言う。同時に、ストライクリザードが両手を合わせる。

『馬鹿野郎、許さん！ 帰ってきたら格納庫要員全員に飯奢れ！』

「破産するので勘弁してください……ちゃんと帰ってきますから」

壁面の武装ラッチから七ミリ榴弾・散弾砲 クロスファイアを掴み取り、腰背面に接続して固定。荒地戦仕様ときは、加速用

のスラスターが配置されていた場所だ。固定武装の積載能は荒地戦仕様の方が上だが、携行火器の場合は二脚の市街戦仕様の方が何かと都合が良い。格闘戦用のナイフと、投擲ダガーは既に格納されている。

格納庫の建物外に出ると、まだ昇り切っていない太陽の弱々しい光が降り注ぐ。丁度交代の時間だったのか、数人の歩哨がこちらを見上げて手を振っている。

『女性陣二人が先行してる。急ぐ必要は無いから、時速一〇〇位の自動走行で行け』後方からマイストの声。『お客が乗ってる上に、お前自身もまだ市街戦仕様には慣れてねえ。一つ一つ、手順を確認しながらだ。実機の間接感を掴むのがより重視されるのが、市街戦仕様だからな』

「了解……行きますよ、サラさん。かなり揺れるんで、舌嚙まないように注意してください」

返事を待たずに跳躍。基地敷地内では、ストライクリザードの制限速度は時速三〇キロメートルだ。だが、一步外へ出れば、ルールも法律も存在しない。HALの運行に関する法など、まだ整備されていないのだ。ひよつとすると近い将来には、自動車優先が定められたお陰で交差点で立ち往生するHALの姿が見られるかも知れない。

着地、再び進行。一步ごとに、敵に体当たりされたかのような激しい衝撃が、足元から突き上げてくる。運歩のリズムが取れたところで、オートメーションへ移行。先行している美琴とヒールレイスの機体の予測位置から最適ルートを入力し、新人は、一つ息を吐いた。

「これ……きつついわね！」

訓練を受けた新人でさえ、歯を食い縛って耐えることしかできない状態でも、彼女は何か言おうとしている。これが世に言う報道人の根性か、と感嘆し　新人は、起動時のシーケンスに漏れがあったことを思い出した。

すぐさま左手でシステム操作。直後、コクピットの衝撃が半減し、新人は溜め息を吐く。

「すいません、サラさん……衝撃吸収機構を動かすの忘れてました」「忘れてたって……殺す気！？ それとも新手的報道に対する圧力？」

「あ、いえ。死ぬときはどうせ僕も一緒です。一蓮托生です。ちなみにこれ、コクピット周りに敷き詰められた、ナノスケールのカーボン・スプリングによるもので、原理的には列車の騒音を打ち消す機構と似てるんですよ。中枢が感知したコクピット周辺へのGに対応して、スーツの耐G機能とも連携が……」

「ああもう、そういうことも取材対象だったんだけど……まあいいや。もうちょっと、違う角度から考えてみようかしら」

「何を記事にされても構いませんけど、大人しくしててくださいね。いつ戦闘になるかも分かりませんから」

新人は少しだけペダルを強く踏み込み、巡航速度を上げた。

先日、ジョニー・メイフェンと戦った場所より、やや南方だ。この辺りまで来ると、放棄建造物もかなり少なくなり、見渡す限りが荒地と岩場の、味気ない風景が広がっている。文明の痕跡に乏しく、自然風景にしても、日頃から見ているものなので新鮮味に欠ける。

だが、新人にとっては取るに足らない景色でも、他の人間にとってはそうではない。現に、操縦席の後ろのごく小さなスペースに収まったサラ・ウェインは、新しい孤立丘や高所を飛ぶ鳶の姿を見出す度に、感嘆の声を上げていた。

「自然のダイナミズムって、凄いものがあるわね。岩を見ているだけで、吹いている風を直接見ているみたいな気分になる」

「そんな大層な物ですかね。僕は見飽きましたよ」

「大層な物よ。ここの風景撮りまくって適当に哲学してるタイトル付ければ、もう立派な写真集の出来上がり」

「それはそれでどうかと思うんですけど。手抜き、って言いません？」

「写真の力はそれだけ強いってことよ。手を入れなくたって、強いメッセージを相手に伝えることができる」

「映像とは違うんですか？」

「写真屋として言わせて貰うなら、違うわね。テレビカメラで見られる映像は、所詮狭いカメラ内のもの。その場にいるのと同じ視点を見るものに与えることは不可能よ。その場にいるかのような錯覚を与えることになら、長けているけどね。だから、戦場の映像はインターテイメントになる。先日の新仙台市の戦闘が良い例でしょう。

「だけど、写真は違う。情報量は確かに少ないかもしれない。だけど、シャッターが降りる一瞬に切り取られるのは、高々メガバイト単位のドットの集まりだけじゃない。何て言うのかな……その場所の空気、人の心みたいなものまで、時として写り込む。そして写真は、写っていない部分を見るものに『想像』させる。映像を見れば、それで終わり。カメラの前以外の光景を、思い浮かべることがはしない。でも、一枚の写真は、フォーカス対象の背後にあるありとあらゆる物を想像させる。」

映像配信によるニュースがこれほど増えても尚、写真を使った新聞は減んでいない。媒体が、紙から電子に代わりはしたけれどね。それはきつと、この写真の力のためだと、私は思っている」

「カメラを持つ者のプライド、って奴ですか？」

サラは肩を竦める。その仕草に、何故かどこかで見たとような感じを覚え、そして直ぐに、マイストに似ているのだ、と新人は気付いた。妙にウィットを効かせた口調もそうだ。彼女の言動は、マイストの残滓を感じさせる。或いは面影、或いは。

(恋人同士、だったんだよな)

昨夜盗み見た二人を思い出す。只の友人にしては近すぎるのに、間に横たわる、二人を隔てる無限にも思える距離。終わってしまっ

た恋とはああいうものなのだ、と漠然と理解することはできても、それ以上のことは分らない。恋など、新人は知らない。

マイストは、自分が彼女を道具としてしか見ていなかったことに気付いたから、彼女から離れた、と言った。ならば、彼女はどうかなのか。今の彼女は、マイストをどう思っている？

「マイストさんのこと、好きなんですか？」

「な、何を言い出すのよ、急に」

「いや、ちよつと気になったんです。何ていうか……別れた元恋人同士って、初めて見たので」

数百メートル後方のマイスト機と通信が繋がっていないことを確認する。

元恋人だけじゃない。愛し合っている存在を、新人は知らない。

恋人同士は勿論、最も身近にいるはずの、互いを認め合い、愛し合う夫婦さえも。半ば気が違えてヒステリックに喚き散らすだけの母と、そんな母をペットか何かのように扱い、息子である新人へは、実験動物へ向けるのにも似た視線を浴びせ続けた父。愛とは何なのか、愛されるとは何なのか。そして愛するとは何なのか。もし彼女がマイストのことを、今でも愛しているのなら。

（二人が離れなきやならない理由が、どこにある？）

求めても得られない物が目の前にあるのに、何故それを取ろうとしないのか。

ストライクリザードの両脚がリズミカルに大地を蹴る音が聴こえる中で、彼女は暫し沈黙し やがてゆつくりと口を開いた。

「二十歳位の時からだだったかなあ……いや、一八過ぎた辺りからだっただかも知れない。そういう状態が何時から始まったのかは分からないけど、とにかく私は、のめりこめなくなったのよ」

「何にですか？」

「恋、って物にね。恋だけじゃない。好きも嫌いも、ありとあらゆる感情に、浸れなくなつたのよね。色んな人と付き合いはしたけど、どこかずれているような気がして。自分の心を、もう一人の誰かが

監視してるのよ。誰かを好きになっても、お前は本当にその男が好きなのかって問われ続けて、段々自分の気持ち分が分からなくなっていく。それでゴチャゴチャになった思いだけが切り取られて、私の中に重なっていくの。それこそアルバムみたいに、自分の心が移ろい、訳分かんなくなつた一瞬が保存されて、降り積もっていく。時々そのアルバムのページが開いて、お前に素直な感情なんか無いんだ、って訴えかけてくる。

月並みなフレーズで悪いけど、恋に恋をしていた、ってことなのかも知れない。或いは私が大人になつたってことかな……昔話をできる程度には。純粹な物が自分の中から消えていくことが、大人になることだと認めたくは無いんだけど、ね」

「じゃあ、好きってことでいいじゃないですか」

「いいかもしれないし、駄目かもしれない。とにかく私は大人になつてしまつて、一六歳には永遠に戻れない。だからあなたのような考えはもう持てないのよ。悲しいと思う？」

「そうですね……」

新人は両腕をリングから外し、腕を組んだ。自動走行システムは順調に稼動し、定められたルートを正確に走っている。

時間が巻き戻せないのは確かだ。故に誰もが過去を羨み、若さに憧れる。こんな下らない一六歳の時を過ごしていようと、一〇年後の自分はきつと今を羨むんだろう。それだけは、新人にもはっきりと分かつた。

『自分を知らないことが若さ』だと、ジェズイットは言った。なら若さを失うとは、知って絶望することなのだろうか。思いのままに突き進むことを止め、その思い自体を疑うこと。

成長とは、マイナスなのだろうか。知らないほうが幸せな、自身への疑いを知ってしまうことが。

「悲しいんでしょうか。でも、良く分からないです。時間が経てば、あらゆるものは劣化します。だけど、劣化が、必ずしもマイナスとは限らない。風の浸食が、美しい風景を作り出すようなものです。」

だったら、悲しいことなんかじゃない。でも……」

新人は ストライクリザード の自動走行を止め、手近な孤立丘へと歩み寄る。大自然の力を受けて、在るだけで芸術的何かを思わせる岩盤の尖塔。その先端へ照準を定め、牽制用の胸部機関砲を発射する。当然、脆い孤立丘は、一瞬で碎け散る。

「こんなにも簡単に壊れてしまう。とても、悲しいです。この碎けた破片と、碎ける前の姿と、どっちが本当なんでしょうか」

「哲学ね」

「写真集になるでしょうか」

「さあね。どうかしら」彼女はまた、肩を竦める。「写真集はともかく……あなたも大人になれば、きっと分かるわ」

「そんなもんなんですかね」

今は分からなくても良い、ということか。ならば、いつ分かれば良いのか。いつになったら、理解することができるのか。決まった境界線など存在しないのだろうか 存在しないからこそ、言いよりの無い不安が湧き上がる。無知であること、無知故に悩むこと、猛進することが許されるのは、後数年。戦いの中で何度も繰り返した、考えることは後でもできると言う文句で、先送りを続けることも、今だけ許された特権なのか。

再び機を自動走行に復帰させる。そして規則正しい走行音。それが、止まることの無い時の刻まれる音のように思えて、新人は身震いした。

「あなたは今、好きな人がいる？」

「え？」余りにも唐突なサラの言葉に、新人は自分の耳を疑う。「どういう意味です？」

「私が喋るだけじゃ不公平じゃない。若いんだし、何かあるでしょ。ほら、常に命の危機に晒されると恋愛感情が芽生えやすくなるとか、話に聞いたことがあるし」

「僕は……」

誰かを好きになったことなんて無い。その代わり、嫌いにもなら

ない。何故なら、人のことを知りたいという根源的欲求が、欠如しているから。だが、失われたそれが、少しずつ蘇りつつあることも、新人は感じていた。

扉の内に閉じ籠り、自分を希薄化し続けることで周りに対応してきた生き方が許されなくなつて、一六特機隊の人々に出会つた。周囲と自分を一体化させるだけでは、生と死が交錯する戦場で戦うことはできない。それでいいのかと自分に問い続け、現在に対するなし崩しの肯定を否定しなければ、生き残ることはできないと学んだ。嫌いな、苛立たしい敵にも出会つた。信頼できる相手も得た。ならば誰かを、好きになることもあるのだろうか。例えば。

脳裏に、一人の少女の横顔が浮かんだ。負の感情のままに戦うことしかできなかった彼女が見せた、あの時の笑顔。以来、自分に向けられる真つ直ぐな眼差し。新人にとっては、初めての友達でもある彼女。

「馬鹿馬鹿しい！ そんなの寝言だ、世迷言だ！ 僕には、そんなものありはしませんよ」

「あら、残念。だけどね、一応人生の先輩として言っておくわ」憮然とする新人にウインクを向け、彼女は言った。「自分の感情を信じなさい。大人になつて、後悔したくないのなら」

つまり、彼女は後悔しているのか。自分の感情を信じられなくなったことに。分からない方が幸せだったと、後ろ向きな自己否定。大人になることがそんな悲しいことだなんて、新人は思いたくなかった。

（じゃあ僕は、どうありたいんだ？）

どんな成長をしたいのか、どんな大人になりたいのか。なりたくない形は即ち親の姿としてはつきりしていたが、自分がどんな人間を理想としているのか、考えても、簡単に答えは出そうになかつた。

もしも、違う親の元で育てられていたら、理想を導くことができただろうか。今こうして、戦場に身を置くという結果は同じでも、違う過程を経ていれば、三宅新人は新人で無い誰かだったのだろうか。

か。望む未来を持ってない人間に、未来は、あるのだろうか。

コクピット内に、断続する電子音が鳴った。自動走行を止め、通信回線を開く。モニタの一角にウィンドウが立ち上がり、白黒の砂嵐が酷い映像の中に、美琴の姿が見えた。

「何かあったの？」

一瞬前までの思考を全て追い出し、新人は尋ねる。彼女は、数キロ先を先行し、民間人を乗せている後方の新人機に、安全を確保するために入念な索敵を行っているはずだ。何もなければ、わざわざ通信など送ってこないのが、美琴のスタイルだ。ならば彼女が、わざわざこちらにコンタクトを取ったということは。

『後退して、新人！』

「え？」

いつに無く切羽詰った様に困惑する間も無く、もう一つ通信ウィンドウが立ち上がり、これも先行しているヒールレイスの顔が映し出された。

『ヤバイのがいる……。今、こっちの観測機で取れたデータを送るよ』

『ヤバイのって、どういうことだよ、ヒールレイス！』
マイストの声が通信に割り込み、三つ目のウィンドウが立ち上がる。距離が近いせいか、黒の操縦服に映える金髪の映像は、先行している二人のそれより遥かにクリアだ。

受信完了の表示が踊り、データが次々と展開される。遠距離からの敵砲撃、速度、熱量、計測不能。周辺の地形・気候情報。立体地図に重なる、予測敵位置の赤い表示。そこから導き出される、敵射撃の到達可能範囲。美琴とヒールレイスの機体の現在位置と、新人とマイストの現在地の関係図。そして。

「何だ、これ……」

転送されてきた静止画像に、新人は息を呑んだ。

何かの着弾痕であることは間違いない。赤茶けた地面に、歪んだ円形のクレーターが穿たれており、外延部や表面の土は焦げ爛れて

いる。それだけなら、良くある榴弾の着弾痕だが、異常なのは、その大きさだ。瞥見するだけでも、優に直径五メートルはある。HAL用火器でできるようなサイズでは無い。

『なんだあ、こりゃあ……。何を撃つたら、こんなもんか？』マイストも驚嘆の声を上げる。

『これが敵の第一射。お陰であたしらは身動きとれずに岩に張り付いている。だけど、あの威力なら、岩盤くらい貫通するかもしれない……』

「今、救援に！」

『バカ、来るな！』通信画面を叩きながら、美琴が叫んだ。『ノコノコ出てきて、狙い撃たれたら一巻の終わりよ！HALの装甲でも、あんなの喰らったら保たない！』

一歩踏み出した姿勢のまま ストライクリザード を静止させ、新人は呟く。どうする、と。どうすればいいのだ、と。彼女らが何もできぬままに撃たれるのをここで座して見るか、二人の下へと進むべきか。

「くそっ！」

叫んでも、状況は何も変わらない。着弾クレーターの画像をもう一度睨み、唇を噛むことしか、新人にはできなかった。

#3 困惑をもたらすもの・4 (後書き)

次回更新予定 三月二二日

#3 困惑をもたらすもの・5

「少々出力が強すぎたか」

砲身冷却、最充填までの所要時間表示を睨み、エドゥワーズ「ヴイン・ライガスは呟いた。

愛機のベルキャットは匍匐狙撃姿勢を取り、剥き出しの岩盤からなる丘陵と崖の上に、溶け込むようにして狙いを定めている。四つの眼は絶え間なく動き、岩陰へ逃れた二体の敵機に動きが無いが、淡々と監視を続けていた。

ジョニー・メイフェンを倒した部隊。かの男を認めるつもりは無いが、それなりの評価はしなければならぬ、と彼は思う。現に、こちらの第一射は命中しなかったのだ。二機、何れも頭部の使用が通常とも異なるタイプだが、一方の機体が特に動きが良い。肩に爪痕と、算用数字で三のマーキングを施された方だ。もう一方の六番を振られた方が無防備に接近しようとするのを押し止め、結果、予測位置をずらされ命中しなかった。

全ては敢えて、だ。別の二機のベルキャットを差し向け、激しい交戦はさせずにこちらへ引き込み、車両群や多数の仮設テントを見せることで、只ならぬ雰囲気と、今すぐこちらを潰さなければならぬという焦りを与える。発見されるのが、都合の悪いことだという演出。そして敵をおびき寄せ、攻撃する。

だが、この敵は安易に接近しようとしなかった。一方は未熟だが、一方はかなりの熟達者。

「第一六特殊機甲中隊……相手にとっては、不足無い」
充填はまだ終わらない。興奮と、苛立ちを同時に抱きながら、エドゥワーズは愛機が抱える砲へと視線を向けた。

性能試験用レールガン・ライフル。本来新型に搭載する予定だったものを、切り離してベルキャットでの運用も可能なように改修したものだ。

弾体加速に必要な莫大な電力は、制式型では弾丸と一つにパツケーディング、カートリッジ化される。だが今回は、外部から電力供給を受けている。連なっているのは、そのための車両だ。加えて、本体の動力炉とも接続し、電力を送り込んでいる。そのため、今の彼のベルキャットは、身動きが取れない。

だが、動く必要など無い、とエドウワーズは呟く。レールガン・ライフルでなくとも、敵の一機や二機、発見されるより早く狙撃で仕留める自身が、彼にはある。なぜならば彼は、帝国近衛騎士団一の狙撃手として、名を馳せる男であるからだ。

国内でも指折りの名門であるライガスの家に生まれ、幼い頃から自分は騎士になるのだと、信じ、信じ込まされて彼は育った。皇家のために剣を振るい、帝国のために死ぬことこそが、自らの存在意義なのだ、と。二人の兄と共に剣技を競い、学に勤しみ、そしていつかは、絢爛たる近衛騎士団の紅衣を纏い、国と主君のために剣と命を捧げる日が来るのだ、と。

だがその一方で、自分は三男なのだ、という思いも、彼を苛んだ。常に兄らと比べられること、兄らは越えられないということ。血や家に対する責任など、自分が負わなくとも兄が追ってくる、だから自分はもつと他の生き方を探してもいいんじゃないか、という欲望が、思春期に差し掛かるにつれ、彼の心を支配していった。

しかし、自分の生まれは変えられない。たった一人の小さな力では、望まない今を追認することしかできず、違う未来など、得ることができない。そして彼は絶望し、やがては変わりたいと思う心さえも、失われてしまうのではないかと脅えた。

そんな彼を変えたのが、子供と呼んでも差し支えないほどに幼い一人の少年との出会いだった。時に、エドウワーズ・ライガス一六歳の誕生日。一度目の階級選択を迫られる、即ち、どうにもならない力の渦に、巻き込まれる日のことだ。

『なあ、君。僕の騎士にならないかい？』少年は言った。

『騎士？』

『ああ、そうだ。君は、自分の生き方を変えたいんだろう？ 何物にも縛られぬ、自由な翼が欲しいんだ。今を否定したいだけのために、逃げ出すために飛びたいんじゃない。高い空のに舞い上がって地面に這いつくばってでは見えない物が見たいんだ。たとえその結果、元の枝に戻るのだとしてもね。』

大人は誰でも、僕らが、単に今に満たされていないが故の下らない反抗をしているだけだって、決め付ける。だけど、選択の権利を……選択しようという意志すらも奪っておいて、そんなことを言うのは傲慢でしか無いんだ。僕はこれに憤りを覚えている。そしていつしか、飛びたいという意志までもが消えてしまっんじゃないか、僕が憤る大人と同じになっってしまうんじゃないかって、恐れてる。君はどうだい、エドゥワーズ・ライガス』

『どうして俺の名前を知っている？』

『君の姓は君が思っている以上に有名だということさ』

『そうだな……お前の言う通り、ライガスは名門だ。だが、有名だろうが無名だろうが、俺は俺なんだ。国家は選ぶことを許しちゃうが、人も、家も、血も、常識も、何もかもが俺が騎士以外を選ぶことを許さないんだ。騎士が嫌なわけじゃない。騎士しかないのが嫌なんだ。俺の未来は、俺以外の誰の物でもないはずなのに！』

『その通りだよ。君の未来は君だけの物だ。忘れちゃいけないんだ』
『偉そうに！ お前みたいなガキに、何が分かる！ 俺の心なんて、分かるはずが無い！』

『分かるさ』

『分からないね』

『いいや、分かる。恐らく、この地上で誰よりも……。僕の名前を教えてあげよう』少年は優しく微笑み、苦悶するエドゥワーズへ視線を向けた。『リイドウエルクタロイ・エスカータ。僕は、一六に満たなくてもミドルネームを名乗ることを強要される、唯一の階級……皇族の人間なのだからね』

そのときの戦慄を、五年経った今でも、エドゥワーズは鮮明に思

い出すことができる。紅の夕陽に染まる、銀色の髪。皇族に対しての礼儀を失っていた、ということさえ忘れさせるほどの、圧倒的な美貌。神か、天使か　醜い自分と同じ人間であるなどという考えが、馬鹿げていると思ってしまう彼の姿は、存在しているだけで既に、どんな絵画よりも彫刻よりも優れた、一つの芸術であるように、エドゥワーズには思えた。

『もう一度お願いしようかな。僕と君は同じものを求めている。自分自身の、他の誰かに定められた部分を変革することだ。だから、僕の騎士にならないか？　僕と君となら、やれるような気がするんだ……僕ら自身を、柵から解き放つことが』

身体が動くのを、最早止められなかった。五歳も年下の相手であろうと、躊躇いなど無かった。エドゥワーズは首を垂れ、少年の前に跪いた。

剣の代わりにその小さな掌が肩に当てられた瞬間を　ここそが自分の場所だと、人生で味わったことの無い充足と幸福に包まれた時を、忘れることはできない。ライド＝ロイのために生きたい、ライド＝ロイのために死にたいと、彼は心の奥底から願った。誰のためでも、誰に定められたわけでもなく、ライド＝ロイの騎士に。

「新手か……？」

唐突に鳴った警報に、彼は我に返った。索敵範囲内に新たな敵機、数は一。先刻の二機と、場所は程近い。レールガン・ライフルの、あれだけの威力を見せ付けられて尚、しかも単機で向かってくる敵。面白い、とエドゥワーズは呟く。

普通ならば、釘付けにされている味方はそのままに、後退して救援を呼ぶか、発煙弾の類でこちらの視界を潰して撤退する。だが、あの新たに現れた一体は、岩陰から周囲を窺いながらも、後退支援を行う様子は無い　こちらを、潰しに来ている。

照準レティクルの中央に、双眼の機体を捉える。その左肩に記されたマーキングに、エドゥワーズは思わず、頬が緩んだ。

「傷跡の七番……！」

ジョニー・メイフェンを倒した相手、リイドロイが『殺すな』とわざわざ言及するまでに執着する敵。よもやこの状況で、よりもよって傷跡の七番が向かってくるとは。余りの喜びに笑い声を上げそうになるのを堪え、エドウワーズは照準を今一度定め直す。

「面白い。実に面白い！ 貴様の力を見せてみる。果たして貴様は、リイドロイの騎士であるこのエドウワーズ・ヴィン・ライガスに、相応しい敵か？」

敵は三体。いや、実質一体。索敵範囲を絞り、出力も連射が可能なまでダウン。わざわざ姿を晒し、挑んでくるといふのなら、それに応えるのが騎士。殺すな、と命じられた。だが。
「手加減はしない。我が主君に、『殺すな』と言わしめるだけの価値があるのなら、それを証明して見せる！」

途切れた円と十字の、緑色の電子表示が、ロックオンを示すオレンジ色に変わる。今一度唇を歪め、エドウワーズは寸分の躊躇いも無く、引き金を引いた。

目の前に二つに分かれた道があるとする。自分は旅人で、ここは見知らぬ暗闇の山道。どちらを進めばどこに着くのか、全く分からない。右の道を進めば街に出られるかもしれないし、左の道を進めば、そこに道が続いていないことにも気付かず奈落へと落ちていくかもしれない。勿論その逆も有り得るし、どちらの道も街へ通じているかもしれない。ひよつとしたら、どちらも奈落かもしれない。

普通、選択肢は三つある。右へ進むか左へ進むか、引き返すか。だが、徴兵前の新人に尋ねたら、答えは違っていただろう。進みもせず、引き返しもせず、その場に立ち止まって朝を待つことだってできる、と答えたに違いない。闇の恐怖に眼を閉じ、風の過ぎる音に耳を塞ぎ、そしていつしか蹲り　どうなるのか。

朝を待たずに狼の餌になっているのがオチだろうな、と新人は嘲り笑った。今の自分なら笑い飛ばせる、笑い飛ばさなければならな

いと思う。

圧倒的な威力を持つ、姿の見えぬ敵砲にどこから睨まれ、身動きの取れなくなった味方機。さあ、どうする、と新人は呟く。行くのか、引き返すのか、立ち止まるのか。

まず、立ち止まる、という選択肢を消去する。幸運は、太陽が毎朝昇るようにはやってこない。ここで座して見ていたって、状況は何も変わらない。ならば引き返し、選択から逃げるか。それでは間に合わない。敵の第二射がいつかは分からない。威力によっては、ヒールレイスと美琴が遮蔽物にしている地形ごと吹き飛ばされることだってありえる。

ならば、選択肢は一つしか残らない。

「進むしか、無いだろう……！」

位置情報を更新、完全マニュアル走行へシステム移行。同時に、電波妨害が掛かったのか、前方の二機との通信が途絶する。パワー・レベルを上昇、戦闘時^{コンバット}へ。

「何、戦闘？ マズイ状況？」後ろで、サラのうるたえた声が聴こえる。

「ええ、かなり。打開するために、僕が敵陣地に突撃を掛けます」「勝手に決めんな」

肩に軽い衝撃が走ると同時に接触通信回線が起動。いつの間に接近していたのか、首を捻れば直ぐ目の前に、マイスト機の、額にセンサ部が追加された特徴的な頭部があった。

『民間人乗せてるってこと、忘れたのか？』

「まさか。無策に突っ込むわけじゃありません。ちゃんと、考えはありますよ」

『何い？』

「現在の不利は、敵兵器のスペック……連射性能や命中精度等が全く分からないからです。おまけに、敵の位置さえハッキリしない。でも、逆に言えば、それらが全部分かれれば打開できます。ならば、どうすればいいのか、答えは一つしかありませんよ」

そう、選択肢は一つしかない。敵にいつ何時撃たれるかも分からない先行二機は動くわけにはいかない。そして、敵位置を知り、敵射撃の性能を知るには。

『お前が困になって、敵に無駄弾を撃たせる。そして位置を割り出した上で、俺が敵の予測索敵範囲外から狙撃して、仕留める。こういうことか？』

「そうです」

『バカ言うな！』マイストが、いつに無く語気を荒げた。『自分の立場を、技量を、キャリアを考へる。お前は、本格的な戦闘はまだ三度目……HALに乗り始めてからだって、殆ど時間が経っていないだろう？』

「時間が問題なんですか？」

『自分の能力を……自分自身を知らない奴が、偉そうな口を聞くな！』

そう怒鳴ったマイストの声に、新人は一瞬、身体を硬直させた。同じ言葉、同じフレーズ。ジェズイットが語った物と全く同じ理念を、彼は説こうとしている。即ち、お前がそう思うのは若さのせいだ、青臭い理想論に過ぎないのだと。

「じゃあ、他にどうしろって言うんですか！？」

『そんなに死にてえのか？』

だがそのために悩むことができるのもまた若さだと、ジェズイットは言っていた。青臭いと言って投げ捨てず、若さだと言って諦めるな、と。

悩むことすらせず、扉の中に身体も心も閉じ込めていた自分自身を思い返す。理想論も、自分を犠牲にしても何かをしたいという気持ちだが、あの時の自分にあっただろうか。勿論、無かった。

（だから、僕は今のこの衝動を、否定したくない）

掠っただけでも命の危険がある砲に敢えて身を晒してでも戦うことを選び、一番良い結果を掴み取ること。できないと繰り返す自分を、ここに置いておくわけにはいかない。

「自分を知らないのは若さかもしれない。だけど、愚かさだって、誰が決めたんです？ 勝手に限界決めて、できないって自分に言い聞かせる生き方なんて、もう御免だ！」

『自分の犠牲にそんなに価値があると、本気で思っているのか？』
「思ってません。だけど選択肢が無いなら、やるしかないでしょう？」

通常の外部観測機と狙撃用スコープ、三つの眼が新人を睨む。

止められることは、初めから覚悟の上だった。面白い、と言って多少の無茶でもやってしまうような人間なように見えて、本当の彼はそうではない。戦う自分を肯定しているわけでも、戦争を楽しんでいるのではない。逃げ続けて、たまたま辿り着いた先がここだっただけの、本当に普通の、小さな男に過ぎないのだから。

だが彼には技術がある。経験がある。新人にはできないことができる、力がある。

(僕と彼との違いは、そこだ)

新人にも、マイストにも、戦う理由なんて無い 戦場なんか、似合わない。だから彼は、戦うことに理由を付けた。

『限界を決めちゃ駄目だとか、可能性を試すだとか、英雄みたいに戦うとか……俺だって、そうやって自分を納得させて戦争やってる時もあつた。丁度今のお前みたいにな』

「僕は！」

『違うって言うのか？ だからお前は少年なんだよ。そんな綺麗な見てくれに、酔うんじゃないよ。それじゃあお前自身がスタスタに傷つくだけだ』

英雄的でありたいという願望なのだろうか。理由も無く戦うために、理想という見た目の良い概念にしがみつき、自分自身を痛めつけているだけなのだろうか。

違う、と新人の中で誰かが答えた。理由ならある。凝集していないだけ。まだ、はつきりと形を取っていないだけ。きっとそれは、新人も、マイストも同じなのだ。

「僕が少年ですらなかつたように、あなたは酔いから醒めたのかも
しれない。けどね、そんなの……格好悪いですよ、マイストさん。
僕は、あなたのそんな背中は見たくない！自分を騙して、理由を
付けて、何が悪いんです？騙して騙して、騙し続ければ、いつか
本当になる。未来を覗き見ることのできる人間なんていないんだ。
騙さなきゃ生きていけないんだ。それさえせずに、何もできない今
をそのまま受け入れることが、大人なんですか！？あなたも大人
なら、僕に……」肩に置かれたマイスト機の腕を振り払い、新人は
叫んだ。「男の背中つてやつを、見せてくださいよ！」

接触通信回線が途絶。同時に、最大出力で機体を駆動させる。一
歩、二歩、三歩。マイストは追ってこない。最高速度で、景色が後
ろへ流れていく。

「言っじゃない、少年のくせに」シートのおすぐ後ろ、殆ど耳元で囁
くように、サラ・ウエインが言った。

「少年だから、言うんです。それに……」

「それに？」

「彼女を見捨てるわけにはいかないんです」

自分を駆り立てるのは、結局のところ彼女なのかもしれない、と
新人は嘆息する。隣にいてもいなくても、美琴の存在に行動を常に
後押しされているのは間違いない。なぜ、どうして？

灌木を踏み潰し、膝ほどの高さの岩場を飛び越え、ストライク
リザードが疾駆する。向かう先も、狙うべき標的も見えない。だ
が走るのを止めたら、狙い撃たれて地獄行き。もう天国には行けな
いだろうな、と新人は呟く。何機のベルキャットを落としたの
か、何人殺したのか、もう思い出せない。

「マイスト、大丈夫かしら」

「彼の援護が無かったら、大丈夫じゃなくなるのは僕らのほうなん
ですけど。まあ、なんだかんだ言っても彼はやってくれると思いま
す。彼、男ですから」そして僕は少年だ、と呟く。

「そうね。あいつは口ではダメ男を演じるけど、いざとなったらち

やんとやってみせる。そうじゃなきゃ、私も付き合ったりしなかったもの」

「話はそこまでにしましょうか」

大まかな敵予測位置から算出される射角、射程圏ギリギリのところで、新人は機を停止させた。メイン兵装、七ミリ榴弾・散弾砲をアクティブに。背丈より少し大きい位の岩陰から、頭部観測機群と銃口を恐る恐る突き出す。すぐ目の前に、第一射でできたらしいクレーターがある。

やや離れた場所から、銃声が聴こえる。ベツカード社製の三九ミリアサルト・ライフルに特徴的な、タイプライターを叩くのに似た発射音だ。女性陣二人は彼女達で交戦中、つまり、直接援護は期待できない。

センサからの情報がモニタに表示される。風速、気温、熱反応。

「ちつ……地面からの熱放射が！」

時間は、朝の八時になるうとしていた。東の空の太陽は、ちょうど朝焼けの時間を終え、いつもと代わらぬ灼熱へと転じるところだ。

乾燥地帯は一般に、昼夜の気温差が大きい。地面から熱が奪われるのを防ぐ物も、太陽光が地面を熱するのを阻む物も存在しないためなのだが、この影響で、昼夜が逆転してすぐの時間帯は、熱センサが余り役に立たない。温度差を持った空気の局地的対流が激しすぎるために、HAL、あるいはMAIの発する熱量が、有意差として検出されないのだ。

同時に、狙撃の難易度も否応無しに上がる。温度も密度も異なる空気の渦が、天然のレンズとなって光を屈折させ、狙いを逸らさせるためだ。

だがそんな不安をよそに、サラがあっけらかんと言った。

「マイストなら、大丈夫じゃない？」

「そうですね」

口元を緩めながら、新人は応じる。マイストには技術がある。力

がある。きつと、信念もある。背にする存在だって、あるのだろう。だから彼は、引き金を引けるのだ。

いつか、自分もマイストのように戦えるのだろうか。そう思っ
て計器類を操作し、そしてその姿勢のまま、全身の動きが凍り付いた。

（何だ、これ……）

何かが変わる瞬間の、あの言い様の無い感覚。剥き出しの舌が神経を撫でるような、胃の中で小人が暴れているような。このままここにいては駄目だと、吞まれてはならないと、新人の直感が警告する。

流れ、だ。この世界にある、確かな流れ。新人が、いつも自分を同調させてきた物。従えば、一番楽に生きていくことができる、得体の知れない力。何かの現象が起こり、何かが転換するとき、この流れは必ず変わる。そして新人はそれを察知することで、今まで生き抜いてきた。

こうすればいいと、漠然と分かるときがある。母が奇声を上げる一瞬前に、彼女の視界から消える。父の視線に貫かれる前に、扉を閉ざす。ナチュラルの手がこちらに揃うとき。次の一枚が二を生むとき。二枚交換でツー・ペアがフルハウスに変わるとき。弾かれた玉が、00に収まるとき。

だが今は、この流れに乗っては駄目だ、と新人の中で、誰かが叫ぶ。それは少年である自分なのか、少年ですらない自分なのか、それとも他の誰かなのか。首筋から背中まで、噴出した冷汗が肌を伝い、操縦服の衝撃吸収素材に吸い込まれる。そして新人は。

「歯、食い縛ってください」

「え？」

「跳びます」

両脚のSMCFを最大駆動。生み出された力が超非晶体金属のフレームを動かし、バネのように全身が屈曲して ストライクリザード が物陰から躍り出す。そして一瞬、まさに刹那の間を置いて、

背後に莫大な運動量が爆着した。

後方から突き刺さる熱風、石片が装甲を叩き、円形に削り取られた岩盤を見て舌打ちする。さすがの威力。だが。

「外したな……」

ややあつてから、新人はほくそ笑んだ。

訓練の最中に聞いた、ファーストアプローチは確実に、という言葉の思い出す。裏を返せば、初手を躲すことができれば、こちらの大きな有利になる。

完全なランダム、自分自身でも予測できない、本能が生み出すアルゴリズムで、ストライクリザードが大地を蹴る。両足のスパイクが削った岩盤が一メートルほども跳ね上がり、まるで遠方からの射撃が追いかけているかのような。それほどまでのパワー、それほどまでの速さ。高速機動戦闘において、市街戦仕様の右に出るものは無い。

前へ、前へ、前へ。そして爪を減り込ませて急停止、制動尾が撓って重心補正、転倒しそうな慣性を打ち消す。そして右へと跳ねる。敵第三射、着弾。HALの全身を呑み込むほどの火柱が上がり、再び巨大なクレーターが穿たれる。

敵位置算出　その余裕は無い。意識は全て駆動へ。それでも尚直感のままに銃口を向け、発砲。標的を知らぬ榴弾は、崖の中腹に着弾し炎を上げた。

「外れたっつていい……!!」

撃てば相手へのプレッシャーになる。プレッシャーは、射手の集中を妨げる。そして今、敵に弾丸を命中させるのは、新人の役割ではない。

来る、と呟き　ストライクリザードの両脚へ全力の力を込め、重心をやや後ろへ。イメージするのは、自在に大地を駆ける、自身。荒地戦仕様よりも、より人の形に近い機械蜥蜴は、手元の操作だけでなく、B2システムによる補正を強く受ける。

(市街戦仕様は、僕に向いている!)

なだらかな衝撃と共に、視界が逆転する。そして爆炎。だが、ストライクリザードを着弾の衝撃が襲うことは無い。

八・二メートルの巨体が、後方へ鮮やかな宙返りを決めていた。そして爆風を受けながら制動尾を振り、空中で体勢を移行する。関節負荷が最小限の、しなやかな猫のような動物にも似た機動で着地。即座に、左方へ再度の跳躍。

(まだか……)

敵位置特定は。こちらからの砲撃は。マイストは、まだ動かないのか。

敵の射撃がこちらの動きを読み切るかもしれない。加えて、いつまでもこんな無茶な機動を続けられるものではない。敵砲撃による損傷は皆無だが、ダメージコントロール画面には、着実に積み重なる各部への負担が赤文字の警告となって発せられている。

「耐久性は問題ないけど、過熱と電気容量が！」

熱排出機構にも、限界はある。主に脚において、SMCFの性状変化や電子回路の破損を防ぐために、圧熱転換機構が一定時間以上連続駆動し、単位時間当たりの発熱がある一定の許容量を越えると、安全機構が働き駆動が停止してしまう。前述の熱限界は、フレームの耐久限界にも数値が接近しており、そのため、熟練の操縦兵ほど、機体に負担を掛けないために、排熱効率を強く意識した戦いをする傾向にある。

だが今の新人は、そんなことを考えている余裕は無い。とにかく全力で回避することしかできない。

残弾数を眼の端で確認しながら、少しでも確からしい方へ銃口を向けてトリガーを引く。見えない標的的中することは無い、文字通りの無駄弾。だがそれでも、撃つことには意義がある。

後方へ跳躍したところへ、再び着弾。一秒でも動作が遅れていたら、あの炎の渦の中に巻き込まれていた、と新人は思わず身震いする。着地と同時に脚部のあらゆる関節から、緩衝剤と高温蒸気の入り混じった白い煙が一斉に噴き出す。そしてまた、全スペックの限

りを尽くした跳躍を行おうとして　後ろから聞こえた小さな呻き声に、新人は踏み込みかけた足を止めた。

「サラさん!？」

大声で怒鳴ったが、返事は無い。シートの後ろを振り返ると、繰り返される高速機動に耐えかねたのか、力なくハーネスに凭れかかったサラ・ウエインの姿があった。

しかし、彼女に構っている余裕は新人には無い。心の中で小さく詫び、無理矢理に回避運動を取ろうとした。右、膝パネルと足ペダルの角度調整、両腕は大きく振って姿勢制御、進む先と今いる位置の明確なイメージ、補正を経て　ストライクリザード　が大きく足を踏み出す　はずだった。

機体は動かなかった。二度、三度と繰り返しても、結果は変わらない。

「何だ!？」

一瞬遅れて、エラー・メッセージ。赤い文字の表示に続いて全身の模式図が表示される。

右脚の蓄電量が、完全に底を付いていた。

動力炉は八〇時間以上の連続稼動が可能だが、常に無尽蔵の電力を使用できるわけではない。激しい戦闘を繰り返して、形状記憶カーボン・ファイバーの駆動に多量の電力を喰われれば、一時的に容量が追いつかなくなることもある。今が、正しくその状態だ。

足下の岩に、右足が躓く。制動尾のみでの復帰は不可能。左膝を着き、両手で機体を支えてどうにか転倒は免れるものの、再充填までの一〇秒にも満たない間は、強力な砲に常に狙われ続けている今、即ち死を意味すると言っても過言ではなかった。

やれる限りはやった、と呟く。最善の策で、最善の行動で、自分の力の及ぶ限りのことはやった。ならば後は、待つしかない。

「必ず誰かが認めてくれるとか、神様はいつでも見ているだなんて、現実とかけ離れたメルヘンを信じるつもりは無い。だけどね、どうすれば良いのか、どうなれば良いのかは分かっているんだ。未来が見

えていれば、自分を傷つけた痛みなんて、感じないんだ。今のあなたはそうなんでしょう、マイストさん？ あなたは大人なんだ。だから僕らはあなたを信じられるんだ」

ストライクリザードの頭部が動き、予測敵位置のほうをランダムにフォーカスする。揺らぐ空気、降り注ぐ日差しの中 何か、光を反射して煌いた。即ち、敵はそこにいる。動きを止めたこちらを仕留めようとしている。見つけた、と新人は呟く。

巨躯を揺らしてライフルを照準する ベルキャット、コクピットに座る何者かの瞳にロツクオンの表示が反射する様、そしてトリガーに掛かった指。遠く離れた こちらの射撃が届かぬほどの位置なのに、その全てが手に取るように、まるで目の前で繰り広げられている光景のように、新人の頭の中を過ぎった。

来る、という予感。何もなければ数秒後には死んでいるという確信。一方で、何かがあるかもしれないという小さな期待。向けられた銃口に対し、信じるという言葉も行為も、こんなにも儚く弱い。

そして一瞬、全てが静止した。呼吸も、ストライクリザードの全ての駆動も、吹く風も流れる雲も、突き刺さる日差しさえも。

あるのは光。空を裂き、全てを貫く一筋の弾丸。それが、ここへ向かえば これに着いて行けばいいという導きのようにも見えて、新人は小さく笑った。

「やっぱりあなたは最高だ、マイストさん」

対物スナイパー・ライフルの発射音が耳を劈き、入り組んだ崖や岩場の一角に、小さな炎が上がった。同時に、流れが変わる。歩みを押し戻す方向から、前を見る者の背中を押し軽やかな物へ。命中、これ以上無い完璧な狙撃だ。

不意に通信が入り、スイッチをオンに。途端に、歓声 自らの力を示した男の雄叫びが聴こえた。

『どうだ！ 少しは俺を見直したか？』

「あなたなら、やってくれると信じてました」

『俺は、信じるに足る大人かい？』

「僕はそう思います……あなた自身が、どう思っていようとも」
「……そうかい」

そう言つて、マイストは口を嚙む。音声のみの通信でも、彼がやれやれ、と肩を竦める姿が目には浮かんだ。女と向き合うことすらできない男、生身で人を撃つたことすらない曹長、こつやつて相手に尋ねなければ、自分が大人であると認めることすらできない大人。そんな自分に呆れて、彼はやれやれ、と言つのだらう。

ならば彼を認めれば良い。彼の才や技術ではなく、存在を。子供が認めることで大人は大人であることができ、女が認めることで、男は男になる。きつと、そういうことなのだらう、と新人は溜め息を吐いた。

『撤退する。お嬢様方に通信、頼んだぜ』

「僕がですか？」

『俺は疲れた。きつとあの娘は、お前の言葉を待つてるぜ……少年』
そのちよつとの皮肉と、僅かばかりの嫉妬と、大きな優しさを包み込んだ『少年』という言葉に 新人は、安らぎを覚えた。肩に張っている力が抜けたのが、自分でもはつきりと分かった。やつぱりあなたは大人だ、と呟く。

「待つてるつて……あなたも、そうなんじゃないですか？」

シートの後ろで失神しているサラ・ウェインの方へ眼を遣る。目立った外傷も、どこかにぶつかったような痕も無いことに安堵しながら、新人はマイストの「やれやれ」という声を聞いた。

『違うんだよ。俺達はもう終わつてる。お前には、まだ分からないだらうけどな』

どんな生き方をしてこようと、やはり自分は、どうしようもないほどに少年なのだ。朝の日差しに身を晒し、新人は、何かの転換と始まりを思った。

#3 困惑をもたらすもの・5 (後書き)

次回更新 二週間後

#3 困惑をもたらすもの・6

当てなかったのではない。当てることができなかった。

未だ掌に残る震えを抑えながら、エドゥワーズ「ヴィン・ライガスは額の汗を拭った。

確かに、彼の主君に命じられていたからこそ、初弾は敢えて命中しないように、敵が動き出した直後を狙って足元へ撃ち込んだ。だが、二発目以降は違う。かつて見たことの無い、畏怖さえ覚えるほどの高速機動。コンマ一秒先の位置すらも予測できない、完全な乱数化。あんな動きの出来る人間は、一体どうという訓練を いや、精神の構造をしているのだ、と彼は訝しむ。

訓練云々で発現する程度の問題ではない。B2システムを搭載した兵器であるMAIや、共和国で言うところのHALでの戦いには、多分に人間の内面が影響する。時に性能差よりも技量差が重視されるのと同じく、人型の兵器に特有の現象なのだが。

「余りにも、異質だ！」

動きが余りにも完全で、一部の隙も無い。まるでロボットではなく、疾走する生身の人間を相手にしているかのようにも思えた。それも、常人より遙かに運動能力も持久力も高い。ロボット兵器

ベルキヤット でも ストライクリザード でも構わないが、宙返りなどという常識外れな機動をやってみせた人間が、かつて存在していただろうか？ 答えは否だ。それほどまでの機体との一体感や、そんな機動を行おうという意志は、一体どこから生まれるのか。明らかに異常で、意志に反する恐怖が芽生える。

だがどうして、自分は恐怖しているのだ、とエドゥワーズは問う。その動きの凄まじさ故なのか。或いはそれとも、一発たりとも命中させることのできなかつた事実を正当化し、狙撃手としてのプライドを守るためか。

「両方だな……」

スコープ越しに見ているだけで肌が独りでに粟立つほどの、鬼神の如き機動、そして、完全な敗北を認めることができずにこうして唇を嚙んでいる自分自身。恐怖し、恐怖する自分を疑い、そしてさらに自分を疑わせる存在を恐怖する。無限に続く螺旋の中に閉じ込められたかのような感覚に、さらにもう一重の恐怖が覆い被さる。そして狙撃手と標的の戦いのみならず、彼は狙撃手としても敗北した。

ベルキヤット の掌中には、正面から銃身を撃ち抜かれたレールガン・ライフルがある。索敵範囲を絞っていたとは言え、こちらが完全に認識していない位置 優に二〇〇メートル以上の距離で命中させられたことになる。HALやMAIが、必ずしも操縦者の身体と同じように動くわけではないことを考慮すれば、奇跡と言っても良い。

面白いじゃないか、と彼は呟く。帝国内で並び立つ者がいない程の狙撃手である自分の弾丸を躲す敵、そしてその自分を、ともすれば上回る技量を持っているやも知れぬ敵。恐怖を押し込め、代わりに沸き上がってきた闘志を、彼は深呼吸して抑える。

今、撤退行動に入った彼らの背中を突くこともできる。ライフルは破壊されても、機体自体に大した損傷は無い。邪魔を入れられなくなかったので最初の二機へ差し向けた手勢も、まだ十二分に戦える状態だ。

だがエドウワーズは、通信機をオンにして言った。

「全機……追撃は一切行つてはならない。速やかに後退、然る後に撤収する。レールガン・ライフルの実用性は、十分に証明できた」
すぐに、方々から抗議の声が上がる。主に、実際に交戦した数機だ。まだ戦えるというのに、みすみす敵を、しかもこちらの試作兵器をピンポイントで破壊した相手を逃がすことには納得できない。

だがエドウワーズは、そんな彼らを愚か者、と一喝する。家の名、騎士の階級は、時に役立つこともある、と自虐しながら、彼は高ら

かに宣言した。

「敬意を払え。特にかの傷跡の七番と、番号知らずのスナイパーに。ヴィンの名にかけて認めよう。彼らは、我らが皇子と来るべき『天馬』に、相応しき敵だ」

自分に何ができるのかを、真剣に考えたことなんて今まで無かった。きっとそれは目の前にできないことが多すぎるのと、何もできない、という答えを突きつけられることが怖かったのだ、と新人は思い返す。無根拠にやれると叫ぶか、駄目だ駄目だと俯いて、扉の中に閉じこもるか。

だが、本当に何もできない、無価値な人間なんてこの世に存在しない。誰も、自分を知らないだけに過ぎない。ジェズイットはそれを評し、若さと言った。

結局、新人の機体には傷一つ付いていなかった。飛び散った岩盤の破片を浴びた、ごく小さな傷ならあるものの、統計上では一割に満たないという無傷での帰還を成し遂げたことになる。よくよく考えれば凄いいことをやったのではないか、とぼんやりと思うことはあれど、自分に何かができた、と考えることは、それこそ煙草の煙を掴もうとするようなもので、捉えきれぬ思考は風に吹かれて消えていく。

だが目の前でハンガーに固定されている自分の ストライクリザード に、定期点検以上の修復は一切不要だった、というのは確かな事実なのだ。整備用に関節を真っ直ぐ伸ばした姿勢なので、一回り大きく見える愛機を見上げ、新人は腕を組んだ。

戦えば、毎度毎度傷だらけになって帰ってきた。今戦う自分をなし崩しに肯定することで心に刻まれる傷、それとも、力を持たないものが、それでも何かを変えようと、どうにもならない大きな力に挑もうとして作った傷か。良く戦場から逃げ出す気にならなかつたな、と新人は苦笑いを浮かべる。

傷つき擦り切れ、それが癒える過程にこそ、成長というものがあ

る。あの日　初めて　ストライクリザード　に乗って戦ったとき、ジエズイットはそう言っていた。確かに、技量はそれなりに上がったかも知れない。傷を負わずに帰ってこれたことが証してくれる。だが。

（技量じゃない、僕の心は、成長しているのか？）

自分は、昨日と違う誰かになれているのだろうか。立ち尽くす新人を見つけ、「仕事減らしてくれてありがとうよ」と声を掛けてきた整備兵に生返事を返す。

外面なんかではない。精神が変わらなければならない。あの、扉の中に閉じこもっていた子供のままで、いられないのだから。徴兵があるうと無かるうと関係ない。

社会の流れに適應する方法は二つある。一つは社会と同じ速さで自分自身も動き、成長し、変化すること。もう一つは流れの底に沈み、流されることを拒絶する代わりに一切の変化も拒絶すること。新人は、後者だった。

だが、小鳥が目にも止まらぬ速さで飛び回る虫を捕らえることができるのは、彼らもまた同じ速さで飛び続けているからだ。動かなくとも生きていけるのは、蜘蛛のような狡猾な存在のみ。愚かで、かつ変わらない存在は、淘汰され生きていくことさえ許されないのが、社会の摂理というものなのかも知れない。

（なら、僕の翼はどこから来た？）

やって、やれたということは分かった。ならば、何故できたのか。次々と降り注ぐ弾丸の雨を全て回避すること、確立上は僅か一割に過ぎない、無傷での帰還を三回目の戦闘でやってしまったこと。

うぬぼれるつもりは無い。だが、少し異常なのではないか、と新人は思う。何の訓練も受けていないのに戦ったことからして、そうだ。なぜできるのか。なぜやれるのか。自分の力は、どこから来たのか。

「なーに難しい顔してんのよ、新人」

肩を叩かれ振り向くと、美琴の姿があった。

「僕だつて色々考えることがあるんだよ。無い頭使つてどうするつて、君は言うだろうけどさ」

「おお、分かつてんじゃん。少しはこのあたしの複雑で機微に満ちた心を理解できたのかしら？」

「いや、君、どっちかというと単純で分かりやすいタイプだと思うんだけど……」

言い終わる前に、彼女の拳が新人の頭を小突いた。またあの、引き攣つた満面の笑みだ。

「折角お父さんとお母さんに貰つた命、もう少し大事にしたらどうなのかな？」

「うーん、あんまし良い親じゃなかったし」

「だからあんたは無茶なことばっかするの？」

彼女の語調が、一瞬で一八〇度転回した。つまりここから先が彼女の言いたいことであり、切り出すタイミングを虎視眈々と窺つていたことになる。そんなことを分析しなければ人と話すことすらできないのか、と新人は自分の性に幾度目かの吐き気を催す。

確かに いや、確認するまでも無く、これまでの戦闘で無茶なことをやらなかったことは無い。最初の戦闘も、ジョニー・メイフエンに挑みかかったときも、そして今度の、あの凄まじい威力の砲と対峙せざるを得なくなつたときも。

だがその理由は、と問われると、新人は答える言葉を持たなかつた。理由が無いわけではない。確かに、戦いへ向け走つていった時には確かな理由を持っていた。だが今になって理由を言葉にしてみようとすると、色々なものが絡まりあつて上手く纏めることができない。

「あんたまさか、またあたしがピンチだからって、無駄に気合入れたんじゃないでしょうね」

「うーん、どうなんだろう。良く分かんない。そういうの、僕の柄じゃないし、たぶん違ふと思う」

と、新人は思わず嘘を吐いた。絡まりあつた中に、彼女を放つて

はおけないという心があったことは事実なのに。『彼女を見捨てるわけにはいかないんです』と、確かにサラ・ウェインへは言ったのに。どうして、目の前の美琴には伝えることができないんだろう。

「まあどつちだつていいんだけど。あたしの目の前で死ぬのだけは止めてよね。後味悪いから」

「保証はできないよ」

「じゃあ約束はできる？」

何気ないその一言に、新人は思わず息を呑んだ。約束　生まれ
てこの方、約束なんて、したことがあつただろうか。勿論、無い。
親とそんな会話を交わしたことも無ければ、何かを約束できる友達
もいなかった。だから新人にとって、約束という言葉は、とても遠
くて手の届かない、夢の中で見る物のように思えた。

落ち着け、と自分に言い聞かせる。約束の間に要るものは信頼。
ならば自分と彼女の間には、それがあるということ　少なくとも美
琴はそう思っているということ。

頷いて良いのだろうか。自分は彼女の信頼に応えられるのだろうか。
か。下らない嘘ばかりで、彼女の真つ直ぐな眼差しを受け止めるこ
とすらできない自分に。

(それだけじゃない。待て。落ち着いて考えろ。死ぬのは止めて、
約束して。これじゃあ、まるで……)

「死地に赴く恋人を見送る故郷の女、といったところじゃねえか」
背後から現れたマイスト・リーズが、新人の思考を代弁した。や
はりこの人には敵わない、と新人は息を吐く。

「いよう、少年少女。ちゃんと青少年してるかい？」

「どこから見てたんですか、マイストさん」額に手を当て、新人は
言う。約束できるのかできないのか、選択を先送りできたことに安
堵しながら。

「お前が腕組みして難しい顔し始めたところから」

「つまり最初からじゃないですか！」

「言い換えれば、そうなるな」

「何しに来たんですか、マイストさん」再び一瞬で口調を転回させ、美琴が言う。

「サラが呼んでる。記念写真を撮ろうってさ」

親指で格納庫の扉を指し、マイストは笑った。

いつの間にか　と、いう表現が本当にぴったりだと思う。

七機の ストライクリザード は今、全機がメンテナンスを完了し待機状態を継続している。剣撃戦仕様のジエズィット機、マイストの狙撃仕様、情報収集能力に長けるヒールレイス機、それを真似た仕様の美琴と、仕様の方向性を決めかねている新人の機体。そして、異彩を放つ二機がある。

「光触媒染料を用いなかつた時点で貴様の負けだ。観念するんだな、シュミット」

「ペラペラ装甲に水色？　そんなの格好悪いですよ、松下さん」

またあいつらか、と新人の隣でマイストが溜め息を吐いた。四番松下の機体は高速格闘戦仕様、そしてシュミットは重砲撃戦仕様。新人は一度、彼らに命を救われている。だから忘れるはずは無い。無いのだが　目の前に並んだ二機の ストライクリザード は、何度目を瞬かせても『見覚えの無い』物へと変貌を遂げていた。

「いつの間に……」

確かに先日までは基本色のままだったのに、松下の機体は青に、シュミットの機体は砲基部までもが緑色に染まっていた。本来の ストライクリザード の基本色は暗赤だったはず、と他の機体へ目を遣り、自分の記憶が確かなことに、新人は安堵さえ覚えた。

「水色ではない、浅黄だ」

「対して変わらないじゃないですかー」

「ふん、森林地帯でもないのに趣味の悪い緑よりは余程良い」

「モスグリーン、って言うって下さいよね。砲撃戦っぽいでしょう？」

「無駄に目立って狙い撃たれるが良い、愚か者が」

「敵の射程内に入る前に全部潰すから問題ないですよーだ。 シュミット・スペシャルの火力を……」

既にサラ・ウェインはカメラを三脚に設置し、角度を調整しているところだ。一六特機隊の面々は、新人を含め殆どが既に集まっている。だが、シュミットと松下の不毛な言い争いは終わる気配を見せない。尤も、彼らの改造合戦は今に始まったことではないと、まだ一六特機隊に配属されて日の浅い新人でさえも理解していた。つまりこれもまた、ここの日常の一部なのだ。

ヒールレイスと美琴が、何か小声で話し合っている。それに興味を掻き立てられながらも視線を外した新人は、悠然とした足取りで人の群れに加わった最後の一人。カーバネル・A・ジェズイットを発見した。

途端に、中央にスペースができる。隊長の姿を認めた人々が、一斉に場所を譲ったのだ。余り権威的ではないが、尊敬されている羨望と、少しの反発が新人の心に入り混じる。

「俺の権限でカラーリングは許可するから、二人ともそう騒ぐな」
敢えて中央へは入らず、一番後ろから身を乗り出しながら彼は言う。
「遅くなってすまない。それと……」

傷跡の付いた左腕で、ジェズイットはそのスペースを指差した。
「その特等席はウチのルーキーに譲るとしよう」

ルーキーと言えば即ち、新人だ。幾つもの腕に押し出され、抵抗虚しく新人はカメラの真正面へと押し出される。ストライクリザードなら幾らでも回避できても、人の腕 心を躲すことはできない。いや、受け止めなければならないのだ。皆が何を思い、何故ここにいるのかを。

一人ずつ、少しづつでも良い。今までの人生でできなかったことを、取り戻せばいい。人のことを知ろうとする意志を持つこと。自分を止めずに、変わり続けること。そうすればいつか、周りにいる大人たちのようになれるのだろうか？

押し出されたスペースは、一人分にはやや広かった。もう一人く

らいは横に並べそうだ。だから新人は手を伸ばし、彼女を呼んだ。

「こつち来なよ、美琴」

「やだ。写真嫌い」

「そう言うと思ったけどさ。正直確信してたけどさ」

即答した、相変わらずの美琴に溜め息を吐きながら、新人は彼女の腕を引いた。

「いや、写真つてのは人間なんて下らない物撮ったって仕方ないってあたしは思うのよ。ほら、風景とか情景とか。もっと綺麗なものを保存するために……」

「いいからいいから」

「やだ。絶対やだ」

「ならば、その特等席を……」腕組みにニヤリと笑い、ジェズイツトが言った。「ウチの『ルーキー達』に譲るとしよう」

「うげっ」

「仮にも上官に向かって、うげとはなんだ」

大声を上げて笑うジェズイツトとはにかむヒールレースに背中を押され、彼女は肩を窄ませながら新人の隣に収まる。

「撮るならもつと早く言ってくればいいのに」

「え？」

「うっさい、バカ」

ぶつくさ言いながら、彼女は前髪を整え始める。

「で、できるの？ できないの？」

「え？ 何が？」

「さっきの話よ。曹長の妄言は忘れて」

再び腕を組み、新人は考える。いつ死ぬかも分からないのが戦場だ。だから、死なないだなんて約束はできない。生きたいと願ったところで、弾丸はそれを聞き入れない。いつか、もしかしたら、彼女の目の前で自分が死ぬことだっただってあるかも知れない。

「あたしの前から誰かがいなくなるのは、もう嫌なんだ。だから……」

……

だが、死なないかもしれないじゃないか、と新人は思う。自分を人間の屑と責め続ける隊長でも、大人であれない、戦場が似合わない副長でも、彼らと一緒になら、何だつてできる気がした。どんな負の可能性だつて吹き飛ばせると思った。

だから新人は、頷いた。

「できるよ。約束する。僕は、死なない」

「はい皆さん、撮りますよーっ！」

サラの大声に、新人はカメラの方へと視線を向ける。

信じ、信じられる相手がいる。もう孤独な、閉じ籠っていた子供じゃない。あの頃へはもう戻らないと、新人は強く誓う。

「ご唱和下さい……。二乗すると四になる数はーっ!？」

自分の力がどこから来たのか。懸念はあるけれど、一人で考える必要はない。幾ら乗しても変わらぬ一ではない。少なくとも隣には、彼女がいる。

「あ」

できたじゃないか、戦う理由。

パズルのピースがびったり填ったような、不可思議な感触。そして新人は、自らが、心に堅く降ろしたシャツターが、ゆっくりと開く音を聞いた。

二、と叫ぶ人々の中で呆然と口を半開きにした新人と、『プラスマイナス2』と答えようとしたマイストの顔だけが珍妙に写った写真が送信されてきたのは、ものの数分後のことである。

昔から、眼を見ればその相手が何を考えているのか、手に取るように分かった。自分に取り入りたいのか、自分に何かを期待しているのか、自分に何かをさせたいのか、自分を何かに利用するつもりなのか。だから、彼らが望む物を与えてやるのは、本当に簡単なことだった。

人の心とはこうも単純なものなのか、と幼い頃から彼は疑問に思っていた。底の見え透いた心は文字通りの浅薄で、そんな些細で軽

くて瑣末なことに懸命になる大人たち　ほんの子供に過ぎない自分に阿り諂う姿を見ては、彼は彼らを見下し、軽蔑し続けた。

そして大人はそれを見て、生まれながらの帝王であるとか、血に現れた王者の風格であると評し、ますます崇める。

「お前は孤独なのよ」傍らの女が言った。「完全な孤独。誰もお前を理解しない。お前が理解したいと思える相手もない。天に召されて久しい母、病床に臥せった父。所詮下らぬ事物に支配された心しか持たぬ下らない人間達。

壊したいと思う壁すら存在しない。越えたいと思う人間なんていない。それはお前が優れているから？　何て自惚れでしょう。ならば周囲が余りにも愚かだから？　まさか。愚かなのはお前？　それとも周り？」

「僕だ」

「ならばどうして周囲は何も変わらない？　お前が愚かでもどうにかなくなってしまふ世界は、愚かではないと言うのかしら？　人の集合体はカオス。その渦中に身を没し、変わらぬことで崩れかけの自分を保ち孤独に耐えているお前に尚、餌に群がる魚のように集る奴らは愚かではないとでも？」

「そうだ。僕はあらゆる感覚を殺した。そして周りに自己を溶け込ませて、相手の中へと入り込んだ。そうして心の中を覗く。相手の望むものを知り、与え、服従させる。例えば自らの心の裏切りに脅える男の抛り所となり、心だけじゃない、全てを捨てさせた。血筋と自らの願望、望まない今を肯定するしかなかった若者に生きる道を与えた。破壊の快樂に取り憑かれた男には再び戦う術を与え、彼の神になった。

何て醜い。何て汚い。時々、僕には人の心があるのだろうかと疑ってしまう。誰もが僕を、人智を超えたとか天上の存在とか、超越者のように扱っただけだね、彼らにそう思われる僕こそが、何より最も忌むべき存在なんだ。

まるで牢獄だ。僕の心が枷となって僕自身を縛り付ける。行いが

檻となつて僕を閉じ込める。閉ざされた世界の中で、誰よりも深い孤独と、誰よりも傲慢な心を持つて生き続けているのが、僕だ」
「ただど私はお前を認める。天上の存在を地上の女が認めたら、何になるのかしら？」

女の身体が、少年に覆いかぶさつた。視界が横転し、ベッドの天蓋が正面に見える。掌に触れる、サテン地の滑らかなシート。総絹の、薄紅に染められた豪華なそれは、滑らかでかつどこか暖かい、だが刺々しさはまるで無い、いつまでも包まれていたいと思う温もりがある。真に高貴な物は何でも、卑しさを寄せ付けない。

なら目の前の女は何なのか　彼が目を逸らし、広々とした室内に向けたとき、彼女が耳元で、生暖かい吐息とともに囁いた。

「どう思う……リイドウエルクタロイ・エスカータ？」

「僕は……」

部屋はこのベッドが五台収まってもまだ余裕が残りそうなほど広い。窓にはレースの、一目で模様を把握しきれぬほど凝つたカーテンが引かれており、その隙間から陽光が染み入って、部屋の中に影絵のような複雑な紋を作っている。僅かに開いた窓から風が吹き込み、模様が揺らぐ。

「僕は、あなたを認めない。認めるわけにはいかないんだ」

「あら、だったらどうして……」女の掌が、帝国第三皇子の頬を撫でた。「お前はこの場所から逃げ出そうとしない？」

「戯れが過ぎますよ……姉上」

彼は女　自身の姉の、ロンググロープに包まれた手を払い除けた。

「戯れれば良い。所詮生きることなんて、戯れに過ぎないのだから。生を愉しめない人間は、死んでいるも同じ」

「じゃあ今の僕は、死んでいるのかな」

「ならば私がお前に命を与えよう。この私、アリアネルアロア・エスカータが」

真紅のドレスに飾られた身体が揺れる。それがまるで、地獄へ繋

がる永久の眠りへ誘う振り子のように見えて、彼は唇を噛んだ。痛みよ、起これ。酔うな、眠るな、目を醒ませ。

命を与えるとは何か。その行為の甘美な誘惑を、ライド＝ロイは否定する。

「要らない……。僕の命は僕のものだ。僕の生き方は、僕が決める」

「そんな子供のような幻に、何時まで縋っているつもり？」

「幻だなんて、誰が決めた？」

「お前はもう、大人になっていいの。同じになればいい……。流れの中に、一つになればいい」

「それはあなたの主観だ、姉上。僕はそれを認めない……」

ライド＝ロイの口を、アリアネルアの唇が塞いだ。

嫌な匂いがした。上から侵食してくる、女という存在。唇を離すことも顔を背けることもできず、彼の中を、アリアネルアの舌が這い回る。頬を撫で、歯茎に触れ、唇を愛おしむように舐める。舌同士が絡まり合い、唾液の弾ける音が部屋中に響く。

彼女が吐息を漏らす。柔らかな刺激。その奥底に蠢く、この世の物とは思えぬほど醜い何かに、彼は耐え切れず身震いした。そして、両腕で姉の身体を押し返した。

「あなたは……。何を考えている？」袖で唇を拭いながら、半身を起こして彼は言う。

昔から、この女の考えだけは読めなかった。自分と同じ色の瞳を正視することすらできなかった。何をしても、彼女にだけは敵わない。だから、彼女にどう接すれば良いのか、生まれてからずっと、すぐ側にいら続けている存在だというのに、分からなかった。

だから、逃げることも拒絶することもできない。流されることしかできない。この歪んだ愛の形は、間違っているのだと、強く念じていようとも。

「お前は私の奴隷なのよ。心の底から、身体の芯から。お前に剣を教えたのは誰だ？ 機動装甲歩兵を与えたのは誰だ？ お前の……」

「黙れっ！」ライド＝ロイは叫んだ。激流に揉まれ、流されまいと

する者のように。「あなただ……。そう、全てあなただ。僕に剣を教えたのも、初めて剣を交えたのも……。僕がモビリティ・アーマード・インファントリで前線に立つことを許したのも、全てあなただ。僕の全てはあなたでできている。そうさ、僕はあなたが怖い。怖くて堪らない。僕を僕で無くするあなたが」

「だからお前は、私を拒絶できない。私を拒絶するとは即ち、お前自身を拒絶するも同じ。こうあるためにお前は生まれ、育てられた……。いや、私が育てた。血と運命と、私という女の奴隷であるべくしてね。」

お前は女を恐れているだろう？ その証拠に、従者も男しかいない。私がお前の側に女を送ろうとしたら、裏切り者や狂人を取り立ててまで自分の身を守った。全部、私がお前の中にいるからだ。お前の精神は、完全に私が支配している。私によって、お前は全ての女を恐怖する。ほら、ライド……。私を見てごらん」

言われるがままに、彼は逸らしていた視線をアリアネルアへ向ける。風が二人の間を抜け、影模様が揺れる。そして差し込んだ光が、女の瞳を、髪の色と同じ銀色に輝かせた。

「お前の瞳は私の証。お前の中には私がいる。幾ら忘れようともがいたって……。」女の両腕が、彼の華奢な身体を抱いた。「お前の身体は、私を忘れることができない」

アリアネルアの 女の身体が、ライド＝ロイの全身を擦った。肌蹴た胸元に肩が埋もれ、柔らかな感触に身体中が痺れる。腰を、頬を撫でる掌、絡み合う両足、髪を掻き分け耳に触れ、そして啜える赤い唇。スリットの深いドレスの下に、彼女は何も身に着けていなかった。

離れたい。なのに離れられない。肉体が、自分の意志の届かぬ遠くへ離れていくかのような錯覚に囚われ、彼は奥歯を噛み締める。

心が広がっていく。自分を埋没させ、今をただやり過ごすために。こうしてまた、意志が消えるのだ。抵抗する意志も、考える意志も。

「姉上……」

そう呟いた瞬間、全てが見えた。次にアリアネルアが何を言うか、彼女の手は、どこに触れるか。呼吸のリズムも、風が揺らす、蜘蛛の巣のようなレースの影も、何もかもが自分と一つに繋がった気がした。

二人の身体が折り重なってベッドに倒れ、女の左手が、リイド＝ロイの襟元に伸びる。そして、彼の胸元を彩る紅色のタイを解いて、彼女は言った。

「そんな呼び方は駄目。昔のように、私を呼びなさい。私を愛しなさい」

「アリア、姉様」

「そう……良くできました、私のリイド」

リイド＝ロイの身体が、一段とベッドに深く沈み込んだ。

(これが僕の檻。これが僕の枷。僕は……彼女から逃れられない) 受容したくない感覚を与えられる肉体を見下ろし、彼は思考する。籠の中の鳥、蜘蛛の巣に絡まった蝶、足枷を嵌められた囚人。ありとあらゆるモチーフが、一瞬の内に脳裏を過ぎる。ここから逃れたい。自由が欲しい。彼女からも、ロイの名からも、全ての柵から解放されたい。

そして少年は、ここから連れ出してくれる誰かを求め 天翔る翼を願った。

That's the end of #3, "Women, the Bringer of Puzzlement".

#3 困惑をもたらすもの・6 (後書き)

次回更新は未定のようです

4 翼のある使者・1

自分がこの世界に存在している必然は、一体どこにあるのだろうか、と時々考える。

世の中にはある一定の流れができていて、一人の人間がそれに逆らおうとしても、あっという間に押し流されてしまう。だから、流れには乗る以外の選択肢がない。そして厄介なことに、その流れというものは、自分が乗らずに横で佇んでいても、平然と流れていくのだ。機械ならば、歯車の一つが欠ければ途端に止まってしまう。

ストライクリザード だってそうだ。一つのパーツの不具合が、一つの駆動の遅滞に繋がり、そして戦場で足を止めることは死と等号で結ばれる。だが、多くの人々で成り立っている世界、世の中、或いは社会というものは、放っておいても動いていくのだ。自分が動かなくとも、平然と、何事もなかったかのように。

(……違うな。そうじゃない)夜の街を見下ろしながら、新人は咳く。

自分が社会を放っておいている 無視しているわけじゃない。社会が自分を無視するのだ。

(いや、それも違う)

社会が自分を無視する？ そんな利己主義が道理を得るはずがない。

無視するには、相手の存在を少なくとも認識していなければならぬ。意識して意識の外へと追いやる行為のことを指して、無視というのだ。だから、違う。

(僕はそもそも認識されていない。少なくとも、認識されていないから、無視されていたわけじゃない。いてもいなくても同じだった。だった。今は、どうだろう。一つの塵以上にはなれたのか？ 外れれば壊れる歯車の一つに、僕はなっているのか？)

分からない。一人では分からない。だから人間は孤独を恐れるの

かもしれない。誰かが隣にいなければ、自分がいる必然を確認することができない。孤独は自分の存在に対する確信を喪失させる。アイデンティティ。自分が自分であるという意識。歯車であるという自認、あるいは自惚れ。

ガラスに映る自分の姿は、相変わらずの陰鬱な雰囲気だった。軍に入る時に刈った髪も少し伸びて、今では耳にかかるくらいの長さになっている。顔はいつも通り。だが服装は、いつもと違った。

ネクタイがずれていることに気づき、新人は慣れない手つきで襟元を直した。色はえんじと焦げ茶を足して二で割ったような、中途半端な赤色。選べと言われて手が出たのは、慣れ親しんだ装甲板の色だった。

まともなスーツを着るのは、ほとんど生まれて初めてだった。一度、着たことがあるとしたら、学校の入学式くらいだろうか。一応、入学式には出席していた。皮の靴も履き慣れず、踵が靴擦れを起こしていた。姿勢制御用杭が欲しいな、と新人は思う。スーツよりもストライクリザードの方が余程扱い易いのだ。それが幸せなところか不幸せなのかは、さて置くとして。

見下ろす街では、無数の明かりが行き交っていた。当てもなく彷徨っているように見える光の粒たちにも、向かうべき、向かいたい場所が、きつとある。誰にでも居場所はある。待っている人がいる。孤独を消し去り、彼ら自身がこの世界に存在する必然を与えてくれる人の下へと、帰る。改めて言うまでもない、普通のことなのだ。新人は溜息を吐く。

ここは、共和国中西部に位置する都市で、名をアゴルテという。ピル・ソアテよりはやや内陸。帝国との暫定国境から離れた、東の首都寄り。に位置し、古来より物流や交通の一大拠点となっている。

このアゴルテという都市は、少し変わった成立過程を経ている。元々はアゴールとコルテという、二つの街だったのだ。新人は、部屋で一人読んだ歴史の教科書に記されていた内容を思い出しながら、

ガラス張りの壁面へ指を添わせる。視線の先には、この街を中央で二つに割る大河、ミーカースト川がある。北西から東へやや蛇行し、そして南へと流れていく。そのうねりの部分に詰まった砂利のように、川を挟んで二つの都市が生まれたのだ。いわゆる、双子都市だ。大河に幾つもの橋が架かり、やがて陸続きの一つの都市も同然となり、その状況を追認するかのようになり、アゴルテという一つの都市が誕生した。

西にピル・ソアテへと繋がる街道があり、北からは鉱床地帯由来の物流を司る鉄道網が集約する。東からは数多の人の流れを受け止め、南の港湾へと吐き出していく。都市規模は首都に次いで大きく、西部では最大。まさに西の要と呼ばれるに相応しい一大都市なのだ。西部の産業、経済は、この街を中心に回っていると言っても過言ではない。少なくとも、新人の昔いた新仙台や、西果ての地ピル・ソアテよりは余程重要で、よく知られた街だ。流れを生み出す、歯車。その上、ここは経済の中心であるばかりでなく、文化的にも重要な意味を持つ。共和国を構成する三民族の交差点　緩衝地帯としての役割も果たしているのだ。

共和国は、北のアメリゴ、東のヒステイニコ。そして南部に陣取る倭族の、合わせて三民族からなる多民族国家だ。経済連合から発展した国家複合体が、より結びつきを強めた結果として今の形があるのだが、民族と民族が隣り合えば、当然衝突が起こる。メルティング・ポット化せずに国家の形を保っているのはある意味奇跡とも言えるが、勿論危うさが付きまとう。今は指導者が強力なリーダーシップを発揮しているから良いもの　或いは戦争という特殊な状況下にあるから　この体制がいつまでも続くとは思えないと、まるで他人事のように新人は考える。

そこへきて、この都市、アゴルテだ。ここは、三民族それぞれが主に居住する地域の、地理的な中間地点に当たる。そのため、三つの文化が渾然一体とし、加えて経済の中心という要件も重なり、混沌とした繁栄を遂げてきた。その混沌から生まれた文化様式や建築、

絵画等はどの地域とも違った独自のもので、結果として、アゴルテは観光都市としての側面も併せ持つこととなった。ミーカストの美しさを称えた歌が、音楽の教科書に指定唱歌として掲載されていたことを新人は思い出す。川は流れる。その岸边にどんな都市が成立し、どんな人間が住まおうと。

今、新人がいるこの場所は、その三民族の危うい融和を象徴するかのような建物、トリニティ・タワーである。地上五八〇メートルにも達する、共和国内一の高層ビルであり、恐らく大陸一でもある。北の謎めいた宗教国家である教国はともかく、帝国は一つの建物を豪奢にすることに長けてはいても、天に向かって矢鱈と高い建物を造ろうという発想は持たないだろう、というのが大勢の見方だ。この高さ　新人がいるのは八七階の、パーティ・スペースとしても用いられるカジノ・ダイニングだが　からだど、地上の光は天の星と同じくらいに見える。もつとも、地上の光は、星々のそれより遥かに慌しい。それぞれの光を生み出した者の性格が出ているのではないか、と新人は思いついた。神様はきつと気が長い。少なくとも、始終戦争ばかりの人間よりは。

街のシンボルであると同時に国家のシンボルの役割も、その細長い炭素複合骨格で背負うことになった　トリニティ・タワー　は、建設の過程や運用にも、国家的意図が介在している。通常なら、この手の建物は莫大な建築費を回収するために、商業施設や大企業のオフィスとして活用されるのだろう。損をするのが分かりきっているのに巨大な建物を造るのは、共和国広しと言えども東の馬鹿だけだ。首都近縁の都市には何に使うのか分からない公共事業の成れの果てが幾つも転がっている。と聞いたことがあるが、ここは西部、アゴルテだ。東の論理は通用しない　はず、なのだ。

あろうことか、この　トリニティ・タワー　の中層階は、とても利益率が高いとは思えない文化施設が占拠している。文化と言っても、娯楽的なものではない。純粹な、三民族の古典文化や芸術、歴史の資料館だ。大衆にとってはおおよそ需要がない。全国からやって

くる観光客のお陰で辛うじて黒字の収支は出せているらしいが、莫大な維持費のために、その黒字も赤字へ転落する寸前を彷徨っているのだという。国の補助金があつて、この有様だ。独立での採算は見込めないだろう。

なぜそんな施設で金の生る木を潰しているのか、という理由に、政治的意図が介入してくる。即ち、民族の融和を象徴する『結果』を先に作ってしまうことで、国の安定を内外にアピールしているのだ。苦し紛れといえばそうかもしれない。昔々、どこかの島国にあつたというところある博物館と違って、バックグラウンドとなる博物館そのものの歴史も、権威も薄い。とりあえず集めてとりあえず権威づけをしただけの代物だ。打算が透けて見える。略奪といった手段に訴えるわけにもいかず、集まつた文化財は大人しい、大衆の耳目を惹きつけるにはインパクトが足りないものばかりだ。

『彼』はどう思っているのだろう。新人は景色を眺めることを止め、室内へ眼を戻す。雲霞の如き大人たちの群れが、視界に立ち塞がった気がした。天井が高い、広々としたフロアだが、招待客も随分と多い。自分のような者まで招かれているのだから当然か、と新人は一人納得する。取り交わされる料理、食器の触れ合う音。グラスに注がれる酒、どこからともなく上がる笑い声。フロアの一部にはルーレット台やポーカー卓が設置されており、そこからも時折、歓声と入り混じって溜息が漏れている。

彼　このパーティの主催者である一人の男へ、新人は眼を向けた。新人をこの場に招いた者であり、共和国の強権的指導者。名を、エイヴェッツ・ミネットという。短く刈り込んだ金髪に、透き通った碧眼が輝いている。金髪碧眼は希少価値なんだ、と兄貴分気取りのマイスト・リーズが自慢気に語っていたことを新人は思い出した。先の大統領選では、強硬右派な姿勢を明確に打ち出し、差し迫る帝国の脅威もあつてかあらゆる層からの支持を集め、結果圧倒的な票数を獲得して当選した。就任二年目の今でも、支持率は七割を切つたことがない。政治家の支持率は落ち続けるのが自然の流れであ

ることを鑑みれば、異常なことだ。化物染みている、という評さえある。

確かに、何かの確信に憑かれて行動しているような印象を、その瞳からは受ける。確信犯的、と表現できるかもしれない。ただし、彼が帰依しているのは宗教ではなく、己の思想なのだろう。正義、愛国心、国威、自由。きつとそれは、共和国自体が依り代にしてきたものでもある。帝国という、力の流れを押し返すために。

「どこまで、信じられるんだ？」新人は呟く。喧騒の中、それを聞き留める者はいない。

貴方にはできるといふのか、この流れを差し止めることが。

できる、と彼なら即答するだろう。それこそが指導者の。少なくとも、彼が考える理想としての。姿であり、国民の支持を集めてしまった者に課せられた義務だ。加えて、彼はやや行きすぎと思えるほど豪胆だ。

そもそも、新人がわざわざ本来の配属先であるピル・ソアテを離れ、ここアゴルテにいるのも、情勢が不安定な西部への視察を強行すると言って聞かない大統領の護衛を命じられたためだ。ピル・ソアテも電撃訪問する予定がある、と小耳に挟んだ。まさに最前線だ。とはいえ、大統領一人やつてきたからと言って、そう簡単に現場の士気が上がるものでもない、と前線で戦うもの一人である新人は思った。一説によると、あのジャーナリスト。確か、名前は、サラ・ウエインと言った。の撮った写真がたまたま大統領の目に留まったからなのだという。世の中は概して、広いようで狭い。

加えて、わざわざ只でさえ駒の足りていないピル・ソアテの新人にまで召集がかけられたのは、数日前、南のテロ・グループ。倭族開放同盟。から、大統領を名指したテロ予告文が送りつけられたためだ。ゆえに、力でくるなら力を持って相対するのが共和国の流儀、と言わんばかりに、その力を象徴するものである。ストライクリザード。による仰々しい護衛が必要とされたのだ。そして、ピル・ソアテ周辺部は、一応最前線ではあるが、南や北と比較して、そう

切迫しているわけではない　と上は判断したのだろう。

第一六特殊機甲中隊からは、新人の他にマイスト・リーズと、巴澄美琴もこの地に送り込まれている。上からの要求は三機で、人選はカーバネル・ジエズイット大尉によるものだ。理由を尋ねると、気まぐれだよ、と彼は即答した。真偽の程はいざ知らず。二人の姿は、今は見えない。

アタッカー、サポーター、指揮兼スナイパーで、一応最小機能単位^トとして成り立ってはいる。羽を伸ばしてこい、と言って、傷の残る左腕で叩かれた肩の感触を新人は思い出す。むしろ、彼の方が楽しそうではあった。

「子供を追っ払って、何やってんだろうなあ」新人は溜息を吐く。

また、大人たちが沸いた。怪訝に思っで見ると、エイヴェッツ・ミネット大統領の隣に、先程まではいなかった、同じ金髪碧眼の少女が姿を現していた。最優先の護衛対象、として事前に渡されたファイルの写真と、そこに記されていた名前を新人は手繰り寄せる。確か。

「アシユリー・ミネット」

そんな名前だった。大統領の一人娘で、年齢は一六歳。自分と同じだったから、記憶に残っている。彼女の顔は、以前にも見たことがあった。勿論直接ではなく、テレビ放送を介してだ。その容姿のために何かとメディアへの露出も多く、ちょっとしたアイドル並の人気があるのだ。ある意味、父親の政権のマスコットの役割を果たしているとも言える。

初めて間近に見た彼女は、画面を通じて見るより遥かに可愛かった。大人たち相手に全く動じもせず、笑顔を浮かべながら通りの良い声で何事か受け答えている。時折、サーモンピンクのカクテルドレスの胸元へ、無遠慮な視線が向けられていることに、新人は気づいていた。当然、彼女だって気づいているだろう。それでも、苛立ちを表に出さないのは、つまり表の顔を使っている証拠　大人、ということなのかもしれない。或いは単に世間に慣れているだけかもし

れないが、少なくとも、自分にはないものを彼女は持っている。

自分のこの視線もまた無遠慮なものの一つだと気づき、新人は目を逸らした。山型にカットされた裾から時折覗く膝、腰元のコサージュ、露わな肩と、腰のライン。彼女の、きつと過渡期であろう身体は、目を逸らしても、焼きついて離れない。くそ、と一つ悪態を吐き、新人は再び窓の外へ顔を向けた。

ハロー、プレジデント。ハロー、アシユリー。貴方たちをどこにいるかも分からない敵から守るために、僕はここにいる。ただこうして、目を逸らしている。

大きな笑い声が起こった。新人は舌打ちする。隣には誰もいない。中途半端な、孤独。

#4 翼のある使者・2

さて、戦争、或いは戦闘の概念自体がどのように変化した現代において、夜間戦闘の際に最も重視される要素とは何だろうか。共和国陸軍、第一六特殊機甲中隊の面々が、その問いに返す答えは様々だ。ある女は経験だと言い、ある男は勘だと言い切る。鍛錬こそ何にも通じる究極のエレメントだと主張する男もいる一方で、あんまり考えたこともない、と能天気な答えを返す者もいる。

さて、人の間で意見が断裂し、そうして尚一人一人が意見を譲らないとき、そこに勃発するのは何か。この問いに対する答えは、どれだけ時が経ち、時代が移るおうとも変わらない。即ち、衝突、闘争だ。そして、第一六特殊機甲中隊の面々が、闘争の手段として選ぶ物は、彼らにしか操ることの叶わない、ハメートルの巨大な乗り物、或いは兵器 HAL MO1 ストライクリガード である。「それにしても……」と、「ある女」であるところのヒールレース・リヴェツサは呟いた。「何でこんなことで喧嘩する羽目になるのかなあ」

「譲れないものは誰にでもある。それが我々の場合は、偶然にも夜間戦闘のセオリーだったというだけの話だ」肩越しの接触通信回路から、「ある男」であるところのカーバネル・ジェズイットの声が聞こえた。

結果として選択された手段は、二対二での夜間模擬戦だった。ヒールレースはジェズイットと組み、他の二人と戦うこととなったのだ。思わず、こう叫ばずにはいられない。

「馬鹿馬鹿しい！ こんなことのために、わざわざ演習場使いますか、普通。大の大人が大人げもなく、基地中丸ごと巻き込んで」

「演習の良い口実にはなる。丁度、手のかかる奴らが不在だ。大人気ないことをやるには、またとない機会だ。そうだろう、ヒールレース？」

「あなたがそう言うんなら、あたしは構わないんですけどね、隊長」
手のかかる少年、少女、そして若造の顔を思い浮かべながら彼女は言った。

『済まないな。ある種の男の世界だ。女であるお前には、理解できんかも知れん』

「女は捨てたも同然ですよ。随分と前に」

『そう思わせぶりなことを言っただけで構ってもらおうとするところを見ると、捨てきれないようじゃないか、二六歳？』

「からかうのは小僧と小娘だけにして下さいよ、バツイチの……来ましたよっ！」

センサーが警報を発するよりも、彼女の反応の方が二呼吸ほども早かった。B2システムの稼働効率は既に戦闘領域に入っている。機体のパワーレベルも戦闘時^{コンバット}を維持している。ヒールレイスが舌打ちをし、半ば蹴り殴りつけるようにしてリングに拘束された四肢を振るうと、それに応えて市街戦仕様の ストライクリザード が、仮想防壁に設定した投棄家屋の影から、しなやかな動作で跳躍。直後、巨大な蜥蜴が歩いた後とも形容される足跡の残った地面に、上方から曲射軌道を取った榴弾が落下、炸薬の代わりに少量詰められた発光剤が瞬き、水色のペイントが散乱した。

「正確な砲撃……。あんにやろう、やるじゃないの」頭の中に描いた『能天気』ことエール・シュミット兵長の顔に、ヒールレイスは唾を吐きかけた。「敵に回すと、意外と厄介なのね」

駆動音を最小に設定。間接の屈曲運動に一瞬の間が置かれるが、位置を完全に把握される 砲手の勅に捕捉されるよりは良い。但し、負担が大きいため長時間は使えない。何より、彼女の性に合わない。同時に熱排出も最低レベルまで抑える。各部への物理的ダメージを熱の形へ変換し排出する機構が鈍るため、これも長引けばオーバーヒート、形状記憶カーボンファイバーの失活にも繋がりがねない。SMCFは熱的破壊より物理的損害に弱いと言われるが、それは外部から破壊しようと思ったときの話だ。内的機構のトラブル

ルは平等に降りかかる。

『ヒールレイス、お前は中距離からの支援に徹しろ』激しくなったノイズが、通信方式が無線に切り替わったことを証している。『シユミットの砲撃は正確だが、奴はデータを重視しない。勘に頼ったところがある。幾らでも欺くことは可能だ。やれるな？』

「勿論」

『結構。後は支援しつつ、センサーユニットで、あのニンジャリザードを炙り出せ。あの男には美学がある。一撃必殺という、下らん美学が。故に、決定的一撃の瞬間まで、あいつは身を潜め続けるだろう』

「当面の敵はシユミット一機？」

『そうだ。俺が奴の設定したと思われる砲撃陣地に突撃をかける。後ろを取られたら敵わん、背中には任せた、軍曹』

腰背部のスラスタに点火したジェズイットの荒地戦仕様機が、返事も待たずに遠ざかっていく。いつも通りとはいえ、真っ先に突っ込んでいく指揮官に嘆息しつつも自分の仕事をこなすべく、彼女は自機の頭部観測機群の感度を最高まで上げた。

ヒールレイス・リヴェツサがその手にかけて仕様変更した ストライクリザード は、シルエットだけを取れば仕様様とさして変わりはない。違うのは頭部だ。一般機の双眼に対し、彼女はセンサーの保護や内部容積確保、廃熱に優れたシールド・アイ仕様を採用している。シールド、即ち日よけという名称は、ともすればサンダラスにも見える外観に由来している。

変更の理由は、王道を少しだけ逸脱したいという彼女の趣向に因るところが大きいが、あと二つの重要な意味がある。一つ目は、情報処理のパートを担うことで、狙撃手の負担を減らす観測手としての役割だ。勿論これは、狙撃仕様のマイスト機と組んで初めて機能する。もっとも、喜ぶべきか悲しむべきか、マイストの技量は十分に高いので、彼女のサポートを必要とするような状況は、今のところ皆無なのだが。

そして二つ目は、指揮官のバックアップとしての役割である。観測できる情報が多いとは、戦場を俯瞰できる立場にいたることと同義だ。光学、熱量、音声、振動。ありとあらゆるデータから、彼女は敵の位置と味方の配置を検証できる立場にいる。ジェズイットに万が一のことがあれば、残された味方を率いるのは彼女の役割なのだ。「万が一……億が一にもありえないわね。あの人、殺しても死ななそう」

通信が途絶えがちになったのを確かめてから、彼女は呟く。上方から警報。連装ロケット砲、多数。撃ち落とすにはタイミングも、状況も悪すぎる。身を潜め、敵を欺き炙り出そうというときに、真上目掛けてマズル・フラッシュを焚いてしまつては、わざわざこちらの位置を知らせているようなものだ。

「もうちょつと頑張つてね、あたしのリザード！」

駆動モードは静音のまま、面攻撃の広い射角から逃れる。脚だけを使つていたらあつという間にオーバーヒート。こちらのそういう状況を、シュミットは読んでいる。腕、肘、膝。地を這う蜥蜴リザードの名に相応しく、土に汚れてヒールレイスの ストライクリザードは不恰好な回避行動を取る。ペイント塗れにされるよりはマシ、とはいえ、汚れることに変わりはない。大人気ないと分かつていながらも、苛立つのは仕方ない。

「こうなつたら……是が非でも勝たせてもらうわ」たまには馬鹿になるのも悪くない、と心中へ呟き、彼女は言った。「罰ゲームは装甲磨きだ！ 覚悟はいいね、シュミット！」

叫ぶと同時に、左手元で武装切り替え。三九ミリのアサルト・ライフルからサブウエポンの対装甲炸裂ダガーをアクティブ。武装ラックの開放信号を送る。一秒の間もなく、右耳へ装甲を伝わった実際の開放音が届く。

右手にはアサルト・ライフルを通常装備しているので、ヒールレイスの場合、基本的にその他の格闘専用武装や炸裂ダガーは、全て左腕で扱うことを想定してモーション・パターンを組んでいる。そ

の、日々想定し続けている動作がB2システムによる常時補正を受け、ストライクリザードの左腕が右脇の下から三本の対装甲炸裂ダガーを取り出した。左右に六本ずつ、計一二本が装備されている。取り出す勢いそのままに、左方の何も無い空間へその三本をまとめて投擲する。同様にもう三本を右方へ。ややあって、実際よりも随分と大人しい炸裂音と閃光が届いた。その間に、ヒールレイスは手近な岩盤の影に自機を滑り込ませている。

敵が勘に頼るといふのなら、その勘をかき乱してしまえば良い。もし、センサの集音機能をフルに活用し、ストライクリザードの駆動音だけを正確にピックアップしているならば、こんな小細工は通用しない。今ヒールレイス自身が行っていることだ。戦場を行き交うあまたの音声の中から、息を殺し獲物に迫る一体を探し出す。夜間戦闘、或いは視界を遮る障害物が多い市街地での戦闘時には、このような一見すると地味な作業の積み重ねが、無視できない程度まで効いてくる。

だが、シュミットにはそれが分かっていない。キャリアの違いを思い知れ、とヒールレイスはほくそ笑む。右に左に、対装甲炸裂ダガーをばら撒いたのは、砲手の勘を攪乱するためだ。勘に頼っているから、どこからか何かしらの気配がすれば、とりあえず風潰しに砲撃を行う。そして、愚かにも足を止めて大口径の砲撃を繰り返せば、位置を特定するのは容易い。

炸裂ダガーを自機位置の攪乱と対砲手の囷に使え、などと指導する者はどこにもいない。ヒールレイス自身が経験の中から編み出したセオリーだ。だからこそ有効なのだ。特に、相手が経験の薄い、勘に頼る操縦兵だった場合。

果たして、空気を裂く間の抜けた音を引き連れ、迫撃砲弾が地面に突き刺さった。炸裂ダガーがつけたペイントの上に、更に水色の上乗せされる。正確無比な砲撃だ。だからこそ予測も、欺くことも容易だ。

落ち着いて、だが一時たりとも警戒を解くことなく、視線同調で

ディスプレイの一部に地形図とセンサ情報を表示させる。外部観測機が得た情報を、あらかじめ導入済み地形データと照合させることで、熱源或いは音源、震源と自機との相対情報を、絶対情報へと置換するのだ。たとえ頭部の映像機が潰されても、敵を捕捉できるだけの自信がヒールレイスにはあった。

「……見つけた」

固定された戦闘領域内での特定のポイントを指定する場合の表示方は、全ての特殊機甲中隊では共通の基準が用いられている。その戦闘領域の広さにもよるのだが、このような二対二での模擬戦の場合、まずエリア全体を三×三で計九個の升目に区切る。そして、その升目一つ一つを、北西から北、北東、西といった順に振ったアルファベットで呼称する。更に、升目一つの中を九つの同様な升目で分割し、こちらには算用数字で番号を割り当てる。例えば、今ヒールレイスがいる区画はD 3、H区画からと思われる砲撃の検証中と、いった具合になる。

これが実戦の場合は最大五×五の二五に区切られるのだが、これはアルファベットが二六しかないことに由来する、とも言われる。HALの運用法を考えた者が、アルファベットでエリアを区切り、更にその中を1〜9の数字で、と設定した結果だ。大規模作戦の場合、更にギリシャ文字で各戦闘エリアを定義する決まりになっているが、まだそこまでの大規模決戦は勃発した試しがない。

その場の設定によって可変であるのだが、最小のブロックは、大体四〇〇メートル四方になる。それが、ストライクリザード 同士 或いは ベルキャット との 目視での戦闘に丁度適したサイズであり、そうなるように全体の戦闘領域も設定される。もつとも、これも実戦においては、周囲の環境要因等のためにしばしば変化する。見渡す限り赤砂の荒野と、市街地を同じ基準で処理できるはずもない。また、手強い一体とやり合っうちにエリア外に出ることなど日常茶飯事であり、いちいち領域を気にしてられるほど、HALの戦場は甘くない。

「Hの……2番か」図表上の点滅するブロックを睨み、彼女は呟いた。「案外近いのね。もつと遠くからちまちま撃つてくると思ったけど？」

表示が正しければ、初砲撃の位置はE 8。ストライクリザーDの右半身を遮蔽物の陰から出して、その方向を窺う。微妙だが一応移動しながら砲撃を行っていることになる。同時に、上空から再びのロケット砲撃。攻めに転じようと思ったタイミングで、丁度出鼻を挫かれる。奴の勘の良さは、悔しいが本物だ、とヒールレイスは舌打ちして、再び画面に目を戻した。

判明したのはブロックだけではなく、そのブロック内での立ち位置もだ。だが、そこまでくると概算でしか求まらないので、伝達時のフォーマットは決まっていない。そして、ここまでが彼女の仕事後は、アタッカーに任せるパートだ。伝達のフォーマットは決まっていないが、ブロック位置だけを伝えても仕方ない。ニュアンスの補正は、各操縦兵に任せられているのだ。

通信ウィンドウを呼び出す。電波状況が悪いのか、映像は出ない。スカー1、ジエズイットの表示を確認し、彼女は言った。

「こちらスカー3。敵位置を補足しました。エッチ・セカンド。サード寄りの窪地が……」

おかしい、と思った。通信のレスポンスに違和感がある。隊長、隊長と彼女は呼びかける。反応はない。画面は砂嵐で、通信音も、全てがノイズに埋まっている。

「電波妨害？でも、ECM装備の機体はないはずなのに……。まさか、ひよつとして」

彼女の脳裏に一つの考えが閃いたのと、左から強烈な敵意が襲い掛かったのは、全くの同時だった。

砲手である自分が生き残り、かつ勝利を得るために最も手っ取り早い手段は何か。前線の一機に暴れさせて注意を惹きつけた状態で、自分はひたすら支援に徹するのが一番だ。夜間であるうが昼間であ

ろつが関係ない。つまり、敵が自分に意識を集中できない状態を作り出せばいいのだ。

幸いにも、組んだ相方は頼りになる男だ。自分の支援などなくとも、単身敵中に潜り込み。一機ずつ静かに、確実に仕留めることのできる技量と冷静さを兼ね備えている。彼　マツシタを敵に回したら、どのように戦うべきだろう、とエール・シュミットは考える。遠くで僅かな光と、成型炸薬の爆発音。そこか、と呟き北西方向へ背部迫撃砲を二射。場当たりの砲撃だが、牽制と足止めになればそれでいい。

この機体、シュミット・スペシャルと自ら名づけた重砲撃仕様機は、ストライクリザードの限界荷重をその身をもって示していると言われるほどの大量の火砲を全身に仕込んでいる一方、HALの命である機動性が殺されている。フルドライブでの競争は経験がないが、通常の荒地戦仕様機と比較して、二割ほど最大速度が低いとシュミット自身は見積もっていた。故に、高速機動型の機体に距離を詰められたら為す術がない。だから場当たりの射撃で無駄弾を撃つことに、シュミットは躊躇いがないのだ。

「運が良かったね、どうも。風が向いてるよ、風が。うん……時代がきてる。間違いない」

先刻の、模擬戦組み合わせを決めるくじ引きのことをシュミットは思い出す。もしマツシタを敵に回す羽目になっていたら、勝ち目はなかった。

とはいえ、敵はカーバネル・ジェズイットとヒールレイス・リヴエツサだ。一筋縄でいく相手ではない。特にジェズイットだ。目視圏内に入られたら最後、と覚悟しておいた方がいいかもしれない。多少の被弾などものともせず接近され、そのくせこちらの肝心な一撃だけは抜け目なく避け、他より一回りレンジの長い格闘兵装

刀、で真つ二つにされて撃墜判定。シュミットは身震いする。勢い、或いはオーラのようなものが、あの男は他と明らかに違うのだ。だが、勝ち目が全くないわけではない。要は、向こうの連携を乱

してマツシタが暴れやすい環境を作ればいいのだ。そうすれば、相対的に自分に向く銃口は減る。

自機のポジションをやや移動させ、武装管制、両肩に装備された一九連装の対地ロケット砲をアクティブに。弾頭径七〇ミリ、無誘導で、普段ならば対赤外線フレアやフレチエット、高爆発威力弾頭などが使用されるが、今回は全て訓練用のペイントに置き換えられている。対HAL戦では面攻撃に用いることが多く、再装填はできないので、基本的には斉射一回限りでパージする。既に右の一九発は使い切っており、デッドウェイトになる空の砲は切り離し済みだ。また地上組と整備班に文句を言われるのかと思うと、やや憂鬱だった。

ついさつき放った迫撃砲の曲射は、敵を仕留めるには至らなかつたらしい。ならばもう一度、炙り出すまで。後はマツシタがやってくれる。加えて。

「実はこのペイント、一味違うんだよ」唇の端を吊り上げ、右手のトリガーをオン。「はははっ！ スペックオーバーの一九連射だ、逃げる逃げる！」

対地ロケット・ランチャー、射角を微妙に変化させながらの斉射一九連発。反動に耐えかねた左肩関節からのエラーメッセージが届くが、OSのダメージ・コントロールに介入して黙らせる。「そもそもそんなダメージなどない」と誤認させるのだ。そうでもしなければ、これだけの重火器は扱えない。数撃てば当たるのは真実だが、数撃てなければ当たらない。たとえ腕が吹き飛ばすが肩が外れようが、数撃ち、当てればそれでよい。

着弾を確認。土埃が見える。同時に、左肩ポイント部電磁ロックボルトへの通電を停止し、弾切れの砲をパージする。だが、観測班から撃墜を知らせる信号は送られてこない。待機している地上班からの発光信号もない。つまり、全て躲された。シュミットは舌打ちし、顔をしかめ、そして、楽しみに笑った。

「想定通り。後は任せたよ、マツシタさん。ま、あの人にとっては

想定外だらうけど？」

前方ディスプレイ内の情報ウィンドウでは、電波障害の発生区域が、網目の罫になって広がっていく。

#4 翼のある使者・2 (後書き)

次回更新は一週間後。

#4 翼のある使者・3

誰かが自分を欺こうとするのなら、それを見破る精神力を。誰かが自分を罠に陥れようと企むなら、それを打ち破る力を。自らが強くあれば、この世の悪しきもの全て、悪しきものではなくなる。何かを悪と決めるのは、つまるところそれを悪と見なさなければならぬ自分自身の力のなさであり、真なる悪とは、人の心の中には存在し得ない。そう、松下肇は考えていた。

南に伝わる思想の亜種、と言えるかもしれない。生まれつきの悪人などどこにも存在せず、人を悪に走らせるのは周りの環境であり、悪を為した人間が悪いのではない。だから救済しなければならぬ、という考え方だが、肝心のどうやって救済するか、の部分は永き時を受け伝えられた末に曖昧になり、消えてしまった。不要だからなのかもしれない。許さなければならぬ、という主旨さえあれば、他の部分はどうでもいいと、この教えを耳にした人々が考えた結果なのだろう。

だが、一つの悪を目の前にして、それを許すことができるだろうか？ 答えは否だ。できないからこそ争いは起こるし、今自分は、こうして兵士として戦場に立っている。だからせめて自分だけは、自分だけは人を許せる人間であろう、と松下肇は考える。何者をも悪と断ずることなく、ひたすらに己を磨き上げることだ。

力を持てば、それは叶う。そして、力があれば、やむを得ず誰かを討つことさえも許される。だから、自分は禁欲的な生活を好むのかもしれない、と彼は思った。身体を鍛え、操縦技術を磨く。反撃を受ければ死は免れないほど愛機の装甲を削り、一撃離脱のスタイルを貫く。自らを『私』と呼び表し、男として生きることさえも拒絶する。兵士は兵士であり、性の違いは関係ない。強くあれ、強くあれと、何度繰り返し返したことが。

一六特機隊に新たなメンバーが加わってからというものの、松下は

自らに課した『強くあれ』という言葉を、より強く意識することが多くなった。

今の世の中は最低と言ってもいい。本来守るべき存在である少年少女が戦場に送り込まれ、その意味を確かに知るより早く、行動として人を殺すことを求められる。彼らが何を思うのか、想像するのは容易だ。即ち、絶望感。自分一人が何をしようとも世の中は変わらず、少しでも楯突こうとすれば、容赦のない力によって押し潰され、千々に裂かれて流されるのだ。そんななかで、一体誰が、自らの意思を確固として持ち、一人の自分が存在している必然を知ることが出来るだろう。

だから、周りの人間が『強く』あらなければならないのだ。特に、あの三宅新人のような、ブランクな少年に対しては。行く道を誰かが強く示さなければ、彼は、いや、彼らの世代は生きながらにして失われてしまう。

だが、一六特機隊の人間はどうだ？ ジェズイットのような男に迷う少年を導くことができるのか？ 飄々としている、といえば聞こえはいいが、それは歴とした意志を示すことから逃げているだけだ。彼の離婚歴のせいかもしれないが、子供にとって、そんな事情など関係ない。目の前にあるものだけが真実なのだ。彼が感じているであろう中途半端な孤独を埋め合わせなければ、いつか、彼は壊れてしまう。強くあれ、と明確に道を示さなければ。

警告の電子音に、松下は我に返った。

「……熱量過多。そろそろ限界、か」

アラートを発したのは、機体状態をモニタするセンサだった。駆動音と廃熱を限界まで抑えつけているため、各部に異常が発生する寸前なのだ。今は我慢の時。まだ、我慢するべき。

市街戦仕様の制動尾を巧みに操り、松下の水色に染まった ストライクリザード が摺り足で移動する。彼にとって最も効率的な移動方法を追求した結果だが、共和国広しと言えどもこれを真似できる人間はいないだろう、と彼は自負していた。市街戦仕様は只でさ

え操縦に難がある上に、勢いを限界まで殺し、重心のコントロールを一瞬でも間違えたら転倒する移動法なのだ。

暗闇の中を目視走査。シュミットの手によると思われる砲撃が、近い。つまり、敵はすぐ近くにいます。大まかな砲撃だが、それで余裕をなくしたところに忍び寄り、一撃で仕留めるのが松下の役目だ。レーザーが死んでいる。何らかの欺瞞手段を使ったのか、と訝しんだが、その程度は障害にはならない、と彼はほくそ笑む。

外部観測を赤外線メインに切り替える。サブを光学、暗視スコピーに。敵がどこかへ身を隠すとして、砲撃源のほうを窺うこともできてかつ、シュミットの執拗な射撃に耐えられる場所。相当限られるはずだ。両腕に大型セラミック製模擬ナイフをセット。ダブル・グリップリング・モード、アクティブ。両腕で格闘戦を目一杯行うための、松下独自の機動プログラムだ。

丁度、シュミットの砲撃方向に対し、七五度程度の角度になっている岩場を、松下は発見した。もし自分が敵なら。ここで様子を見つつ突撃するときを見極めるだろう。

「敵機、捕捉」

赤外線センサが、おぼろげな影を捉えた。廃熱を抑え、駆動を静音にし、防御に徹している ストライクリザード の姿。

どちらだ、と松下は画面を睨む。ヒールレイスか、ジェズイットか。緊急廃熱、パワーレベルを上昇。一手の間合いだ。たとえ廃熱や駆動音で向こうがこちらに気づいたとしても、逃れるより一瞬だけ早く、必殺の一撃を加えればいい。この一呼吸にも満たない間で、どこまで踏み込めるのか、松下には正確に分かった。幾度となく、鍛錬を繰り返したことだ。この間合い、このタイミングなら、勝てる。

「鋭っ！」

浅黄の ストライクリザード が跳躍した。限界まで重量を削った機体が、風を受ける木の葉のように舞う。右上方から一閃。松下の脳が描き出す双刀の軌跡をB2システムが拾い上げ、両腕のリン

グが検知した肉体の動きを補正する。

敵機が動いた。アサルト・ライフル、シールド・アイ仕様。ヒールレイス・リヴェツサだ。彼は無意識のうちに小さく舌打ちする。戦いたいのは、彼女ではない。邪魔だ、と呟き大型ナイフを振るった。その時だった。赤外線センサーが、一瞬にして鮮やかな赤に染まった。全て、スクリーン一面の赤。その中に埋もれて、何かがこちらを引き摺り込もうと蠢いている。

思わず防御姿勢を取って着地する。赤外線をサブに、暗視をメインに復帰。見失った ストライクリザード の姿を再び捉えようと、今度は目の眩む閃光が、松下の両目を襲った。暗視スコープのために、少量の光が過大に出力されたのだ。

「炸裂ダガーに……狙い澄ましての緊急廃熱？」

「その通りっ！ 待ってたわよ、あんたが来てくれるのを！」

接触通信回線が起動している。松下は奥歯を噛み締める。両肩を掴まれたのだ、と気づいた次の瞬間、全身に後方から突き上げる衝撃が襲った。シートベルトに身体が減り込む。岩盤に叩きつけられたのだ。

『ほらほら、敬語はどうした伍長殿っ！』

「模擬戦は無礼講でお願いします」

『そいつは宴会だけにしな！ 酒の席なら、あたしが許す！』

「冗談めかして……っ！」

そう、冗談めかしていながらも、彼女は本気だ。こちらの動きを完全に読んでいたのだ。赤外線と暗視スコープの併用で走査を行うと完全に読んだ上で、絶妙のタイミングで一斉廃熱、炸裂ダガーの発動。フラッシュ・グレネード程の威力はないにせよ、並の操縦兵相手ならば抵抗力を奪うには十分だった。

両肩関節部からのアラート。装甲が歪み、積層構造内の光ファイバーが曲がって内部を通る光の屈折率が変化したのを、センサーが感知したのだ。だが、まだ戦えないわけではない。むしろ、チャンスだ、と松下は直感する。近接戦は自分の間合い。そこにわざわざ飛

び込んできてくれたのだから。

右脚を、自機と敵機の間には滑り込ませる。装甲の薄い脚部は、通常よりもクリアランスが広く設定されている。有体に言うなら、関節が柔らかい。だから、一般仕様の機体ならば不可能な動きもできる。抑えつける姿勢なので、上体のパワーだけでは適わない。だが、蹴りならば十分対抗できる。

形状記憶カーボン・ファイバーの力と、アモルファス非晶体金属の関節が唸りを上げる。松下は膝パネルとペダルに連結された右脚を思い切り蹴り出し、応えて浅黄の ストライクリザード が、押し掛かるヒールレイス機を蹴り飛ばした。目の奥が痛む。閃光のダメージから回復するには、今しばらく時間が必要なようだ。だが、敵は待つてくれない。そして、ヒールレイス・リヴェッサの辞書に容赦の二文字は存在しない。

彼女愛用の、三九ミリアサルト・ライフルの銃口がこちらを向いた。咄嗟に跳躍し、大袈裟な動作で射線から逃れる。速射性に秀でた機種だ。相手に大きな運動量を強いるという点では、制式の四三ミリより優れている。

ダブル・グリップリング・モードを解除。通常制御に復帰する。メインに設定した右手の大型ナイフはそのままに、オートで左手のナイフが大腿部の武装ラックへ収まった。同時に、脇の下のラックを開放、対装甲炸裂ダガーを取り出し、膝丈ほどの岩場を飛び越えながらの投擲。着地、衝撃吸収剤が気化し、圧熱転換機構が熱量を噴き出すに任せ、体勢を限界まで低くしての突進。ダガーの回避で、ヒールレイス機は体勢を乱している。即ち弾幕が途切れ、接近できる。

一息に懐、ライフルの内側へ飛び込み、首筋目掛けて逆手のナイフを振るう。舞い散る火花、だが、手応えはない。頭部の、人間でいう眼窩上隆起を掠めただけだった。この間合いで、この呼吸で。やはり、手強い。

「だが、しかし！」

踏み込んだ右脚を軸に、体を捌いて半回転、左踵で回し蹴りを見舞う。咄嗟に腕で防御されるも、華奢な ストライクリザードのバランスを崩させ、仰向けに転倒させるには十分な威力だった。

倒れながらも、ヒールレイス機はこちらへライフルを向ける。だがその発砲よりも、松下の浅黄色の機体が体勢を立て直し、赤い右腕を踏みつける方が早かった。取った、と眩き、再びのダブル・グリップリング・モードを起動。左大腿部の武装ラックから大型ナイフを取り出し、両手に一振りずつ正手に構え、振りかぶる。

振り下ろし、撃墜判定で、いずこかのジェズイット機を走査するはず、だった。

『ほおう……隊長の俺を差し置いて女を先につけ狙うとは、お前も意外とつまらない男じゃないか、ハジメ・マツシタ伍長?』

聞こえたのは、強化セラミックス同士が衝突する、金属より軟らかい衝突音と、貼りつかせた笑顔が目に見え、カーバネル・A・ジェズイットの声だった。

渾身の力を込めた二振りの大型ナイフが、空中で易々と受け止められていた。訓練用の、三・五メートル模造刀だ。咄嗟の動作で飛び退る。長大な刀を操るために両腕が肥大した、荒地戦仕様・剣撃戦用 ストライクリザード の双眼が、松下を睨み据えていた。

『再教育が必要か、な?』

「このインクだな」剣の切っ先で地面に撒き散らされたペイントを示し、カーバネル・ジェズイットは外部拡声器へ向け言った。「通常の訓練用ペイントではない。中身が、HAL塗装用の代物に入れ替わってる。熱硬化性樹脂に炭素繊維の格子構造を織り込んだ複合材が、HAL装甲の最外装だ。こいつの塗装には少々面倒で高価な光触媒塗料を使う必要がある。触媒、即ち金属だ。そんなものを撒き散らせばそりゃあ、通信が途絶するわけさ。お前なら分かるだろう、伍長?」

『ええ。シュミットの悪戯ですか。後ほど、自分が叱責しておきま

す」

意外だった。彼ならば、滑稽なほど怒り出すだろうと踏んでいただけに、ジェズイットは拍子抜けする。要するに、シュミットが、マツシタの私物である金属塗料を勝手に持ち出したのだ。特殊機甲部隊においては、訓練弾はハンドメイドが基本だ。ペイントの自身を入れ替えることだってできる。恐らく、工兵とも親しいシュミットが、彼らを巻き込んで悪ふざけを決行した、それだけの話なのだろうが。

「構わん、これも一興だ。イレギュラー要因はいつ降って湧くか分からんのが世の常だ……。それはともかく、伍長」

『はっ』浅黄の ストライクリザード が、両手に持ったナイフを構え直す。

「何か、言いたいことがあるそうだが？」

『特に、何も』

「ほう……。それにしても、凄い敵意じゃあないか。俺が憎いのか？ ああ、刀が短いのが不満か。ハンディがついているのが？」

『いいえ。それなら自分も目を傷めておりますので、好都合です』

「好都合？」

『ええ。貴方とは……。』マツシタの機体が、風に揺らいだ。『一度本気で戦ってみたかった！』

旋風、いや、暴風。襲いくるその ストライクリザード を形容する言葉は、より激しいものが相応しかった。初撃は二刀。続いて右、左。圧される、とジェズイットは冷や汗を流す。存在そのものに圧力があるのだ。突破力ならば荒地戦仕様脚のこちらのほうが上なはずなのに、むしろ小回りの効かなさが仇になっている。つまり、一撃離脱型として、マツシタの方が完成している？

認めるわけにはいかない。だから、俺を認めさせなければならぬ。ジェズイットは奥歯を噛み締める。正面、交差した二刀。舌打ちし、三・五五メートル模造刀を振るって正面から受け止める。火花が散り、互いの頭部が触れんばかりに接近する。鏝迫り合いだ。

だが、いつ以来だろう。こうも精神が灼き切れるような激しい闘争は。頭の中を、身体の中を、火花が駆け巡って戦え、と叫ぶ。

「やるようになったじゃないか、伍長！」腰背部スラスタに点火送り込まれた推進剤が爆発し、ストライクリザードが時速二〇〇キロメートルを目指して加速する。無論、刀と刀は組み合ったまま。「耐えられるか、これに！」

「まだっ！」

刀身が僅かに滑る。次の瞬間、マツシタ機は身体ごと左に投げ出し速さの戒めを逃れた。逃がさん、と呟き高速ターン。砂埃を巻き上げ、時速一五〇キロメートル。刀を構える。浅黄の機体 que 起き上がる。すれ違い様、一閃。手応えはある。

刀が切れていた。ジェズイットは息を呑む。訓練用と訓練用だ。本来ならばありえない。だが、現実には手元の模造刀は、二メートルほどを残して鮮やかに切断されていた。驚きの余り、機動が鈍る。そして、それを見逃すマツシタではない。と、いうことを忘れるほど、ジェズイットの驚きは激しかった。

「まさか……」

『言っただけです、本気だと』

再びターンしたときには既に、目の前にストライクリザードの姿があった。刀を投棄、全兵装カット、B2システムのリンクを強化。刀が無くとも、この腕はある。距離、ゼロ。前方ディスプレイが水色に染まる。

格闘戦における攻撃には、必ず『線』がある。そして防御の方法には二通りあり、一つは面、一つは線だ。例えば、振り上げられたナイフを盾で受け止める。これは面防御だ。確実ではあるが咄嗟の動作には向かず、簡単ではあるが防御に専従する必要がある。

線を見極めることだ、とジェズイットは呟く。マツシタ機の繰り出す二本の腕、逆手に装備された二振りの大型ナイフ。その作用線に対し正確に合致した防御を行えば、盾など必要ない。ただし、ほんの僅かでも作用線を外せば、押し切られて斬られる。ゆえにB2

システムのリンク係数を上げ、追従性を限界まで向上させた。

『鋭!』

「応っ!」

気合声と共に交錯。両腕にエラー・メッセージ。だが、長刀を振るために強化された豪腕にとっては意に介するほどのダメージではない。ジェズイットは息を吐く。自らの愛機の肥大した両腕が、ナイフを持つマツシタ機の両手首を掴んで受け止めていた。

内心の動揺を抑え、ジェズイットは言った。

「俺の機体の主武装は刀だ。だが、俺は一度たりとも刀に頼ったことはない。なあに、何にでもバックアップというものは必須だよ、マツシタ。何か一つを極めるのも悪くないかもしれないが、融通が利かないのはもつと悪い。武装も、思想も。あまり一つの考えに囚われすぎない方がいい。人生の先達としてのアドバイスとっておけ」

『丸腰で、何をっ!』

「お前の考えは大体分かる。似たようなことを言っていた奴がいてな。それはともかくとしても、お前に一つ言っておきたいことがある。いいか、伍長。強さとは、力ではない。それと、丸腰なのは……」腕部の増設した廃熱機構が高温蒸気を吐き出し、腕に籠る力が一層強まる。「お前の方だ」

マツシタ機の、両手に構えたナイフが、二本とも柄を残して地面に落ちた。滑らかな断面が見える。絶句するマツシタの息遣いに、ジェズイットは唇を歪める。

「その昔……とある国に剣の達人がいた。ある時道場で稽古をつけることを求められた彼は、木刀で応じた。そして気合一閃、相手の木刀を同じ木刀で切断したのだそうだ。そして、更に凄まじいことに、振り下ろした木刀が切断したというのに、切れた先端の方は、道場の天井に突き刺さっていた、らしい」

掴んだ両腕を力任せに引き、地面に叩きつける。左腕で敵機右腕を、右脚で左腕を抑え、右腕に標準装備の訓練用ナイフを装備する。

喉元に突きつけ、撃墜判定。

「つまり、強さが力とは限らないが、悲しいことに、力は強さだ。どちらを取るかは、お前次第。そして、今の俺もまた、本気だ」

「男の世界ってやつなのかしら。あー、下らない」

広域索敵をオフ、シュミット機との相対位置を見定めながら、ヒールレイス・リヴェツサは大きく一つ息を吐いた。

ジェズイットは、何かマツシタに伝えたいことがあるのではないかと彼女は睨んでいた。それが何なのかは判然としない。だが、上手く伝わらないだろう、ということだけははっきりと分かった。ジェズイットは余りにも不器用だ。ああいう指導者は、味方に勢いがあるときは良い。だが、そうでないときは、曖昧さと強引さが、逆に反発を招く。マツシタの中に何かのわだかまりがあることを、ジェズイットは見抜いたのだろうか。彼女には分からない。時として、性差は思考の決定的な差になる。だから分かるうとしても決して理解できない。そして、そういう場合のたった一つの対処法を理解している程度には、ヒールレイス・リヴェツサは年齢を重ねていた。

「勝手にやってくれば良いのよ、馬鹿野郎共。あたしの知ったこつちやない」

今は、眼前の敵だ。当初の予定とは逆だが、シュミットを落とすことが、今の彼女の役割だ。勝手にやっている、と言う以上は、言えるだけの仕事はしななければならない。火器管制、残存武装をチェック。三九ミリライフルの残弾は十分にある。だが、それだけだ。対装甲炸裂ダガーは既に使い切った。ナイフは、マツシタ機との交錯時に取り落としたらしく、画面には投棄済みの赤表示が点滅していた。

跳躍、照準レティクルが シュミット・スペシャル を捉える。同時に被ロックオン警報。二段、三段と機体を躍らせながら、右手のトリガーを引く。同時に、正面から機関砲の一斉掃射が降り注い

だ。反転、後退、前進。常に視界は正面に砂漠迷彩の ストライク
リザード 趣味が悪い、とヒールレイスは毒づく を捉え続
ける。間髪入れずに応射。

この撃ち合いは、一歩でも退いたら負けだ。四三ミリと比べて、
ベツカード社製三九ミリは、威力では劣るが速射集弾性に優れる。
よりスマートで、エレガントだと彼女自身は思っていた。敵のいい
加減な射撃を確実に回避し、確実な反撃で潰す。中距離射撃戦での
性能を比較すれば、こちらの方が優れている。採用されなかったの
は整備性の問題と、あとは上の問題だ。金やら、利権やら。あたし
には関係ないけどね、と彼女は舌打ちし、空中で機体を一回転させ
ながらトリガーを引く。パネルの隅に表示された数字が桁を減らし、
残弾、ゼロ。

「ええいつ、弾の減りが早いのも問題!？」

実際装弾数は多目なので、問題があるわけではないのだが、目の
前のゼロ表示を見るとそう思ってしまう。空弾倉を破棄。オートの
動作で再装填。

「ちっ！ 鬱陶しいタイミングで撃ってくる！」

直撃がくる、と咄嗟の判断で回避を選択。自動のモーションはキ
ヤンセルされ、左手にマガジン、右手に弾切れのライフルを抱えた
ヒールレイスの ストライクリザード は、地面を転がり、立ち上
がって再び跳躍する。

シュミットの機体には、近接戦用の機関砲が内臓されている。ど
う冷却機構や給弾路を確保したのかは本人しか知らないが、胸部に
二門、両腕部に一門ずつだ。だが、攻撃よりは防御の側面が強いた
めに、一つの目標を狙い撃つことには長けていない。集弾性が低い、
まさに弾幕だ。そこが、ヒールレイスにとってはずけ込む隙になる。

精密機動。B2システムのリンク係数を上昇させる。耳鳴りと、
頭の中を掻き回される違和感と不快感。その苛立ちを、彼女は機動
に叩きつけた。最大効率でのアプローチ、即ち、正面からの突撃。
慌てふためいたシュミット機の銃口が向く。急減速、側方へ跳躍。

急激な動作に脚部がアラート・メッセージの悲鳴を上げる。知ったこっちゃない、と彼女は呟く。

「オート装填なんて、素人臭い。マニュアルで十分よ、こんなもの！」

射線 avoidance、体を丸めての前転。そのシーケンスに、両腕でのマガジン装填を割り込ませる。するり、と、マガジンがライフルへと飲み込まれる、心地良い感触が伝わってくる。残弾表示がグリーンに復帰、立ち上がった前を向く。即座に、扇を描いて一斉射。シユミット・スペシャル がたじろぐ。

「そこっ！」

一步、二歩、三歩。一瞬の隙を突いて、懐へ飛び込む。応射は遅い。集弾性もない。僅かな間を縫えば、近づける。

零距离で反撃しようと向けられた両腕を蹴り上げる。背後へ回り込み、首を掴んで引き倒す。超重量の機体が倒れて上がった砂埃を掻き分け、コックピットへ三九ミリの銃口を突きつけた。

撃墜判定。これで、ヒールレイス・ジェズイット組の勝利が確定した。装甲磨き以外に何をやらせてやるうか、と思案しつつ、開放された通信回線に向かって彼女は叫んだ。

「どうだっ！ あたしの、勝ち！」

『よ、容赦ないっすね、姐さん』シユミットの情けない声が返る。いつからだろう、この男が姐さん、などと彼女を呼ぶようになったのは。『あーあ、来たと思っただけだなあ……』

「何が？」

『時代の風が』

「何言ってるの」

『ははっ、姐さんには分からないでしょう。これは男の世界ですか』

知ったこっちゃない、と彼女は呟く。誰でも、他の誰とも共有できない自分の世界を持っているものだ。男であろうと女であろうと、大人であれば、誰でも。それをわざわざ男の世界と名づけ、理解さ

れないことを誇る心理は、彼女には今一つ分からなかった。どうでもいいとも思う。

きつと、その誰でもない、自分だけの世界を作るための時間が、思春期というものなのだろう、とヒールレイスは過ぎた日々を思い返す。自然と、その真っ只中にある二人の姿が目に見えた。巳澄美琴と、三宅新人。

「何やってんのかな……」

前に置かれる言葉は今頃であり、今更であり。そして後ろに継がれる言葉はあいつらであり、あだし、であった。西の空には、星が瞬いている。

4 翼のある使者・3 (後書き)

次回更新は一週間後

4 翼のある使者・4

空には霞がかかっていた。天候は晴れ、それも快晴の部類で、星の瞬きを隠す雲は風に吹かれて消えてしまったはずなのに、星の光は今一つ不明瞭だった。都市が吐き出すガスや水蒸気のせいだろうか。それとも、光を地上に奪われてしまったのだろうか。

「ロマンチズムは、柄じゃないよなあ」

新人は、星空から室内の喧騒へと目を戻す。行き交う人々の隙間に、マイストの長身が見えた。大柄な男性と話している。場に不釣り合いなドレッドヘアだ。誰だろう、と頭を捻り、ストライクリザードの仕様書にその写真が載っていたことを思い出す。名は忘れたが、開発主任者だ。確か、性同一性障害のため、あの筋肉質な姿でも性別は女性。女が強い世の中になった、と言っていたかジェズイットが笑っていた。

知った顔は他にもある。この地を支持基盤にする国会議員に、兵器会社の社長。芸能に疎い新人でも名を知っているレベルのトップモデルや、財界の重鎮がいる。変り種では、スポーツ選手やテレビでよく見かける司会者。それらが皆、この国の長である男、エイヴエッツ・ミネットを囲んで談笑している。いや、談笑などという生易しい話ではないのかもしれない。余り関わりたくないな、と新人は思わず眉をひそめる。

軍人もいる。なぜか見覚えがある将官がいる、と思ったら、訓練所で訓示を垂れていた男だった。一六特機隊に配属の旨を、新人に伝えた人間だ。向こうはきつとこちらのことは覚えていないだろう。三次徴兵、若年層への緊急動員の第一陣ということで、世代全体としての印象は強いかもしれないが、新人自身は、偶然の重なりでストライクリザードに乗っていることを除けば、ごく一般的でありふれた、どこにでもいる人間だ。だから、覚えていたら、ほとんど奇跡のようなものだろう。

その細面な横顔をぼんやりと眺める。遠目だが、肩の章に、将官以上であることを示す青い星があることに新人は気づいた。新兵教育に、そんな上の階級の人間が介入するものだろうか。胸には勲章。新人が首を捻った、その時。男の顔が、新人を見た。そして、あるうことか、満足げな笑みを見せた。

新人は慌てて視線を逸らす。覚えられていたのだろうか。いや、そんなはずはない。一〇や一〇〇単位ではない数の人間を彼は見送っているはずなのだ。僅か数週間の簡易訓練を受けただけの新人の顔を覚えているはずがない。そして、パーティ会場でたまたま目線があつた子供に、笑顔を向けるような性格の人間にも見えない。

もう一度盗み見た彼は、もう新人の方を見てはいなかった。同じ軍人や、政治家らしき男たちと、いつ果てるとも知らぬ談話に没頭していた。化かし合い、なのかもしれない。こういう場所で、具体的にどんなことが話し合われるのか、新人は知らない。

ふと、何かが足りない、と新人は思った。先刻まではあつて、今はないもの。少し考えて、アシユリー・ミネットだ、と気づく。大人たちの間で少しも臆することなく立ち回っていた彼女の姿が、ない。

まさか、誘拐にでもあつたのか。護衛、という任務のために飛躍してしまつた想像を抑えつけた時、新人の背中に誰かが声をかけた。「ねえ、君、一人？」新人は振り向く。

透き通つた碧眼が目の前にあつた。金髪に、桃色のドレス姿。幻か、と思わず瞬きするが、アシユリー・ミネットの笑顔は現実として、新人に向けられていた。彼女が、自分に話しかけている。眩暈を起こしそうになる頭を新人は叱りつけた。

「え？ ああ、えつと……」

「誰かと一緒？」口ごもり俯く新人の顔を、彼女は下から覗き込む。身長は同じか、新人の方が少し高いくらいだ。

「えーっと、保護者が一人。それと……」美琴のことを何と呼ぶべきか、一瞬悩んで新人は言う。「相方が一人。多分、その辺にいる

と思う……思います。アシュリー・ミネットさん」

「敬語も何もいらさないから、アシュリーって呼んで。あたしも同じ一六歳だもん」

「じゃあ、アシュリー」

「上出来！」

小さく身体を躍らせてまた笑う彼女、アシュリーに新人はたじろぐ。距離感の測り方が分からないのだ。年齢は美琴と大して変わらないが、彼女の場合は、どんなときでも誰に対しても一歩、引いている。それが彼女にとっての心地よい距離であり、新人にとっても都合が良かったのだが、アシュリーは違う。

高いヒールを鳴らしてアシュリーが歩み寄る。爪先同士が触れ合いそうなほど近づかれ、新人は後ずさる。圧力だけなら並みのベルキャットより上だ、と新人は苦笑した。

「ねえ、あたしのこと、知ってる？」

「顔と名前くらいなら、僕でも知ってるよ。メディアへの露出、多いから」

「あたしも、君の顔と名前だけは知ってるんだ」

「え、どうして？」呆けた顔で新人は問い返す。

「どうしてでしょう？」アシュリーは目にかかった前髪を払って、当ててみると笑った。

新人は目を背ける。一つ一つの仕草が余りにも華やかで、正視している、頭が侵食されるような気がしたのだ。彼女は魅力的だが、怖い。新人の知らない、関わりうとしてこなかったタイプの人間。ああ、かわいいと呑気な考えが浮かぶが、それより先に警戒心が先に立った。相変わらずな自分に嫌気が差す。

しかしなぜだ、と新人は腕を組む。なぜ、ただの一兵卒、或いはどこにでもいる一六歳の子供に過ぎない自分のことを、大統領の愛娘であり、このような社交場にも物怖じせず、見れば誰もが憧れるであろう類稀な容姿を持つ新人とまさしく正反対な人間である彼女が、自分のことを知っているのか。同じ一六歳と言った。つま

り、年齢も知られている。

接点は皆無だ。もし、あるとしたら。

「サラ・ウェイン女史の記事を読んだ、とか」

「その通り」と彼女は腕を組んで言った。ややあつて、真似をされているのだ、と新人は気づいた。「君と話してみたかったんだ。だって、あたしと同じ年なのに、最前線で戦ってるんでしょ？ それもあの ストライクリザード に乗って。どんな子なんだろうって、すごい気になったんだ。意外と……ううん、やっぱり、普通の男の子なんだね。ちょっと安心した」

「僕は、普通だよ」安心という単語が気にかかる。「普通だ」

「でも、 ストライクリザード で戦えるんでしょ？ 戦闘機動とかやつちやったりして。すごいなあ。格好いい」

「……そんな格好いいもんじゃないよ。整備は大変だし、壊せば怒られるし」

「でも、あたしの目からは、格好いいの」

パーティ客の一人がアシユリーの後ろを通り過ぎる。それを避けて、さりげなく、彼女は新人の正面から隣へ立ち位置を変えた。背丈よりも遥かに大きなガラスに背中を預け、会場の方を向く。新人は、目線のやり場に困ってマイストの姿を探した。見当たらない。

香水だろうか。柑橘系の匂いがした。嫌でも、隣に立っているのは自分と違う、異性なんだという意識を、新人は喚起される。

「ねえ、シント」ファーストネームを出し抜けに呼ばれ、新人は返事に詰まる。その困惑を知ってか知らずか、彼女は変わらず笑顔のまま言った。「どんなこと考えて、戦ってるの？」

「どんなことって、何？ 戦闘中ってことか、それとも、僕の戦争観を？」

「んー、どっちも」

「戦闘中は……」どんなことを考えているだろう。常に考え続けているとは思う。何のために。「生き延びること。一体でも多く敵を落とすこと、かな。戦闘中は戦闘に集中してるから、他のことは考

えない。考えてる余裕がないんだよ、僕には。だからこういう答えになる。ベテランの人たちなんかだと、もつと色々なことを考えていられるんだろうけど」

「じゃあ、戦争については？」

「それを、兵士である僕が君に答えるのは、問題がある気がするよ」「何で？」

「何でって、戦争を主導している人間の娘じゃないか、君は」喧騒の中に、共和国大統領、エイヴェッツ・ミネットの姿が見える。「僕が言ったことに、悪い感情を持つかもしれないし、それで僕の立場が危うくなるかもしれない。さすがに軍法会議は勘弁して欲しいから」

「ふーん。君も、そういう風に言うんだ」アシュリーの視線が新人を睨めつけた。不機嫌そうに頬を膨らませる。「大丈夫。誰にも告げ口とかしないから！」

「いや、そういう問題じゃなくて、心構え、みたいなの……」

「あたしは普通の女の子だから」

「いや、普通じゃないよ。誰がどう見たって」新人とは違う。

「じゃあ、君の前だけ」相好を崩して、彼女は言った。「君の前だけ、普通の女の子。これでいいでしょ？」

「……分かったよ」

ウインクする彼女を前にしては、そう答える他なかった。単にわがままに甘えているだけだと分かっていたが、否、と言うことはできなかつた。普通ならそうだ。普通なら。だから新人も、普通に倣う。

「馬鹿げた戦いだ、って思ってるよ。国内の安定に戦争を利用してのようなものだからさ。戦争は外交の手段であっても、内政に使うものじゃないって、思うんだけど。まあ、三民族の勢力が拮抗していて、かつそれらが微妙なバランスを保って国家として成立している、っていう状況自体が、ある意味奇跡なのかもしれないし、手段を選んでいられない、為政者……大統領の思考も分からないではな

いんだけど、ね。

でもさ、国内の不満は、絶対に消えないよね。だって、異民族による最高の政府よりも、同民族による最低の政府の方が、統治に関しては優れてるんだ。何故かっていうと、異民族による統治の場合、政治に反対する手段として、武力の行使が正当化されてしまうから。例えば、南の倭族解放同盟。彼らには正義がある。倭族による倭族のための単一民族国家の樹立、っていう彼らの究極の目標には、一定の理解を得られるだけの正当性があるんだ。あくまで『一定の』だよ？ 僕は彼らのテロ行為を容認してるわけじゃない。銃弾が飛び交えば、必ず誰かが泣くんだから。

大統領の劇場的な民主主義は、ある意味一つの回答だと思うんだ。戦いという一つの目標に向かって民意を煽り、愛国心で一つに束ねる。劇場的ってより、エンターテイメントかもしれないな。大衆には、戦争の後が見えてない。戦争しなきゃならないとは理解していても、それが何故なのか、また、どんな犠牲を生むのか、全然分かってない。テレビに流れる映像をただ眺めているかのように、受動的なんだ。もつとも、分かってないことに関しては、僕自身も同じなんだけど。

馬鹿げた戦いだって言ったね。僕は、必ずしも戦争という手段に訴える必要はなかったんじゃないか、って思ってる。かといって、国家の分裂を望んでいるでもない。共和国の今の形は、経済的には、非常に都合がいいからね。統治には、別の手段を模索するべきだったんじゃないか、ってことだよ。いや、だからって、北の教国みたいによく分からない宗教を拠所にするのは余り歓迎できないと思うし、西の帝国みたいなのも、どうなんだろう。ごめん、じゃあどうしろっていう結論は、僕の中ではまだ出てないんだ。だけど、人が死ぬのは、殺さなきゃならないのは嫌だなって、戦場に出る度に思う。人間の死と僕の行動を遠ざける、ストライクザードというシールドがあったとしても」

「そっか。パパのやりかたは、必ずしも歓迎されてるわけじゃない

んだ」

「スマートじゃない、ってことだよ。ベターではあっても、ベストじゃない。そして、次善の策を取ってしまったことで、ベストの手段を模索する機会が失われてしまった。だから……」そこまで話して、新人は言葉を濁した。

アシユリーが目を伏せていた。先程までの笑顔は消えている。「そっだよね」と彼女は言っつて、また笑顔を作ったが、それは新人にさえ一目で作り物だと分かるほどの、不自然なものだった。だから話したくなかったんだ、と新人は呟く。彼女とは、距離感が測れないのだ。どこまで言っつていいのか、何を言っつてはいけないのか。落ち込ませたかっつたわけではない。話せと言われたから、思っつてることを正直に話した。そして、方便を使いこなせるほど、新人は器用ではない。

前にも似たようなことがあつた、と新人は思い出す。あの時は思いつき殴られた。進歩していかない。何も。普通に、倣えていない。その時、全く違っつ方向から、からかうような拍手と共に、誰かの声が聞こえた。

「なるほど、非常に興味深いね」新人は目を向ける。見覚えのない相手だ。「それが、共和国兵の考えか。想像してはいたより、知的だ。だが、美的とは言い難い」

「誰です、あなた」

男、だろうか。黒のスーツ姿なので、恐らく男だ。だが、見た目では服装しか性別の確証となるものがない。そのまま女性としても通るような、浮世離れた容姿だつた。胸元にはビビットな赤のりボンタイが結ばれている。美しさを空気として纏つた彼の姿に圧倒され、新人は一步後退る。並の人間ではない。だが、誰だ。

肌の色は、大理石のような白。いわゆる東方コーカソイドの白さとも違っつ。まるで、白くあることを宿命づけられているかのような、自然さと不自然さが共存してはいた。唇の赤がいやに際立っつ見える。

「あなたは誰、か。はて、僕は誰だろうね。敢えて言うなら、僕は誰かになるうとする過程にある、かな。僕が誰かを決めるのは、僕じゃなくて、君だ。少なくとも今はね」

ブルーともグレーともつかぬ不思議な色の瞳が、新人を見た。照明の具合で変化し、どの色と決定することができないのだ。だが、何よりも彼を特異な存在にしているのが、髪の色。煌く、銀。肩を覆うほど伸ばされた長髪には、緩いウェーブがかかっている。

「ねえ、あたし、あなたとどこかで会ったことある？」アシュリーが首を傾げて言った。「思い出せないんだけど、どこかで、あなたを見たことあるような気がするの」

「どこかで会ったことある、か」彼は繰り返した。「まるで古風な誘い文句だね。そういうセリフは、薔薇の花束片手に男が吐くものだよ、アシュリー・ミネット」

「知ってるんだ、あたしのこと」

「もちろん。君はこの国では有名人だろう？」

「この国」新人は言った。「ってことは、君は共和国の人間ではない」

「その通り。鋭いね、なかなか。やはり君は面白いよ、シント・ミヤケ」

「やはり？」それに、なぜ名を知っている。問い返そうとした新人を遮って、彼は言った。

「自己紹介がまだだったね。僕の名は……そうだな、敢えて名乗るなら、エル・ロイとでもしておこうかな」

「偽名？」

「さあね」

「身分は。何者なんだよ、一体」

食ってかかる新人を宥めるように、うつすらと笑って彼は言った。
「旅人さ」

気障な男だ、と新人は苛立つ。確かに、銀色の髪を持つ人種なんて、聞いたことがない。だが、染めているようにも見えない。だから

ら、この国の人間でないのは本当だろう。彼の民族、あるいは彼の家系に、特異なものなのだろうか。

給仕が寄ってきて、盆に乗った飲み物を勧めた。どれもアルコールらしく、新人は、嬉々として受け取るうとしたアシュリーを制し、自身も固辞する。一方エル・ロイは、慣れた手つきで発泡するシャンパンのグラスを取った。

「さて、君は『馬鹿げた戦い』だ、と言ったね？ 共和国は国家安定のために戦争を利用せず、他の道を模索すべきだった、と」手にしたグラスを傾け、エル・ロイが言った。

「ああ、そうだ。でも、肝心の他の道が、僕にはよく分からない」新人は応じた。

「なら、より先鋭的な国家の制度を参照してみよう。例えば、帝国かの国に人種という概念はない。消え去った、とした方が適切かなあるのは三層六土の階級だ。帝国における人の差は階級の差だ。身体的特徴も何も関係ない。髪が金だろうが、銀だろうが、黒だろうが、ね。自然に生まれてしまった差異を廃し、自らの手で新たな秩序を創生することで、帝国は安定を得た。君は、これをどう思う？」

「人々がそれを納得して受け入れることができるのなら、いいと思うよ。確かに帝国の国家制度は、君の言葉を借りるなら、美的だ。でも、大概の人間は、そんなもの受け入れられない。帝国化されてから最低でも一世代巡らないと、無理だろうね。」

「だけど、帝国には世界国家政策がある。確か、世界はすべからく帝国化すべし、だっけ。その階級に基づく社会制度は、絶対的に正しいものだから全世界規模で運用しなければならず、また、多種多様な人種民族を一つに束ねる唯一無二のセオリーだ。よって、帝国は拡大しなければならぬ……。迷惑な話だよ。制度になまじ良い側面があるだけにね。仮に共和国が単一民族国家でも、戦うだろうなあ」

「迷惑な話、ね」エル・ロイは繰り返した。「まるで親に反抗する子供みたいだ。マクロナ視点を持ってないんだね、共和国は。やはり

国家としては帝国の方が成熟しているよ」

「そんな言い方、やめてよ」アシュリーが彼を睨む。「あんたがどこの国の人か知らないけど」

「ああ、すまない。君は反抗期真っ盛りな男の、愛娘だったね」

「あんた……！」

顔が青白い。アシュリーが一步踏み出す。その手は、拳。新人は咄嗟に、彼女のアクセサリーの巻かれた腕を掴んだ。

「駄目だよ、アシュリー」

「何よ、君、コイツを庇うの？」ピンクのマニキュアが塗られた爪が、掌に食い込んでいる。「パパのこと馬鹿にする奴は、許さない！」

「だからって、彼を殴ればそれでいいわけでも、ない。だけど……」新人は、顎に手を当ててこちらを見ているエル・ロイを睨みすえた。「気に食わないのは、僕も同じだ」

「君の気分を害するのは、僕の本意じゃないな、シント。すまない。謝るよ」

「アシュリーは、どうなんだよ」

「為政者の一族は、どんな非難や罵声を浴びせられることも、甘んじて受け入れなければならぬ。それが人の上に立つものの義務であり、覚悟だ。この程度を耐えられないようでは、共和国も底が知れる」

「……いい加減にしろよ、お前」新人は悪びれる様子もないエル・ロイの胸倉を掴む。グラスが揺れるが、一滴も零れない。「親のやつてることを馬鹿にされれば、普通の人間は怒る。それくらい分かるだろうが。わざわざアシュリーを挑発するただけに君はここに来たのか？」

「君に会いに来たんだよ」

「真面目に答えるよ！」

「僕は至って真面目なんだけど……。まあ、いい。君の望む真面目で答えよう。」

普通の人間は怒る、と君は言ったね。だが、為政者が一々癩癩を起こしていたら政治は進まない。そんな人間には誰もついていかないよ。だから、最高権力者は、人を超えていなければならない。歴史を見る。かつての権力者は、その権力の正当性を霊的能力に求められていることが大半だ。もつとも、エスパーなんてこの世には存在しないから、ならば、現代で為政者とその一族に要求されるのは……崇高な理想と気高き精神。こんな、どこの馬の骨とも知れない男に、二言三言馬鹿にされた程度では動じない心さ。普通の人間では、駄目なんだよ。

しかし、僕にも疑問はある。シント、君はなぜ『誰だつて怒る』ではなく、『普通の人間は怒る』という表現を使った？　まるで、君自身は怒らないと言っているみたいだ」

「……この世の誰もが、肉親のことを尊敬してるわけじゃない、つてことだよ」新人は掴んでいた手を離す。「君には関係ない」

「やっぱりね」エル・ロイは襟元を軽く整え、言った。「僕と、同じだ」

「同じ……？」　どういうことだ、と言い立てかけたのを自ら押し止め、新人は吐き捨てた。「君の家庭事情は、僕には関係ない。それに、僕の質問に答えてないよ」

「君の質問？　ああ、僕がなぜここにいいのか、だね。だがそう訊かれても、旅の途中としか答えられないな」

「じゃあ、あんたの国はどこ？　なんで旅なんかしてんの？」怒りを収めたアシユリーが割つて入る。だが口調は刺々しく、『あんた』という二人称も変わらない。「こんな戦争ばかりやってる国に来て、何が楽しいのよ」

「世界を知りたいのさ。知らなければならんだよ、僕は。この地の果てには何があるのか、海の向こうはどこへ繋がるのか、空の彼方には、何が待っているのか」

エル・ロイは窓の向こうの夜空を仰ぐ。つられて見上げた空には、霞んだ星々が遠慮がちな瞬きを見せる。眼下の夜景は美しいが、夜

空の方は、綺麗とは言えない。

「海の間ごうには、他所の国があるじゃない」と怪訝な顔のアシリ。

「君は共和国から出たことがないのに、よく言うね。本当かな？」

「地の果てはないよ。天動説じゃないんだから」新人も、彼の意図を量りかねて言った。

「君は世界のどこまでを見た？」

「何を言ってるんだよ。誰もこの世の中を全部見ているわけがない。伝聞じゃ何も信じないってこと？ だったら、空の彼方を……宇宙を直接その目で見た人間なんて、ほぼ皆無だ。でも、宇宙の存在を疑う人間なんていない」

「さて、どうだろうね。最後にロケットが飛んだのはいつか、覚えているかな？」

「それは……覚えてないけれど。今は戦争中だ。第一、この辺りはフロウ・ダストが濃いから、航空機だってロクに飛べないんだ。北のほうじゃ薄いつて聞いたけど」

「人が宇宙に飛び立つのを阻む、大気低層の金属微粒子層、か」エル・ロイは窓ガラスに細い指を沿わせた。「この街の星がいま一つ美しくないのは、そのせいかな？ いや、美しくないのは、この世界自体、か」

そう言っつて口唇を綻ばせるエル・ロイに、「どういうことだよ」と新人は問う。彼は指を離さず　まるでそこに失った光を求めめるかのように　星しか見えない夜空を見上げたまま「言葉通りさ」と応じる。

「この世界は美しくないよ。まるで……」

その時、エル・ロイの言葉を丁度遮るかのように、新人の背後から誰かの声が發した。「お戯れが過ぎます、旦那様」と言ったその声の主を、新人は振り返り見る。

「君か、ゼリア」とエル・ロイが応じたその男の年齢は、三〇の半ばくらいだろうか。だが、短く揃えられた頭髪には白いものも目立

ち、四〇台に見えないこともない。彼は新人とエル・ロイの間を隔てるように立ち、一〇か二〇センチメートルほどの高みから、新人を見下ろした。わけもなく苛立ち、新人は彼の灰色の瞳を睨み返す。いや、苛立っているのではない。怖いのだ、この男が。睨まなければ取り喰われそうなの、冷たい瞳。スーツの裾に力を感じる。アシユリーが、背中に回って引つ張っていた。ほんの数分前までは、怖いものなど何もなさそうだった碧眼が、不安の色に染まっている。「旦那様はやめろ。僕はまだ一五だよ」ゼリア、と呼んだ男の肩を軽く拳で叩いてエル・ロイは言う。

「では、坊ちやま」

「坊ちやまも勘弁してもらいたいな。僕はもう一五だ」

ゼリア　どこかで聞いた名前だ、と新人は思う。だが、思い出せない。濁った泥水の中に落としした硬貨を探しているかのように、記憶の中に沈んだまま見つからない。

「保護者……か、何か？」新人は訊いた。

「まさか。君じゃあるまいし。従者だよ、従者」

「偉いんだね、君は」

「ああ。大人を顎で使うというのは、これで気持ちがいいものだよ……つと、もう一人が来た」

エル・ロイが示した方を、新人も見やる。続いて現れたのは、腰に届かんと伸びた金髪を後ろに束ねた青年だった。金髪を見ると瞳の色を確かめるのが癖になっている新人は、彼の眼を恐る恐る覗き込む。二スを塗った家具のような、明るいブラウンだ。青ではない。「格好いい人だね」と、新人の背中に隠れたまま、アシユリーが耳打ちする。

「……現金だね、女の子って」小声で言う新人に、「何が？」と返して彼女は首を傾げた。分からないならいい、と新人は応じる。

確かに、見知った顔のアーカイブを探しても、これ以上はいないと思えるほどの美男子だった。切れ長の瞳は冷たそうな印象を与え、長い髪と、その氷のような眼差しが、貴公子然とした雰囲気

を作り出している。だが、エル・ロイに比べると、その美しさも霞む。新人は、小さく息を吐く銀髪の少年へ目を戻した。

「さて、後の予定もあるし、うるさいのに見つかってしまったし……」スーツ姿の二人の男に挟まれ、エル・ロイは肩を竦めて言った。「僕は行くとするよ。また会えるときを楽しみにしているよ、シント、アシユリー」

踵を返した彼の背中に、何者なんだろう、という疑問が再び湧き上がる。偽名を使い、身分を隠し、大人を従える一五歳の少年。誰もが魅入る容姿に目を引く銀髪。旅人と自らを称したからには、帰る場所があるのだろう。それは、どこに？ 少なくとも、共和国ではない。海の向こうか、大地の果てか、はたまた空の彼方か。

彼が歩みを止め、こちらを振り返った。そして、大仰な動作で二人を いや、新人を指差す。

「これだけは言っておく。この世界は鳥籠で、僕らはその中に囚われた小鳥だ。空の青さえ知らぬ、ね。命短し、足掻けよ少年。黒き瞳の……」赤き唇へ微笑を添えて、彼は言った。「光、失せぬ間に」

#4 翼のある使者・4（後書き）

次回更新 1週間後

4 翼のある使者・5

「ああ、もう！ 何なのよ今のあいつは！」

アシユリーの大声に、周囲の数人が何事かと一斉に振り向いた。ただでさえ彼女は目立つのだ。何でもない、と会釈を繰り返しながら、新人は彼女の手を引き、会場の扉を潜った。

「とりあえず、落ち着いて落ち着いて」

「うるさいっ！ ああいう気障な勘違い男って、あたし大っ嫌いな。ちよつと顔がいいからって何言っても許されるとでも思ってるのかな。あー思い出したらイライラしてきた！ きつとああいうのって子供のときから蝶よ花よと甘やかされて育ってんのよ。そうでもなきゃあんなセリフ真顔で吐かないし。なんでわざわざ人の神経を逆撫でするようなこと言ってヘラヘラ笑ってられるのかな。どういう家で育ってんの？ 性格歪んでるとしか思えない！ 矯正できそうにないところまでね。ああいう変な男がいるから世の中おかしくなるのよ」

「いや、世の中はさすがに言い過ぎだっ……」

「何、シント、君またあいつの肩持つの！？」

「いやいや、肩を持つわけじゃないよ。腹が立ってるのは、僕も同じだから」

腹は立っている。だが、それ以上に疑問が大きかった。エル・ロイと名乗った彼は一体何者なのか。なぜ新人のことを知っていたのか。『君に会いに来た』と彼は言った。もしそれが真実だとしたら、新人のことを知っていた理由にはなる。だが、疑問の上乗せになるだけだ。即ち、どうして新人に会いに来たのか。新人は彼を知らない。一度でも見たことがあるば、記憶に残ってもおかしくないのだが。

「そつだ、アシユリー」

「何よ。あたしは今すぐこーく機嫌が悪いの」

「それはいいからさ、さつきエル・ロイに『どこかで会ったことある？』って訊いてたよね。あいつの顔に覚えとかあったの？」

彼女はちよつとむつとしたような表情を見せ、それから溜息を吐いて言った。

「確かに、どこかで見たような顔なのよね。でも、思い出せなくて。あーもどかしいなあ、こつこつ。灯台下暗しとか木を隠すなら森の中とか、そんな感じ。喉元まで出かかっているんだけど」

「そつか。分かんないか……」新人は白い壁紙の張られた壁に背を預けた。

間接照明のオレンジ色が照らす廊下は人気がない。扉を挟んだホール内からは、曲名の分からない管弦楽の音が漏れ聞こえてくる。明るい色の絨毯は柔らかく、慣れない革靴を履いた足が沈み込みそうだった。辻々には大きな花瓶に、これも名前の分からない花が生けられている。造花ではない。壁にかけられた絵のタイトルも思い出せない。事物が自分を馬鹿にしているように思えて、新人は苛立つ。

彼は一体何者なんだ、という疑問を再び繰り返す。アシユリーは覚えていない。と、すると残る手がかりは『ゼリア』というあの従者の名前だ。どこかで聞いたような覚えがあった。だが、どこで。これまでに出会った人間の顔を片っ端から思い描いても、ゼリアという名の人間には思い当たらなかった。あの全てを悟ったような冷たい瞳は、一度相対すれば忘れないだろう。では、会ったことがない？

いや、今はそんな取り留めのないことよりも大事なことがある。

新人は、壁にもたれて目を伏せるアシユリーの姿を目の端に捉えた。

「あの、アシユリー」

「何？」

「僕がこんなこと言うのも何だけどさ、その……大丈夫？」

アシユリーの碧眼がゆつくりとこちらを向いた。それに引き寄せられるように、新人は彼女と目線を合わせる。

「別に、どつってことない。パパのこと言われたのは……結構ムカついたけど、でも、あたしはパパじゃないから。パパと同じことは言えないんだなって思った」

「そりゃあ、同じ言葉でも、誰の口から発せられるかによって意味は変わってくるからね。言葉というツールの特徴的な……」

言いかけて、しまったと口を噤む。だが、彼女は新人の言うことを聞き流していたらしく、新人は胸を撫で下ろした。

「やっぱ、知らなきゃ駄目なんだよね、世の中のことを。パパと同じ視角に立たなきゃ、あたしの言葉はパパと同じ力を持ってないんだ。戦争のことだつて……」そこで、何かに気がついたように彼女は言葉を切った。

「それって、すごく難しいことだと思うけど。もし完全に背景が一致しなければ、同じ言葉にも力は宿らないとするなら、全ての金言や格言は無意味になっちゃうよ。誰もが古典文学を読み込んでるわけじゃないし、歴史を熟知しているわけでもない」

「ねえ、シント」

「何？」聞いてないな、と新人は嘆息し、そして次の一言に耳を疑った。

「ストライクリザード、乗せてよ」

「はあ？ 何で……」

新人は必死で彼女の論理を追いかける。つまり、戦争を知るために、最前線で戦うストライクリザードを知ろうというわけか。自分の言葉に力が欲しい いや、単にエル・ロイに言われたことが悔しいから。

「いいじゃん、減るもんじゃないしー」

「減るよ！ 一回の出動毎にどれだけの労力や人員が……。大体、民間人をおいそれと乗せるわけにはいかない」

「でも、フリージャーナリストのサラ・ウェインは乗せたんでしょ」

「あの人は特例だよ！ ええと、そう、割と高度な政治的判断というやつが……」

「大人の理屈だよな」アシュリーは唇を尖らせる。「そういうの、嫌い」

「好きだ嫌いだの問題じゃないんだよ！」

「何よ！ サラ・ウエインは乗せられてもあたしは駄目なの？」

「駄目、駄目駄目！」

両手を振る新人をアシュリーの上目遣いが襲った。いけない、と後ずさるうにも既に背中が壁。我が意を得たりと真正面に回ったアシュリーは、拗ねたような表情で言った。

「ふーん……あたしみたいなのより、ああいう大人の女性の方が好きなんだ。ふーん」

「いや、そういうわけじゃ……」

「じゃ、いいでしょ？」途端に笑顔を弾けさせる。

（ああ、もう！ 演技って分かってても……。全く、ちよつと顔がいいからって何言っても許されるとでも思ってたのかな。あー何だかイライラしてきた！ きつとこういうのって子供のときから蝶よ花よと甘やかされて育ってんだ。そうでなきゃ正気でこんなセリフ吐けるわけがない！）

演技だという判断くらいはつく。目的のために自分を取り込もうとしているだけだと分かっている。それでも彼女の無邪気な眼差しには、抗しきれない力がある。少なくとも、男なら誰も。新人は頭を抱える。

「だから、そういう問題じゃなくて！」

「じゃ、どういう問題？」アシュリーは首を傾げる。

「根源的問題。そもそも、君を乗せるのはNG。サラさんとの比較は意味がないし、大人の理屈でも何でもない。もし万が一乗れる機会があるとしたら、上の許可が下りた場合だけど、少なくとも僕に判断できる事項じゃない。僕じゃ責任が取れないから……」

「責任とかいいから、気にしないで！ あたしが怪我したらあたしのせいだから」

「いや、責任云々じゃない」

「君が言ったんじゃん」

「そうだけど……」

やり辛い。かのジョニー・メイフェンより遙かに強敵だ、と新人は苦笑いする。

「とにかく、駄目なものは駄目だ。気持ちは分らないでもないけど、僕の権限で君を ストライクリザード に乗せてあげることはいできない。危険だし……危険は顧みないって言っても駄目だよ？

それに、僕の立場だって危うくなる。第一、非常識だよ」

「でも、今日の警備って言ったって、あるかどうかも分かんない、独立派組織のデモの牽制くらいでしょ？ 火器だっほとんど使わないみたいだし、別に後ろに乗ってるだけなら、バレないから！」

「駄目だよ」

「邪魔しないから、お願いっ！」

「邪魔でも邪魔じゃなくても駄目！」

「……分かった」

アシユリーは短く言った。納得してくれたのか、と新人が安堵するのも束の間、彼女は壁に背をついた新人にずいと身を乗り出した。逃げられない。両足の靴の間に、ハイヒールの爪先が見える。膝と膝が触れ合っている。新人の背中を冷や汗が伝う。

「な、何……かな？」と、どういう表情で対すればいいか分からず、半笑いで尋ねる新人に「何でしょう？」とアシユリーは応じる。彼女の右手が新人のネクタイを掴み、慣れた手つきで解いた。一箇所引けば解けるのか、と新人は初めて知る。

まさか、と今更の悪い予感が新人の脳裏を過ぎった。果たして、それは一般的な悪い予感の例に漏れずに的中する。

アシユリーの左手が、所在無く上着の裾を探っていた新人の右手を掴む。そしてそのまま、サーモンピンクのドレスの胸に触れた。柔らかな感触に全身が硬直する。マシユマロ、スポンジ、メレンゲ、どれも違う。それを形容する言葉を新人は持たなかった。真正面から暴風を受けたときの感触に似ているかもしれない。あの微妙な心

地よさが、右の掌一箇所に集中している。脳細胞がブランクのグレイに染まっていくのが分かった。たった今まで警戒していたことがどこかへ吹き飛んでいく。

「さて、この状況。もし、今あたしが結構大きい声とか物音とか立てたら……」右手の解けたネクタイを遊び、彼女は甘えた声で言った。「どうなるかなあ？」

手を引こうとすると、逆に身体自体を押しつけられてますます密着する。シトラスの香り。

「さあ……どうなる、かな？」精一杯振り絞った声は、語尾が震えていた。

「あたし、そこそ有名人だし、大スキャンダルになっちゃうかも。少なくとも、君、今まで通りの生活送れなくなるよ」

「……これは恫喝？」

「まさかあ！ ただのお願いだつて」

「断った後のことを盾にするお願いのことを指して、恫喝って言うんだよ」

「へえ。知らなかった。博識なんだね、君」

「ふざけたことを……」

「そんな強がったこと言つたつて、手、震えてるよ。こついつことの経験、ないんでしょ」

「ああ、ないよ。それがどうした」

苛立ちを抑えきれずにそう吐き捨てた新人の言葉を無視し、アシユリーは悪戯つぽく笑つて言った。

「じゃあ、改めてもう一回。ストライクリザード にあたしを乗せて。お願い！」

断つたらどうなるか。もし仮に彼女が言ったように騒いだとしたら、身の破滅だ。マスコミには晒し者にされ、もうリザードドライブではいられない。彼女自身にしても、会つたばかりの一兵士とこんなことを、と虚実入り混ぜて報じられれば、父親の信用問題、ひいては国家の安全を脅かすことに繋がりがかねない。下手をすれば、

この国が戦争に負ける。

なら、受け入れれば？ アシュリーが言ったように、今日の任務にそう激しい戦闘機動は必要ないだろう。むしろ、街中の護衛なのだから、静粛な機動が求められるくらいだろう。明日以降の日程は移動しながらの警護なのでそうもいかないが、今日ならば、訓練も何も受けていない彼女を乗せても、大丈夫かもしれない。見つかった場合が怖いのが、上手くやれば問題ないだろう。まだ子供だ、見過ごしてもらえないかもしれない。何より、彼女を後ろに乗せられるのだ。他でもない、アシュリー・ミネットを。

新人は息を飲んで目を瞑り、その一瞬の間に全てを熟考して言った。

「……駄目だ」

たとえば彼女のプライドを傷つけることになろうとも、駄目だ。新人にはこちらの選択しかできなかった。こちらを見上げるアシュリーの表情が、今にも泣き出しそうに崩れる。仕方ない、こうするしかない。これが自分にできる最善だと、この後に起こりうる全てのこと覚悟を決めた、その時だった。

大袈裟な咳払いが聞こえた。知っている声に、新人は振り向く。「……ええと」腕組みをし、顎に手を当てた巴澄美琴の姿がそこにあった。「参考までに一応訊くけど、何してんの？」

「うわああっ！」新人はアシュリーを押し退け、解けたネクタイを取り戻し、しどろもどろになりながら言った。「あの、えーっと、君が考えてることは大体分かるけどそれは違う。違うんだよ。誤解だよ誤解」

「あらら、人の考えが大体分かるなんて、通称根暗ボーイが凄い進歩。でも、あたしの質問に答えてない。もう一回訊くけど、何してんの？」いつも通りの頑とした口調。逃がさない、とその目が語っている。

「それは……」と言い淀んだ新人を押し退け、答えたのはアシュリーだった。

「秘密ですよ、相方さん」既に表情は笑顔に戻っている。

「相方……？」と怪訝な顔をして、ようやくそこにいるのがアシュリー・ミネットだと気づいたらしい。美琴は、途端に慌てた素振りを見せた。「なな、何でよりもよって新人？」

面倒なことになった、と頭を抱える。ストライクリザードに乗せると脅されていた、と言うわけにもいかず、新人は根暗に押し黙るしかない。

「じゃあ、あたしはこれで失礼しまーす」半ばスキップするようにアシュリーは背を向け、そして会場の扉に手をかけて振り返った。

「あたし、諦めないから」

それだけ言い捨て扉の向こうの喧騒に消える彼女を、新人は唾然として見送った。何度駄目だといえば諦めるのか。いや、それよりも。

「諦めない、諦めない」美琴の視線は、いつにも増して冷たかった。「何か、告白されて振ったみたいなの状況に見えたけど。説明が欲しいかな、保護者として」

「保護者！？ いや、それはいいとして……」新人は呼吸を落ち着ける。「説明は、できない。ちょっと厄介なんだ。それと、何度でも言っけど君の考えてることは違う。誤解曲解だよ」

「ま、ゴカイでもハマグリでも何でもいいんだけど」

「ここは八七階」

「話を逸らすな、馬鹿」

「ごめんなさい」やはりこれくらいの距離感が心地いい。「ところで……なんでわざわざ僕を探しに？」

「そう、それ忘れてた」美琴は掌を打つ。「マイストさんが呼んでる。何か会わせたいとか、あなたに会いたい人がいるとか言ってた」「ふうん。何だろう」

「あたしに訊かれたって分かんない。開発サイドの人っばかったけど」

「そっか。ありがとう」と生返事を返し、アシュリーが消えた扉の

方を見遣る。諦めない、と彼女は言った。何をするつもりなのだろう。見る限り、何を仕出かしても不思議ではない性格をしている。何だか嫌な予感がして、新人は嘆息する。

「ほら、ぼんやりしてないで」美琴が新人の手を取った。「待たせてるんだから、早く」

「ちょっと待って」と言つて、引き摺られかけるのをどうにか押し止める。掌にこもる力、心地よい冷や汗が少し。何よ、と詰め寄る彼女に、苦笑いで目線を泳がせながら、新人は言った。

「あの……ネクタイの結び方、分かる？」

#4 翼のある使者・5 (後書き)

次回更新 ちよつと間が空きます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5968f/>

Boy from Shattered World

2010年10月10日10時16分発行